青森県埋蔵文化財調査報告書　第172集

野尻(2)遺跡

平成6年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第172集

野尻(2)遺跡

－浪岡バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成6年度

青森県教育委員会

口絵１　野尻(2)遺跡遠景（南から）

口絵２　第９号住居跡出土須恵器大甕

序

青森県教育委員会では、平素より記録保存のための発掘調査並びにその報告書刊行など、埋蔵文化財の保護についての措置を講じております。

このたび、浪岡バイパス建設事業に伴い、建設省東北地方建設局青森工事事務所から委託を受けて、平成５年度に当教育委員会が発掘調査を実施した、南津軽郡浪岡町に所在する野尻(2)遺跡の発掘成果がまとまり、ここに報告書を刊行することになりました。

調査の結果では、平安時代などの数多くの遺構や遺物が出土し、浪岡町及び周辺地域などの本県の古代史を知る成果が明らかになりました。

この調査成果が広く文化財の保護と研究に活用され、また地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護の意識の高揚につながることを期待したいと存じます。

最後に、平素より埋蔵文化財の保護に対し御理解を賜っている建設省東北地方建設局青森工事事務所並びに浪岡町教育委員会と、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり御指導、御協力を賜った関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成７年３月

青森県教育委員会

教育長　佐々木　透

例　言

1　本報告書は、平成５年度に実施した浪岡町に所在する野尻(２)遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡の青森県遺跡登録番号は29-061番である。

3　本報告書の執筆者名は、依頼原稿については文頭に、その他は文末に付した。

4　試料の同定・分析等は、次の方々に依頼した（順不同、敬称略)。

火山灰及び須恵器の蛍光Ｘ線分析	奈良教育大学教授	三辻　利一
放射性炭素による年代測定	学習院大学教授	木越　邦彦
鉄器の金属学的解析	岩手県立博物館主任専門学芸調査員	赤沼　英男
石器の石質鑑定	八戸市文化財審議委員	松山　力
遺跡の歴史的環境	青森県立柏木農業高等学校教諭	赤平　智尚

5　本書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、建設省国土地理院発行の５万分の１地形図「青森西部」を複写したものである。

6　挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。

7　竪穴住居跡の主軸方向は、カマドの主軸方向によっている。カマドの主軸方向は煙出し孔の中心と焚口の中央を結んだ線と磁北とのずれを計測した。また、竪穴住居跡の面積は、住居構築時における床面の面積－すなわち、壁の下端で囲まれた範囲（掘り方面積）を計測した。計測にあたっては、プラニメーターを使用し、３回の計測による平均値を採用した。

8　遺構・遺物の文・図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。

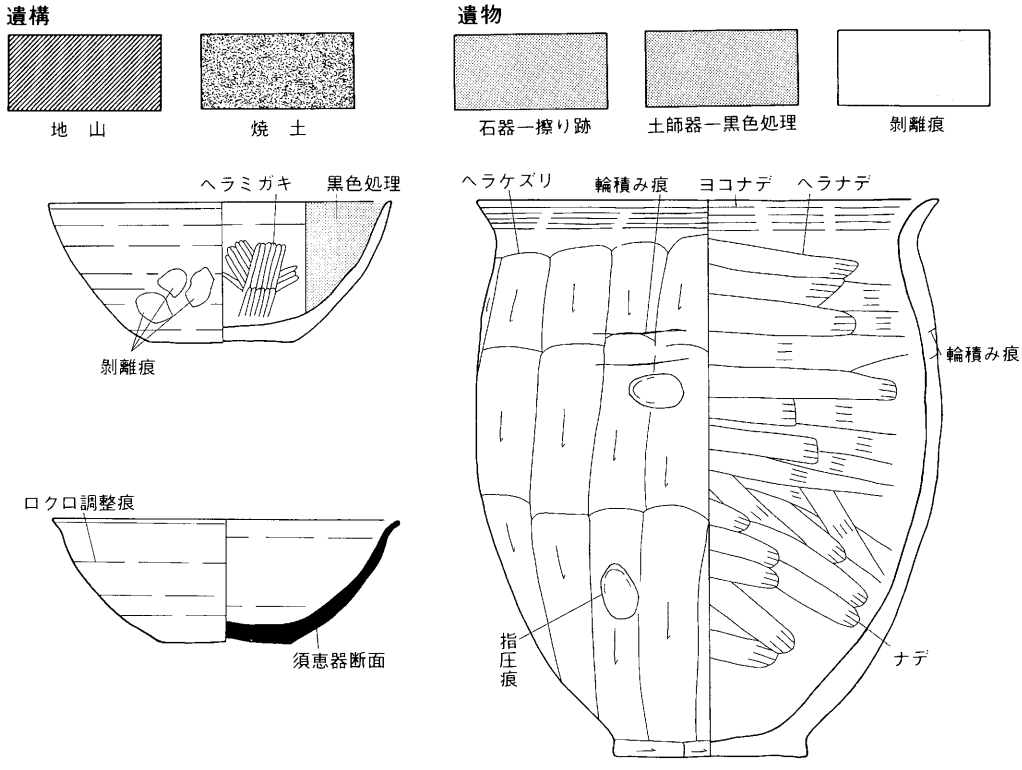
(1)　遺構内堆積土の注記には、「新版標準土色帖」(小山、竹原；1993）を用いた。

(2)　白頭山苫小牧火山灰の略称はＢ－Ｔｍで表した。

(3)　遺物には観察表・計測値を付し、出土地点、法量及び諸特徴を一覧できるようにした。なお、計測値の（　　）は推定値を示す。

(4)　出土遺物の量は、収納箱のデスクトレー（縦31.5cm、横24.5cm、深さ5.5cm）で表したところもある。

(5)　図中で使用したスクリーン・トーンの表示は下の通りである。



スクリーントーン・実測図凡例

9　引用・参考文献については本文末に収めた。文中に引用した文献については、著者名・編集機関と西暦年で示した。

10　発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

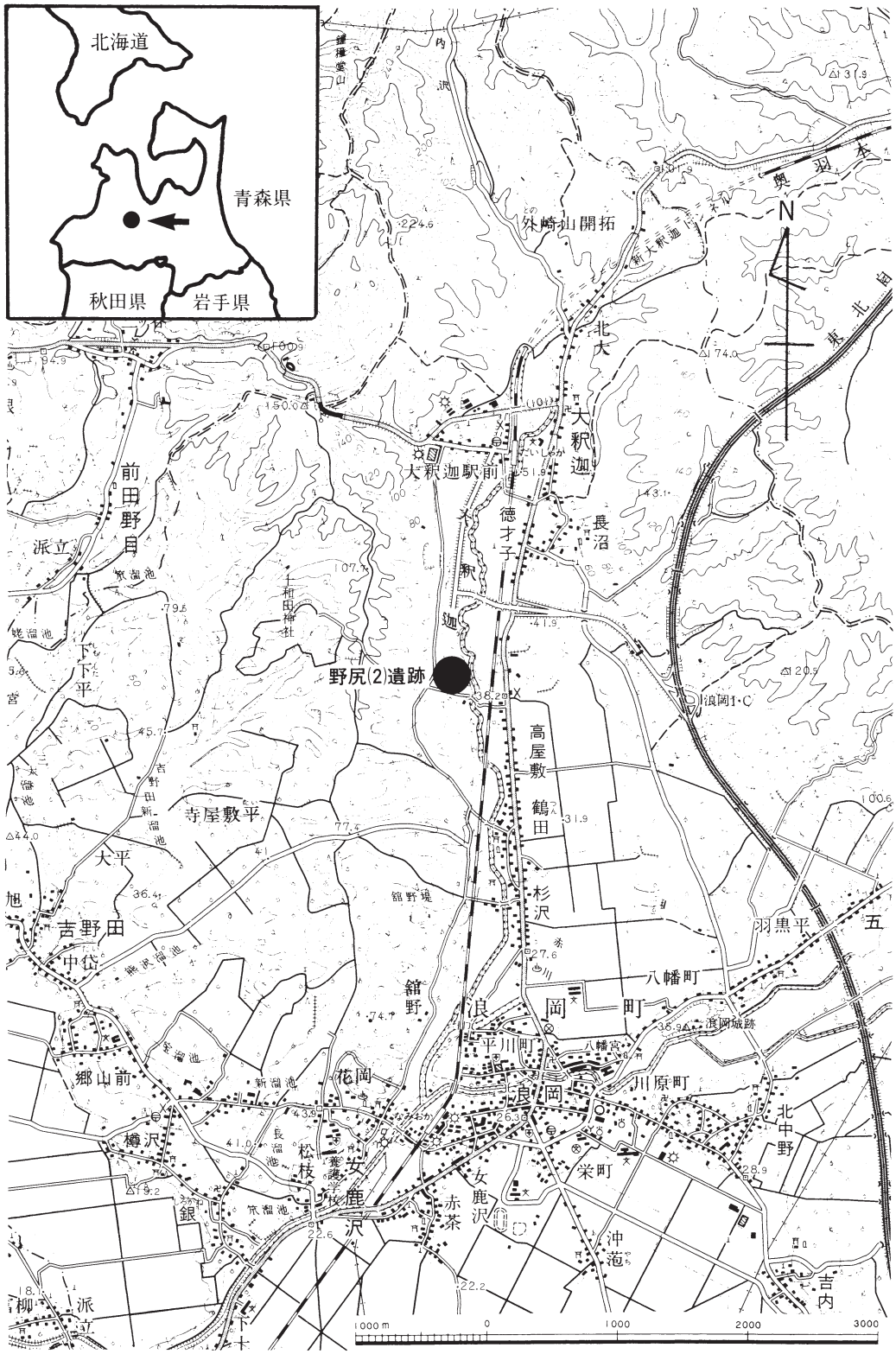
11　発掘調査及び本報告書作成にあたって、下記の諸氏から御協力・御助言を得た（敬称略、順不同）。

新谷雄蔵、永澤秀夫、小山内誠、半沢　紀、寒川　旭、花岡正光、塩原鉄郎、
遠藤正夫、小笠原善範、桐生正一、工藤竹久、久保　泰、桜田　隆、酒井宗孝、
鈴鹿良一、瀬川　滋、田中寿明、長尾正義、藤田亮一、古屋敷則雄、光井文行

目　次

口　絵
序
例　言
目　次
第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査要項 …… 1
第Ⅱ章　調査の方法と経過 …… 3
　第1節　調査の方法 …… 3
　第2節　調査の経過 …… 5
第Ⅲ章　遺跡の環境 …… 6
　第1節　地学的環境 …… 6
　　1　遺跡周辺の地形 …… 6
　　2　地質及び遺跡内の層序 …… 6
　第2節　歴史的環境 …… 15
　　1　周辺の遺跡 …… 15
　　2　歴史的環境 …… 19
第Ⅳ章　検出遺構と出土遺物 …… 23
　第1節　縄文時代の遺構と遺物 …… 23
　　1　竪穴住居跡 …… 23
　　2　掘立柱建物跡 …… 31
　　3　土坑 …… 36
　　4　埋設土器遺構 …… 44
　　5　小ピット群 …… 44
　第2節　平安時代ほかの遺構と遺物 …… 46
　　1　竪穴住居跡 …… 46
　　2　土坑 …… 99
　　3　焼土遺構 …… 113
　　4　溝跡 …… 121

第Ⅴ章　遺構外出土遺物 ……131
第１節　縄文時代の遺物 ……131
1　縄文土器 ……131
2　石器 ……132
3　土製品 ……132
第２節　平安時代ほかの遺物 ……152
1　土師器 ……152
2　須恵器 ……152
3　鉄　器 ……152
4　その他の遺物 ……152
第Ⅵ章　調査の成果 ……155
第１節　縄文時代 ……155
1　検出遺構 ……155
2　出土遺物 ……157
第２節　平安時代 ……160
1　住居跡 ……160
2　土師器 ……165
3　須恵器 ……166
第Ⅶ章　自然科学的分析 ……167
第１節　出土火山灰の蛍光Ｘ線分析 ……167
第２節　出土須恵器の蛍光Ｘ線分析 ……170
第３節　放射性炭素年代測定 ……176
第４節　出土鉄器の金属学的解析 ……177
☆　引用・参考文献 ……184
☆　写真図版 ……185
☆　報告書抄録 ……208


北海道
青森県
秋田県
岩手県
外崎山開拓
奥羽本
東北自
N
北大
大釈迦
大釈迦駅前
徳才子
長沼
前田野目
派立
下下平
野尻(2)遺跡
高屋敷
鶴田
寺屋敷平
大平
吉野田
中岱
杉沢
羽黒平
八幡町
鎧野
浪岡
平川町
川原町
郷山前
花岡
樽沢
松枝
女鹿沢
赤茶
栄町
北中野
沖萢
吉内
1000 m
0
1000
2000
3000

第１図　遺跡位置図

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

第１節　調査に至る経過

野尻(２)遺跡(以下、本遺跡と言う)は、南津軽郡浪岡町に所在する遺跡として、青森県教育委員会が平成４年５月８日に青教文第162号により台帳登録した遺跡(29-061)である。当時の調査によると、本遺跡は平安時代、中世、近世の遺跡とされている。

建設省関係の浪岡バイパス建設に伴う発掘調査は、浪岡町山本遺跡を皮切りに昭和59年度から始まったが、このバイパス沿いには幾つかの遺跡が所在することが知られていた。その中で本遺跡の発掘調査は、平成４年度に関係機関との協議の結果、工事の進捗状況から建設省青森工事事務所の要請を受けて平成５年度に実施することになったものである。併せて、本遺跡の発掘面積の関係から当年度にこの遺跡の発掘調査が終了し次第、同じ建設省関係の常磐バイパス建設に伴う水木館遺跡の発掘調査を本遺跡の発掘チームが引き続いて行う予定になった。

平成５年度に入って、４月12日に新たに配属の決まった当センター職員を現地に案内して下見を行い、その上で14日に青森工事事務所、教育庁文化課、当センターの各担当職員間の現地での打合せを行った。

なお、４月20日に浪岡町中央公民館において雇用説明会を開催した。

(鈴木克彦)

第２節　調査要項

１	調査目的	浪岡バイパス建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する野尻(２)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。
２	発掘調査期間	平成５年５月10日から同年９月30日まで
３	遺跡名及び所在地	野尻(２)遺跡、南津軽郡浪岡町大字高屋敷字野尻16－１、外
４	調査面積	7,200平方メートル

5　調査委託者　　建設省東北地方建設局青森工事事務所

6　調査受託者　　青森県教育委員会

7　調査担当機関　　青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関　　浪岡町教育委員会、中南教育事務所

9　調査参加者

調査指導員	村越　潔	弘前大学教授	(考古学)
調査協力員	蝦名　俊吉	浪岡町教育委員会教育長	
調　査　員	高島　成侑	八戸工業大学教授	(建築史)
	新谷　武	青森県立浪岡高等学校長	(考古学)
	奈良岡洋一	青森県立藤崎園芸高等学校実習教諭	(考古学)
	赤平　智尚	青森県立柏木農業高等学校教諭	(考古学)
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター		
	調査第三課長　鈴木　克彦(現総括主幹)		
	総括主査　畠山　昇		
	主　査　伊藤　昭雄		
	調査補助員　熊谷　和明、小川　次郎、成田　雅子、佐々木千文(伊藤昭雄)		

第II章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

１　調査区の設定

建設省が設置した道路中心杭№309と№311を結ぶ直線と、№310上で直交する線を基準として、４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。調査区域が南北に長いため、グリッドは東から西へアルファベットを、北から南へ算用数字を付し、この組合せによって、Ｈ－17、Ｋ－30というように名づけた。各グリッドはその北東隅のグリッド杭の記号により表示することとした。標高原点は、浪岡警察署高屋敷駐在所向いの道路際に国土地理院によって設置された水準点（標高38.2m）からレベル移動を行い、調査区域内に数箇所設置した。

南北軸線は磁北から2.3度西へ偏っている。

２　発掘調査の方法

土層観察用として11ライン南側を幅40cmほどベルト状に残し、土層にはローマ数字（Ⅰ～Ⅳ）を付して呼称した。

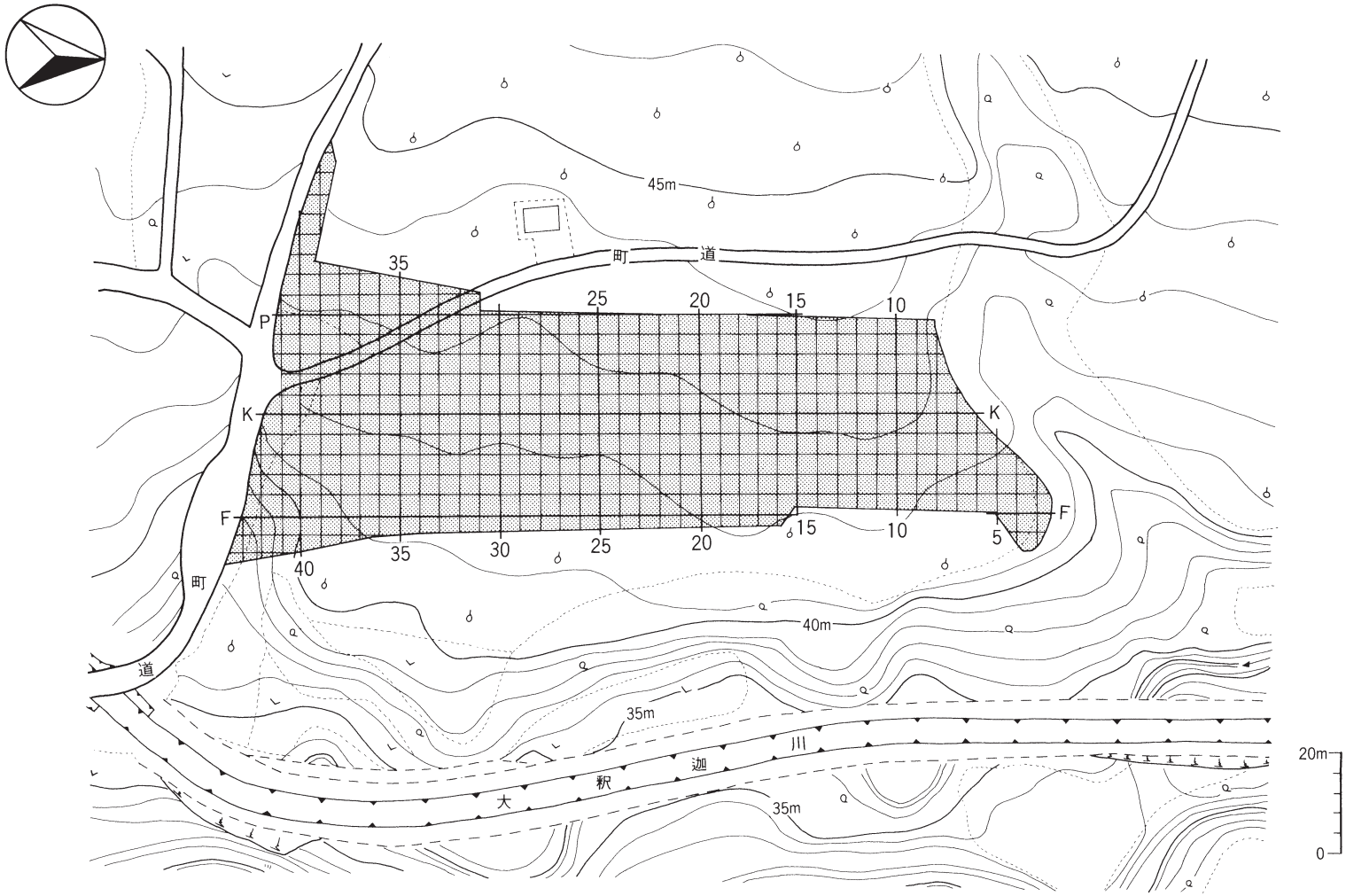
遺構は、各種類ごとに確認順に番号を付した。遺構の調査は堆積土の状態を観察するために原則的には四分法を用い、規模の大小や遺構の性格によって、二分法、その他を用いた。遺構内の堆積土層には算用数字を付して呼称した。

遺構の実測は、基本的には遣り方と平板測量で行ったが、第１号住居跡、第３号住居跡、第４号住居跡、第６号住居跡、第７号住居跡、第９号～第11号住居跡及び第24号土坑、第28号～第30号土坑については、ロープウェイと小型測定カメラを使う空中写真撮影による測量も行った。実測における縮尺は、基本的には20分の１とし、遺物の出土状態や規模の大小によっては10分の1及びその他とした。

遺物は、遺構及び層位ごとに取上げることを原則とした。遺物の出土地点を記録し、層位・標高を図に記入した。遺構外出土遺物はグリッドごとに取上げた。

記録保存のために、適宜写真撮影を行った。遺構については、土層断面・遺物の出土状況・完掘等を撮った。その他必要に応じて基本層序・調査状況等についても撮った。写真は、モノクローム、カラーリバーサルフィルムを使い、貴重な遺構・遺物等についてはカラープリントも使用した。

（伊藤昭雄）



第２図　遺跡地形図、グリッド配置図

第２節　調査の経過

平成５年５月10日、調査器材等を現地に搬入し、プレハブ小屋内清掃、器材収納等いわゆる環境整備を行い、一部粗掘りを開始した。翌日からグリッド設定のための杭打ちを始めた。粗掘り作業は北側から行い、順次南側へ拡張していった。

翌11日より、縄文時代後期の土器片及び石器片、平安時代の土師器・須恵器片が出土し始めた。翌々日には、平安時代の竪穴住居跡を３軒確認した。５月18日には、平安時代の竪穴住居跡をさらに１軒、縄文時代のそれを１軒、大溝２条、溝２条を確認した。

遺跡内の層序を知るために、F－７グリッド西壁、O－24グリッド西壁、O－39グリッド東壁、E－26グリッド東壁の４箇所について、５月14日から25日まで各グリッド内の一部を深く掘った後、土層を詳細に観察そして記録した。

５月20日、標高原点を知るために、近くの水準点（標高38.2m）からレベル移動を行い、調査区域内に数箇所設置した。

５月21日より併行して中央部のL－27グリッド周辺の粗掘りにも取り掛った。すぐに平安時代の竪穴住居跡を１軒確認し、24日から精査を行った。28日には北端沿いに縄文時代後期十腰内Ⅰ式の土器片が多量に出土した。31日には土坑を始めて１基確認した。

６月３日には焼土遺構を４基確認した。粗掘り作業を早く進めるために、６月７日より重機を入れ、15日には盛り上げた土を外部に搬出した。粗掘りが進んでも思ったほど遺構は検出されず、７月の粗掘り・精査も順調に進んだ。

７月29日、粗掘りはほぼ終了した。８月に入ると好天が続き、しかも遺構・遺物数が少ないため精査は急速に進んだ。８月４日よりロープウェイと小型測定カメラを使う空中写真撮影を行った。８月中に精査終了のめどが立ち、協議を重ねた結果、当初終了の予定日は変えないものの、９月いっぱいは、本遺跡の北側及び南側の試掘調査を実施することになった。

好天の８月25日、本遺跡周辺の地質調査を行った。大規模な露頭は本遺跡西北西500mのところに見られた。これ以外では、切り割り等による小規模なものが数箇所のみである。

９月30日、出土遺物の取り上げを終え、猫車等の調査器材を一部水洗いし、整理した。調査器材・出土遺物をトラックで搬出し、現地調査を終了した。

現地説明会については特別な場を設けては行わなかったが、10月30日13時より浪岡町「中世の館」において、山元（２）遺跡、羽黒平（１）・松山遺跡、そして、野尻（２）遺跡終了後調査に入った水木館遺跡の４遺跡と合同で、調査概要をスライドを使って説明し、併せて出土遺物を展示した。周辺地域住民の方が多数訪れ、熱心な質問を受けた。　　（伊藤昭雄）

第Ⅲ章　遺跡の環境

第１節　地学的環境

１　遺跡周辺の地形

本遺跡は標高38～44m（主体は41～44m）の緩傾斜面（主体の勾配は50‰内外）上にあり、50mほど東には比高差約５mをもって、大釈迦川がほぼ南へ流れている。川というよりはコンクリートの側壁によって造られた５m幅の水路といった方がよい。

本遺跡はもともとはりんご園であり、この辺一帯は、大釈迦川以西にはりんご園、以東には水田が拡がっている。この土地利用については、大釈迦川以東の東西勾配が以西のそれよりもさらに小さくなることによる。

ほぼ北には、標高468mの梵珠山を見ることができる。本遺跡のすぐ南にある町道を西北西へ１㎞ほど進むと津軽山地の尾根に達し、ここからは標高1625mの岩木山とその手前に拡がる津軽平野南部を見下ろすことができる。なお、この尾根からすぐ西には広大なりんご園が延々と続く。向きを変えて東南東～南東に目をやると、八甲田山の峰々を見ることができる。

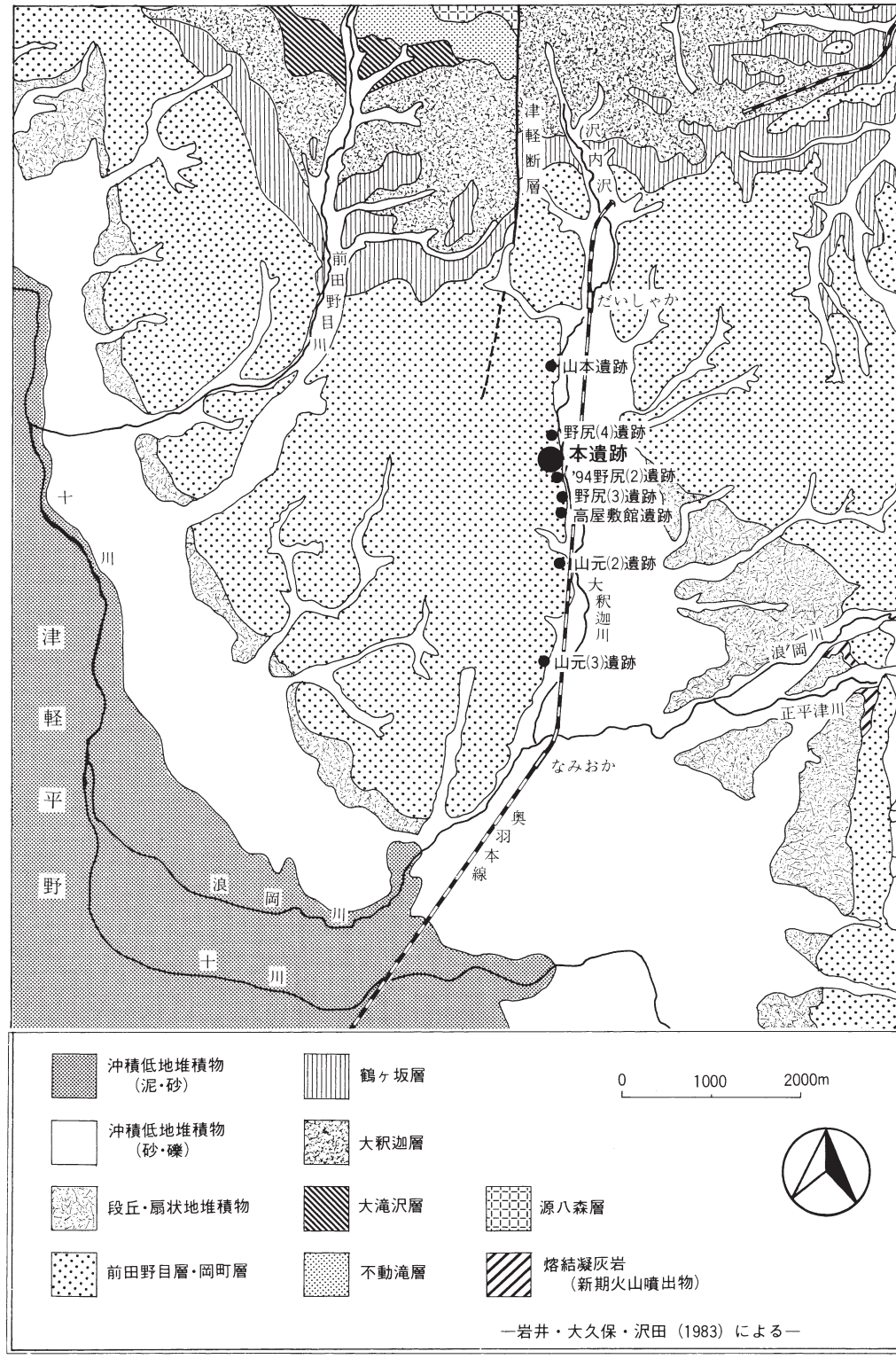
水野・堀田（1983）によれば、本遺跡は前田野目台地に属する。この台地は津軽平野と大釈迦丘陵の間に分布する海成段丘を中心とした砂礫台地で、標高によって３段に細分される。本遺跡はその中の中位面に属する。

２　地質及び遺跡内の層序

岩井・大久保・沢田（1983）によれば、本遺跡の基盤層は第四系洪積統の前田野目層で、その層相は凝灰質砂を主とし、粘土、シルトを伴う。砂は塊状の部分もあるが多くは薄成層し、また、軽石粒や礫を多く含んで斜交層理を示すことが多い。しばしば泥炭の薄層を挾在する。

前田野目層は本遺跡周辺では国道101号線よりほぼ南に舌状に拡がっており、表層におけるその限界は、津軽山地南端と津軽平野の境界に一致している。ただし、西側ではその境界部に段丘・扇状地堆積物が幅狭く張り出している。なお、この前田野目層は津軽断層を境に東側では岡町層と呼ばれる。

地質構造上、本遺跡より北にいくほど地層は古くなる。というのも、津軽山地南部の馬ノ神山（標高549m）を中心とするドーム構造に影響されるからである。ただし、この馬ノ神山ドームは先の津軽断層より東側にはみられない。本遺跡周辺における前田野目層・岡町層以外の詳細は下の通りである。これらの分布は第３図に示した。



第3図　遺跡周辺表層地質図

沖積低地堆積物(泥・砂)

十川・浪岡川等によって供給された泥や砂で、いわゆる沖積統である。

沖積低地堆積物(砂・礫)

同じく沖積統であるが、大釈迦丘陵・前田野目台地及び浪岡台地が津軽平野と接する付近で、前田野目川・大釈迦川等によって供給された砂礫中心の堆積物である。

段丘・扇状地堆積物

津軽平野の東縁部にみられる砂礫中心の堆積物で、洪積統である。

前田野目層・岡町層

鶴ヶ坂層

新第三紀鮮新世に属するとされ、主として浮石質凝灰岩から成る。全体的に塊状無層理である。

大釈迦層

同じく新第三紀鮮新世に属するとされ、主として中〜粗粒の凝灰質砂岩から成る。一般に下部はシルト岩優勢、上部は砂岩優勢で、しばしば斜交成層が認められる。本層には浅海性の海棲動物化石が豊富に含まれており、大釈迦動物化石群として知られる。

大滝沢層

新第三紀中新世に属するとされ、主として石英安山岩質の浮石質凝灰岩から成る。

不動滝層

新第三紀中新世に属するとされ、主として珪藻土質シルト岩から成る。全体的に塊状無層理で、貧化石帯となっている。

源八森層

同じく新第三紀中新世に属するとされ、主として黒灰色シルト岩の硬軟互層及び塊状黒色シルト岩から成る。

熔結凝灰岩(新期火山噴出物)

新期火山噴出物の最下位に位置する。一般に田代平熔結凝灰岩と呼ばれ、石英安山岩質で、八甲田火山の北麓に広く分布する。

前田野目層・岡町層、鶴ヶ坂層及び大釈迦層は、国道101号線及び7号線沿いによく観察することができる。前田野目層・岡町層は、鶴ヶ坂層の上にほぼ水平な層理を有して接し、層厚は国道沿いでは数メートル程度で、この上にローム層を載せていることが多い。また、大釈迦層は津軽断層以西の前田野目部落付近では、みかけ上西側に30度前後傾斜しており、この上に鶴ヶ坂層が載るという、いわゆる傾斜不整合を呈する。しかし、津軽断層以東の新大釈迦トンネル

直上付近では、大釈迦層の傾斜はどこでも緩いものとなっている。これは、津軽断層を境にその東西で地殻変動がかなり異なっていたことを意味する。

本遺跡西北西500mのところに見られる比較的大きな露頭を観察すると、地表より、腐植土→赤褐色ローム→緑灰色浮石質凝灰岩→灰白色細粒凝灰岩→緑灰色浮石質凝灰岩の順に下に続く。この露頭の垂直距離は約15mあり、凝灰岩が全体の8割ほどを占める。上位の緑灰色浮石質凝灰岩は風化が進んで粘土質である。これら凝灰岩層は、東へ11～16度傾斜し、下位ほどその数値は大きい。層相から前田野目層に属するものと考えられる。

土層観察用として11ライン南側を幅40cmほどベルト状に残した。ここにおける基本土層の詳細は下の通りである。第4－1図はその実測図である。

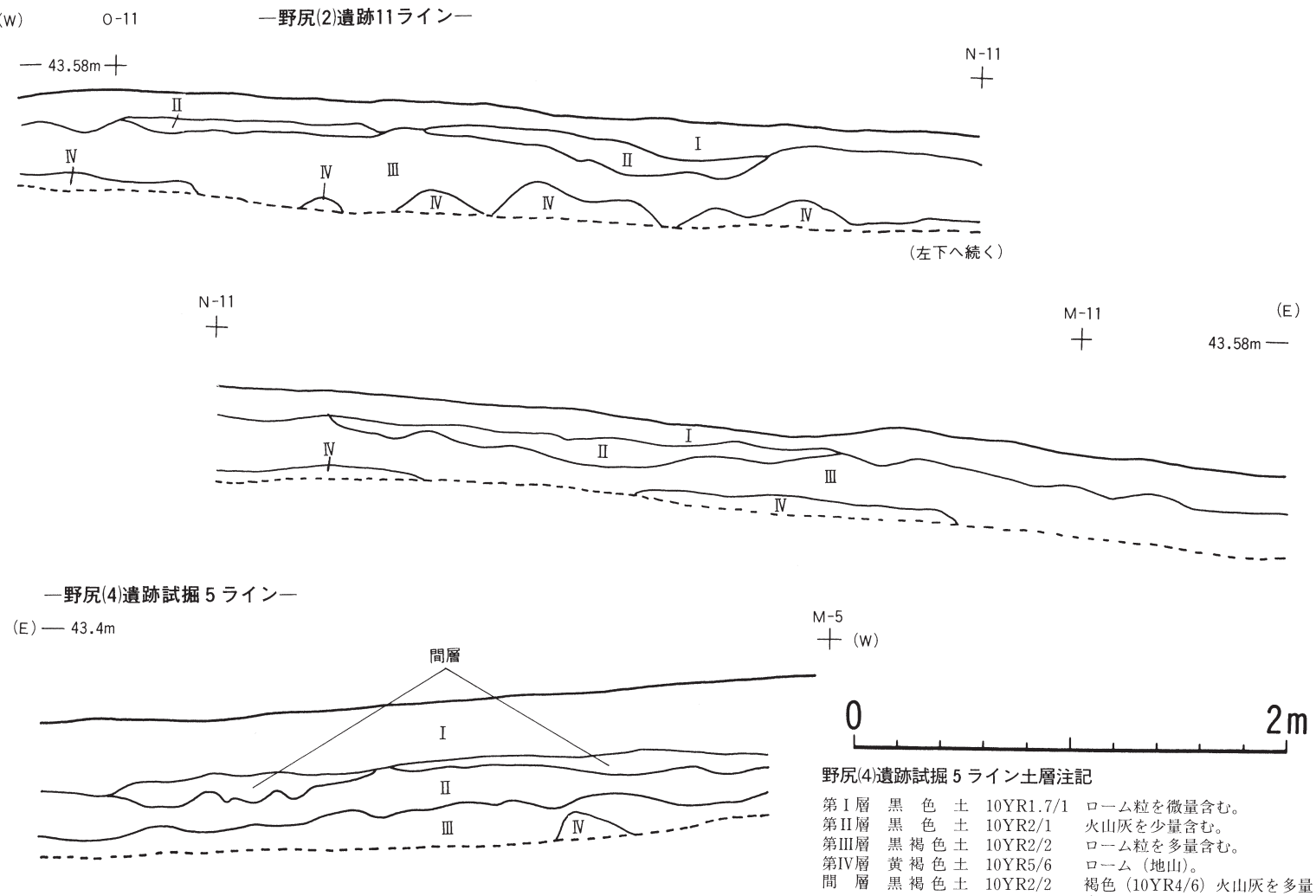
I層	黒褐色土	10YR 3/1	しまりあり。耕作土層。
II層	黒色土	10YR 2/1	I層より軟らかい。レンズ状。
III層	暗褐色土	10YR 3/3	II層より軟らかい。下方ほど軟らかい。色は一様ではなく、下方にいくにつれ褐色を帯びる。漸移層。
IV層	褐色ローム	10YR 4/4	しまりあり。粘性あり。地山。

基本層序観察用として、O－24、F－7、E－26、D－39の各グリッドについて一部深く掘った。観察した壁は、前者2つについては西壁、後者2つについては東壁である。セクション及び対比は第4－2図の通りである。このうちI層からIV層(ただし各セクション最上部)は、基本土層にそのまま対比される。IV層は最上部を除くとグリッドごとに微妙に異なっており、各セクションごとに注記を付した。V・VI層は約2m掘ったF－7グリッドでのみ確認した。詳細は下の通りである。

V層　灰白色粘土　10YR 7/1　粘性大。

VI層　灰白色細粒～浮石質火山灰　10YR 7/1

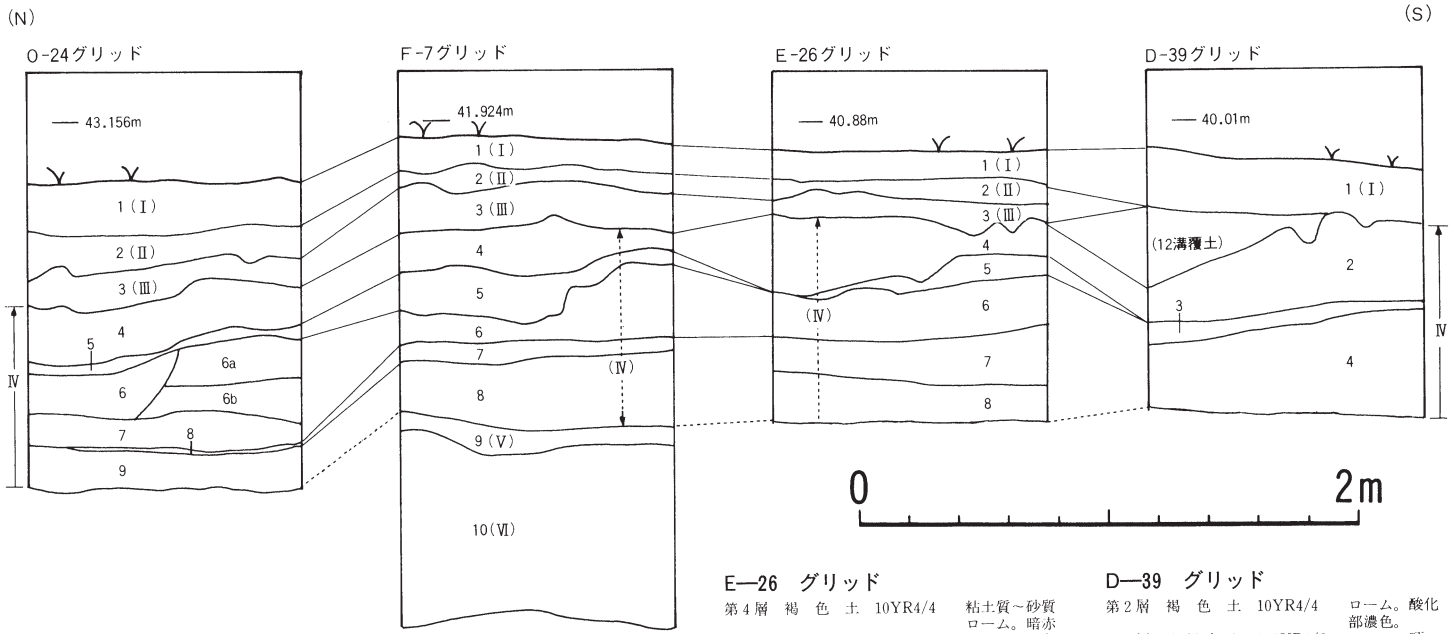
塊状無層理。乾くと非常に細かい粉末となるが、ベビーパウダーほど細かくはなく、かすかにさらさらする。径1cm以内のもろい浮石が30～40%含まれる。酸化の進んでいるところは黄褐色を呈する。ところによっては黄褐色～灰白色粘土となっている。黄褐色粘土の中にはリモナイトが見られたりする。底面はこれ以上ボーリングステッキが突き刺さっていかないほどに硬くしまっている。鶴嘴を使わなければ掘り下げることは不可能である。



野尻(4)遺跡試掘5ライン土層注記

第Ⅰ層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒を微量含む。
第Ⅱ層	黒色土	10YR2/1	火山灰を少量含む。
第Ⅲ層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒を多量含む。
第Ⅳ層	黄褐色土	10YR5/6	ローム（地山）。
間層	黒褐色土	10YR2/2	褐色（10YR4/6）火山灰を多量含む。

第4—1図　基本土層実測図



O—24 グリッド

第4層	褐色土	10YR4/4	ローム。
第5層	鈍い黄褐色土	10YR5/4	粘土。
第6層	褐　色　土	10YR4/4	ローム。径1cm以内の非常に硬い、角張っているリモナイト多数。
第6a層	鈍い黄褐色土	10YR5/4	ローム。
第6b層	褐　色　土	10YR4/4	ローム。
第7層	鈍い黄橙色土	10YR6/4	ローム。
第8層	灰白色土	10YR7/1	粘土。
第9層	鈍い黄橙色土	10YR6/3	砂質ローム。砂は粗粒。

F—7 グリッド

第4層	褐　色　土	10YR4/4	ローム。
第5層	鈍い黄褐色土	10YR5/4	粘土。
第6層	褐　色　土	10YR4/6	砂質ローム。
第7層	鈍い黄橙色土	10YR7/2	粘土。
第8層	鈍い黄橙色土	10YR6/3	砂質ローム。粒の粗い部分と細かい部分の水平な互層。

E—26 グリッド

第4層	褐　色　土	10YR4/4	粘土質～砂質ローム。暗赤褐色～赤褐色の酸化部少量。径2cm以内のリモナイト塊少量。
第5層	鈍い黄橙色土	10YR6/4	粘土質ローム。
第6層	褐　色　土	10YR4/4	砂質ローム。部分的に粗粒砂。暗赤褐色～赤褐色の酸化部3～4割。リモナイト少量。
第7層	鈍い黄橙色土	10YR6/4	粘土。厚さ1～2cm。
	褐　色　土	10YR4/4	砂質ローム。厚さ2～3cm。暗赤褐色～赤褐色の酸化部3割。リモナイト少量。※第7層は、上の互層。
第8層	鈍い黄橙色土	10YR6/4	粘土。

D—39 グリッド

第2層	褐　色　土	10YR4/4	ローム。酸化部濃色。
第3層	赤褐色土	2.5YR4/6	ローム。硬いリモナイト粒含む。
第4層	灰白色土	10YR7/1	粘土。赤褐色～黄褐色部もある。粘土質～砂質ローム も不規則に存する。

第4—2図　基本層序実測図及び対比

V・VI層については、11ラインの第3号溝跡セクションでも、最下部の第8・9層として確認しており、前田野目層と考えられる。

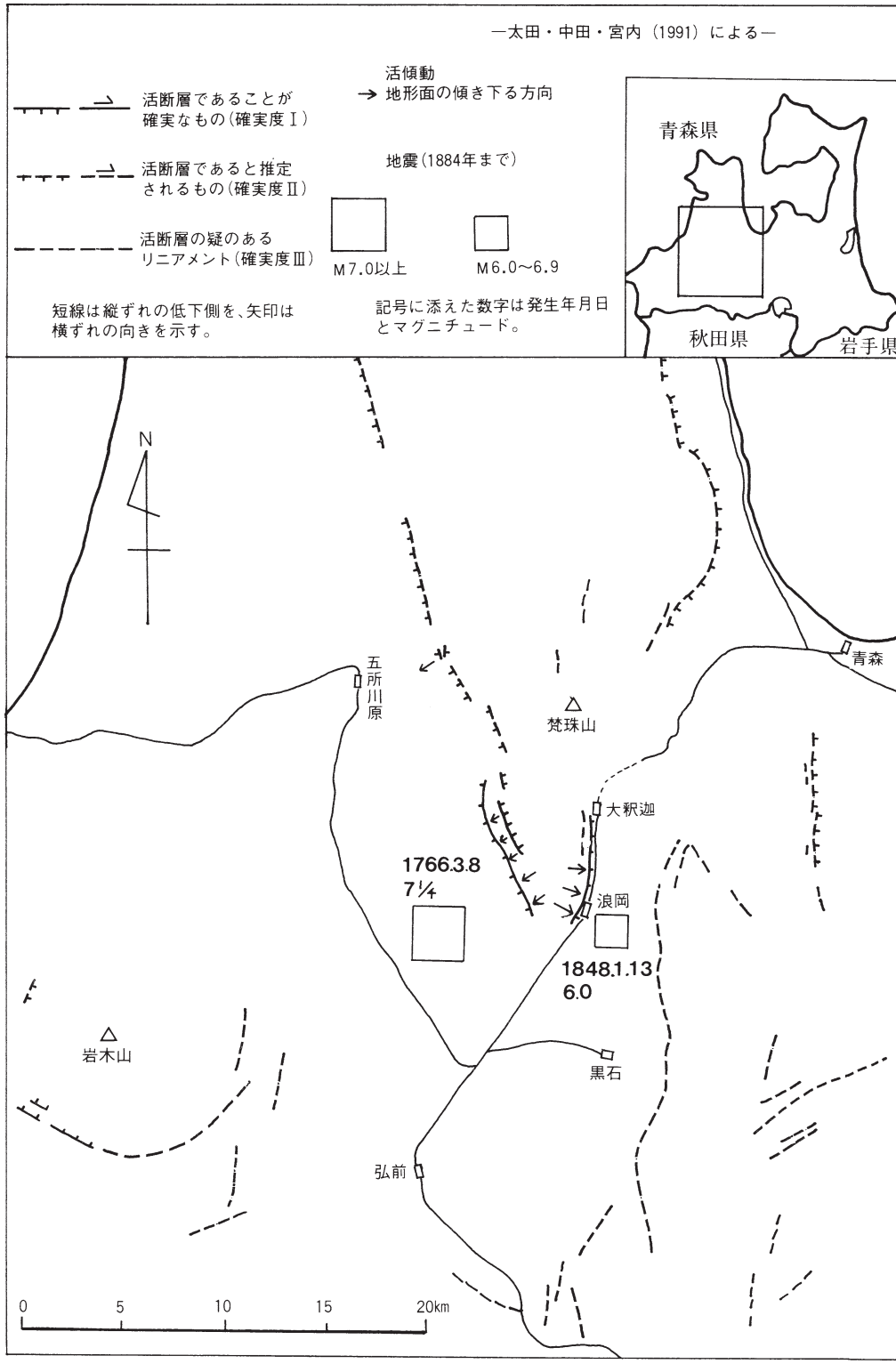
なお、第6号及び第18号土坑各覆土から採取した火山灰2点を蛍光X線分析(依頼)した結果、両方ともB－Tmであることが判明した。第6号土坑においては、その平面形は環状、断面形は盆状かつレンズ状である。第18号土坑では、第1層と第4層の間に16cmの厚さで挾在していた。この他に第26号土坑確認面及び第9号住居跡確認面の狭い範囲に、B－Tmと考えられる火山灰を確認している。さらに9月の試掘で、本遺跡1ラインより24m北の野尻(4)遺跡5ラインの土層より、やはりB－Tmと考えられる火山灰を確認している。黒色土層のほぼ中間にレンズ状に見られた。第4－1図に示す通りである。本遺跡からは、十和田a降下火山灰(To－a)は確認されていないが、南に位置する山元(3)遺跡からは、採取試料8点中1点だけTo－aを確認している。

本基本層序のローム層部分については、リモナイト(褐鉄鉱)がしばしば見られることから、本遺跡は、過去において水の影響をよく受けていたと考えられる。このような現象は、山元(3)遺跡の調査でも確認されている。これに対してやはり本遺跡の南に位置する山元(2)遺跡の調査では、比較的急な斜面が関与しているのか、水の影響を示唆するようなリモナイトは確認していない。ここでのロームは、明黄褐色ローム→明黄褐色粘土質ローム→橙色浮石質ロームの順に下に続く。上位の明黄褐色ロームは、径2.5cm～1cm以下の腐蝕の著しい浮石を多量に含む。下位の橙色浮石質ロームは軟らかく、径5cm前後の腐蝕の著しい浮石が密集し、炭化材を含んだりする。後者は、堆積状況から降下性というよりは火山砕屑流性と考えられる。1.2万～1.3万年前の十和田八戸火砕流堆積物(To－H)の可能性が高い。

最後に本遺跡周辺の活断層についてふれる。第5図は、太田・中田・宮内(1991)によって調査されたものである。この図を元にすると、浪岡バイパスは活断層上付近に位置するとみられる。浪岡バイパス建設事業の実施に先立って、平成4年から平成6年までに青森県教育委員会によって調査された遺跡は、南から山元(3)遺跡、山元(2)遺跡、高屋敷館遺跡、野尻(3)遺跡、'94野尻(2)遺跡、'93野尻(2)遺跡－本遺跡、野尻(4)遺跡である。なお、野尻(4)遺跡のすぐ北には山本遺跡があって、昭和59～60年に同じく調査されている。

第3図に示されているように、これら全ての遺跡は、前田野目層と沖積低地堆積物(砂・礫)の境界線付近に位置し、すぐ東には大釈迦川が南流する。大釈迦川との比高差は数mの域を超えず、南下するほどその数値は小さくなる。特に高屋敷館遺跡から野尻(4)遺跡にかけては、そのすぐ東には急傾斜の崖地形が見られる。高屋敷館遺跡においては、深い環濠がこの崖を切って大釈迦川と通じている。

この活断層に特に名称は付されていないが、前田野目台地に影響を及ぼす「浪岡撓曲」によっ



第５図　津軽地方の活断層分布図

て、地下に逆断層が存在すると推定されるものである。断層形態は撓曲崖(撓み崖ともいい、地層が段状におしまげられて形成された急斜面)とされ、変位は数十mとみられている。南北方向に5.5kmほどの長さを有するとされるが、このライン付近における現在までの発掘調査では、逆断層そのものは全く確認していない。ただ、前述の急傾斜の崖地形は撓曲崖の可能性が高く、大釈迦川の浸食作用にのみよるものとはいえないであろう。なお、このラインの北延長線付近には、前述の津軽断層が存在する。

(伊藤昭雄)

【引用・参考文献】

・青森県農林部土地改良第一課 (1983) 土地分類基本調査「青森西部」.

・岩佐三郎 (1962) 青森県津軽地方の含油第三系とその構造発達史について. 石油技術協会誌, 27, p. 407－441.

・藤井敬三 (1981) 油川地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 地質調査所, 38 p.

・伊藤昭雄 (1978MS) 津軽半島中山山脈中央部の新第三系について. 弘前大学教育学部中学校教員養成課程理科専攻課程卒業論文.

・寒川　旭 (1989) 考古学と古地震研究の接点. 第四紀研究, 27, p. 241－252.

・寒川　旭 (1990) 遺跡から得られた過去の地震情報. 地学雑誌, 99, p. 51－62.

・寒川　旭 (1992) 地震考古学. 中公新書, 251p.

・活断層研究会 (1991)『新編日本の活断層－分布図と資料』東京大学出版会, 448p.

・町田　洋・新井房夫 (1992)『火山灰アトラス－日本列島とその周辺』東京大学出版会, 210p.

・青森県教育委員会(1987)山本遺跡発掘調査報告書. 青森県埋蔵文化財調査報告書第105集.

・青森県教育委員会 (1994) 山元(3)遺跡発掘調査報告書. 青森県埋蔵文化財調査報告書第159集.

第２節　歴史的環境

青森県立柏木農業高等学校教諭　　赤平　智尚

１　周辺の遺跡

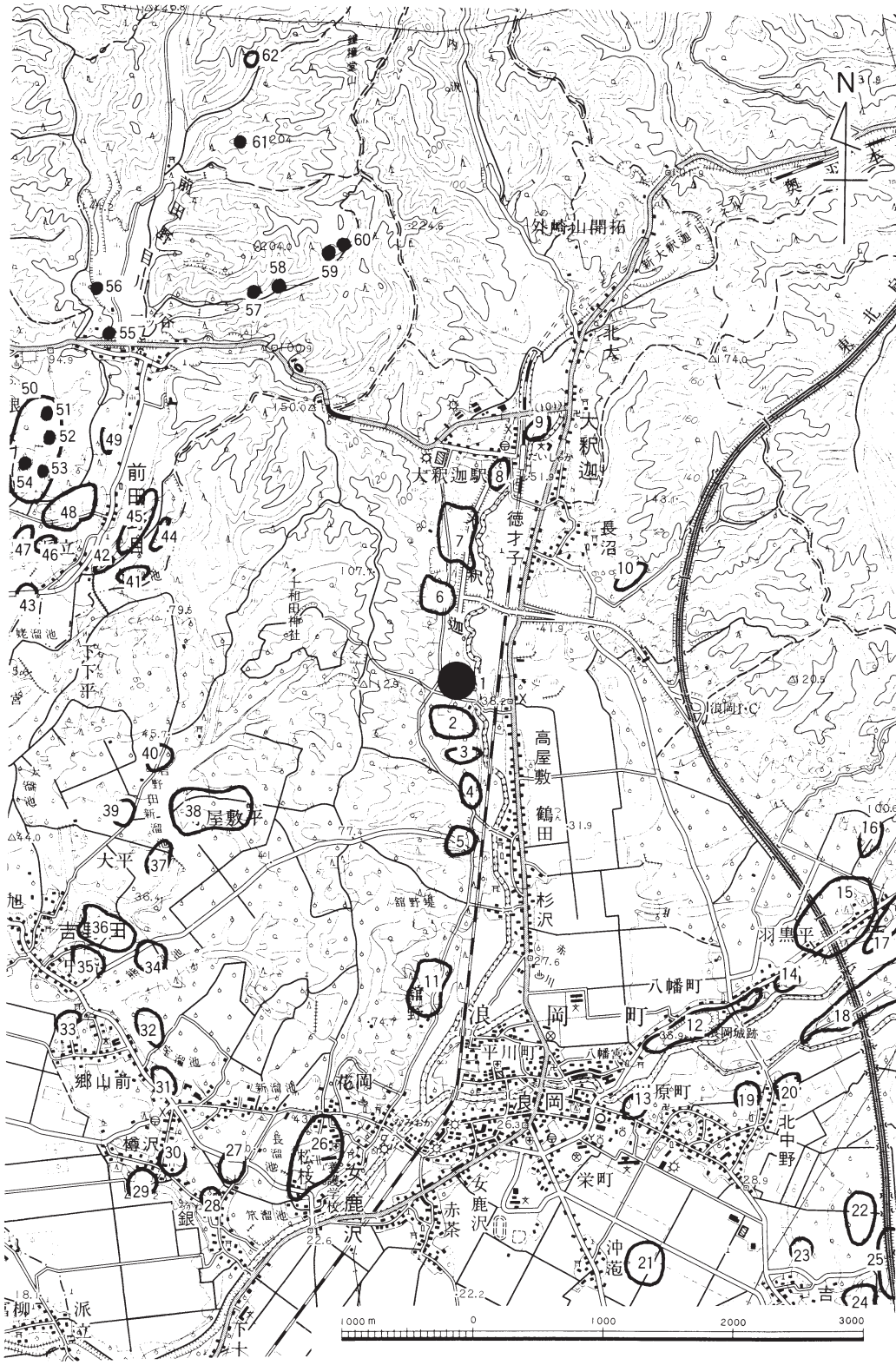
野尻(2)遺跡は、梵珠山南麓の40～44mの前田野目台地縁辺部、浪岡町大字高屋敷字野尻に位置する。現在ここ浪岡町で確認されている遺跡は、62遺跡を数える(1)。その分布は、八甲田山西麓や梵珠山に連なる丘陵地帯に多く見られ、中でも平安時代の遺跡と推定されるものが半数以上を占めている。かつて昭和50年代には、八甲田山西麓の津軽平野に面した丘陵縁辺部を東北自動車道が北進することになり、その建設に伴う緊急発掘調査が実施された。その結果、源常平遺跡・羽黒平(1)遺跡・杉の沢遺跡・松元遺跡が調査され、いずれも平安時代の集落跡が検出されている。また、浪岡バイパスが計画されている大釈迦から前田野目台地にかけての梵珠山南麓の丘陵地帯には、20以上の遺跡が確認されているが、やはり平安時代の遺物が出土する遺跡が多い。特に本遺跡を含め浪岡バイパス約10kmの建設計画路線内には、現在北から、山本・野尻(1)～(4)・高屋敷館・山元(1)～(3)遺跡の９遺跡が確認され、いずれの遺跡においても平安時代の遺物を中心に出土している。その中の主なものとして、山本遺跡から縄文時代前期から後期の遺物と平安時代のヘラ書きのある土師器や須恵器が多数出土した。また、精錬炉と思われる遺構も検出した。山元(3)遺跡からも平安時代の住居跡や須恵器大甕など、さらに、'94野尻(2)遺跡からは終末期古墳と思われる遺構が、高屋敷館遺跡からは、平安時代の大規模な土塁や堀跡そして掘立柱建物跡等が検出されている。

さて、これらの遺跡からは必ずといっていいほど、灰褐色をした須恵器が多く出土する。この産地として、本遺跡の西方約３km付近の前田野目川流域に点在する五所川原須恵器窯跡群に求めることができる。ここは、日本最北の平安時代須恵器窯跡群として知られている。梵珠山南麓、前田野目川流域の山間部に点在する窯跡は、上流から砂田窯跡と鞠ノ沢窯跡が７ヶ所(前田野目窯跡群)、狼ノ長根付近に４ヶ所(持子沢窯跡群)を指す。かつて、昭和43年には砂田・鞠ノ沢窯跡(2)が、同じく昭和47年には持子沢窯跡(3)が、坂詰秀一氏らによって調査された。また、昭和48年には、村越潔氏、新谷武氏らによって砂田窯跡が調査され(4)、窯の全貌が知られるようになった。半地下式の無段階登窯で、10世紀の始め頃に持子沢に、そして中頃は砂田・鞠ノ沢の前田野目川上流部へ築かれて、やがて11世紀には消滅することになる。現在、この窯跡群の東方3km付近を大釈迦川沿いに南北に分布する平安時代の遺跡の調査を進めているが、本遺跡を始めとして、殆どの遺跡からこれら窯跡群の製品が出土する。そればかりか、津軽一円のみな

第１表　周辺の遺跡

No.	県遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	種 別	時　代
1	29061	野尻(2)遺跡	浪岡町高屋敷字野尻	散布地	縄文・平安
2	29062	野尻(3)遺跡	浪岡町高屋敷字野尻	散布地	平安・中世・近世
3	29003	高屋敷館遺跡	浪岡町高屋敷字野尻	散布地	平安
4	29054	山元(1)遺跡	浪岡町杉沢字山元	散布地	縄文・平安
5	29055	山元(2)遺跡	浪岡町杉沢字山元	散布地	平安
6	29060	野尻(1)遺跡	浪岡町高屋敷字野尻	散布地	縄文・平安
7	29049	山本遺跡	浪岡町徳才子字山本	散布地	平安
8	29001	早稲田館遺跡	浪岡町徳才子字早稲田	散布地	平安
9	29048	大釈迦館(館の畑)遺跡	浪岡町大釈迦字前田	城　跡	中世
10	29002	大堤沢遺跡	浪岡町長沼字南藤巻	散布地	縄文(後、晩)・平安
11	29056	山元(3)遺跡	浪岡町杉沢字山元	散布地	縄文・平安
12	29020	浪岡城跡	浪岡町五本松字岡本、浪岡字岡、字村本	城　跡	中世
13	29050	川原館(川原御所)遺跡	浪岡町浪岡字浅井	城　跡	中世
14	29021	加茂神社遺跡	浪岡町五本松字松元	散布地	平安
15	29017	羽黒平(1)遺跡	浪岡町五本松字羽黒平	散布地	縄文・平安
16	29018	羽黒平(2)遺跡	浪岡町羽黒平	散布地	縄文(晩)・平安
17	29019	羽黒平(3)遺跡	浪岡町羽黒平字宮本	散布地	縄文(晩)
18	29027	源常平遺跡	浪岡町北中野	散布地	縄文(中、後)・平安
19	29023	浪岡崎(1)遺跡	浪岡町北中野字天王	散布地	平安
20	29024	浪岡崎(2)遺跡	浪岡町北中野字天王	散布地	縄文(晩)
21	29022	沖林遺跡	浪岡町北中野	散布地	平安
22	29036	桃里遺跡	浪岡町北中野字桃里	散布地	平安
23	29052	北畠館遺跡	浪岡町吉内	城　跡	中世
24	29039	吉内遺跡	浪岡町吉内字山下	散布地	平安
25	29038	杉ノ沢遺跡	浪岡町北中野字桃里、吉内字杉ノ沢	散布地	縄文(後)・平安
26	29014	長溜池遺跡	浪岡町松枝字野尻	散布地	縄文(中、晩)・平安
27	29015	大林遺跡	浪岡町銀字杉田	散布地	平安
28	29051	銀館(杉銀館、尾林館)遺跡	浪岡町銀字杉田、字上野	城　跡	中世
29	29013	山神宮遺跡	浪岡町樽沢字村元	散布地	縄文(晩)
30	29012	神明宮遺跡	浪岡町銀字杉田	散布地	縄文(晩)・平安
31	29011	上野遺跡	浪岡町郷山前字上野	散布地	縄文(中、後)

No.	県遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	種別	時　代
32	29009	熊沢溜池遺跡	浪岡町樽沢字村元	散布地	平安
33	29010	永原遺跡	浪岡町郷山前字永原	散布地	縄文(前、後)
34	29007	中平(1)遺跡	浪岡町郷山前	散布地	縄文(中、後)
35	29058	吉野田平野遺跡	浪岡町吉野田字平野	散布地	平安
36	29008	中平(2)遺跡	浪岡町郷山前	散布地	縄文(中)
37	29005	旭(1)遺跡	浪岡町旭字木戸口	散布地	平安
38	29059	寺屋敷平遺跡	浪岡町吉野田字荷越沢	散布地	平安
39	29006	旭(2)遺跡	浪岡町旭	散布地	平安
40	29004	下下平遺跡	浪岡町旭	散布地	平安
41	05060	桜ケ峰(3)遺跡	五所川原市前田野目字桜ケ峰	散布地	縄文・平安
42	05043	真言館遺跡	五所川原市前田野目字桜ケ峰	館　跡	平安
43	05008	川崎遺跡	五所川原市前田野目字川崎	散布地	縄文・平安
44	05059	桜ケ峰(2)遺跡	五所川原市前田野目字桜ケ峰	散布地	縄文・平安
45	05009	桜ケ峰遺跡	五所川原市前田野目字桜ケ峰	散布地	縄文・平安
46	05063	隠川(3)遺跡	五所川原市持子沢字隠川	散布地	平安・近世
47	05064	隠川(4)遺跡	五所川原市持子沢字隠川	散布地	平安
48	05062	隠川(2)遺跡	五所川原市持子沢字隠川、字犬走	散布地	平安・近世
49	05061	犬走(2)遺跡	五所川原市持子沢字犬走	散布地	平安
50	05020	隠川(1)遺跡	五所川原市持子沢字隠川	散布地	縄文(中、後)・平安
51	05024	持子沢D遺跡	五所川原市持子沢字隠川	窯　跡	平安
52	05021	持子沢A遺跡	五所川原市持子沢字隠川	窯　跡	平安
53	05022	持子沢B遺跡	五所川原市持子沢字隠川	窯　跡	平安
54	05023	持子沢C遺跡	五所川原市持子沢字隠川	窯　跡	平安
55	05051	犬走(1)遺跡	五所川原市前田野目字犬走	散布地	平安
56	05017	鞠ノ沢遺跡	五所川原市前田野目字鞠ノ沢	窯　跡	平安
57	05012	砂田B遺跡2号窯	五所川原市前田野目字前田野目	窯　跡	平安
58	05011	砂田B遺跡1号窯	五所川原市前田野目字前田野目	窯　跡	平安
59	05015	砂田D遺跡2号窯	五所川原市前田野目字砂田	窯　跡	平安
60	05014	砂田D遺跡1号窯	五所川原市前田野目字砂田	窯　跡	平安
61	05016	砂田E遺跡	五所川原市前田野目字前田野目山	窯　跡	平安
62	05013	砂田C遺跡	五所川原市前田野目字砂田	窯　跡	平安



第６図　周辺の遺跡位置図

らず、南は米代川流域や馬淵川流域、北は北海道日本海側のほぼ全域から出土例が報告されている。

さて、町の中心部を流れる浪岡川は、南東部山地に源を発し、王余魚沢川・正平津川・大釈迦川と合流して西流し、板柳町滝井付近で十川に、さらに五所川原市西方で岩木川と合流、十三湖を経て日本海へと注いでいる。津軽における中世城館は、この岩木川の本支流の段丘上に築かれる場合が多く、日本海交易を通じ十三湊から河川を利用して、多くの物資が内陸部へ搬入されてきたものと思われる。ここ浪岡町には、浪岡川と正平津川が合流する地点の右岸に、北畠顕家の子孫が築城したと伝えられる史跡浪岡城がある。昭和52年から発掘調査を進めており、大陸からの舶載陶磁器である青磁、白磁、青白磁、明の染付や銭貨などが大量に出土している。また、周囲には北畠関連の城館跡も知られており、古くは源常館、吉内館、そして、川原館(川原御所)、外ヶ浜の押さえとして浪岡城の北方を防御したものと推定される大釈迦館や北畠氏の家臣軽井源左衛門の居館とされる王余魚沢館等がある。

2　歴史的環境

野尻(2)遺跡が位置する浪岡町北部の歴史的環境については、すでに本遺跡の北約1kmに所在する浪岡バイパス関連の山本遺跡調査時に詳細な報告が見られるので(佐藤　仁:1987)(5)、概観することにする。この地方が歴史に登場するのは室町末期、浪岡北畠氏が作成したと伝えられる『津軽郡中名字』に、「奥法郡山邊には、行岳七郷－葦町－本江－苛沢－皐淵川－百々の郷－驗所寺」の名が見える。さらに、遺跡の東側を南流する大釈迦川沿いの地名に比定できるものとして、「木賊(徳才子)－鶴田(高屋敷字鶴田)－杉沢(杉沢)－小野(女鹿沢字赤茶付近)－小荒木(女鹿沢付近)」などがある。また、同書は「今都遐流三郡の大名は鼻和郡三千八百町は大浦の屋形南部信州盛信と申也。平賀郡二千八百町は大光寺南部遠州源政行と申也。田舎郡二千八百町・奥法郡二千餘町・沼湏保内一千貫は伊勢国司浪岡御所源具永卿也」とし、当地方は浪岡御所北畠具永が支配していたとしている。しかし、永祿五年(1562)に領地問題から、浪岡御所の8代具運が川原御所具信親子に殺害されるという事件(川原御所の変)にまで発展し、これを契機に、北畠氏の勢力は急速に衰え始める。やがて、津軽平定を目指していた大浦為信の攻撃を受け、遂に9代顕村の代に落城するのである(6)。その後、豊臣秀吉から所領を安堵され、名を津軽氏に改めた為信によって、津軽の統一が進められていくことになる。

近世に入ると、寛文四年(1664)には、田舎郡、鼻和郡、平賀郡をそれぞれ田舎庄、鼻和庄、平賀庄に改めた。その後、農村支配を強化するために3庄15遣に分け、天和元年(1681)までには22遣となるが、貞享4年の検地後、遣を組と改めた。浪岡は田舎庄に属し、浪岡組には高屋敷・徳才子・大釈迦など本支村あわせて22ヶ村があった。浪岡は、大道筋である碇ヶ関－弘前－藤

崎－浪岡さらに新城－油川と結ぶ羽州街道、大鰐－乳井－尾上－黒石－浪岡と結ぶ乳井道、浪岡－王余魚沢－高田－青森と結ぶ大豆坂通が交わり、中世以来、津軽の内陸部各地と外ヶ浜を結ぶ交通の要衝として発展を遂げてきた。ここ高屋敷村についての記録として、正保二年(1645)の『津軽知行高之帳』に252.9石、寛文四年(1664)の『陸奥国津軽郡高辻村々帳』に252石、貞享四年(1687)の『検地水帳』では、712石7斗3升、小字名に「安田・福田・野尻」など高屋敷集落内に現在ある地名が見られる。昭和13年には、高屋敷字後田(現在の杉沢小学校北側)地内より、10,162枚もの中国銭が発見されており(7)、室町中期の埋没と鑑定されていることから、史料のない高屋敷村の中世の姿を彷彿させるものである。

【参考引用文献】

(1)『青森県遺跡地図』　1992:青森県教育委員会

(2)『津軽前田野目窯跡』　1968:五所川原市教育委員会

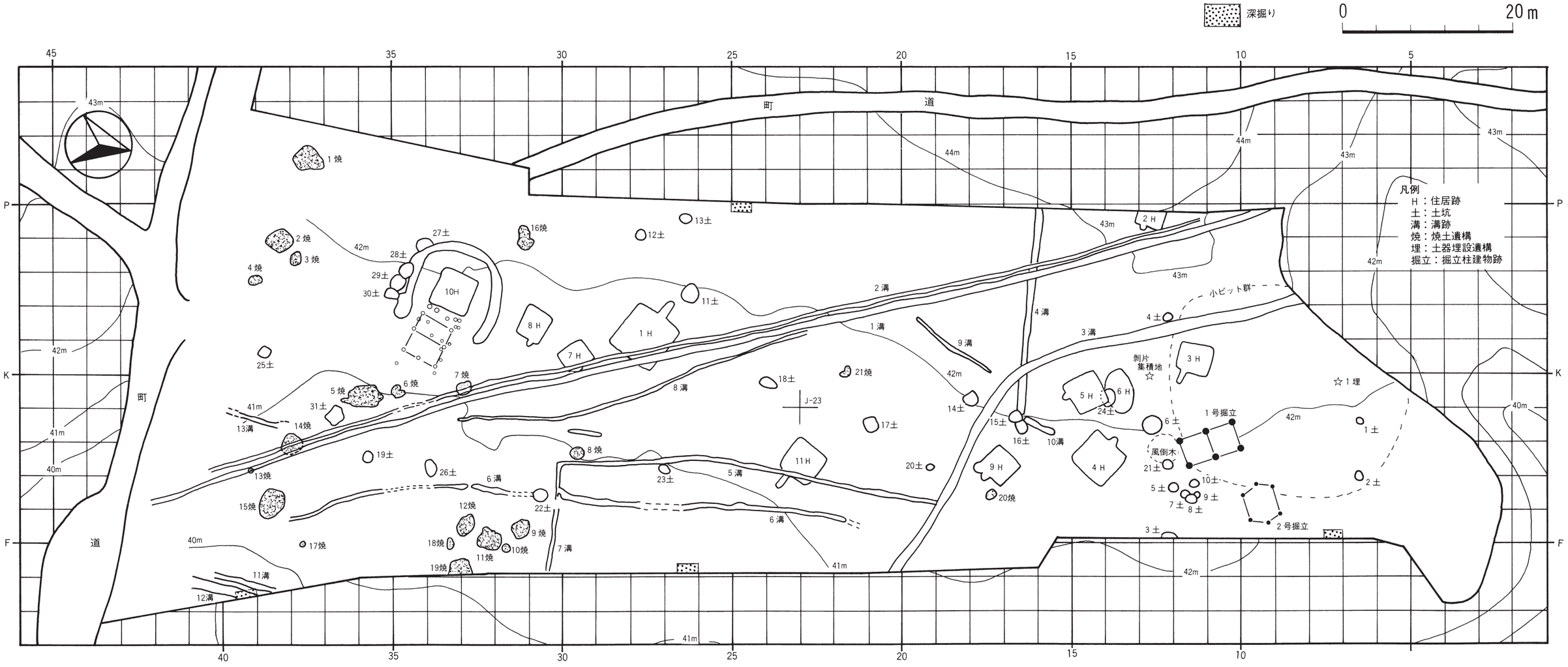
(3)「津軽持子沢窯跡の調査」　1972:坂誥秀一　考古学ジャーナル75号

(4)「青森県前田野目遺跡発掘調査概報」　1974:村越潔，新谷武　北奥古代文化6号

(5)「歴史的環境」　1987:佐藤　仁　『山本遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第150集

(6)『津軽一統史』では天正6年（1578）としているが、南部側の資料である『南部根元記』には天正十八年(1590)とある。

(7)「大杉村発掘古銭について」　1939:成田末五郎　『陸奥史談』第九輯


深掘り
0
20 m
凡例
H：住居跡
土：土坑
溝：溝跡
焼：焼土遺構
埋：土器埋設遺構
掘立：掘立柱建物跡
町
道
小ピット群
剝片集積地
風倒木
1号掘立
2号掘立
☆1埋
J-23
1 H
2 H
3 H
4 H
5 H
6 H
7 H
8 H
9 H
10H
11 H
1 溝
2 溝
3 溝
4 溝
5 溝
6 溝
7 溝
8 溝
9 溝
10溝
11溝
12溝
13溝
1 焼
2 焼
3 焼
4 焼
5 焼
6 焼
7 焼
8 焼
9 焼
10焼
11焼
12焼
13焼
14焼
15焼
16焼
17焼
18焼
19焼
20焼
21焼
1 土
2 土
3 土
4 土
5 土
6 土
7 土
8 土
9 土
10土
11土
12土
13土
14土
15土
16土
17土
18土
19土
20土
21土
22土
23土
24土
25土
26土
27土
28土
29土
30土
31土
43m
44m
42m
41m
40m

第７図　遺構配置図

第Ⅳ章　検出遺構と出土遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

本遺跡で縄文時代に属する遺構は、竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡２棟、土坑11基、埋設土器遺構１基、小ピット群等である。以下、遺構別に記述する。

１　竪穴住居跡

第６号住居跡（第８～14図）

［位置］　調査区の北側、Ｊ－13グリッドに位置している。

［平面形・規模］　長軸５ｍ01cm、短軸２ｍ78cmの楕円形を呈している。東西方向に長く、長軸方向はＮ－75°－Ｅである。床面積は約8.8㎡と推定される。

［重複］　南側で、第24号土坑に切られている。ただし、遺物の出土状況から、本住居跡との時間差はあまりなかったものと考えられる。なお、第24号土坑は第５号住居跡に切られている。

［壁・床面］　基本層序の第Ⅳ層を壁及び床面としている。壁は急に立ち上がり、壁高は概ね20～25cmである。床面は若干の凹凸が見られ、中央付近がいくぶん低い。

［壁溝］　認められなかった。

［柱穴・ピット］　５個のピットを検出した。ピットの深さはP_1－13cm、P_2－31cm、P_3－18cm、P_4－９cm、P_5－13cmである。

［炉］　ほぼ中央部に位置する。楕円形状の地床炉であり、やや窪んでいる。

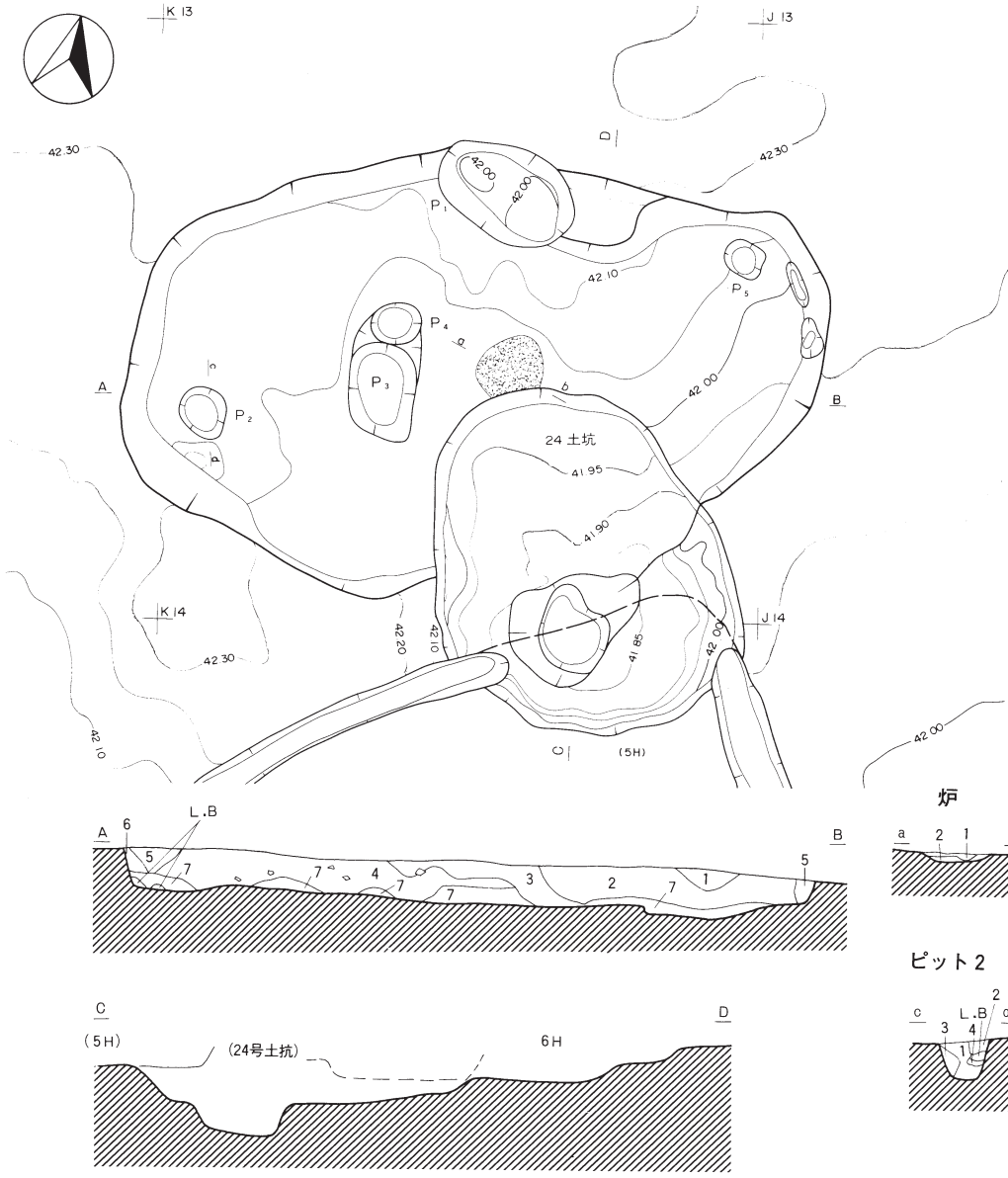
［その他の施設］　北壁の中央付近に段差の見られる部分がある。床面からは９cm高くなっている。西側がピット１に切られている。

［堆積土］　ローム粒やロームブロックを含んだ黒色土及び黒褐色土を主体としており、覆土中に多量の遺物を含んでいる。

［出土遺物］　確認面から床面直上にかけて、多量の遺物が出土した。土器は縄文時代後期十腰内Ⅰ式である。深鉢形土器が多く、他に浅鉢形・壺形等の土器及び小型土器がある。

石器は床面から石皿が出土したほか、覆土から不定形石器８点（スクレイパー３点、Ｒ－フレイク５点）、フレイク３点が出土している。

［時期］　出土した土器から、縄文時代後期前半の十腰内Ⅰ式期に、構築・廃棄された住居跡と考えられる。　（畠山　昇）



第6号住居跡

第1層	黒色土	10YR1.7/1	軟らかい。炭化物微量含む。
第2層	黒色土	10YR2/1	焼土粒微量、炭化物少量含む。
第3層	黒色土	10YR1.7/1	炭化物微量含む。
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量、焼土微量含む。
第5層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒、炭化物少量含む。
第6層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒多量含む。
第7層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒中量、炭化物微量含む。

炉

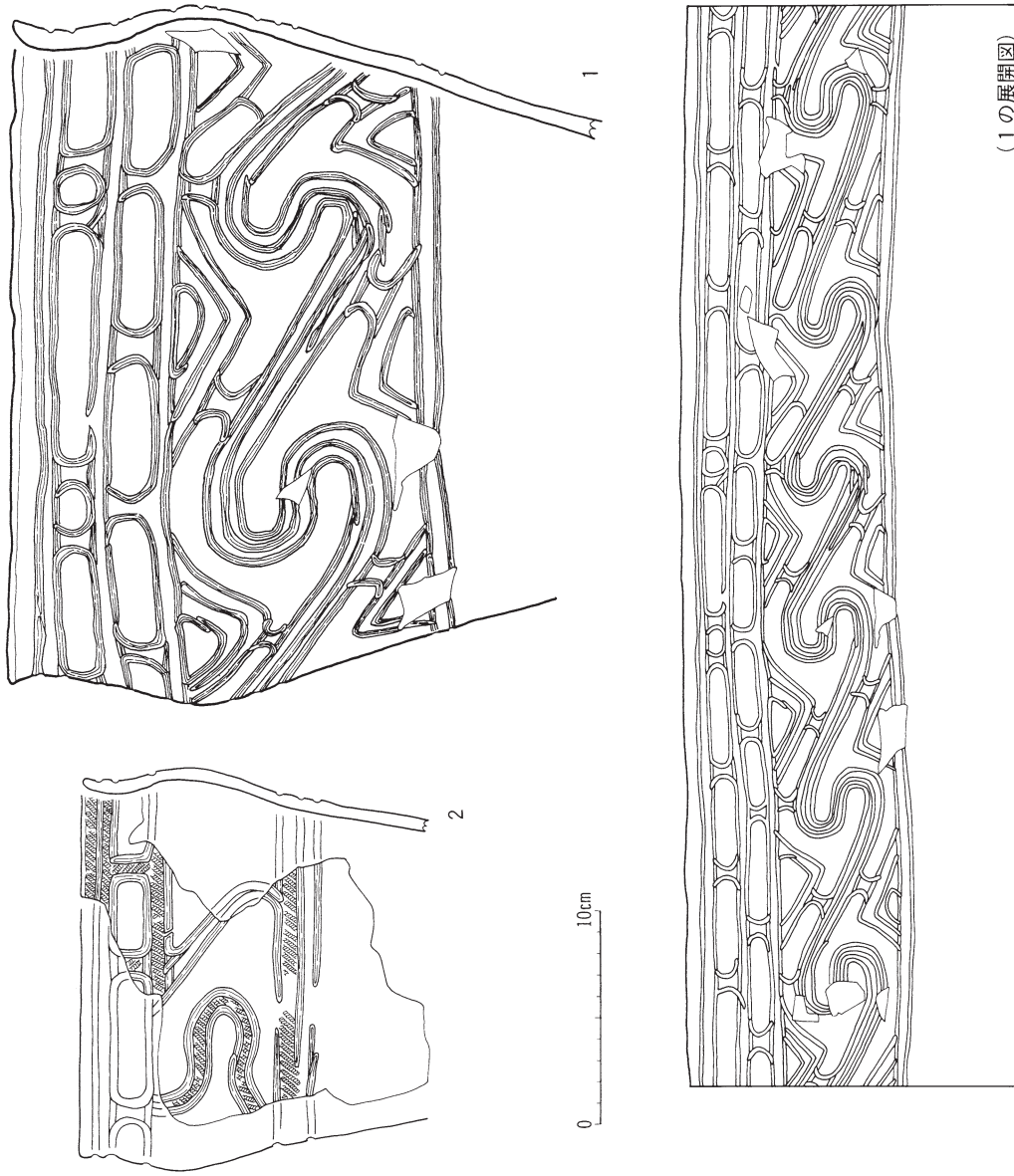
第1層	褐色土	10YR4/6	焼土粒・炭化物を含む
第2層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム質。

ピット2

第1層	黒褐色土	10YR2/2
第2層	暗褐色土	10YR3/3
第3層	黒褐色土	10YR2/3
第4層	褐色土	10YR4/4

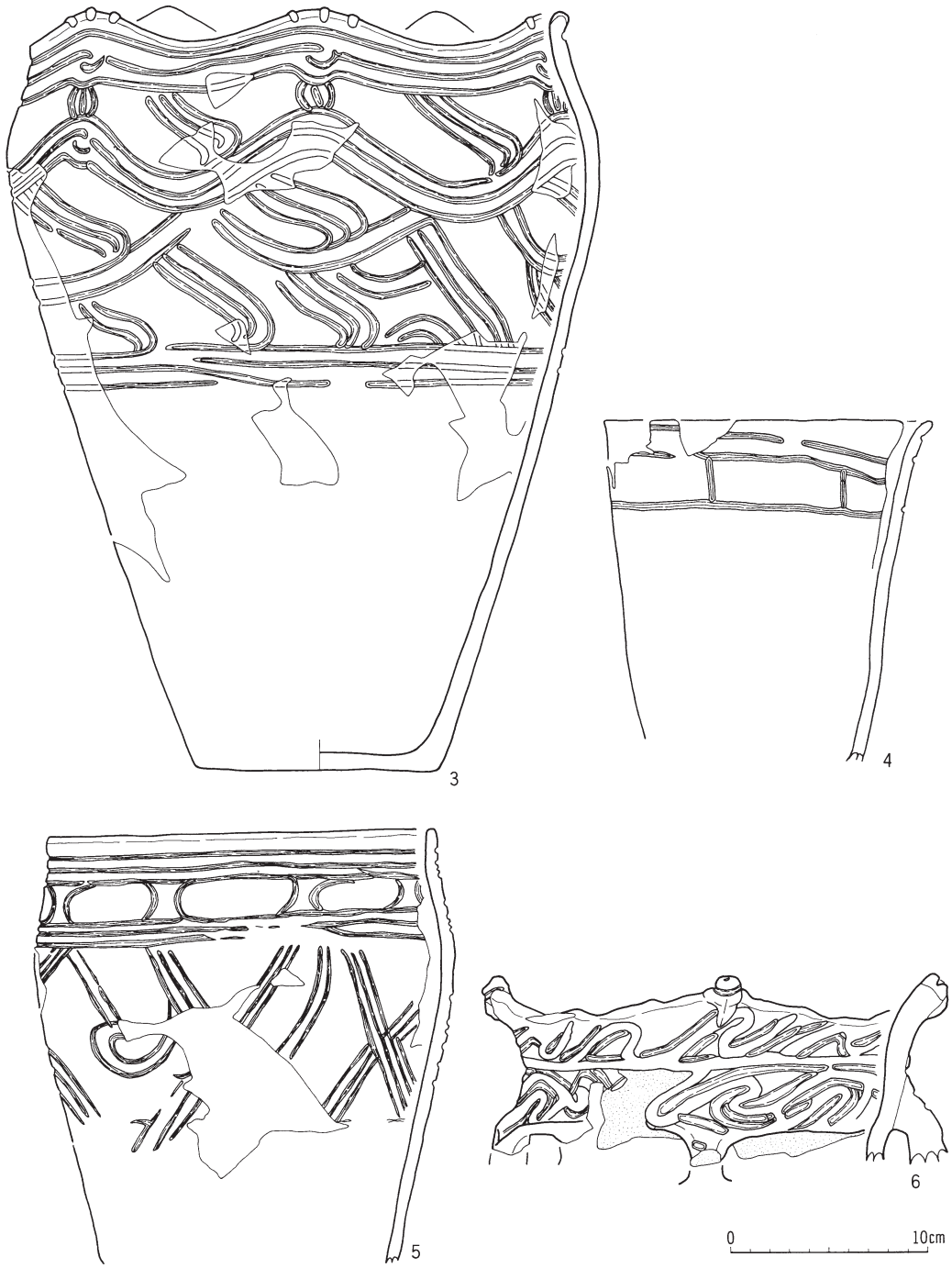
0　　2m

第8図　第6号住居跡(1)



第９図　第６号住居跡(2)

図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
1	６Ｈ覆土	平行沈線、長楕円形文、波状文（横位方向）	Ｊ－１	深鉢
2	６Ｈ覆土	平行沈線、長楕円形文、ＬＲ縄文	Ｊ－４	深鉢

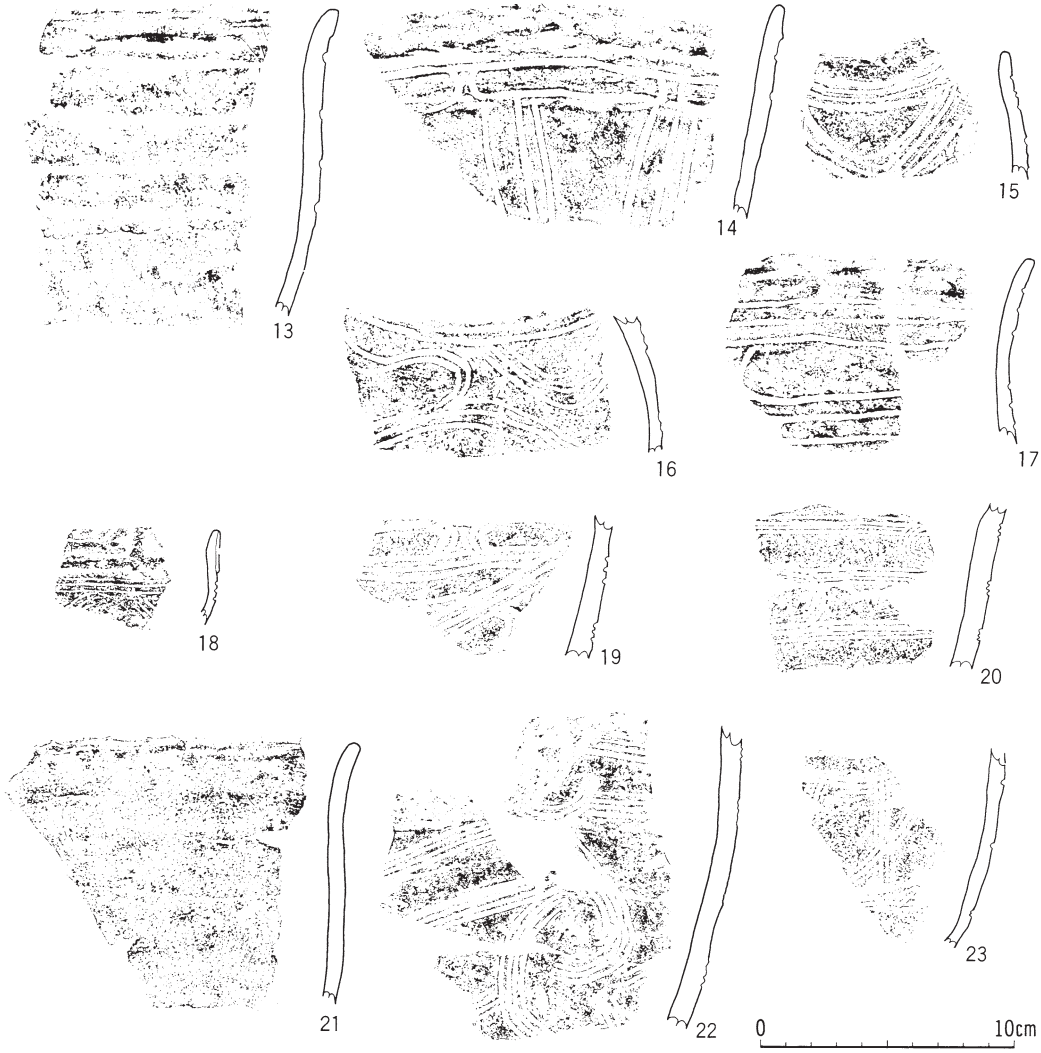


図番号	山土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
3	６Ｈ覆土	平行沈線文、入組状文	Ｊ―16	深鉢
4	６Ｈ覆土	平行沈線文、縦位	Ｊ―５	深鉢
5	６Ｈ覆土	平行沈線文、長楕円形文	Ｊ―３	深鉢
6	６Ｈ覆土	隆帯、沈線文、波状文	Ｊ―24	

第10図　第６号住居跡(3)

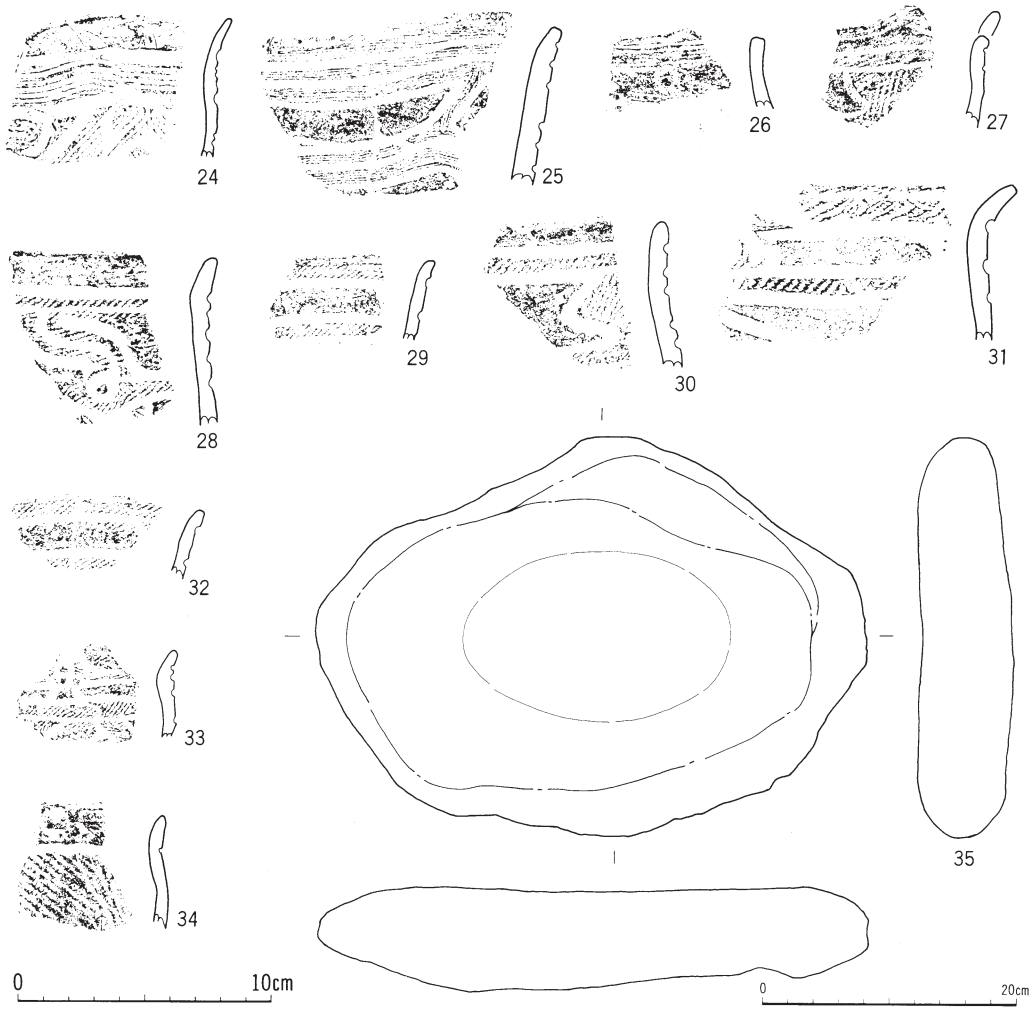
図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
7	6 H覆土	沈線文、入組状文	J —24	カメ棺
8	6 H覆土	沈線文、LR縄文	J — 2	小型鉢
9	6 H覆土	沈線文、隆帯	J —49	深鉢
10	6 H覆土	沈線文、隆帯	J —54	深鉢
11	6 H覆土	沈線文、	J —37	鉢
12	6 H覆土	沈線文、	J —55	深鉢

第11図　第6号住居跡(4)



図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
13	6 H 覆土	平行沈線文	J —53	深鉢
14	6 H 覆土	沈線文、楕円形文	J —52	深鉢
15	6 H 覆土	多条沈線文	J —40	鉢
16	6 H 覆土	沈線文、入組状文	J —46	壺
17	6 H 覆土	平行沈線文	J —56	深鉢
18	6 H 覆土	隆帯、平行沈線文	J —27	鉢
19	6 H 覆土	沈線文、楕円形文	J —26	深鉢
20	6 H 覆土	沈線文	J —30	深鉢
21	6 H 覆土	無文	J —51	深鉢
22	6 H 覆土	多条沈線文、入組状文	J —43	深鉢
23	6 H 覆土	多条沈線文	J —28	鉢

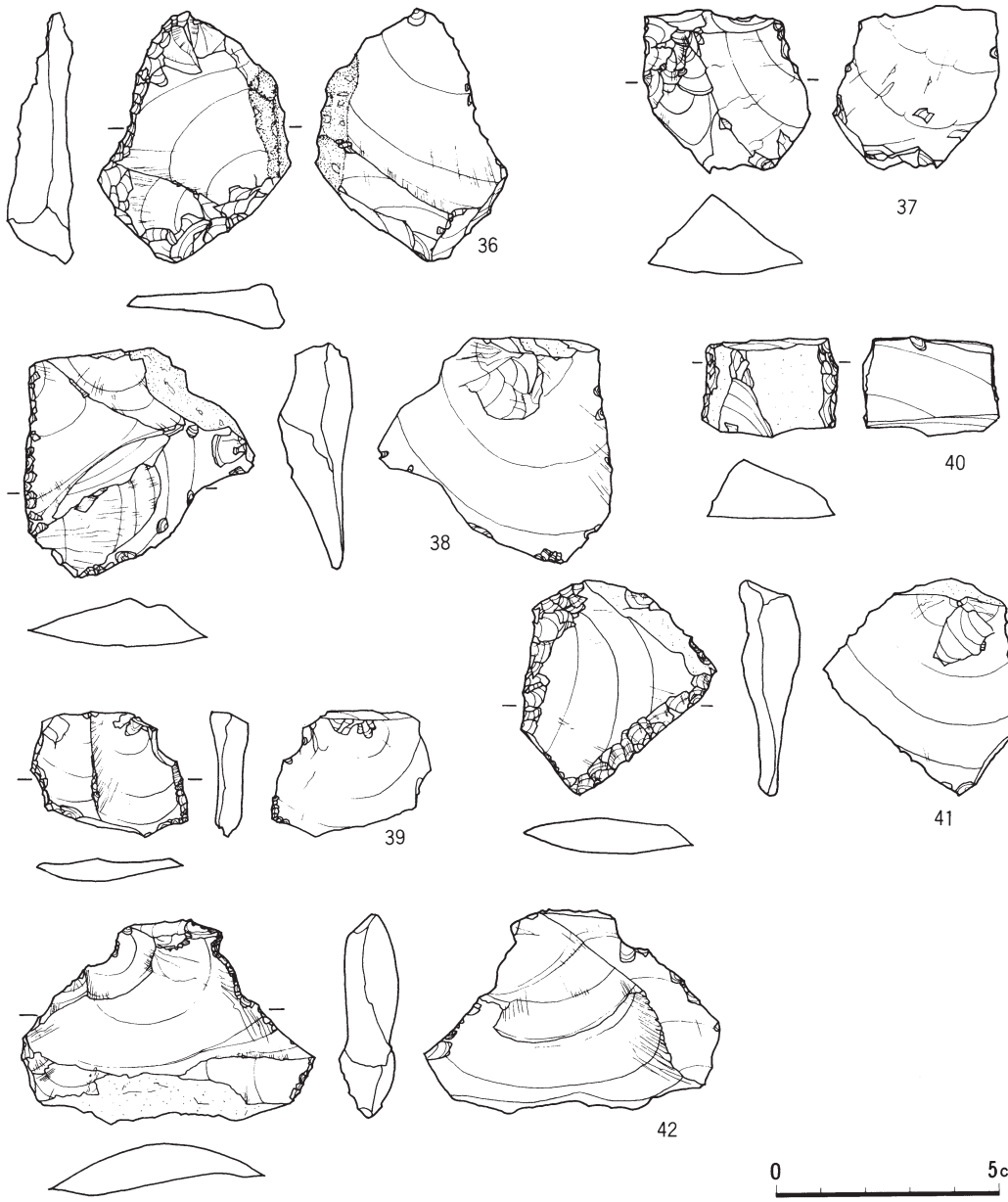
第12図　第 6 号住居跡(5)



図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
24	6 H覆土	沈線文、櫛目状沈線文	J —48	鉢
25	6 H覆土	沈線文、櫛目状沈線文	J —42	深鉢
26	6 H覆土	沈線文、櫛目状沈線文	J —29	鉢
27	6 H覆土	沈線文、L縄文	J —38	深鉢
28	6 H覆土	沈線文、LR縄文	J —47	深鉢
29	6 H覆土	沈線文、LR縄文	J —44	
30	6 H覆土	沈線文、L縄文	J —33	深鉢
31	6 H覆土	正行沈線文、LR縄文	J —50	深鉢
32	6 H確認面	沈線文、LR縄文	J —25	鉢
33	6 H確認面	沈線文、LR縄文	J —32	鉢
34	6 H確認面	沈線文、LR縄文	J —39	鉢

図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
35	石皿	6 H床面	434	316	79	約16kg	安山岩	237	S —1

第13図　第6号住居跡(6)



図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
36	スクレイパー	6 H 覆土	44	42	14	14.8	珪質頁岩	6	
37	R－フレイク	6 H 覆土	35	35	18	21.3	珪質頁岩	3	S－5
38	R－フレイク	6 H 覆土	52	52	13	28.5	珪質頁岩	4	
39	R－フレイク	6 H 覆土	27	32	8	5.3	珪質頁岩	10	
40	スクレイパー	6 H 覆土	20	29	13	10.9	頁岩	11	
41	スクレイパー	6 H 覆土	46	45	11	19.0	珪質頁岩	7	
42	R－フレイク	6 H 覆土	45	65	11	20.2	細粒凝灰岩	5	

第14図　第 6 号住居跡(7)

2　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第15・16図）

［位置］　Ｈ・Ｉ―10・11グリッドに位置する。

［重複］　小ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

［平面形・規模］　平面形が長方形を呈し、東西１間、南北２間である。東西の柱間寸法は北側（ピット１―４）が368cm、中央（ピット２―５）が366cm、南側（ピット３―６）が360cmである。南北の柱間寸法は東側（ピット１―２―３）が北から306cm＋309cm、同様に西側（ピット４―５―６）が314cm＋315cmである。なお、長軸方向はＮ―34°―Ｗである。

［柱穴］　柱穴の平面形は楕円形を呈し、規模は短軸60cm～70cm、長軸70cm～80cm、深さ52cm～90cmである。

［出土遺物］　ピット内から若干の縄文土器と石皿片１点、フレイク３点の石器が出土している。縄文土器は全てのピット内から出土しているが、とくにピット６からの出土が多い。また石器はピット３からの出土である。

第２号掘立柱建物跡（第17・18図）

［位置］　Ｆ・Ｇ―９グリッドに位置する。

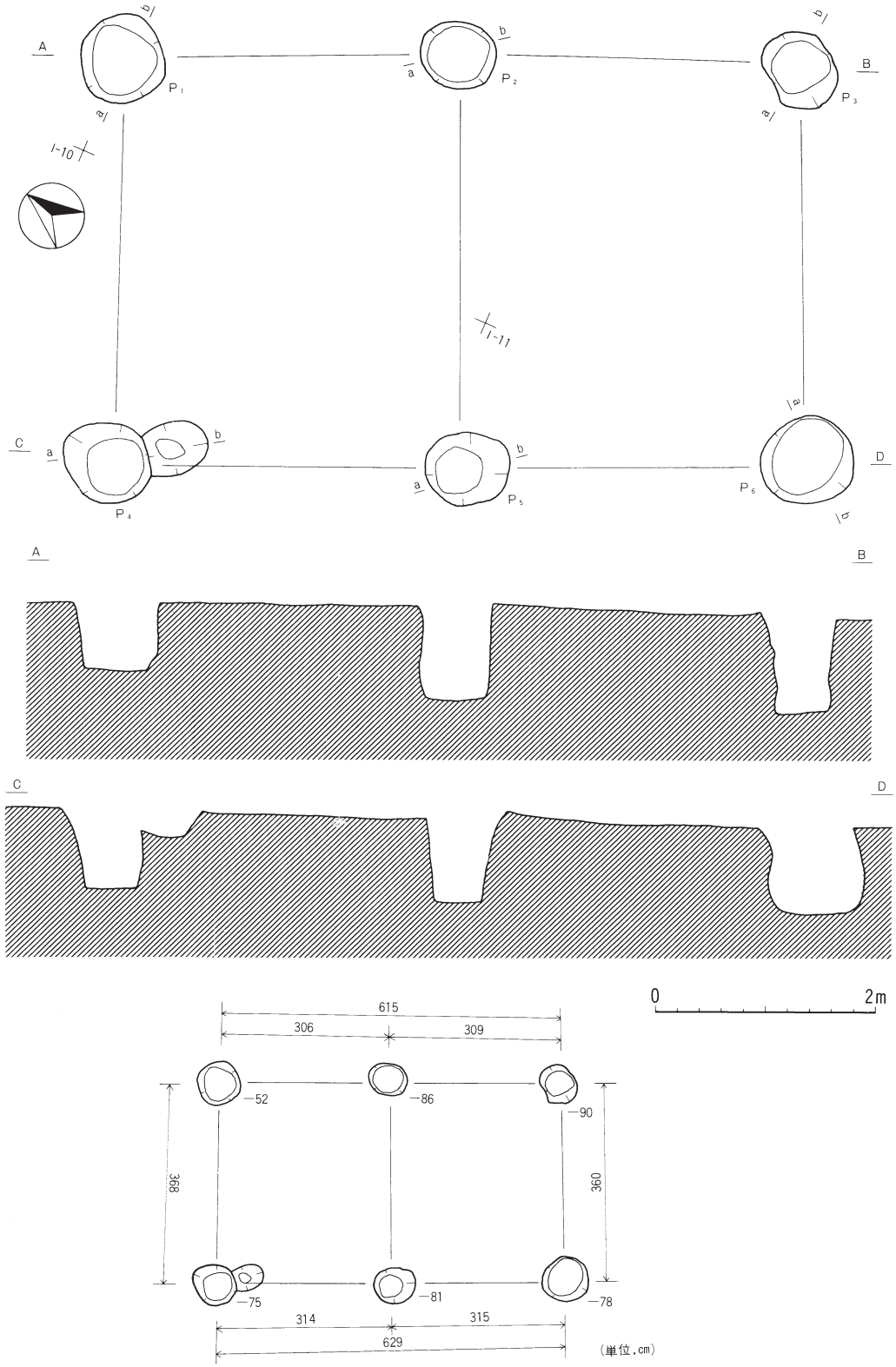
［重複］　小ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

［平面形・規模］　平面形は東西に長い六角形を呈している。柱間の寸法は、東側のピット６とピット１の間が187cm、ピット１とピット２の間が180cm、西側のピット５とピット４の間が188cm、ピット４とピット３の間が189cmである。また、北側のピット５とピット６の間は368cm、中央のピット１と４の間が470cm、南側にピット３と２の間が370cmである。長軸方向はＮ―62°―Ｅで、第１号掘立柱建物跡の長軸方向とほぼ直交している。

［柱穴］　柱穴の平面形は楕円形を呈し、規模は短軸40cm～70cm、長軸70cm～80cm、深さ42cm～86cmである。

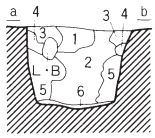
［出土遺物］　ピット内からの出土はみられなかったが、ピット４の脇から縄文土器が若干出土している。

（畠山　昇）



第15図　第１号掘立柱建物跡(1)

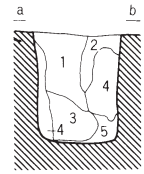
ピット1



ピット1

第1層　黒褐色土　10YR2/3
第2層　黒褐色土　10YR2/2
第3層　褐　色　土　10YR4/4
第4層　褐　色　土　10YR4/6
第5層　褐　色　土　10YR4/6
第6層　黒　色　土　10YR2/1

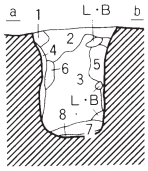
ピット2



ピット2

第1層　暗褐色土　10YR3/3
第2層　褐　色　土　10YR4/4
第3層　灰黄褐色土　10YR4/2
第4層　黄褐色土　10YR5/6
第5層　黒　色　土　10YR2/1

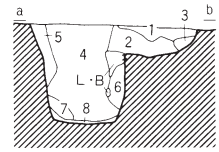
ピット3



ピット3

第1層　にぶい黄褐色土　10YR4/3
第2層　黒褐色土　10YR2/2
第3層　黒褐色土　10YR2/3
第4層　黄褐色土　10YR5/6
第5層　にぶい黄褐色土　10YR4/3
第6層　暗褐色土　10YR3/3
第7層　黒褐色土　10YR2/2
第8層　黒　色　土　10YR2/1

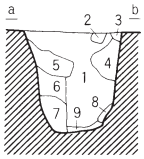
ピット4　ピット7



ピット4・ピット7

第1層　黒褐色土　10YR3/1
第2層　暗褐色土　10YR3/4
第3層　黒褐色土　10YR2/2
第4層　黒褐色土　10YR2/2
第5層　黒褐色土　10YR3/2
第6層　黒　色　土　10YR2/1
第7層　にぶい黄褐色土　10YR4/3
第8層　黒　色　土　10YR2/1

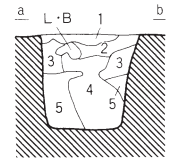
ピット5



ピット5

第1層　黒褐色土　10YR2/3
　　＋褐　色　土　10YR4/6
第2層　褐　色　土　10YR4/4
第3層　黒褐色土　10YR2/2
第4層　黄褐色土　10YR5/6
　　＋暗褐色土　10YR3/4
第5層　黄褐色土　10YR5/6
第6層　黒褐色土　10YR2/3
第7層　褐　色　土　10YR4/6＋にぶい黄褐色土　10YR4/3
第8層　褐　色　土　10YR4/4
第9層　黒褐色土　10YR3/2

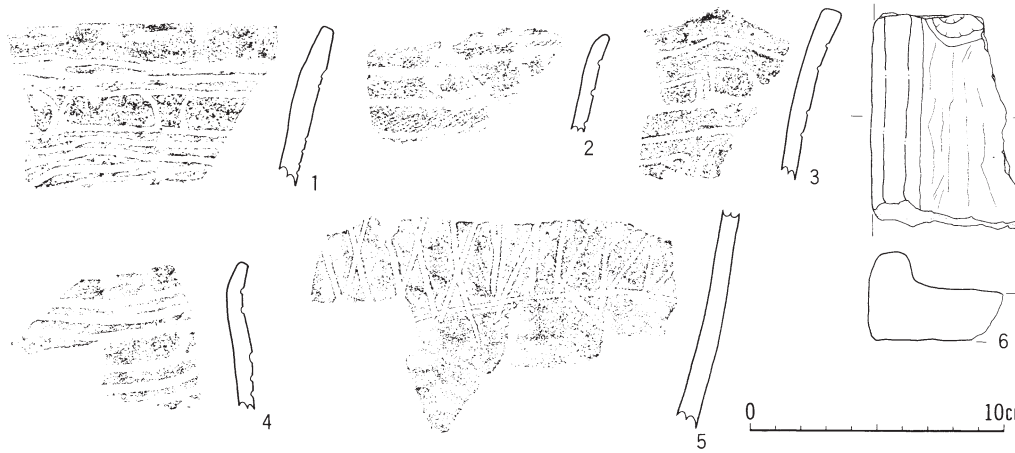
ピット6



ピット6

第1層　黒褐色土　10YR3/1
第2層　暗褐色土　10YR3/3
第3層　褐　色　土　10YR4/6
第4層　黒褐色土　10YR2/2
第5層　にぶい黄褐色土　10YR4/3

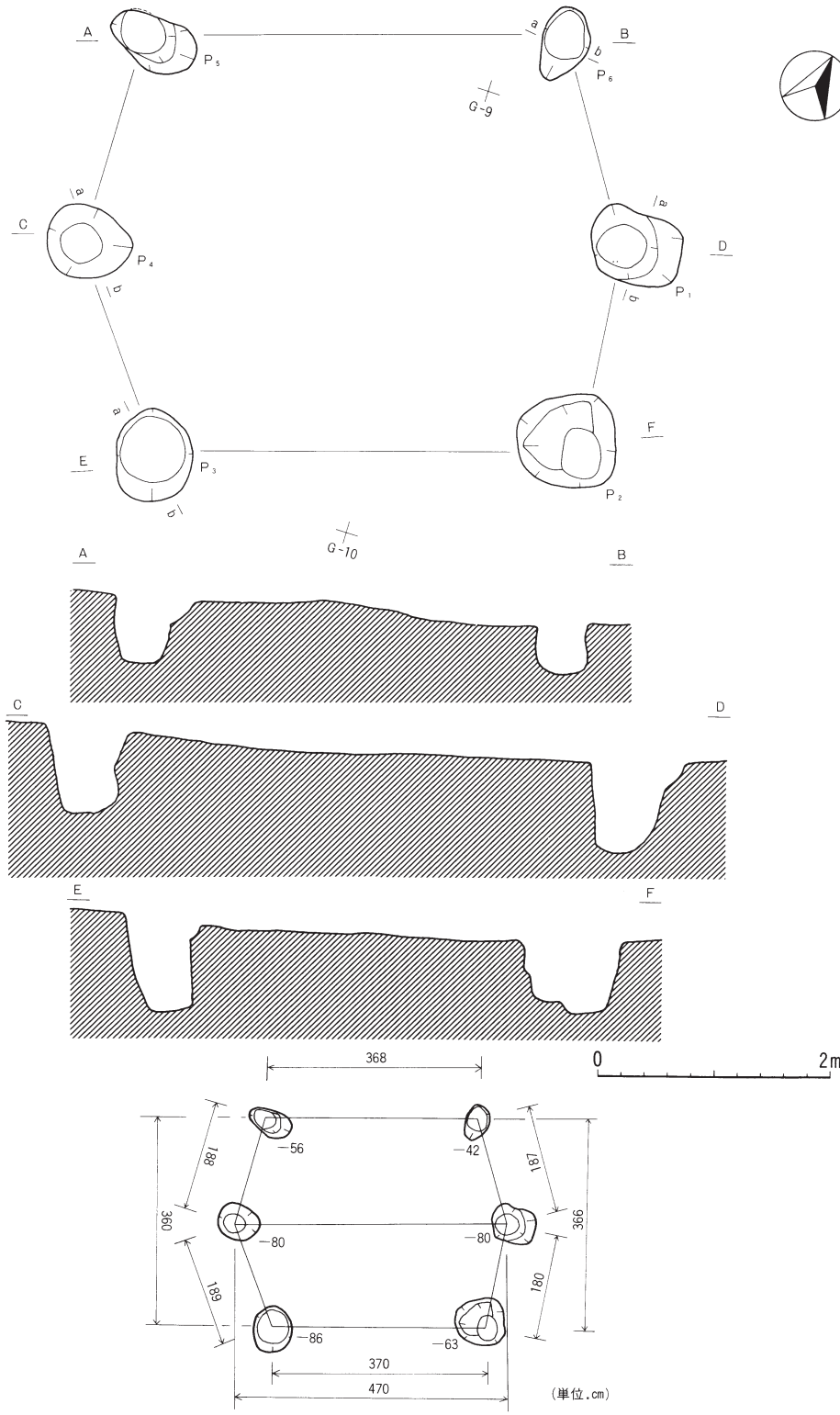
0　2m



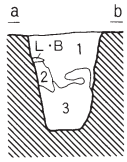
図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
1	ピット6フク土	平行沈線文、楕円形文	J—69	深鉢
2	ピット1フク土	平行沈線文、LR縄文	J—75	深鉢
3	ピット5フク土	平行沈線文、楕円形文	J—73	深鉢
4	ピット6フク土	平行沈線文、楕円形文	J—70	深鉢
5	ピット2フク土	網目状沈線文	J—74	深鉢

図番号	器種	出土地・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
6	石皿	ピット6	(83)	(59)	(34)	(165)	凝灰岩	破片。フチあり。

第16図　第1号掘立柱建物跡(2)

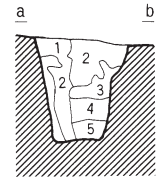


第17図　第２号掘立柱建物跡(1)



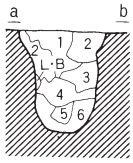
ピット1

第1層　黒褐色土　10YR2/2
第2層　黒褐色土　10YR3/1
第3層　にぶい黄褐色土　10YR5/4
　　＋褐　　色　10YR4/6



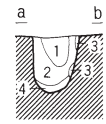
ピット3

第1層　暗褐色土　10YR3/3
第2層　黒褐色土　10YR2/3
第3層　黄褐色土　10YR5/6
　　＋暗褐色土　10YR3/4
第4層　黒褐色土　10YR3/1
第5層　褐色土　10YR3/4
　　＋黒褐色土　10YR2/2



ピット4

第1層　黒褐色土　10YR2/2
第2層　黄褐色土　10YR5/6
第3層　にぶい黄褐色土　10YR5/4
第4層　黒褐色土　10YR3/1
第5層　明黄褐色土　10YR7/6
第6層　明黄褐色土　10YR7/6



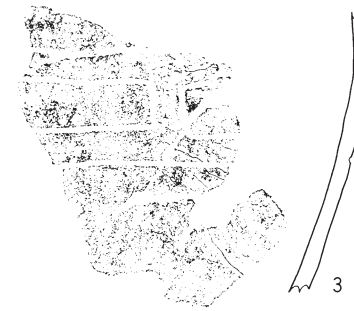
ピット6

第1層　黒褐色土　10YR3/2
第2層　黒褐色土　10YR2/2
第3層　黄褐色土　10YR5/6
第4層　にぶい黄褐色土　10YR5/4
　　＋褐　色　土　10YR4/4

0　　2m

1

2

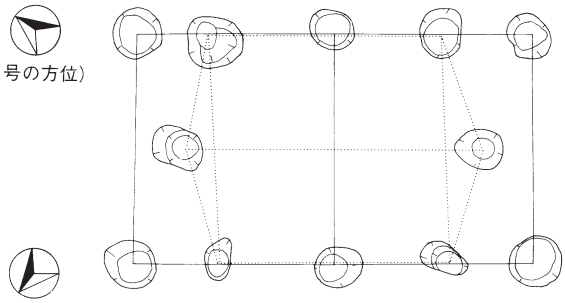


3

0　　10cm

図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
1	ピット4そば	沈線文、LR縄文	J―77	深鉢
2	ピット4そば	沈線文	J―78	深鉢
3	ピット4そば	沈線文	J―76	深鉢

1号と2号との比較



(実線は1号,点線は2号)

第18図　第2号掘立柱建物跡(2)

3　土　坑（第19～22図）

縄文時代に属すると考えられる土坑は11基であり、そのほとんどが調査区の北側から検出されている。

第1号土坑

［位置］　調査区の北側、Ｉ－６グリッドに位置している。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　直径80cmのほぼ円形を呈する。深さは26cmである。

［壁・底面］　壁・底面は第Ⅳ層を掘り込んで構築している。壁の立ち上がりはやや急で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］　壁際に、ローム質の褐色土が部分的に見られるほかは、全体に黒色土及び黒褐色土の堆積が見られた。

［出土遺物］　覆土から、少量の縄文土器が出土した。

第2号土坑

［位置］　調査区の北側、Ｇ・Ｈ－６グリッドに位置している。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形は不整楕円形を呈し、規模は短軸62cm、長軸82cm、深さ24cmである。

［壁・底面］　壁・底面は第Ⅳ層を掘り込んで構築している。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］　全体に微量のローム粒や炭化物（木炭）粒を含んだ暗褐色土及び黒褐色土の堆積が見られた。

［出土遺物］　覆土から、少量の縄文土器が出土した。

第3号土坑

［位置］　Ｅ・Ｆ－12グリッドに位置している。一部調査区域にかかっており、全体の三分の二を調査できた。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　直径が約36cmのほぼ円形を呈する。深さは36cmである。

［壁・底面］　壁は第Ⅲ層から掘り込んでいる。壁は急な立ち上がりを呈し、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］　壁際に黄褐色土（ローム）が部分的に見られたが、全体に黒褐色土と暗褐色土の堆積が見られた。第２層には炭化物が多量に含まれていた。

［出土遺物］　覆土から、少量の縄文土器が出土した。

第４号土坑

［位置］　Ｌ―12グリッドに位置している。

［重複］　なし。東側の部分が第３号溝と接している。

［平面形・規模］　平面形は不整楕円形を呈し、規模は短軸90cm、長軸97cm、深さ26cmである。

［壁・底面］　第Ⅳ層を壁・底としている。壁の立ち上がりは急で、底面には凹凸が若干認められる。

［堆積土］　全体に黒色土と黒褐色土の堆積が見られた。

［出土遺物］　覆土から、少量の縄文土器がフレイク１点、及び炭化したオニグルミの核の破片3.8ｇが出土した。

第５号土坑

［位置］　Ｇ―12・13グリッドに位置している。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形は楕円形で、規模は短軸106cm、長軸128cm、深さは35cmである。

［壁・底面］　壁・底面は第Ⅳ層を掘り込んで構築している。壁の立ち上がりは急で、底面には凹凸がやや見られる。

［堆積土］　壁際にローム質の黄褐色土が見られるが、堆積土の大半は黒色土及び黒褐色土で占められている。

［出土遺物］　覆土から、縄文土器が約30片ほど出土した。

第７号土坑

［位置］　Ｇ―11グリッドに位置している。

［重複］　第８号土坑より古い。

［平面形・規模］　全体は不明だが、調査できた部分から推定して、平面形は不整な楕円形と思われる。規模は調査した部分で、短軸60cm、長軸86cm、深さ17cmである。

［壁・底面］　壁・底面は第Ⅳ層を掘り込んで構築している。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底面の東側隅に深さ15cmのピットを検出した。

［堆積土］　全体にローム粒を若干含んだ暗褐色土の堆積が多く見られた。また、底面には焼

土がやや厚く認められた。

［出土遺物］　覆土から、少量の縄文土器が出土した。

第８号土坑

［位置］　Ｇ―11グリッドに位置している。

［重複］　第７号土坑及び第９号土坑より新しい。

［平面形・規模］　平面形は楕円形で、規模は短軸112cm、長軸140cm、深さ32cmである。

［壁・底面］　壁は第Ⅳ層から掘り込んでいる。壁は急な立ち上がりを呈し、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］　全体にローム粒や炭化物を少量含んだ黒色土及び黒褐色土の堆積が多く見られた。

［出土遺物］　覆土から、およそ30片ほどの縄文土器と石鏃１点が出土した。

第９号土坑

［位置］　Ｇ―11グリッドに位置している。

［重複］　第８号土坑に切られている。

［平面形・規模］　全体の形状は不明だが、調査した部分から推定して、平面形は楕円形と思われ、規模は調査した部分で短軸60cm、長軸86cm、深さ15cmである。

［壁・底面］　第Ⅳ層を壁・底としている。壁の立ち上がりは急で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］　全体にローム粒・炭化物を含んだ黒色土・黒褐色土・褐色土の堆積が見られた。

［出土遺物］　縄文土器が１片出土したほか、石皿の破片が１点出土している。

第10号土坑

［位置］　Ｇ―11グリッドに位置している。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形はやや不整な円形で、規模は短軸107cm、長軸115cm、深さ24cmである。

［壁・底面］　第Ⅳ層を掘り込み、壁・底面としている。壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。

［堆積土］　全体にローム粒と炭化物を含んだ黒褐色土を主体としている。また、下部に焼土の堆積が見られた。

［出土遺物］　縄文土器が11片、敲磨器が１点出土した。

第14号土坑

［位置］　Ｊ―17・18グリッドに位置している。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形はやや不整な円形で、規模は短軸158cm、長軸162cm、深さ48cmである。

［壁・底面］　第Ⅳ層を壁・底としている。壁の立ち上がりは緩やかで、東～北～西側に緩い段を持つ。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］　全体にローム粒を多量に含んだ黒褐色土の堆積が多く見られた。

［出土遺物］　縄文時代晩期（大洞Ｂ式）の土器が13片出土した。

第21号土坑

［位置］　Ｈ―12グリッドに位置している。

［重複］　風倒木によって西側の半分が壊されている。

［平面形］　全体形は不明だが、調査した部分から直径80cmほどの円形と思われる。深さは30cmである。

［壁・底面］　壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］　暗褐色土と黒色土の堆積が見られた。

［出土遺物］　覆土から、縄文土器が出土した。

第24号土坑

［位置］　Ｊ－６グリッドに位置し、第６号住居跡の調査中に確認した。

［重複］　第６号住居跡より新しく、第５号住居跡より古い。

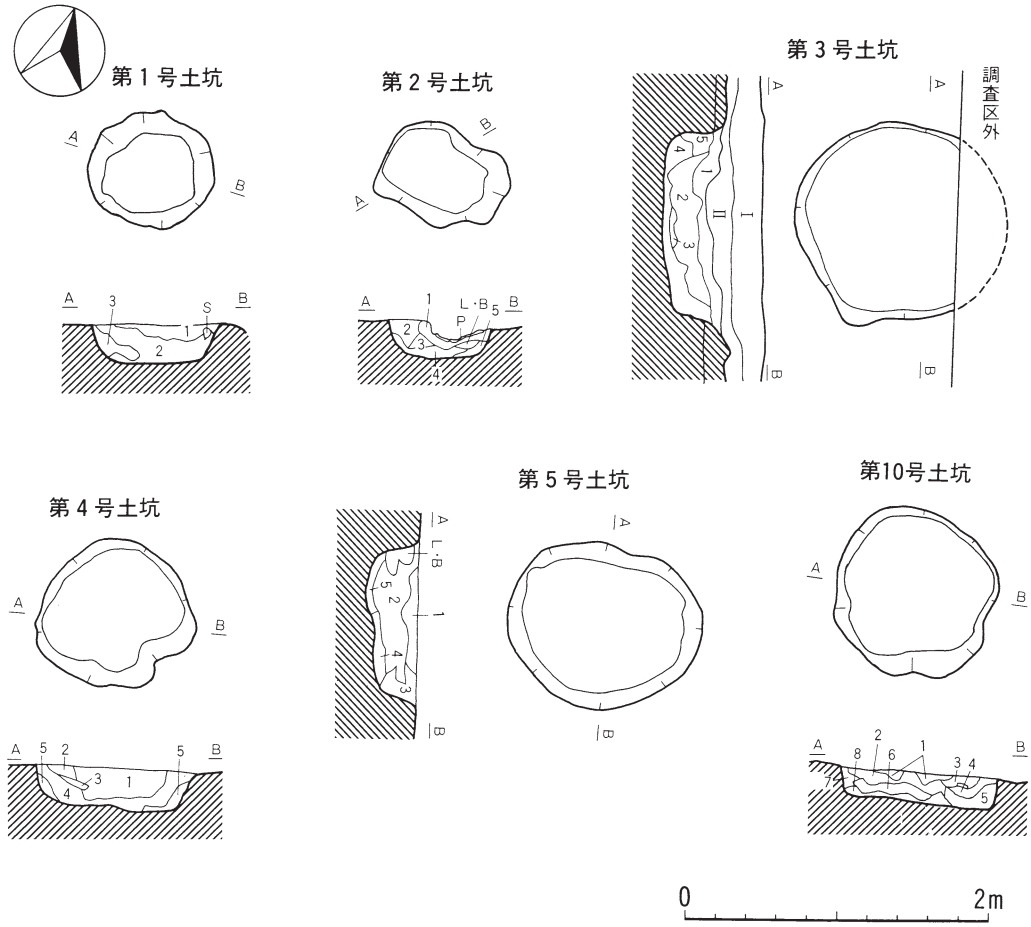
［平面形・規模］　平面形は楕円形で、規模は短軸202cm、長軸240cm、深さ34cmである。

［壁・底面］　壁はやや急に立ち上がり、底面は凹凸が見られるものの、ほぼ平坦である。また、底面の南側に深さ22cmのピットを検出した。

［堆積土］　全体に黒褐色土を主体としている。

［出土遺物］　覆土から、縄文土器が若干出土した。

（畠山　昇）



第1号土坑

第1層　黒色土　10YR1.7/1　炭化物微量含む。
第2層　褐色土　10YR3/1　炭化物微量、ローム粒少量含む。
第3層　褐色土　10YR4/4　ローム質。

第2号土坑

第1層　黒褐色土　10YR2/2　炭化物微量含む。
第2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量含む。
第3層　黒褐色土　10YR2/3　炭化物微量、
第4層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒小量含む。
第5層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　ローム粒微量含む。

第3号土坑

第1層　黒褐色土　10YR3/1
第2層　黒褐色土　10YR2/3　炭化物を多量に含む。
第3層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒を中量含む。
第4層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒を少量含む。
第5層　黄褐色土　10YR5/6　ローム。

第4号土坑

第1層　黒色土　10YR2/1　ローム粒を微量含む。
第2層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒を少量含む。
第3層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒を少量含む。
第4層　黒褐色土　10YR2/3＋褐色土　10YR4/4　炭化物を少量含む。
第5層　暗褐色土　10YR3/3　炭化物を小量含む。

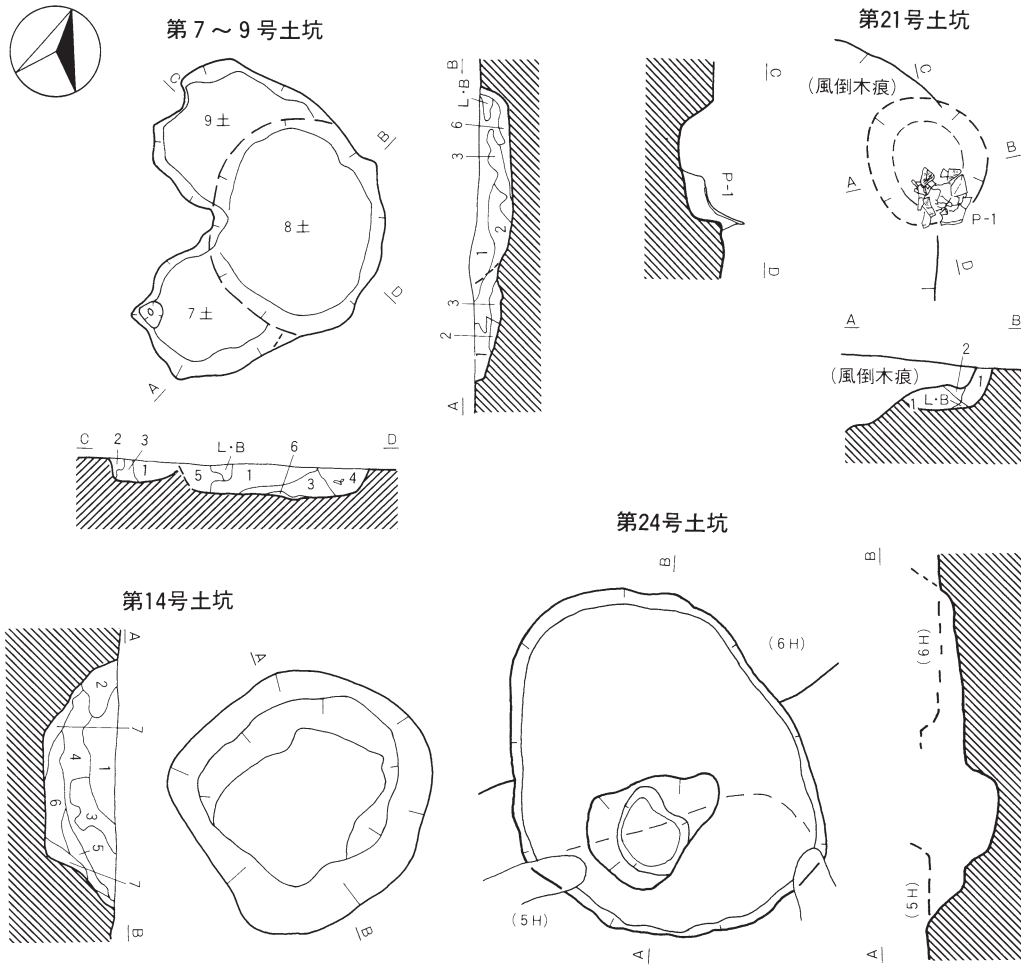
第5号土坑

第1層　黒褐色土　10YR3/1　炭化物を微量含む。
第2層　黒褐色土　10YR2/3　炭化物を少量含む。
第3層　暗褐色土　10YR3/3　ローム塊を少量含む。
第4層　黒褐色土　10YR2/3
第5層　にぶい黄褐色土　10YR4/3

第10号土坑

第1層　黒色土　10YR1.7/1　ローム粒微量、炭化物少量含む。
第2層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、炭化物微量含む。
第3層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒、炭化物微量含む。
第4層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、炭化物微量含む。
第5層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒、炭化物少量含む。
第6層　暗褐色土　10YR3/4　焼土。
第7層　暗褐色土　10YR3/4　ローム質。
第8層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒を少量含む。

第19図　土　坑(1)



第７号土坑

第１層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒を中量含む。
第２層　褐 色 土　10YR4/4　ローム質。
第３層　暗褐色土　7.5YR3/4 焼土。

第８号土坑

第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒、炭化物微量含む。
第２層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒、炭化物微量含む。
第３層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒、炭化物少量含む。
第４層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量、炭化物微量含む。
第５層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒、炭化物微量含む。
第６層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒を少量含む

第９号土坑

第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒を微量含む。
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒を中量含む。
第３層　褐 色 土　10YR4/6　ローム粒を多量含む。

0　2m

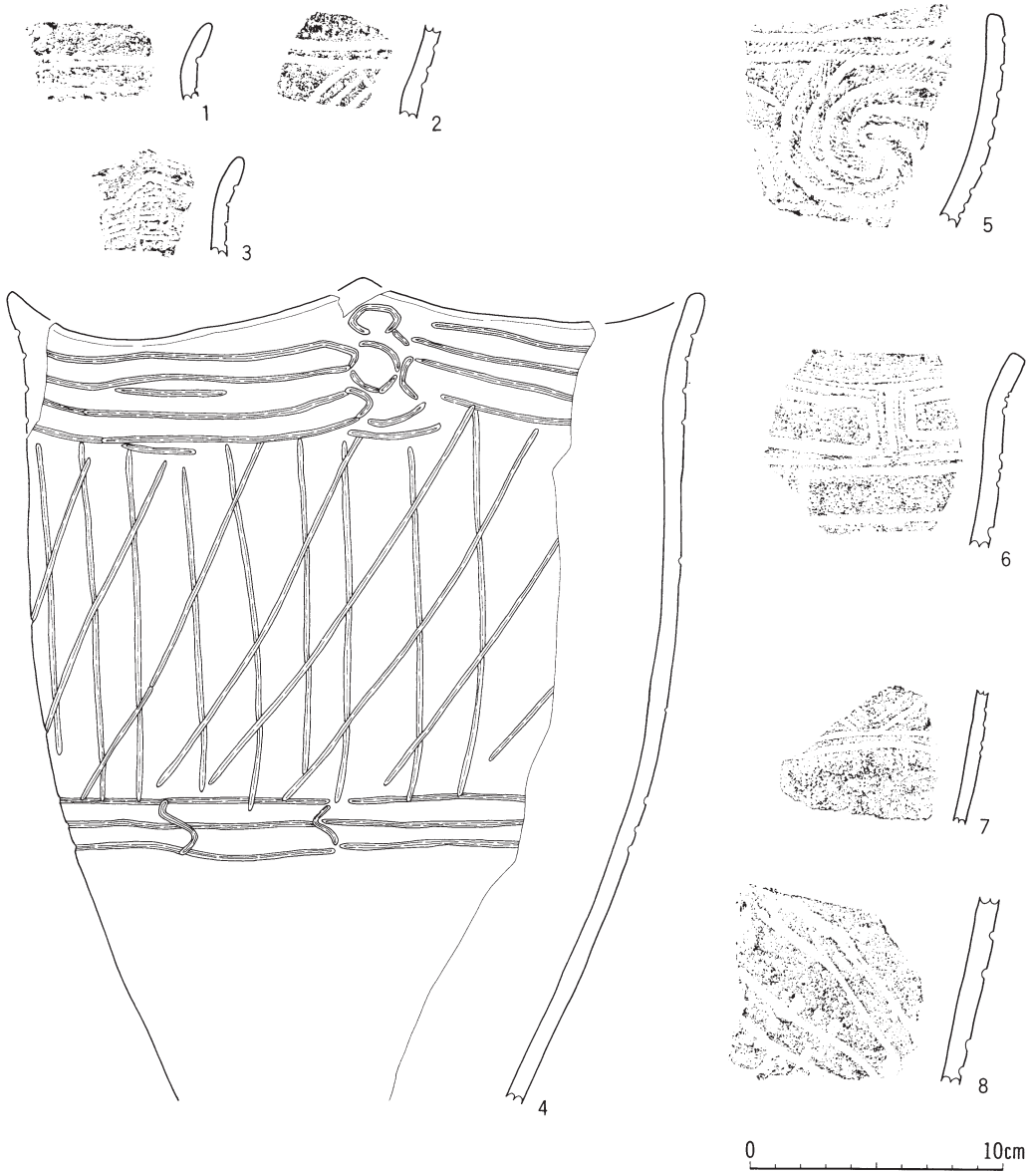
第14号土坑

第１層　黒 褐 色 土　10YR3/1　ローム粒、炭化物を微量含む。
第２層　黒 褐 色 土　10YR3/2　ローム粒を中量含む。
第３層　黒 褐 色 土　10YR2/3　L・B多量含む。
第４層　黒 褐 色 土　10YR2/2　ローム粒を少量含む。
第５層　黒 褐 色 土　10YR2/3　L・B多量含む。
第６層　黒 褐 色 土　10YR2/3　L・B多量含む。
第７層　明黄褐色土　10YR6/6　砂質ローム。

第21号土坑

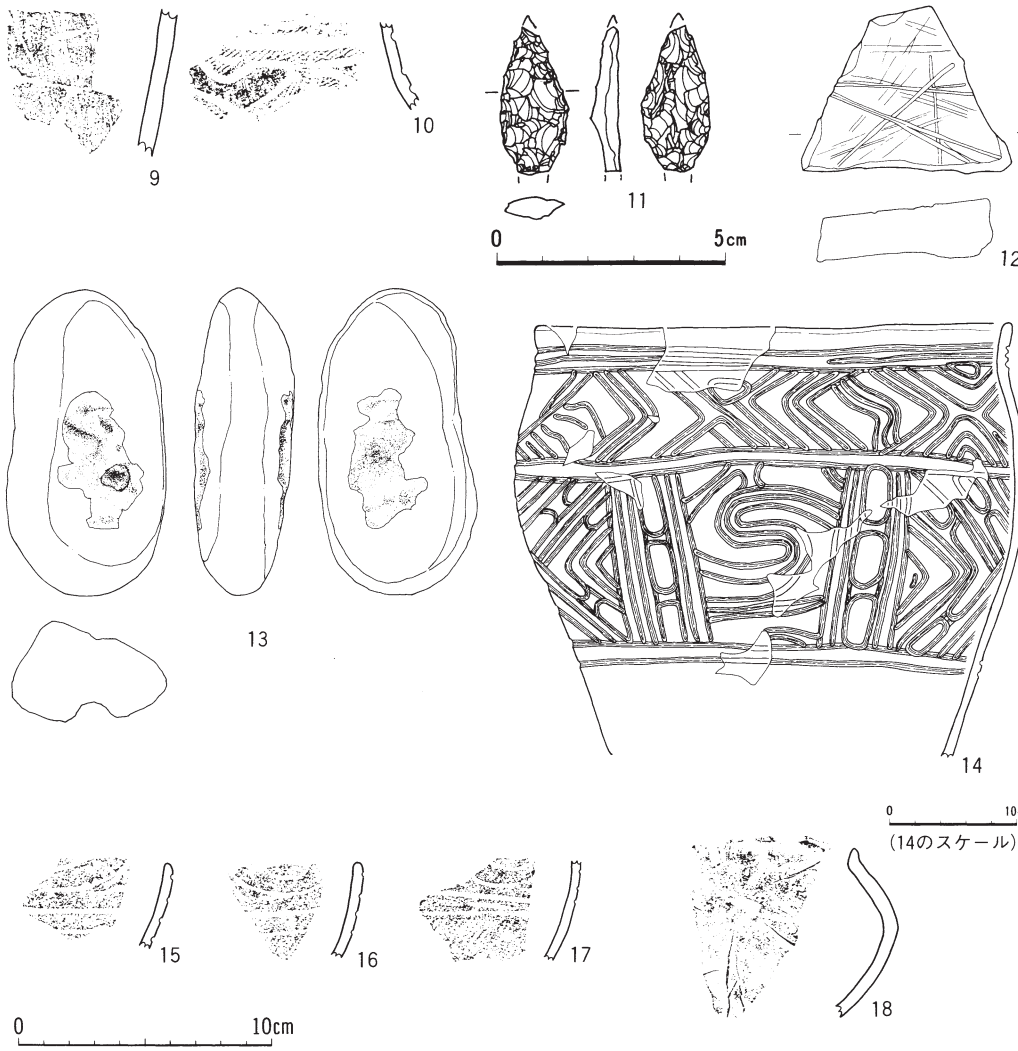
第１層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒を少量含む。
第２層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒を微量含む。

第20図　土　　坑(2)



図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
1	1号土坑覆土	沈線文	J —85	深鉢
2	1号土坑覆土	沈線文	J —86	深鉢
3	2号土坑覆土	沈線文	J —87	鉢
4	2号土坑覆土	平行沈線文、格子目状沈線文	J —15	深鉢
5	3号土坑覆土	平行沈線文、渦巻状文、ＬＲ縄文	J —88	
6	4号土坑覆土	沈線文、櫛目状沈線文	J —90	深鉢
7	5号土坑覆土	沈線文	J —92	深鉢
8	5号土坑覆土	沈線文	J —91	

第21図　土　　坑(3)



図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
9	8号土坑確認面	格子状沈線文	J ― 99	深鉢
10	7号・8号土坑覆土	沈線文、ＬＲ縄文	J ― 98	鉢
14	21号土坑覆土	平行沈線文、区画文、Ｓ字状沈線文	J ― 13	深鉢
15	14号土坑覆土	沈線文	J ―103	15～16は同一個体
16	14号土坑覆土	沈線文、ＬＲ縄文	J ―104	
17	14号土坑覆土	沈線文、ＬＲ縄文	J ―101	
18	14号土坑覆土	無文	J ―100	

図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
11	石鏃	8号土坑覆土	(32)	15	6	(2.5)	珪質頁岩	29	尖基有茎鏃
12	石皿	9号土坑覆土	(80)	(62)	(23)	(105)	凝灰岩	235	線条痕
13	敲磨器	10号土坑覆土	121	63	39	278	細粒凝灰岩	227	凹石

第22図　土　　坑(4)

4　埋設土器遺構（第23図）

Ｊ－７グリッドに位置する遺構で、１基のみの検出である。調査区の北端に位置している。確認は第Ⅲ層であるが、土器の上半部は耕作により欠失している。埋設の方法は正立埋設であるが、東側に若干傾いている。掘り方の規模・形態は埋設した土器に合わせて掘り込んだものである。土器内の堆積土は１層のみの確認で、シルト質の暗褐色土の堆積を確認した。

（畠山　昇）

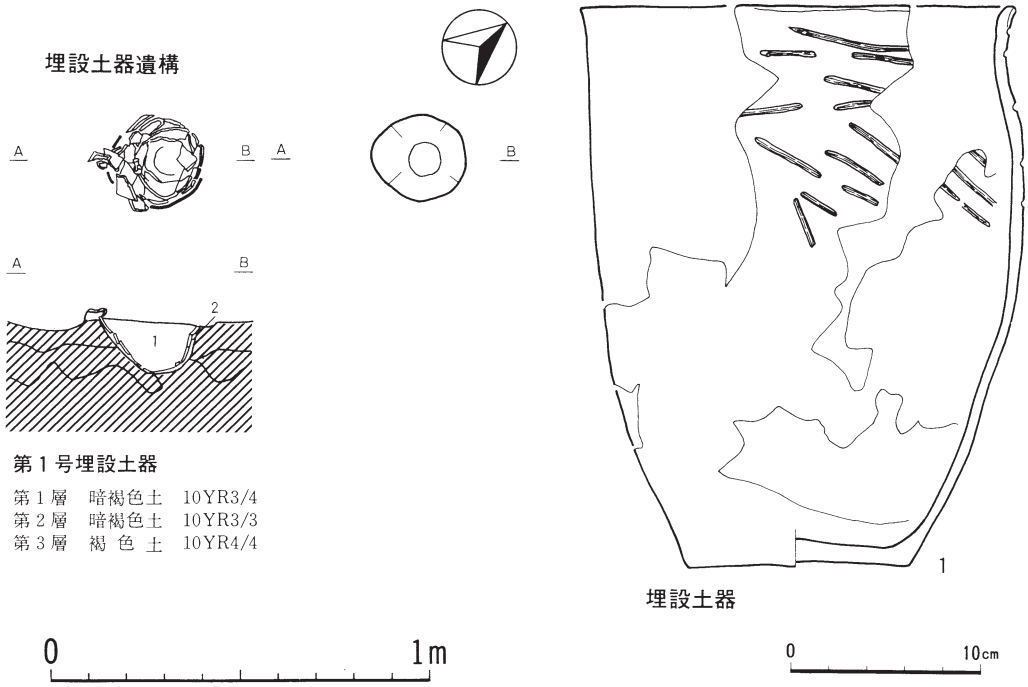
5　小ピット群（第23・108図）

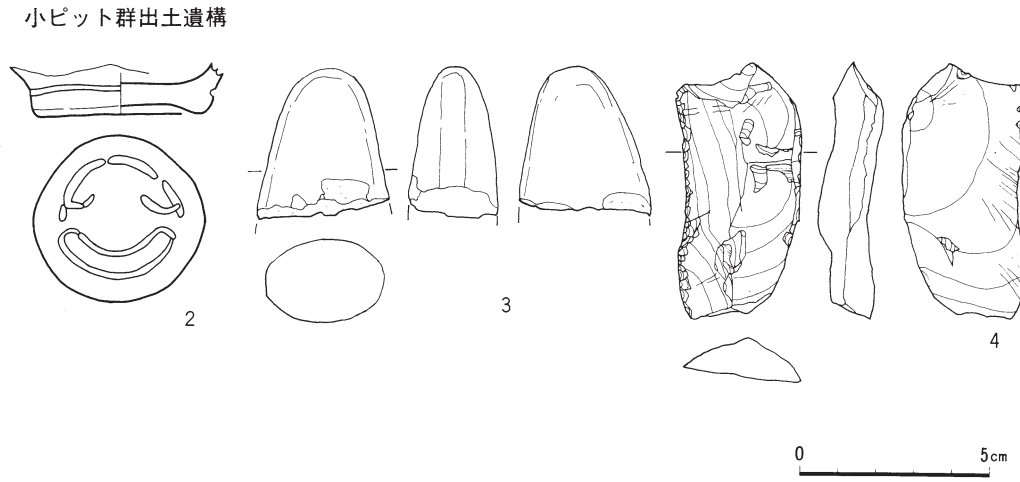
調査区の北側の区域から、性格の不明な小ピットをおよそ100個ほど検出した。大部分が縄文時代のものと考えられるが、中にはこれより新しい時代のピットも含んでいる可能性もある。

ピットの平面形は円形か楕円形で、規模は径20cm～70cm、深さ10cm～40cmである。全般に、径30cm前後、深さ20cm～30cmのピットが多い。

また、ピットの内部からは縄文土器の破片や不定形石器、フレイク、磨製石斧（基部破片）等の石器が出土したものがあり、これにはピット番号を付している（P_1～P_{12}）。

（畠山　昇）





図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
1	埋設土器遺構	沈線文	J ― 18	深鉢
2	ピット1・覆土	沈線文	J ―271	底部

図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
3	磨製石斧	ピット６覆土	(38)	(35)	(24)	(45.7)	輝緑岩	212	頭部片
4	スクレイパー	ピット10覆土	31	62	13	26.2	珪質頁岩	31	

第23図　埋設土器遺構、小ピット出土遺物

第２節　平安時代ほかの遺構と遺物

１　竪穴住居跡

第１号住居跡（第24図～第29図）

［位置］Ｋ・Ｌ－26～28及びＭ－26・27グリッドに位置する。

［重複］第１号及び第２号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。

［平面形・規模］北東壁は６ｍ44cm・南東壁６ｍ43cm・南西壁６ｍ38cm・北西壁６ｍ40cmの方形を呈する。主軸方位はＮ－52°－Ｗ、床面積は40.30㎡である。

［壁・床面］各壁とも急な立ち上がりを呈し、壁高は北東壁４cm前後、南東壁１～10cm、南西壁10cm前後、北西壁12～18cmである。床面は、地形を反映して西側の方がやや高く、ほぼ全面にわたって堅い。

［壁溝］各壁の直下から検出し、一部途切れる部分もあるがほぼ一周する。幅12～16cm前後、深さ９～19cm前後である。

［柱穴・ピット］柱穴状のピットは26個検出した。このうち主柱穴の可能性が考えられるのは、ピット１・２・４・５である。主なピットの深さは以下の通りである。

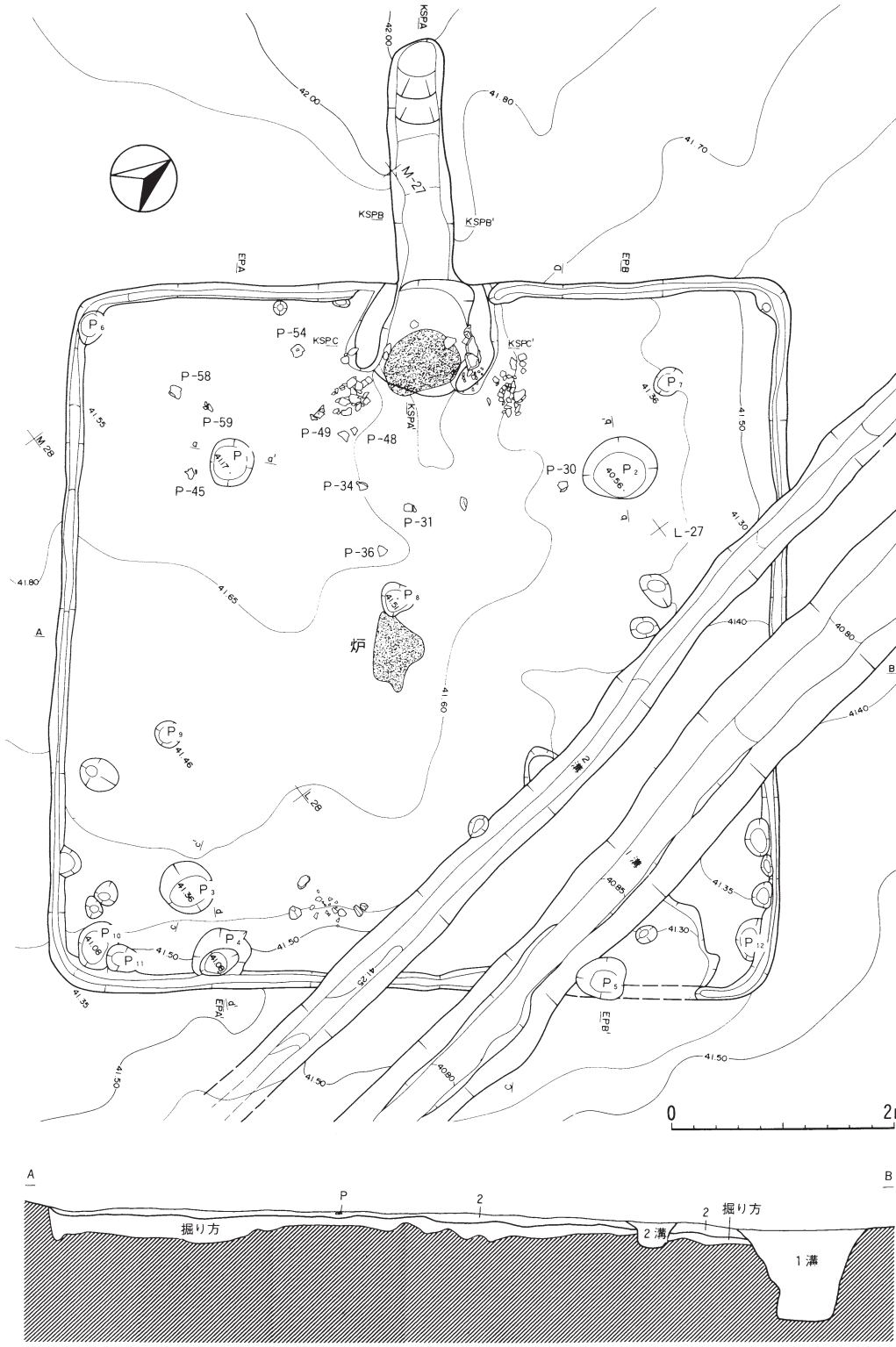
P_1…64cm・P_2…71cm・P_3…24cm・P_4…65cm・P_5…80cm・P_6…52cm・P_7…23cm・P_8…12cm・P_9…23cm・P_{10}…50cm・P_{11}…50cm・P_{12}…29cm

［カマド］北西壁のほぼ中央に位置し、火床面は両袖の中央から、70cm×52cmの楕円形状に検出された。燃焼部前方には土師器甕の破片が、一部敷かれたように確認された。袖及び天井部は、粘土と礫で構築されており、天井部の礫は袖前方へ多数崩落・散乱していた。煙道部・煙出し孔は、北西壁から215cm外側へ突き出て、掘り方は最大19cm窪んでいる。煙出し部は煙道部末端より若干低くなっている。また、73cm×45cmの不整楕円形状に床面中央が焼けていた。炉とみられる。

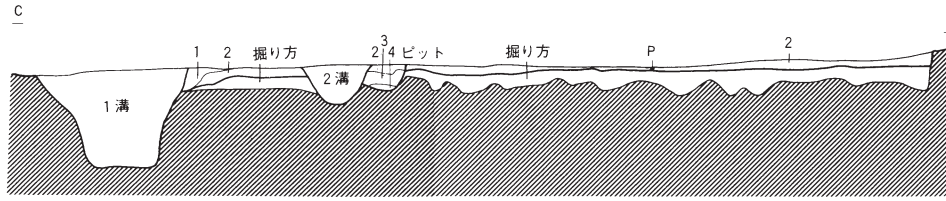
［堆積土］５層に区分できた。ローム粒・ローム塊を半分ほど含む黒褐色土で大方占められ、人為堆積の様相を呈する。

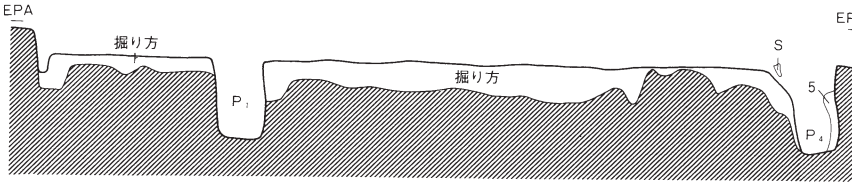
［出土遺物］床面、床面直上から若干の土師器、鉄器が出土した。土師器は、坏・甕・小甕・埦・皿・耳皿、鉄器は刀子・鉄滓各１点が出土している。なお、床下からは土師器の鉢１点が出土した。破片は、土師器の甕等がデスクトレーに１箱、同坏が40点、須恵器の甕が７点出土した。カマド袖付近、ピット４北付近からの出土が多い。

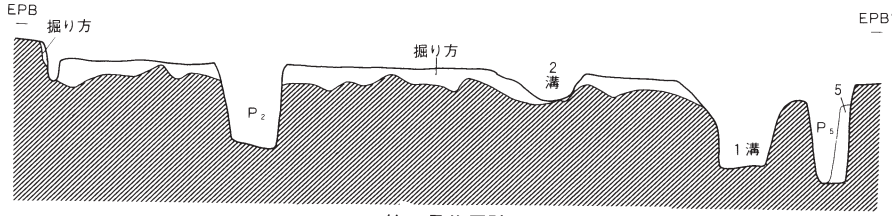
［時期］出土遺物から、本住居跡は９世紀中頃から後半と思われる。

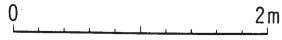


第24図　第１号住居跡（１）





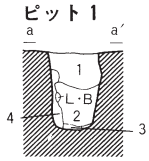




第1号住居跡

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒を少量含む。
第2層	黒褐色土	10YR2/2	明黄褐色ロームを約半分含む。底面付近に炭化物を若干含む。
第3層	黒色土	10YR2/1	黄褐色ロームを少量含む。
第4層	黄褐色土	10YR5/6	
第5層	黄褐色土	10YR5/6	暗褐色土を約半分含む。硬く、ロームブロックを含む。

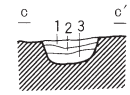
ピット1



ピット1

第1層　黒褐色土　10YR2/2
明黄褐色ロームを微量含む。
第2層　黒褐色土　10YR3/2
にぶい黄橙色ロームを約3割含む。
第3層　にぶい黄橙色土　10YR7/4
やや粘性あり。
第4層　にぶい黄褐色土　10YR4/3

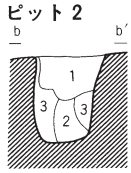
ピット3



ピット3

第1層　黒褐色土　10YR2/2
明黄褐色ロームを約4割含む。
第2層　黒色土　10YR2/1
ローム粒を微量含む。
第3層　褐色土　10YR4/4
黒色土を微量含む。

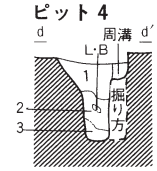
ピット2



ピット2

第1層　黒褐色土　10YR3/1
黄褐色ロームを約2割含む。
第2層　黒褐色土　10YR3/2
やや粘性あり。ローム粒を少量含む。
第3層　黄褐色土　10YR5/6
黒褐色土を少量含む。

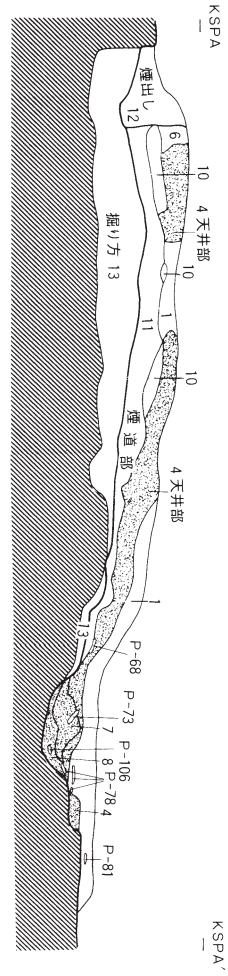
ピット4

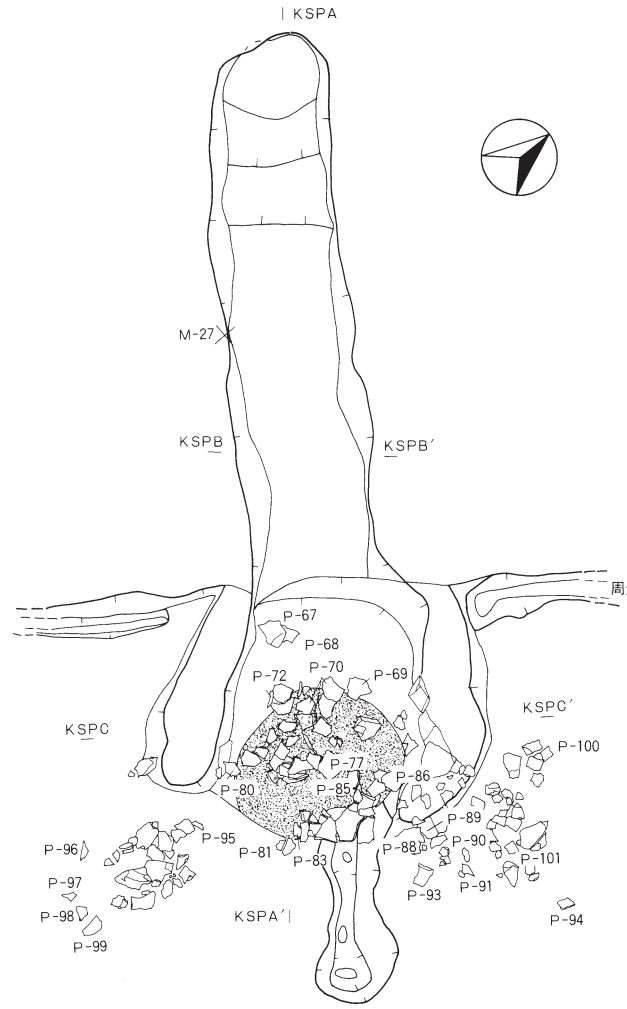


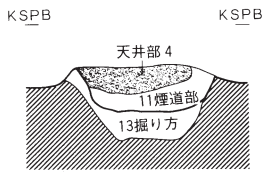
ピット4

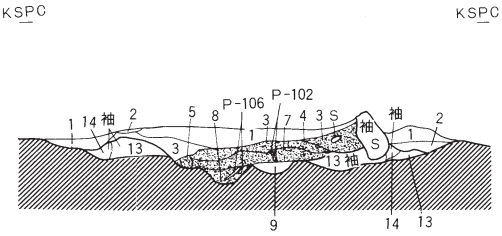
第1層	黒褐色土	10YR2/2	褐色ロームを約3割含む。
第2層	暗褐色土	10YR3/3	黄褐色ロームを約4割含む。腐植土を少量含む。
第3層	にぶい黄橙色土	10YR7/3	やや粘性あり。黒褐色土を微量含む。

第25図　第1号住居跡（2）







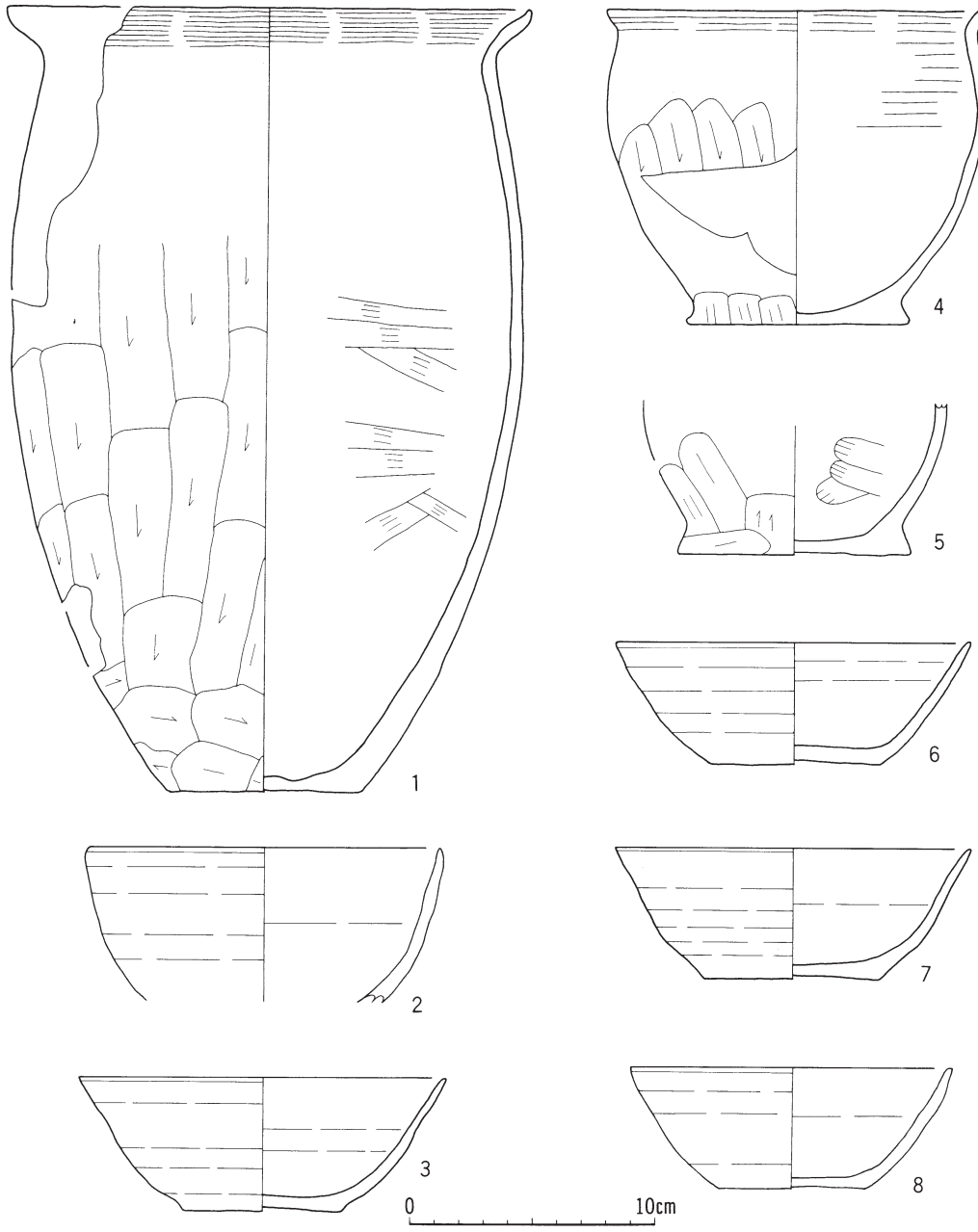


第１号住居跡カマド

第１層	黒褐色土	10YR2/3	にぶい黄橙色ロームを少量含む。
第２層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	
第３層	褐色土	7.5YR4/3	明褐色土・にぶい黄橙色ロームを少量含む。
第４層	褐色土	7.5YR4/4	明褐色土を約半分含む。天井部。
第５層	明褐色土	7.5YR5/6	天井部。
第６層	灰黄褐色土	10YR4/2	にぶい黄橙色ロームを約４割含む。
第７層	褐色土	7.5YR4/4	橙色土を少量含む。炭化物を少量含む。
第８層	褐色土	7.5YR4/4	橙色土を少量含む。炭化物を少量含む。褐色ロームを約１割含む。
第９層	明褐色土	7.5YR5/8	明赤褐色焼土ブロックを含む。
第10層	黒褐色土	10YR3/1	にぶい黄橙色ロームを約半分含む。
第11層	黒色土	10YR1.7/1	にぶい黄橙色ロームを約１割含む。煙道部。
第12層	黒色土	10YR1.7/1	煙出し。
第13層	黒色土	10YR1.7/1	にぶい黄橙色ロームを約４割含む。ローム塊多量。掘り方。
第14層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒を微量含む。

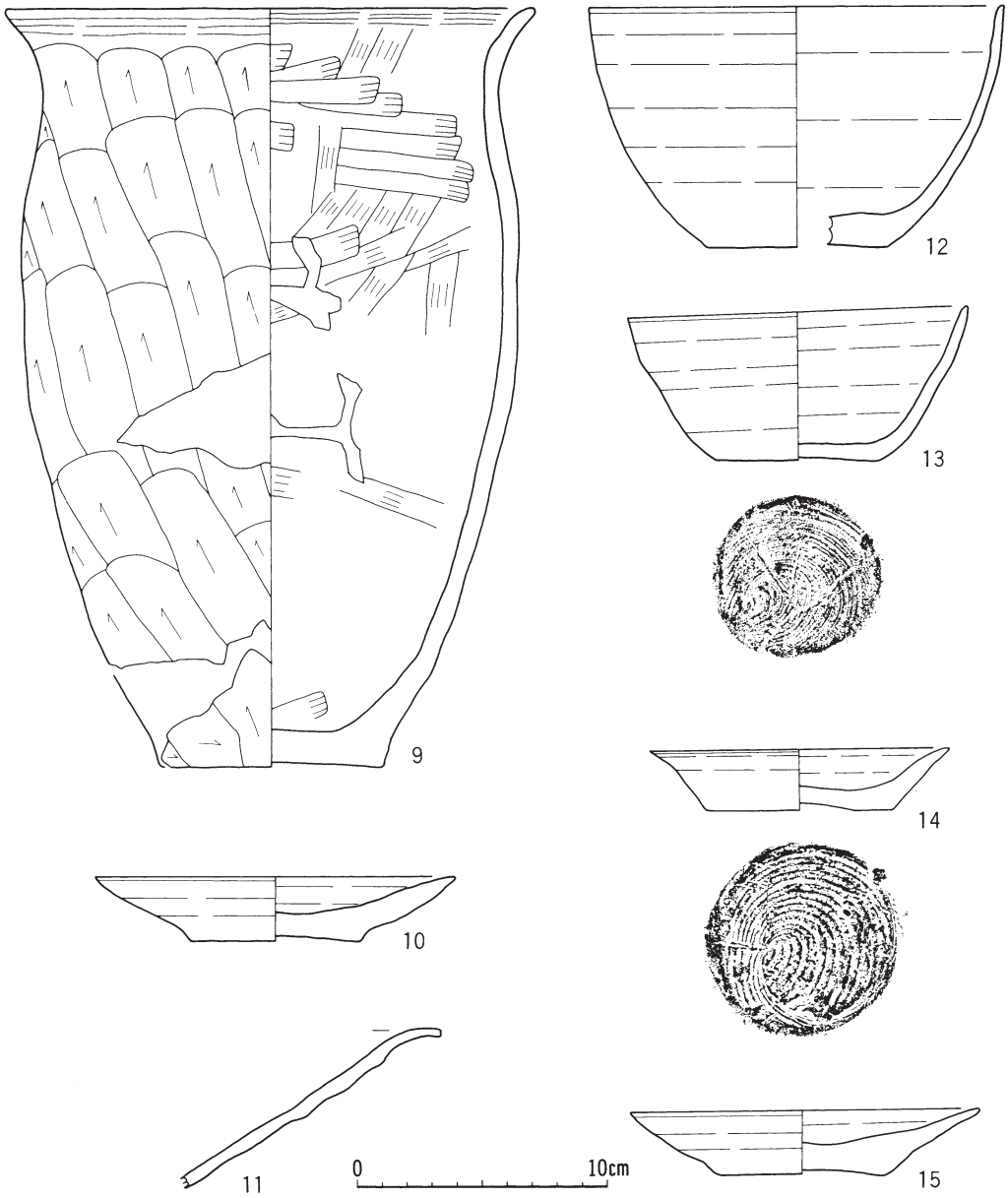
0　1m

第26図　第１号住居跡（３）



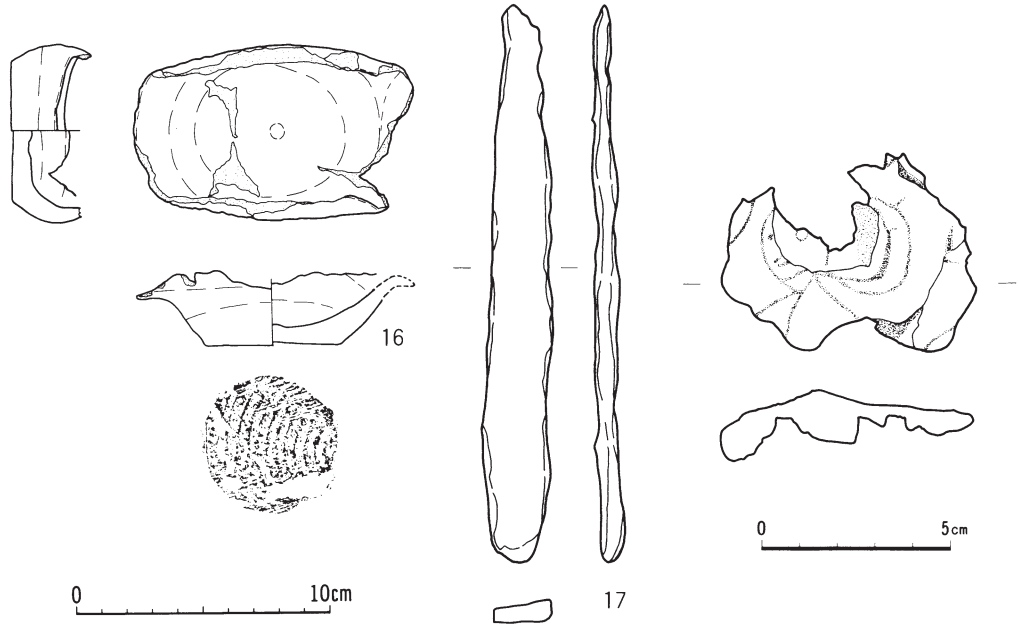
番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
1	土師器	甕	完形	床面・確認面、カマド燃焼部・フク土	(21.4)	8.0	32.0	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	—	K I	P-20・105・70・72・75・78・86
2	土師器	坏	体部上半	床直・確認面	(14.4)	—	—	ロクロ	ロクロ	—	I b	P-2
3	土師器	坏	完形	床直	(14.8)	6.5	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-5
4	土師器	小甕	略完形	床面、カマド燃焼部・フク土	15.7	9.1	12.8	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	砂底	KIII	P-30・82
5	土師器	小甕	体部下半	床直	—	9.6	—	ヘラケズリ	ナデ	砂底		
6	土師器	坏	完形	床面・床直	14.5	7.1	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-19・23・10
7	土師器	坏	完形	床面、6Hフク土	(14.6)	7.3	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-34・49・50・55・59
8	土師器	坏	体部半分	床面	(13.2)	(6.0)	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-5・44

第27図　第1号住居跡(4)



番号	種類	器種	部　位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備　　考
					口径	底径	器高					
9	土師器	甕	略完形	床面・確認面、カマド焼成部・フク土	(21.2)	(9.0)	30.3	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	砂底	K Ⅰ	P-34・105・77・82～84・88・89
10	土師器	皿	完形	床直	14.4	6.8	2.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切		P-52
11	土師器	鍋	口縁部	床面・カマド・フク土	(36.0)	—	—	ヨコナデ	ナデ	—		P-48・96
12	土師器	鉢	体部半分	床下	(16.6)	(7.2)	9.6	ロクロ	ロクロ	—		
13	土師器	坏	完形	床面・床直、6Hフク土	13.6	6.6	5.9	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Ⅰb	P-56・58
14	土師器	皿	完形	床直	12.0	7.5	2.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切		P-54
15	土師器	皿	完形	Pit 6フク土	14.0	6.8	2.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切		P-104

第28図　第1号住居跡(5)



番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
16	土師器	耳皿	略完形	床面	—	5.4	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切		P-33

番号	出土位置	最大計測値				種類	備考
		長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
17	床面	150	16	5	25	刀子	F-1
18	床直	67	—	18	22	鉄滓	F-2

第29図　第１号住居跡（６）

第２号住居跡（第30図・第31図）

［位置］ O－12・13グリッドに位置する。西側の約四半分は調査区域外にある。

［重複］ 第２号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。

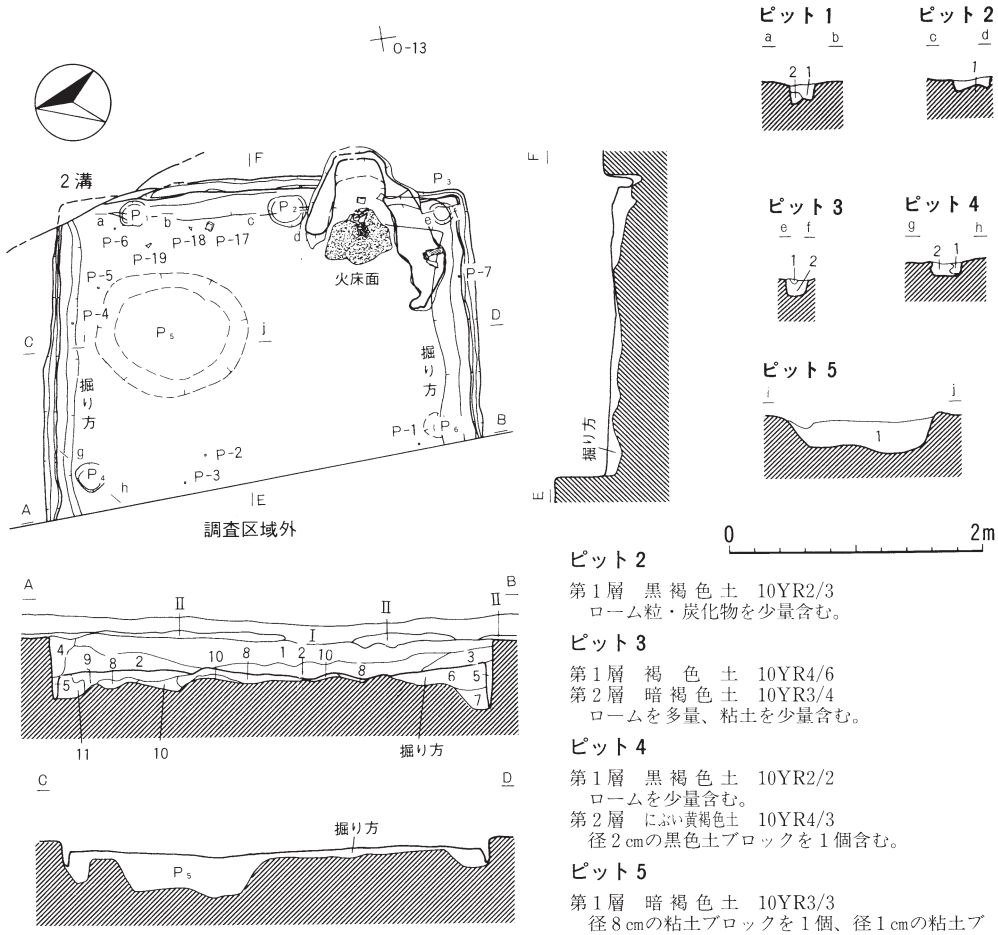
［平面形・規模］ 西側は調査区外で、検出できた東壁の壁長は３m20cmである。全体のプランは不明であるが、ほぼ方形を呈するものと思われる。主軸方位はS－85°－E、検出できた床の面積は7.51㎡である。

［壁・床面］ 各壁とも急な立ち上がりを呈し、壁高は東壁７～19cm、南壁８cm前後、北壁９～24cmである。床面は、地形を反映して西側の方がやや高い。

［壁溝］ 各壁の直下に検出し、一部途切れる部分もあるが、ほぼ一周する。幅６～13cm前後、深さ７～15cm前後である。

［柱穴・ピット］ 床面から柱穴状のピットを４個検出した。また、貼り床を剥いだ段階で確認したピットは２個（ピット５・６）である（点線で示したピット）。なお、ピット５は土坑状を呈する（後述）。ピット１・３・４が主柱穴と考えられる。主なピットの深さは以下の通りである。

P_1…14cm・P_2…10cm・P_3…13cm・P_4…13cm・P_5…30cm



ピット2

第1層　黒褐色土　10YR2/3
　ローム粒・炭化物を少量含む。

ピット3

第1層　褐　色　土　10YR4/6
第2層　暗褐色土　10YR3/4
　ロームを多量、粘土を少量含む。

ピット4

第1層　黒褐色土　10YR2/2
　ロームを少量含む。
第2層　にぶい黄褐色土　10YR4/3
　径2㎝の黒色土ブロックを1個含む。

ピット5

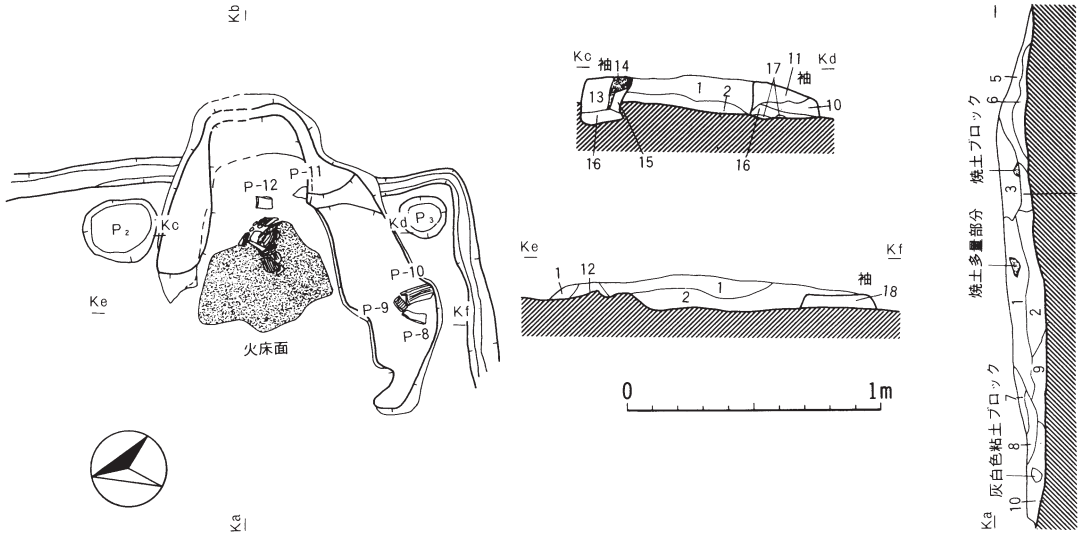
第1層　暗褐色土　10YR3/3
　径8㎝の粘土ブロックを1個、径1㎝の粘土ブロックを少量含む。ローム粒を多量、炭化物を少量含む。

第2号住居跡

第1層	暗褐色土	10YR3/3	炭化物を少量含む。
第2層	暗褐色土	10YR3/3	灰白色粘土ブロック・ローム粒を少量、炭化物・焼土粒を微量含む。
第3層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒を斑状に約4割、灰白色粘土ブロックを少量含む。
第4層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒を約3割含む。
第5層	暗褐色土	10YR3/4	非常に軟らかく、粘性ややあり。
第6層	暗褐色土	10YR3/3	明黄褐色ロームを斑状に約半分含む。灰白色粘土ブロックを少量含む。
第7層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム。暗褐色土を約3割含む。
第8層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム。暗褐色土をブロック状に2～3割含む。粘性あり。
第9層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム。灰白色粘土を層状に約4割含む。暗褐色土を約1割含む。粘性あり。
第10層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム。粘性あり。
第11層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム。粘性あり。長径5㎝の楕円状の灰白色粘土ブロックを数個含む。

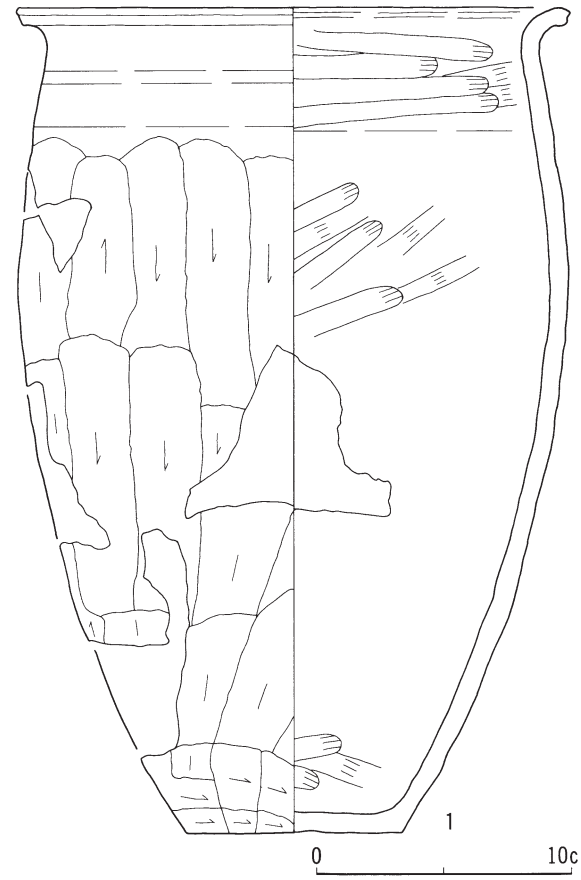
第30図　第2号住居跡（1）

［カマド］　東壁の南寄りに位置している。火床面は燃焼部のほぼ中央にあり、37㎝×53㎝の不整な楕円形を呈する。袖は灰白色の粘土をつき固めて構築し、煙道部は短く、遺存状態はよくない。燃焼部後方から土師器の甕片が多数折り重なるように出土した。右袖からそれらと接合できる口縁部等片3点が出土した。左袖の壁と接する部分からピットを検出したが（ピット2）、カマドと関連があるものと思われる。



第2号住居跡カマド

第1層　暗褐色土　10YR3/3
炭化物・焼土粒を微量含む。
第2層　黒褐色土　10YR3/2
炭化物・焼土塊を少量含む。
第3層　にぶい黄褐色土　10YR5/3
灰白色粘土を多量、暗赤褐色土塊を少量含む。
第4層　褐色土　10YR4/4
焼土粒を多量含む。
第5層　にぶい黄褐色土　10YR4/3
第6層　褐色土　10YR4/6
第7層　にぶい黄褐色土　10YR4/3
灰白色粘土を多量、炭化物・焼土塊を微量含む。
第8層　黒褐色土　10YR2/3
炭化物を微量含む。
第9層　黒色土　10YR2/1
炭化物を多量、灰白粘土塊を少量含む。
第10層　暗褐色土　10YR3/3
灰白色粘土を少量、炭化物を微量含む。
第11層　黒褐色土　10YR3/2
炭化物・焼土粒を微量含む。
第12層　黒褐色土　10YR3/2
焼土粒・灰白色粘土を少量含む。
第13層　にぶい黄橙色土　10YR7/3
非常に硬い。灰白色粘土を約3割含む。カマド内側にいくにつれ、赤味を帯びる。
第14層　明赤褐色土　5YR5/6　焼土。
第15層　黒褐色土　10YR2/3
第16層　にぶい黄褐色土　10YR4/3
炭化物を微量含む。
第17層　灰白色土　10YR8/2　粘土。
第18層　褐灰色土　10YR4/1
ローム粒を約3割、灰白色粘土塊・炭化物を少量含む。



番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
1	土師器	甕	略完形	床面・周溝、カマド2・4層	(21.8)	8.6	32.7	ロクロ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ロクロ・ナデ	—	K I	P-2・4・7・20～23.8～12・14～16

第31図　第2号住居跡(2)

［その他の施設］北側の床下から、短軸98cm、長軸120cm、深さ30cmの土坑（ピット５）を検出した。覆土の大半はローム粒や炭化物を含んだ黒褐色土で、短時間で堆積した状況を呈している。

［堆積土］11層に区分できた。堆積土の大部分は、炭化物を微量～少量含む暗褐色土である。第６～11層は掘り方の部分である。

［出土遺物］床面、カマド付近から土師器の甕１点、床面から縄文時代後期の土器片１点、そして若干の土師器片（甕等23点、坏８点）が出土しただけである。

［時期］出土遺物から、９世紀中頃から後半の住居跡と思われる。

第３号住居跡（第32図～第37図）

［位置］J－11及びK－10・11グリッドに位置する。

［重複］小ピット群と重複し、本遺構の方が新しい。

［平面形・規模］東壁３m57cm・南壁２m95cm・西壁３m93cm・北壁３m63cmの隅丸台形を呈する。なお、東壁中央半分は検出できなかった。主軸方位はS－77°－E、床面積は13.20m²である。

［壁・床面］掘り込みが浅く、攪乱を受けているため、東壁中央部分は確認できなかった。確認した壁は各壁とも急な立ち上がりを呈し、壁高は南壁10～16cm・西壁22cm前後・北壁９～12cmである。床面には若干の凹凸が見られ、わずかに北東へ傾斜している。西側の一部を除いて全般に堅緻である。

［壁溝］東壁のカマド北側や西壁の中央付近は一部途切れているが、全体の４分の３ほどを検出した。幅７～20cm、深さ３～16cmで、底面は凹凸が激しい。

［柱穴・ピット］床面から16個、壁溝から４個、東壁直上から３個のピットを検出したが、主柱穴は不明である。なお、ピット１は土坑状を呈する（後述）。各ピットの深さは以下の通りである。

P_1…46cm・P_2…６cm・P_3…10cm・P_4…25cm・P_5…22cm・P_6…32cm・P_7…38cm・P_8…19cm・P_9…20cm・P_{10}…30cm・P_{11}…13cm・P_{12}…19cm・P_{13}…17cm・P_{14}…11cm・P_{15}…15cm・P_{16}…36cm・P_{17}…16cm・P_{18}…12cm・P_{19}…37cm・P_{20}…８cm・P_{21}…９cm・P_{22}…38cm・P_{23}…12cm

［カマド］東壁の南側に位置し、火床面は両袖の中央から直径55cmの円形状に検出された。袖は粘土質の黄褐色土で構築され、芯材を使用していない。煙道部・煙出し孔は、東壁から155cm外側へ突き出て、地山を掘り込んで構築している。煙出し孔は煙道部より緩やかに低く続き、フラスコ状を呈する。

第３号住居跡

第１層　黒褐色土　10YR2/2
第２層　黒褐色土　10YR2/2　炭化物を少量、ローム粒を微量含む。
第３層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒を微量、径２cmの炭化物を３個含む。
第４層　褐　色　土　10YR4/6　ローム粒を中量含む。
第５層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒を多量、炭化物を中量、焼土を微量含む。
第６層　黄褐色土　10YR5/8　ローム、炭化物を少量含む。
第７層　暗褐色土　7.5YR3/4　焼土を多量含む。炭化物を混入する。

ピット２

第１層　褐　色　土　10YR4/4　ローム粒多量含む。
第２層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量含む。
第３層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒中量含む。
第４層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量、焼土少量、炭少量含む。

ピット３

第１層　褐　色　土　10YR4/6　焼土微量、炭化物微量含む。

ピット１

第１層　黒褐色土　10YR2/2　３～４cm程度のローム１個、炭化物少量含む。
第２層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　焼土少量含む。
第３層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒多量、炭化物微量含む。
第４層　褐　色　土　7.5YR4/6　焼土多量含む。
第５層　暗褐色土　10YR3/4　炭化物微量、焼土微量含む。
第６層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　焼土多量、炭化物少量含む。
第７層　黒褐色土　10YR3/2　焼土中量、炭化物多量含む。
第８層　黄褐色土　10YR5/6　３cm程度のローム５、６個、ローム粒微量含む。非常に軟らかい。

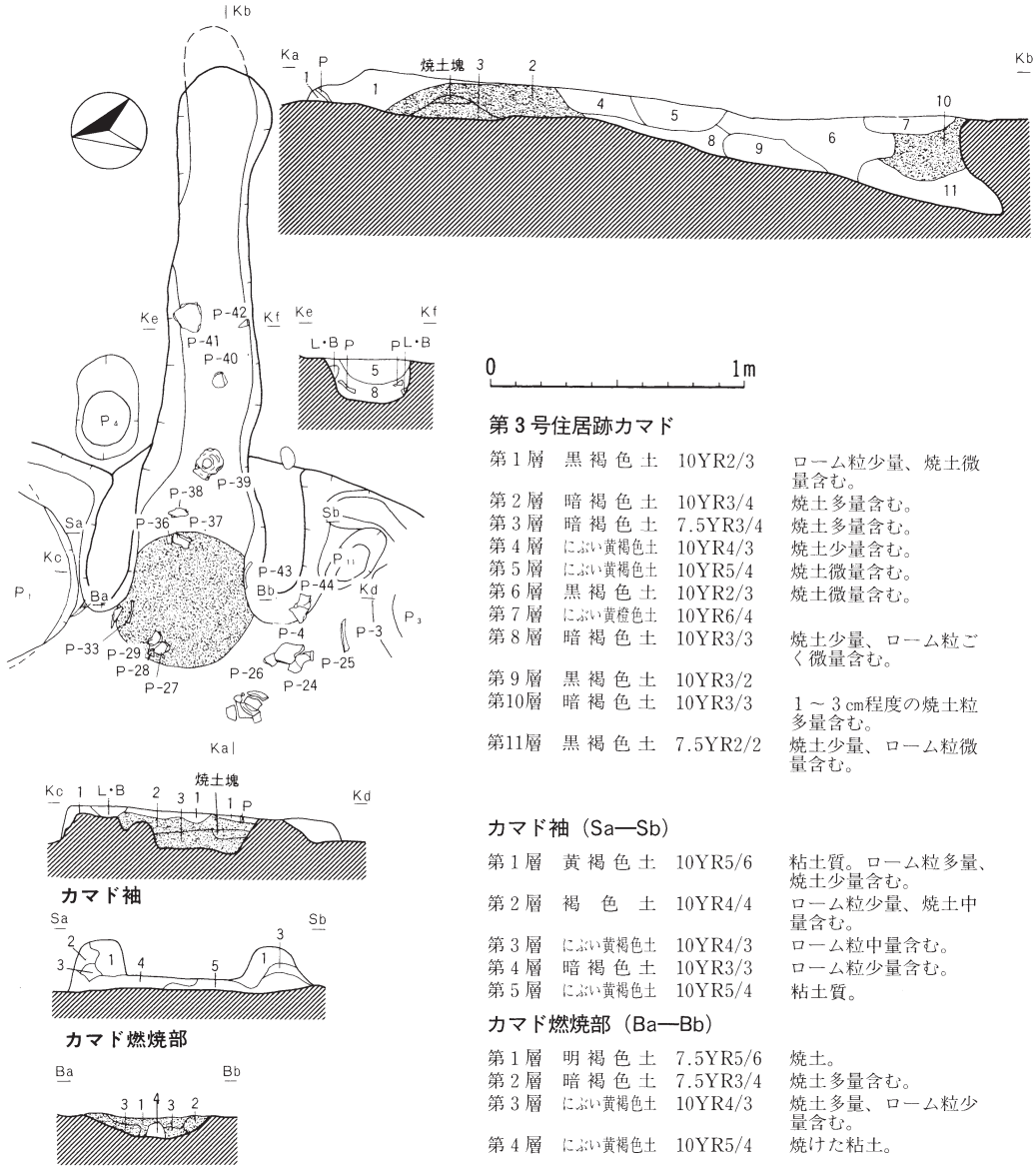
木炭（C―D）

第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒・炭化物を中量含む。

木炭（E―F）

第１層　暗褐色土　10YR3/4　２cm程度のロームを含む。ローム粒を微量含む。

第32図　第３号住居跡（１）



第３号住居跡カマド

第１層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量、焼土微量含む。
第２層	暗褐色土	10YR3/4	焼土多量含む。
第３層	暗褐色土	7.5YR3/4	焼土多量含む。
第４層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	焼土少量含む。
第５層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	焼土微量含む。
第６層	黒褐色土	10YR2/3	焼土微量含む。
第７層	にぶい黄橙色土	10YR6/4	
第８層	暗褐色土	10YR3/3	焼土少量、ローム粒ごく微量含む。
第９層	黒褐色土	10YR3/2	
第10層	暗褐色土	10YR3/3	１～３cm程度の焼土粒多量含む。
第11層	黒褐色土	7.5YR2/2	焼土少量、ローム粒微量含む。

カマド袖（Sa―Sb）

第１層	黄褐色土	10YR5/6	粘土質。ローム粒多量、焼土少量含む。
第２層	褐色土	10YR4/4	ローム粒少量、焼土中量含む。
第３層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム粒中量含む。
第４層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量含む。
第５層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	粘土質。

カマド燃焼部（Ba―Bb）

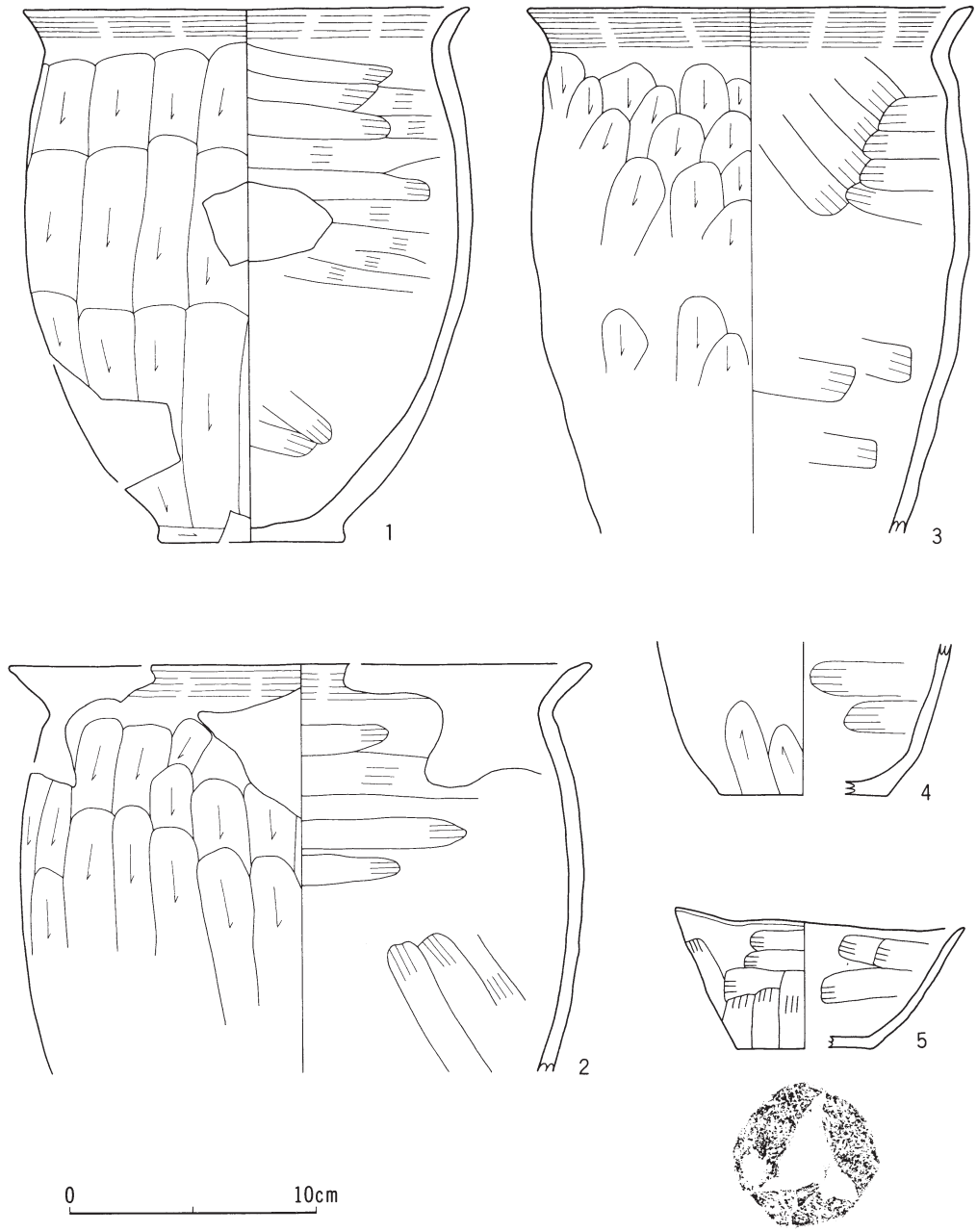
第１層	明褐色土	7.5YR5/6	焼土。
第２層	暗褐色土	7.5YR3/4	焼土多量含む。
第３層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	焼土多量、ローム粒少量含む。
第４層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	焼けた粘土。

第33図　第３号住居跡（２）

［その他の施設］カマド左袖脇から、短軸69cm、長軸76cm、深さ46cmの土坑（ピット１）を検出した。焼土・炭化物をよく含み、短期間で堆積した状況を呈する。多数の土師器甕片を出土していること等から貯蔵穴と考えられる。

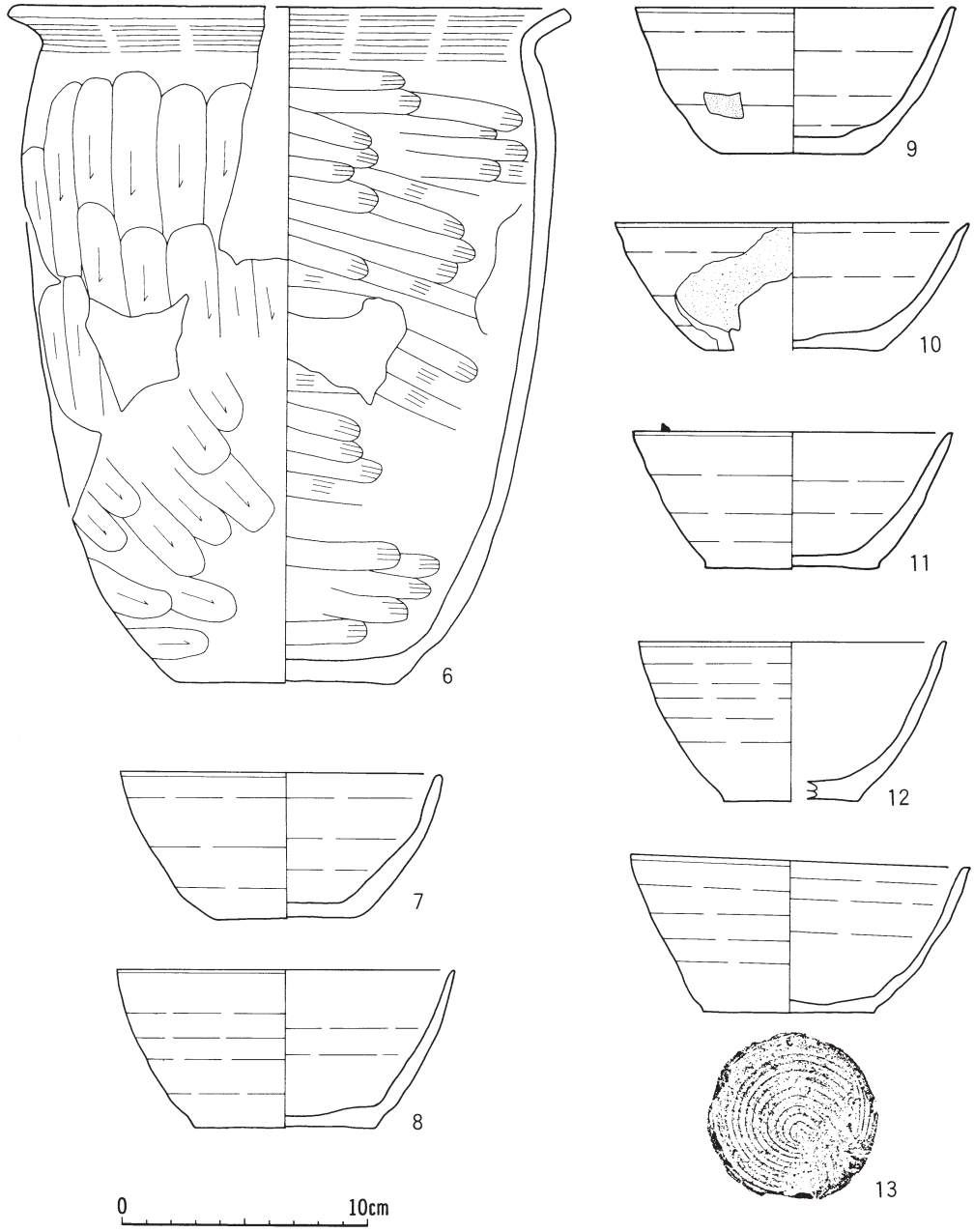
［堆積土］７層に区分できた。人為堆積の様相を呈する。

［出土遺物］床面・床面直上から、土師器の坏・高台付坏・甕が若干出土した。覆土からは、土師器の小甕と石器（敲磨器片・Ｒ－フレイク各１点）が出土している。破片では、覆土・掘り方から縄文土器約70点、土師器の甕がデスクトレーで４分の３箱、坏が61点出土している。



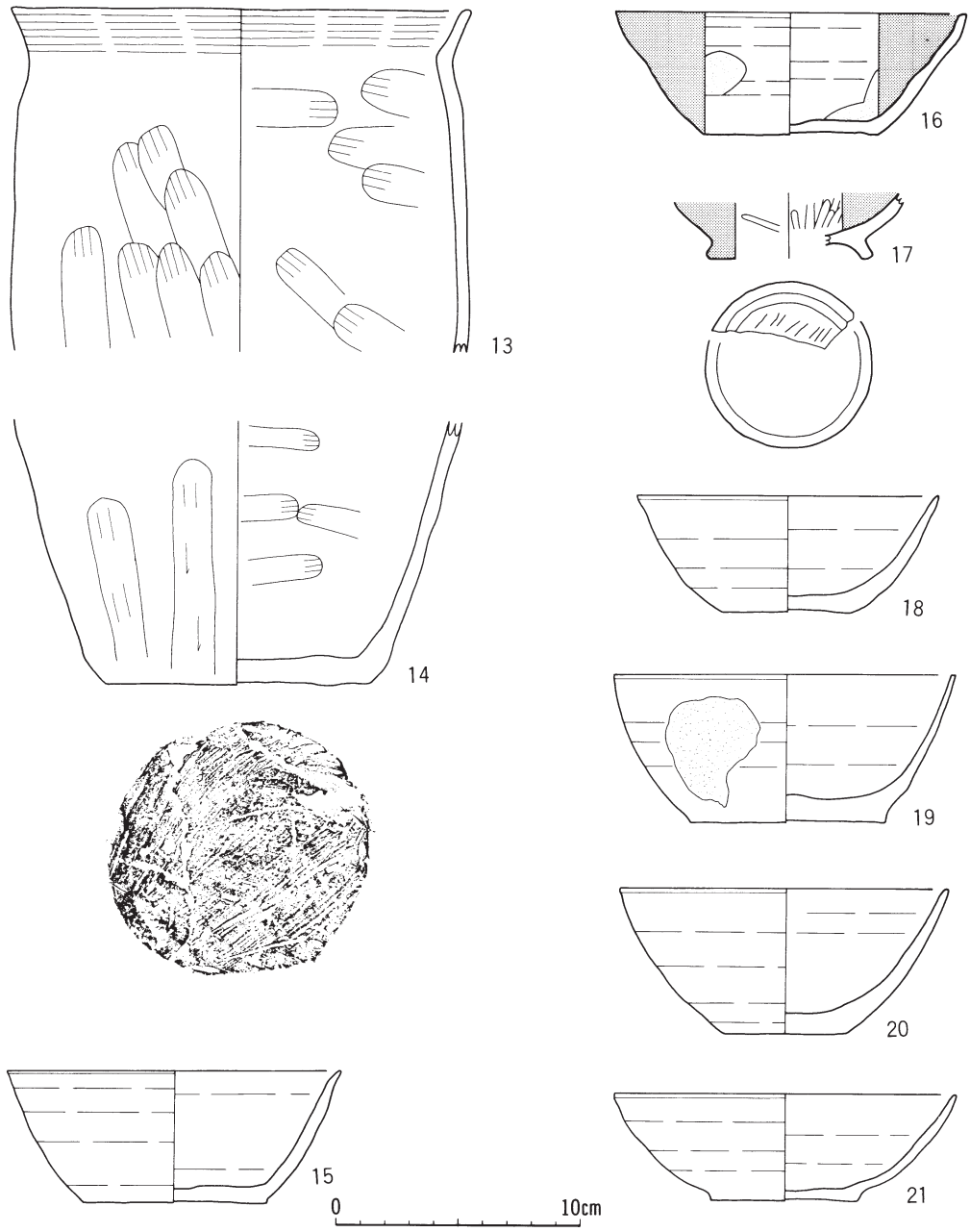
番号	種類	器種	部　位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備　　考
					口径	底径	器高					
1	土師器	甕	完形	床直、Pit1・5、フク土3層、カマド	18.2	7.6	21.8	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	砂底	K II	P-12・15・57・2・3・35・40・41
2	土師器	甕	体部上半	Pit1フク土、カマド	(23.8)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-56・63・68・35
3	土師器	甕	体部上半	床直・Pit1フク土、カマドフク土	(18.2)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラナデ・ナデ・ヨコナデ	—		
4	土師器	小甕	略完形	フク土	—	(6.9)	—	ヘラケズリ	ナデ	—		P-27・29・60・33・35・43
5	土師器	坏	略完形	フク土・Pit1フク土、カマドフク土	12.0	5.7	5.8	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	II	P-55・63・35(カマド)

第34図　第3号住居跡(3)



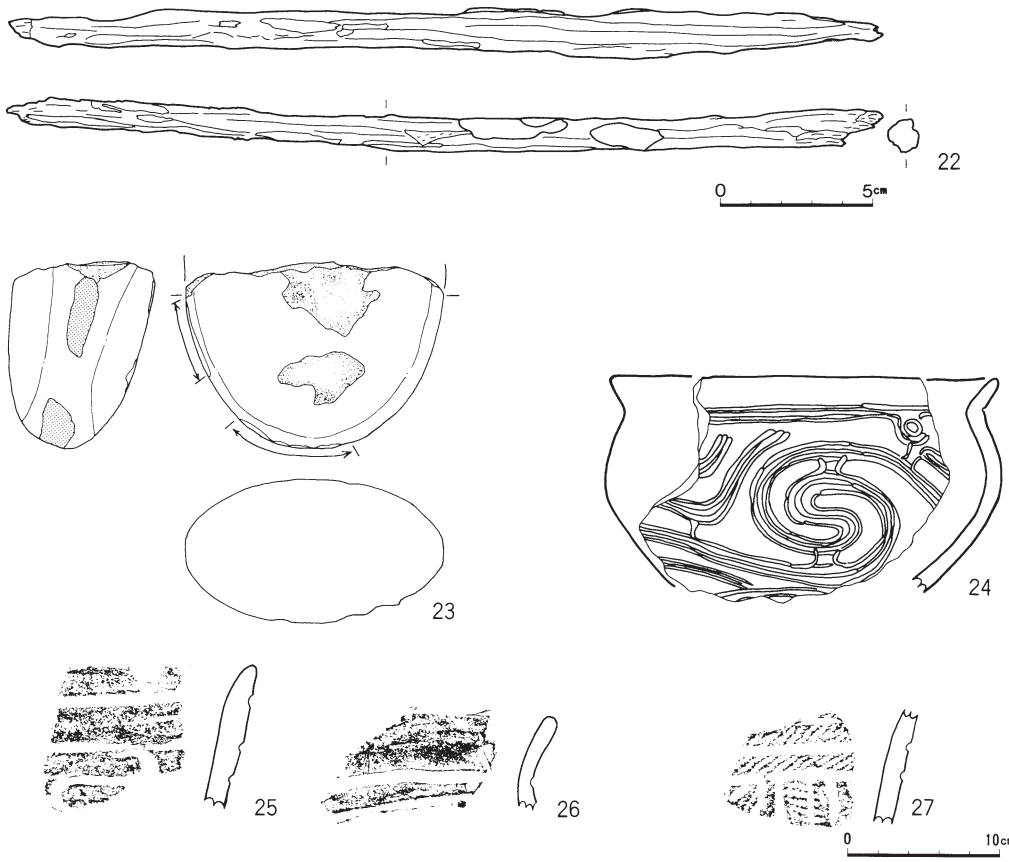
番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
6	土師器	甕	略完形	床直、Pit1フク土	22.5	9.0	(27.5)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	砂底	K I	P-17・51・59・61・64・65
7	土師器	坏	完形	床直、Pit1、カマド	(13.1)	5.6	5.9	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-16・63
8	土師器	坏	略完形	床直	(13.8)	7.4	6.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-1
9	土師器	坏	完形	床直、フク土	(13.0)	5.8	5.9	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	二次加熱
10	土師器	坏	略完形	床直	(14.4)	7.2	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-13・14、二次加熱
11	土師器	坏	略完形	床面	(13.0)	7.0	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-23
12	土師器	坏	体部半分	床直	(12.6)	(5.6)	6.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-11
13	土師器	坏	略完形	床直、フク土、カマドフク土	(13.5)	7.0	6.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-9・10・30

第35図　第3号住居跡(4)



番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
13	土師器	甕	体部上半	フク土3層、カマド	(18.4)	—	—	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-24
14	土師器	甕	体部下半	床直・フク土3層、I-12II層	—	10.8	—	ヘラケズリ	ナデ	ヘラケズリ		P-2・5・8
15	土師器	坏	完形	Pit1フク土	13.6	7.3	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-53・66
16	土師器	坏	体部半分	床直・フク土、Pit1フク土	(14.4)	7.2	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-18、内外面黒色処理(漆?)
17	土師器	高台付坏	底部	床直・ピット1フク土	—	(6.8)	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色処理・ヘラミガキ	III	P-22、内外面黒色処理
18	土師器	坏	略完形	カマド	(12.4)	5.4	4.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-39
19	土師器	坏	完形	フク土、Pit1フク土	14.0	8.0	6.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-52、二次加熱
20	土師器	坏	略完形	フク土、Pit1フク土	(13.5)	5.0	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-63
21	土師器	坏	完形	フク土3層	14.0	6.1	4.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-4

第36図　第3号住居跡(5)



番号	出土位置	最大計測値				種類	備考
		長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
22	Pit 1 フク土	570	33	21	60	(木製)棒	

図番号	器種	出土地・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	整理番号	備考
23	敲磨器	フク土	(60)	(84)	(44)	(332)	花崗岩	228	磨石＋凹石

図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
24	Pit 4	沈線文		
25	フク土	沈線文	J—68	
26	フク土	沈線文	J—67	
27	Pit 1	沈線文、縄文（L R）	J—66	

第37図　第3号住居跡(6)

また、ピット1覆土から木の棒（木製品）が出土している。なお、炭化材が壁溝及び西側中央の床面・床面直上から多く出土した。遺物は、中央部からカマド右袖付近にかけて多く出土している。

［時期］本住居跡は炭化材の出土状況から、焼失家屋と考えられる。出土遺物から、9世紀中頃から後半の住居跡と思われる。

第４号住居跡（第38図～第44図）

［位置］G～I－13・14グリッドに位置する。

［重複］なし。

［平面形・規模］北東壁４m92cm・南東壁５m41cm・南西壁４m94cm・北西壁５m45cmのほぼ方形を呈する。主軸方位はN－46°－W、床面積は25.45m²である。

［壁・床面］北東壁は上部が削平されたものと思われ、壁高は２cm前後しかない。その他の壁は急な立ち上がりを呈し、壁高は南東壁９cm前後・南西壁11～15cm・北西壁11～18cmである。床面は凹凸が激しく、全般に堅緻である。

［壁溝］各壁の直下から検出し、一周する。幅20～40cm前後、深さ12～24cm前後である。

［柱穴・ピット］床面から８個、壁溝から30個、柱穴状ピットを検出した。主柱穴と考えられるのは、ピット１・３・５・６の４個で、後者２個については柱痕を確認した。主なピットの深さは、以下の通りである。

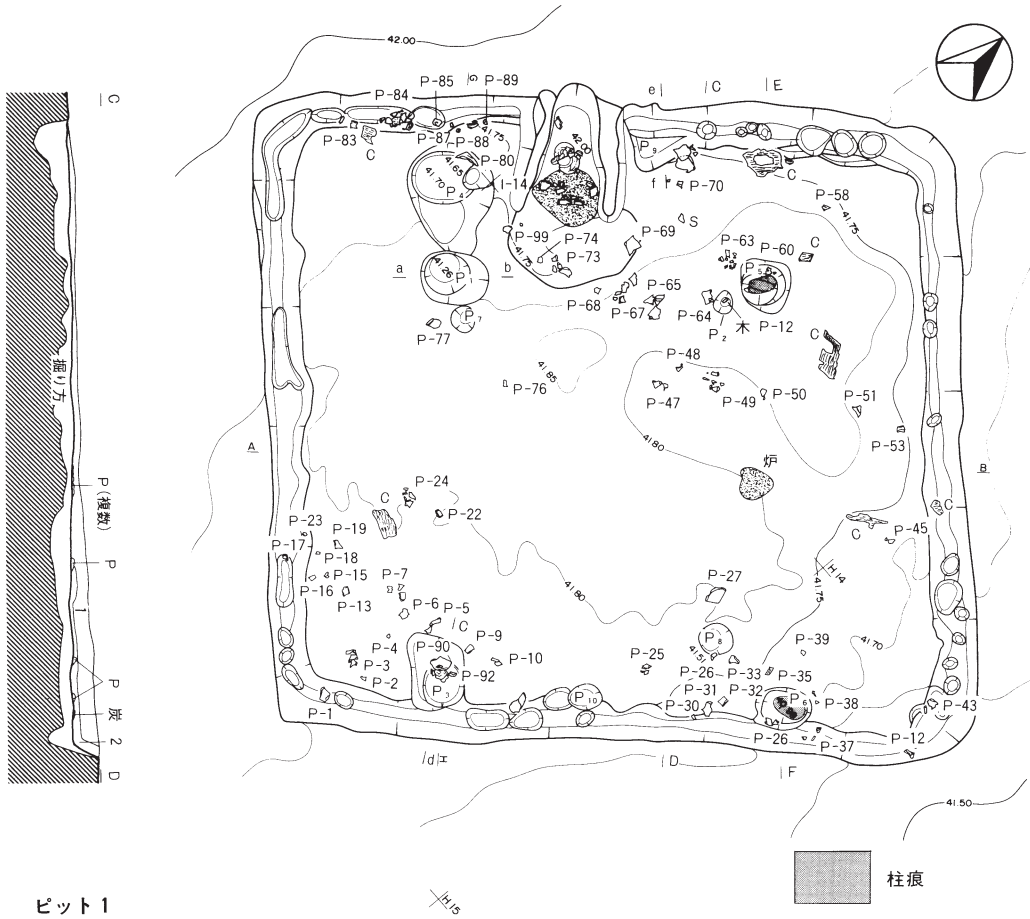
P_1…65cm・P_2…39cm・P_3…10cm・P_4…17cm・P_5…68cm・P_6…77cm・P_7…46cm・P_8…27cm・P_9…10cm・P_{10}…21cm

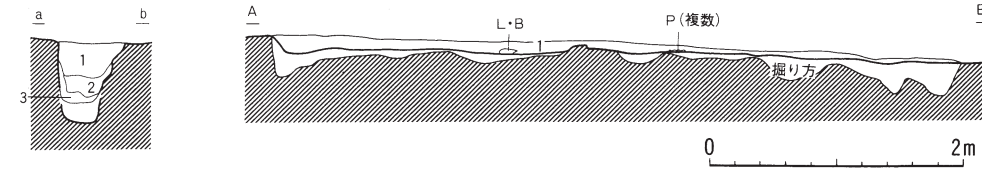
［カマド］北西壁のほぼ中央に位置する。煙道部は短く、燃焼部後方から土師器片が多量に出土している。火床面は両袖のほぼ中央にあり、直径約40cmのほぼ円形を呈する。後方から土師器片が、全体からは炭化物が出土している。焚口は床面より若干低い。袖はにぶい黄褐色～暗褐色土で構築され、芯材は使用していない。なお、本カマドは新・旧２つのカマドが重なっており、新カマドでは、土師器小甕２点及び壺１点が折り重なるように、旧カマドでは、土師器甕及びミニチュア土器各１点が、それぞれ支脚として使われていた。また、ピット５と６の間のほぼ中央から炉跡と思われる焼土を検出した。

［堆積土］２層に区分できた。炭化物を微量含む黒褐色土で構成される。

［出土遺物］床面・床面直上から多量の土師器・須恵器が出土した。土師器では坏・甕・小甕・ミニチュア土器、須恵器では大甕片があげられる。カマド燃焼部からも多量の土師器が出土しており、甕・壺・ミニチュア土器は各１点、小甕２点が支脚として利用されている。ピット３覆土からは、須恵器大甕の大きな破片が１点出土した。この大甕片は、第９号住居跡ピット５出土の大甕と接合した。縄文時代の土器片は、床面・床面直上から22点、覆土から10点、床下から６点、ピット12から２点、壁溝から４点出土している。平安時代の土器片については、土師器甕等がデスクトレーで１箱、坏が29点、須恵器甕が１点、坏が２点、大甕が１点出土している。遺物は、カマド周辺、ピット３・６付近から多く出土している。なお、床面・床面直上及び壁溝付近から少量の炭化材が出土した。

［時期］本住居跡は炭化材の出土状況から、焼失家屋と考えられる。出土遺物から、９世紀中





第4号住居跡

第1層　黒褐色土　10YR2/3　炭化物微量、ローム粒少量含む。
第2層　黒褐色土　10YR2/2　炭化物ごく微量含む。

ピット1

第1層　黒褐色土　10YR2/2　明褐色（10YR5/6）ローム粒10%含む。
第2層　褐　色　土　10YR4/4　ローム。ブロックを多く含む。
第3層　明褐色土　7.5YR5/6　ローム。にぶい橙色（10YR7/3）粘土を少量含む。

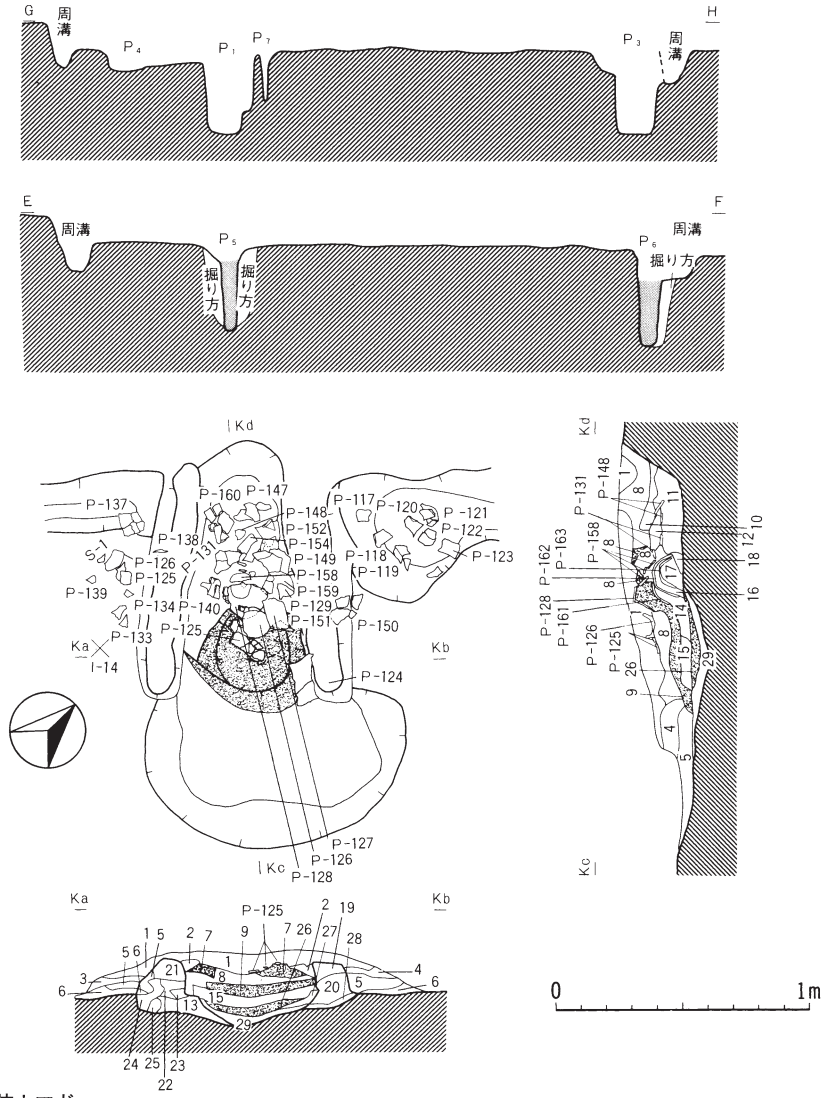
ピット3

第1層　黒褐色土　10YR2/2
第2層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒微量含む。
第3層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量含む。
第4層　褐　色　土　10YR4/6
第5層　明黄褐色土　10YR6/6

ピット9

第1層　黒褐色土　10YR2/3　炭化物ごく微量含む。
第2層　黒　色　土　10YR2/1
第3層　褐　色　土　10YR4/6
第4層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒ごく微量含む。周溝覆土。

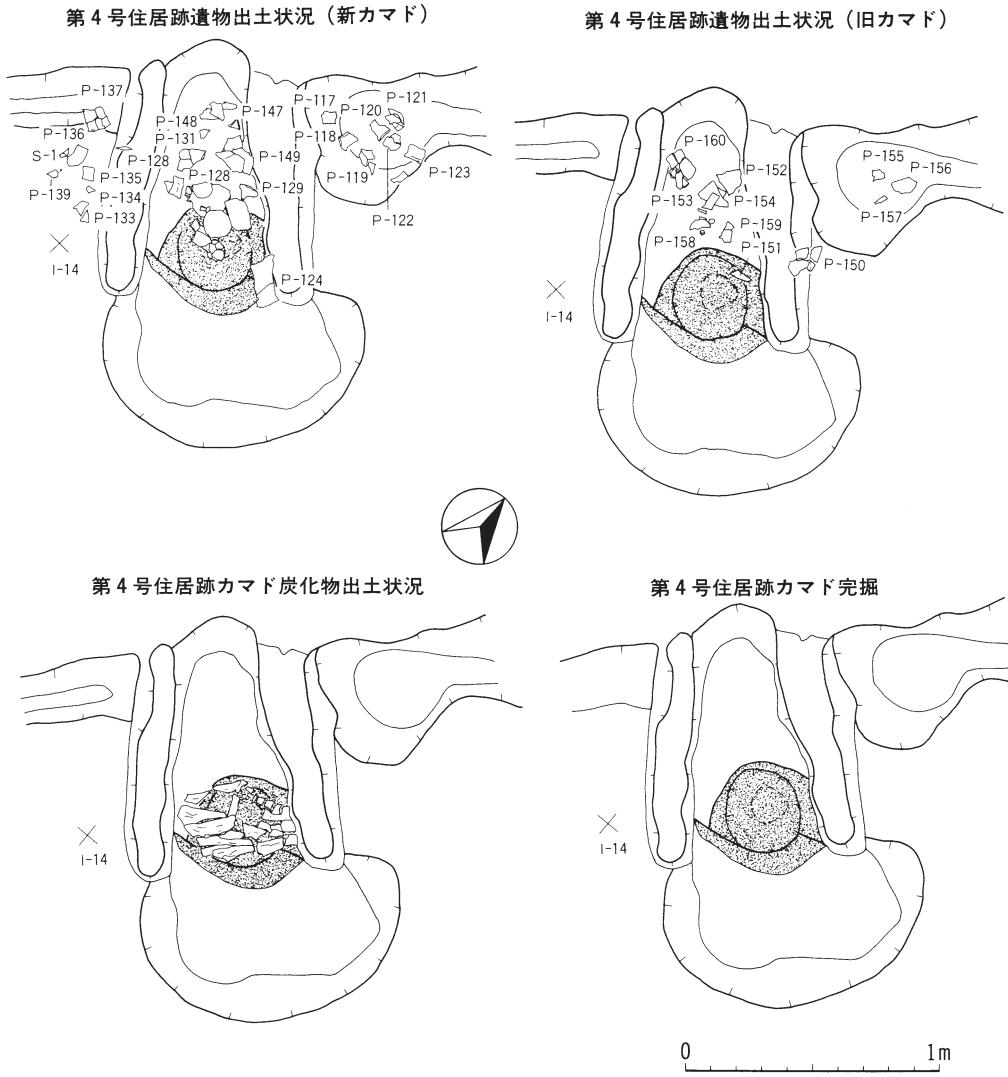
第38図　第4号住居跡（1）



第４号住居跡カマド

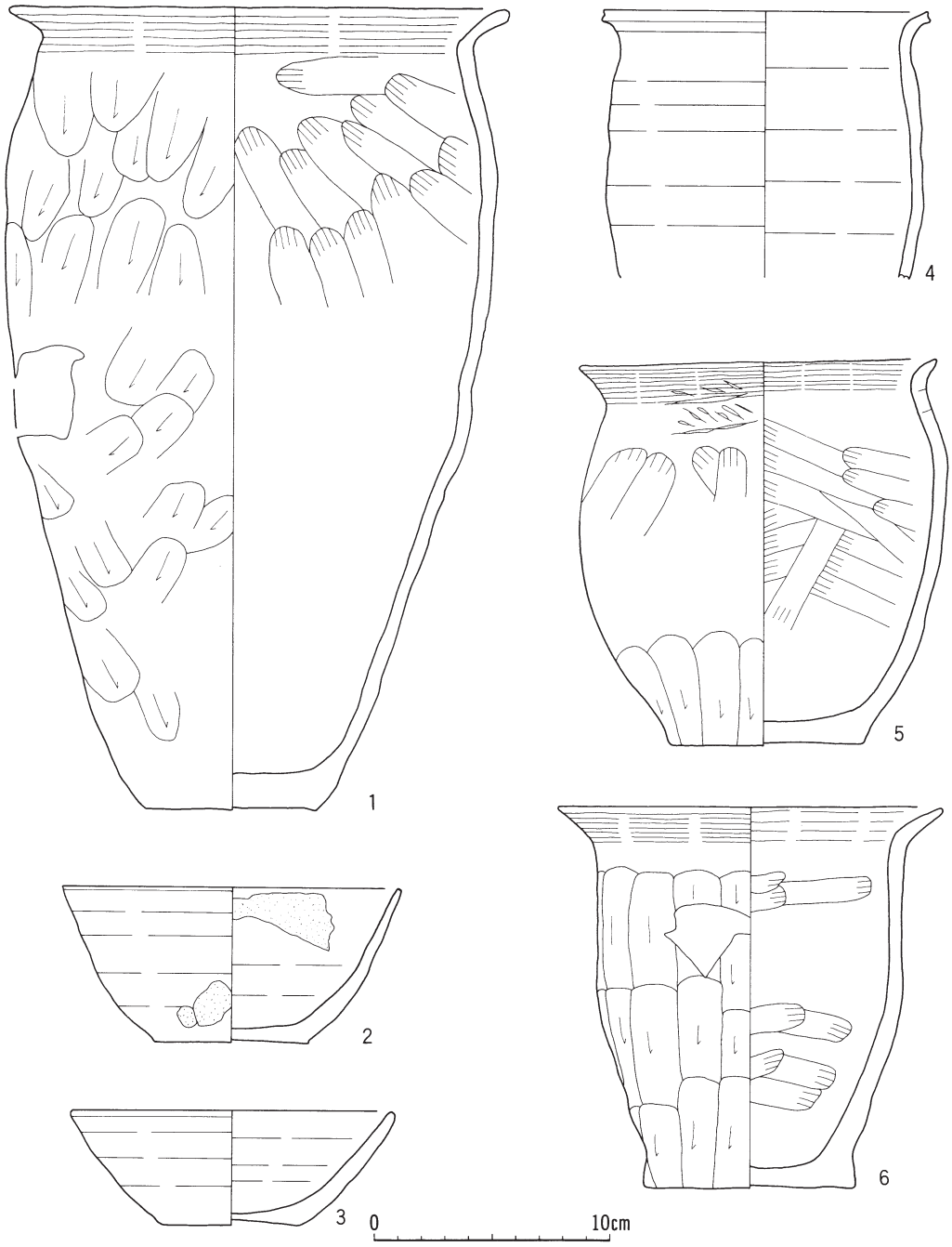
第１層	黒褐色土	10YR2/3	袖のそばに炭化物ごく微量、にぶい黄橙色(10YR6/4) ローム粒少量含む。
第２層	褐色土	7.5YR4/6	
第３層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒を帯状に多量含む。
第４層	暗褐色土	10YR3/4	
第５層	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色（10YR5/8）ローム粒微量含む。
第６層	暗褐色土	10YR3/3	袖のそばに炭化物ごく微量含む。
第７層	赤褐色土	5YR4/2	焼土。
第８層	暗褐色土	7.5YR3/4	赤褐色（5YR4/8）焼土ブロック少量、炭化物ごく微量含む。
第９層	明褐色土	7.5YR5/8	焼土。
第10層	黄褐色土	10YR5/6	
第11層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量含む。
第12層	褐色土	7.5YR4/6	
第13層	褐色土	10YR4/6	暗褐色（10YR3/4）土50％含む。
第14層	褐色土	7.5YR4/6	
第15層	明褐色土	7.5YR5/8	
第16層	褐色土	7.5YR4/4	
第17層	暗褐色土	7.5YR3/4	
第18層	極暗褐色土	7.5YR2/3	
第19層	にぶい黄褐色土	10YR5/3	にぶい黄褐色（10YR4/3）土50％含む。
第20層	暗褐色土	7.5YR3/4	明赤褐色（5YR5/8）土粒微量含む。
第21層	褐色土	7.5YR4/4	暗褐色（10YR3/4）土50％、炭ごく微量含む。
第22層	褐色土	7.5YR4/4	
第23層	暗褐色土	10YR3/4	
第24層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	暗褐色（10YR3/4）土50％含む。
第25層	黄褐色土	10YR5/8	黒褐色（10YR2/3）土少量含む。
第26層	にぶい赤褐色土	5YR4/4	赤褐色（5YR4/6）土少量含む。
第27層	極暗赤褐色土	5YR2/4	明赤褐色（5YR5/8）土50％含む。
第28層	黄褐色土	10YR5/8	褐色（10YR4/6）土少量含む。
第29層	褐色土	7.5YR4/4	

第39図　第４号住居跡（２）



第40図　第４号住居跡（３）

頃から後半の住居跡と思われる。

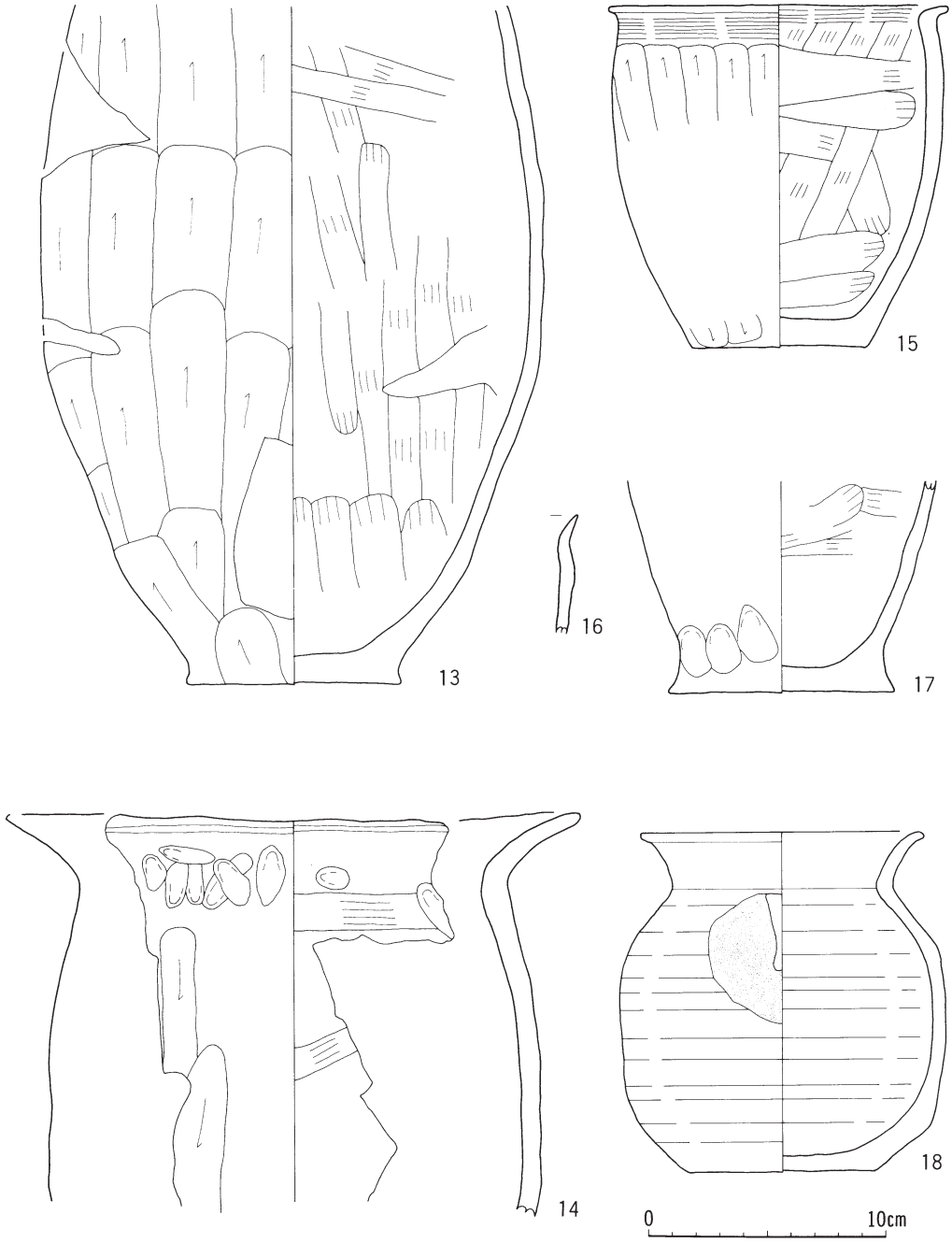


番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
1	土師器	甕	完形	床直・Pit4・カマド、9Hフク土、Pit5	21.2	7.4	33.8	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	砂底	K I	P-65・67・70・79、145、124・128・136、42・52・115・229・285、294・295・303(9H)
2	土師器	坏	略完形	床面	(14.4)	6.5	6.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-11
3	土師器	坏	完形	床直、9Hフク土1層	13.8	6.0	4.9	ロクロ	ロクロ	—	I b	P-27、20(9H)
4	土師器	小甕	体部上半	床直、5H床直・フク土、9H床直・フク土・Pit53層、16土	14.0	—	—	ロクロ	ロクロ	—		P-15・16・26(5H)、107・114・130・195(9H)
5	土師器	小甕	完形	床直・床面・Pit4・カマド、9HPit4	15.2	8.3	16.2	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	—	K II	P-64・86・89、144・146、113～116・135
6	土師器	小甕	略完形	床直・床面・周溝・Pit4、9Hフク土1層・Pit5	(16.2)	9.0	16.2	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	砂底	K II	P-27、49・64・79・83・84・88・89・127、16(9H)

第41図　第4号住居跡(4)

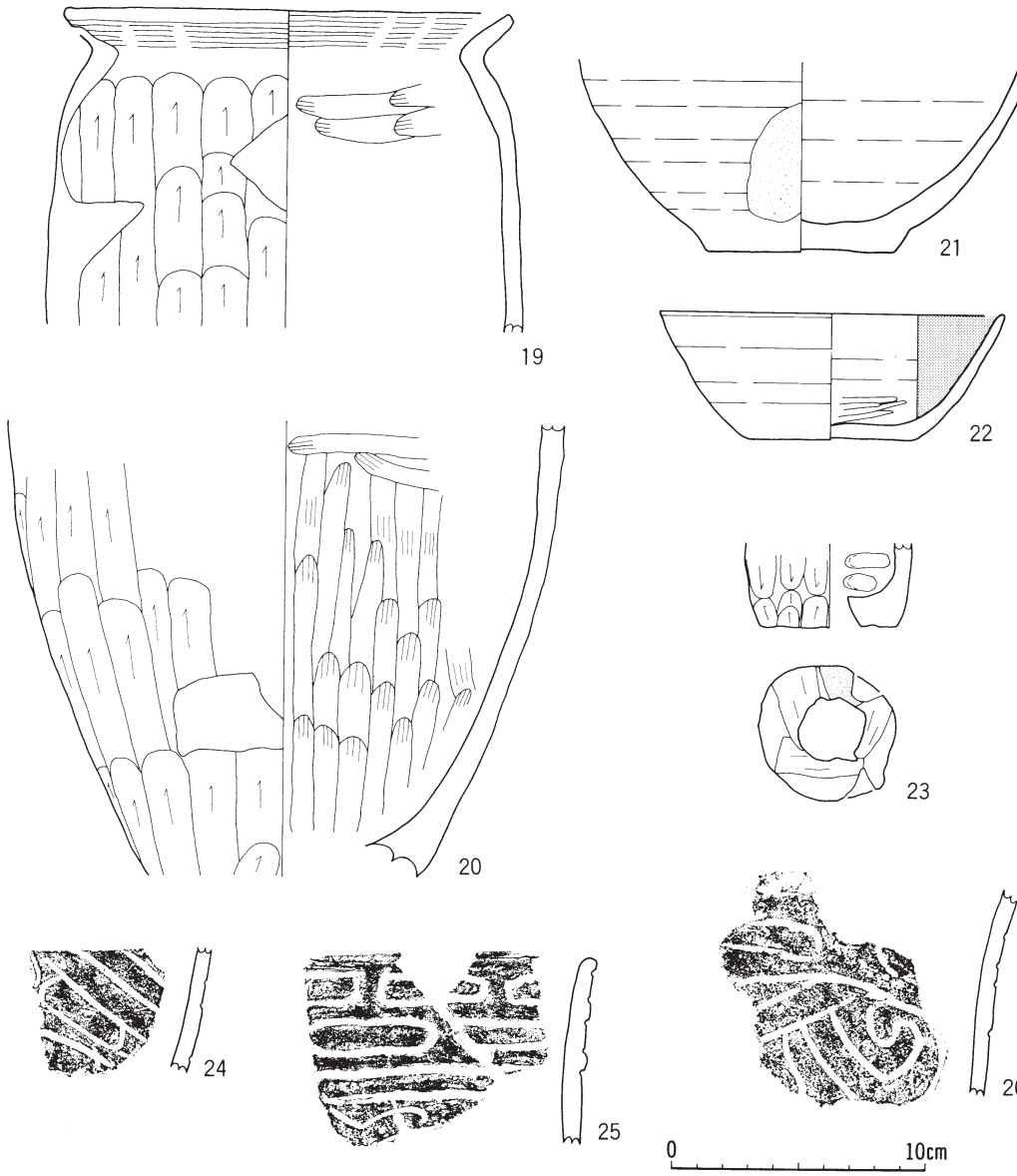
番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
7	土師器	甕	完形	床面、9HPit5・カマド・カマド脇周溝	18.0	5.2	27.3	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ナデ	砂底	K I	P-70、228・95～98・101～103・120～122
8	土師器	甕	略完形	床面・床直・5H床面、9H床直	(21.0)	7.5	(25.8)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	砂底	K I	P-76・1・5～7・14・21、16(5H)、207(9H)
9	土師器	甕	略完形	床面・カマド、9HPit5	(19.0)	(8.2)	31.8	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	輪積み痕	K I	P-70・134、149・154
10	土師器	小甕	体部下半	カマド	—	7.0	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	—		P-128、161(支脚)
11	土師器	小甕	体部上半	床直・カマド脇周溝・カマド、9Hフク土1層	(11.0)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラナデ・ナデ・ヨコナデ	—		P-63、94・102、42(9H)
12	土師器	ミニチュア土器	体部下半	床面	—	4.6	—	ヘラケズリ	ナデ	ヘラケズリ		P-85

第42図　第4号住居跡(5)



番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
13	土師器	甕	略完形	床面・床直、カマドフク土	—	9.0	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ		P-73・74・76、20・21・49・66～69、111・105～107・123・125・126・130・132・133・148(カマド)
14	土師器	甕	口縁部	床面、9Hフク土・ピット5フク土	(24.0)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-70・98・246・322・333(9H)
15	土師器	小甕	略完形	カマド脇周溝、9Hフク土	(14.2)	7.4	14.4	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-123・122(9H)
16	土師器	小甕	口縁部	床直、9Hピット5	(12.0)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-41・321・322(9H)
17	土師器	小甕	体部下半	カマド	—	9.6	—	指圧痕	ナデ	砂底		P-163(支脚)
18	土師器	壺	略完形	カマド、9Hピット5	(12.0)	8.0	14.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切		P-162(支脚)・316(9H)

第43図　第4号住居跡(6)



番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
19	土師器	甕	体部上半	Pit4・カマド	(17.8)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-141・144・115
20	土師器	甕	胴部下半	カマドフク土、9H床面・フク土	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	—		P-147・148・150・152・153・160(支脚)、132・105(ともに9H)
21	土師器	甕	体部下半	Pit3フク土	—	7.5	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切		P-90
22	土師器	坏	体部半分	Pit9フク土、9Hフク土1層	(13.6)	6.3	5.0	ロクロ	ロクロ・ヘラミガキ	回転糸切	Ⅰa	P-156・51、内面黒色処理
23	土製品	ミニチュア土器	完形	カマド	—	5.4	—	ヘラケズリ	指圧痕	ヘラケズリ		P-158(支脚)

図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
24	4H	沈線文	J—61	P—43
25	4H床面・床下・壁溝フク土	沈線文	J—58	P—33
26	4H床面	沈線文	J—59	P—56

第44図　第4号住居跡(7)

第５号住居跡（第45図・第46図）

［位置］Ｉ－14、Ｊ－13～15及びＫ－14グリッドに位置する。

［重複］第24号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

［平面形・規模］北東壁４ｍ８㎝・南東壁４ｍ10㎝・南西壁４ｍ11㎝・北西壁４ｍ58㎝の台形を呈する。主軸方位はＳ－21°±α－Ｅと推定される。床面積は18.05㎡である。

［壁・床面］北東壁は上部が削平されたものと思われ、壁高は１㎝前後しかない。その他の壁は急な立ち上がりを呈し、壁高は南東壁４～10㎝・南西壁２～５㎝・北西壁６㎝前後である。床面は地形を反映してわずかに東へ傾斜しており、凹凸が見られる。また、カマドがある側の南半分ほどが硬い。

［壁溝］各壁の直下に検出し、ほぼ全周する。幅10～30㎝前後、深さ５～33㎝前後である。

［柱穴・ピット］床面より４個、壁溝より３個、柱穴状のピットを検出した。主柱穴は不明である。主なピットの深さは次の通りである。

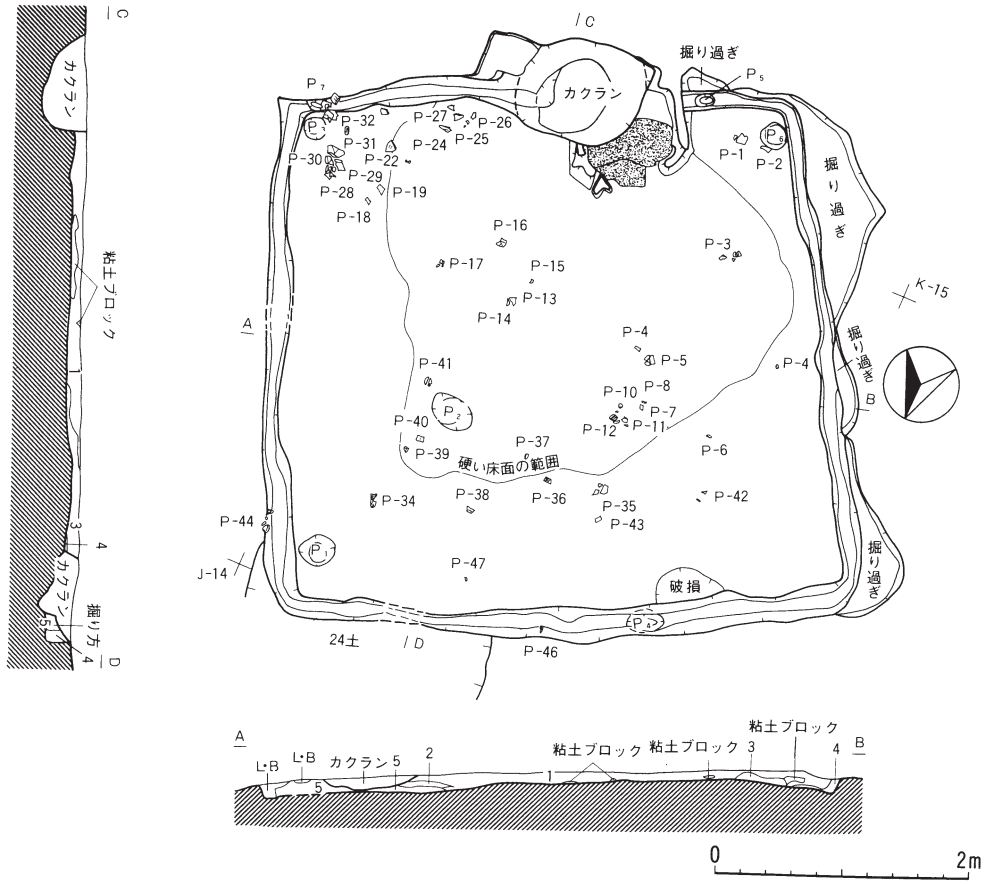
P_1…31㎝・P_2…38㎝・P_3…19㎝・P_4…35㎝・P_5…31㎝・P_6…14㎝・P_7…30㎝

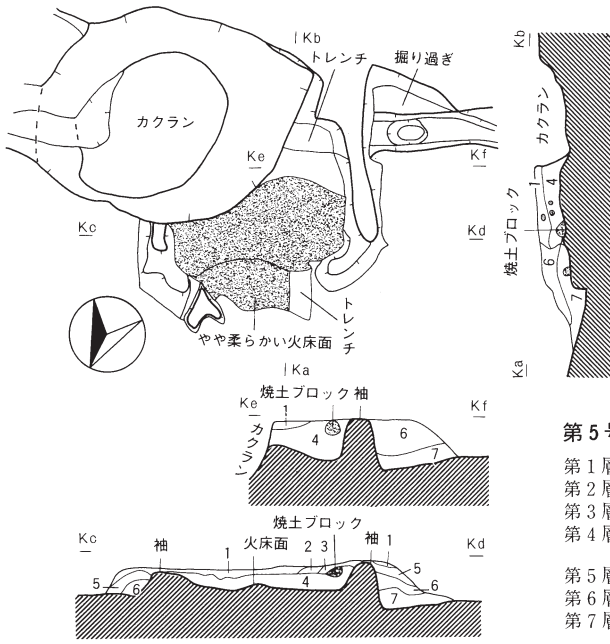
［カマド］南東壁の西寄りに位置し、東側は抜根により攪乱を受けている。火床面は床面より若干高い。袖は粘土で構築され、芯材は使用されていない。なお、煙道部は検出されなかった。

［堆積土］５層に区分できた。ローム粒・ローム塊を含む暗褐色土で大方占められ、人為堆積の様相を呈する。

［出土遺物］床面・床面直上から、土師器坏のほぼ完形品が５点、覆土から、大石平型石篦が１点出土している。破片では、土師器甕等５点、坏７点、須恵器甕等１点が出土した。また、確認面、覆土、床面直上、床下から、縄文時代後期十腰内式土器がデスクトレーに１箱分出土している。遺物は、中央部の硬い床面付近と東隅から多く出土している。

［時期］出土遺物から、９世紀後半の住居跡と思われる。





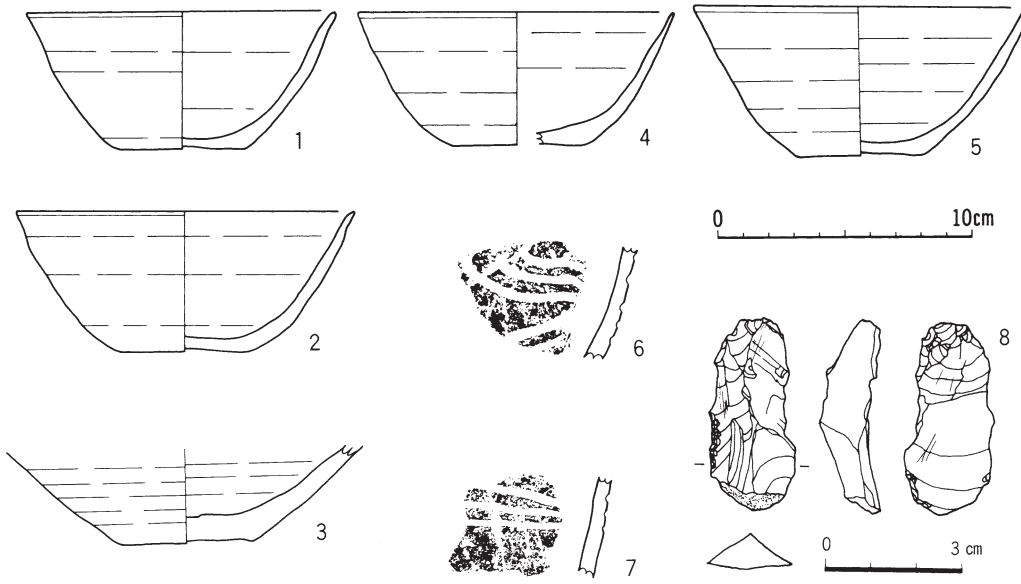
第5号住居跡

第1層　暗褐色土　10YR3/4
　炭化物微量、LB、粘土粒含む。
第2層　褐　色　土　10YR4/4
　焼土粒微量含む。ローム質。
第3層　暗褐色土　10YR3/3
　ローム粒少量含む。
第4層　黒褐色土　10YR2/3
　ローム粒少量含む。
第5層　黒褐色土　10YR2/2
　焼土粒微量含む。

第5号住居跡カマド

第1層	暗褐色土	10YR3/3	
第2層	褐　色　土	10YR4/6	ローム。
第3層	暗褐色土	10YR3/4	
第4層	黒褐色土	10YR2/3	焼土粒30%含む。
第5層	褐　色　土	10YR4/4	
第6層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム。
第7層	暗褐色土	10YR3/4	

第45図　第5号住居跡(1)



番号	種類	器種	部　位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備　　考
					口径	底径	器高					
1	土師器	坏	完形	床直・床面	12.2	5.0	5.3	ロクロ	ロクロ	—	Ⅰb	P-32・31・51
2	土師器	坏	完形	床直・床面	13.3	5.2	5.5	ロクロ	ロクロ	—	Ⅰb	P-32・33・22
3	土師器	坏	体部半分	床面	—	5.3	—	ロクロ	ロクロ	—	Ⅰb	P-3
4	土師器	坏	略完形	床直・床面	12.4	5.2	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Ⅰb	P-5・6・35・36・11
5	土師器	坏	完形	床直・床面	13.3	5.0	5.8	ロクロ	ロクロ	—	Ⅰb	P-32・4・22～24・26・28・30

図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　　考
6	床下	沈線文	J —62	
7	床面	沈線文	J —63	

図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　　考
8	大石平型石箆	フク土	42	19	10	6.7	珪質頁岩	2	

第46図　第５号住居跡（２）

第７号住居跡（第47図・第48図）

［位置］　Ｋ２－９・30グリッドに位置する。

［重複］　第２号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。

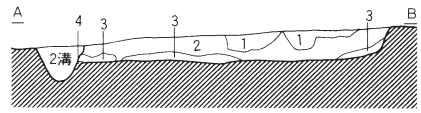
［平面形・規模］北東壁２ｍ82cm・南東壁２ｍ61cm・南西壁２ｍ88cm・北西壁２ｍ55cmのほぼ方形を呈する。主軸方位はＳ－44°－Ｅ、床面積は7.30㎡である。

［壁・床面］　各壁とも急な立ち上がりを呈し、壁高は北東壁８～15cm、南東壁13～19cm、南西壁19～23cm、北西壁17～20cmである。床面は地形を反映して第２号溝跡側の方が若干低く、ほぼ平坦である。

［壁溝］検出されなかった。

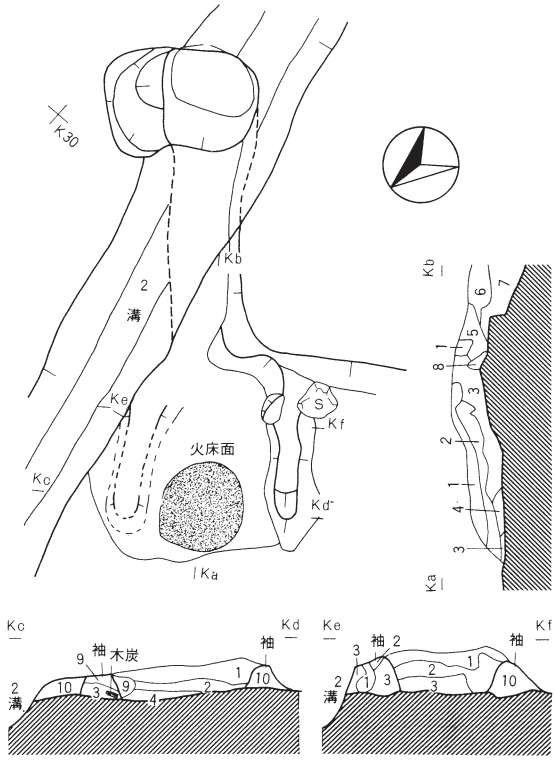
［柱穴・ピット］柱穴状のピットは２個検出した。どちらも主柱穴と考えられる。両ピットの深さは以下の通りである。

P_1…10cm・P_2…８cm



第７号住居跡

第１層　黒　色　土　10YR2/1
第２層　黒 褐 色 土　10YR2/2
　LB多量含む。
第３層　黒　色　土　10YR2/1
　LB少量、炭化物少量含む。
第４層　明黄褐色土　10YR7/6
　ローム。暗褐色土少量含む。

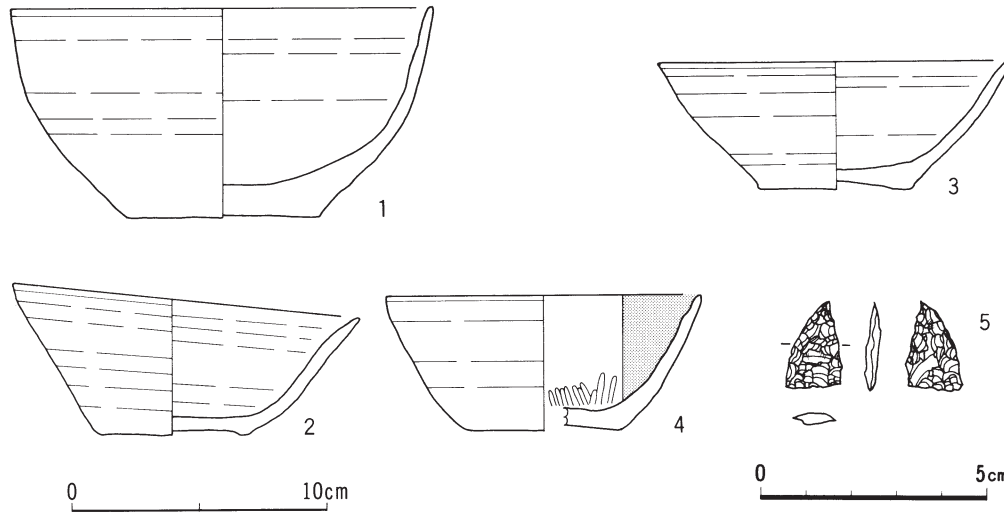


第７号住居跡カマド

第１層　黒 褐 色 土　10YR2/2
第２層　にぶい黄褐色土　10YR4/3
　焼土粒少量、ローム粒少量含む。
第３層　明赤褐色土　5 YR5/6
　焼土。木炭少量含む。
第４層　黒　色　土　N1.5/0
　木炭多量、焼土少量含む。
第５層　黒 褐 色 土　10YR2/3
　焼土粒・ローム粒少量。
第６層　黒 褐 色 土　10YR2/2
　ローム粒少量含む。
第７層　明黄褐色土　10YR7/6
　ローム。
第８層　黒 褐 色 土　10YR2/2
第９層　にぶい黄橙色土　10YR7/4
　木炭微量、焼土粒少量、ローム多量含む。
第10層　黒 褐 色 土　10YR3/2
　LB多量含む。

0　1m

第47図　第７号住居跡（１）



番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
1	土師器	鉢	完形	床面・床直	16.5	7.6	8.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切		P-19・20・21・22・23
2	土師器	坏	完形	床直、2Hカマド	13.8	6.0	5.3	ロクロ	ロクロ	—	Ⅰb	P-14(2H)、底面剝離
3	土師器	坏	体部半分	床直	(14.0)	6.0	5.0	ロクロ	ロクロ	—	Ⅰb	P-9
4	土師器	坏	体部半分	床面	(12.4)	(5.8)	5.3	ロクロ	ヘラミガキ	回転糸切	Ⅰa	P-26・28、内黒処理

図番号	器種	出土地・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	整理番号	備考
5	石鏃	住居床直	19	12	3	0.4	珪質頁岩	14	平基無茎

第48図　第７号住居跡（２）

［カマド］南東壁中央に位置し、火床面は両袖の中央とみられる部分から、直径35cmのほぼ円形状に検出された。袖はロームブロックをつき固めて構築し、右袖と南東壁の付け根には、長径15cmの礫が崩れないように施工されていた。左袖は木炭・焼土粒を微量～少量含んでいたため、掘り過ぎて確認が遅れた。煙道部・煙出し孔は、南東壁から125cmほど突き出ており、地山を掘り込んでいる。煙出し孔は煙道部より緩やかに低く続き、フラスコ状ピットの様相を呈する。

［堆積土］４層に区分できた。大半はロームブロックを多量に含む黒褐色土である。

［出土遺物］床面・床面直上から土師器の坏３点・鉢１点、床面直上から平基無茎の石鏃１点が出土した。破片では、土師器の甕等18点、坏５点及び鉄器片１点が出土した。遺物は、ピット１・２の周辺から多く出土している。なお、長径10～20cmの自然の円礫が数点、北側床面から出土した。

［時期］出土遺物から、９世紀後半の住居跡と思われる。

第８号住居跡（第49図～第51図）

［位置］Ｋ－30、Ｌ－30・31グリッドに位置する。

［重複］なし。

［平面形・規模］北壁３ｍ66cm・西壁３ｍ40cmであるが、東壁・南壁東端は検出できず、規模は不明である。北壁・西壁を基に推定すると、東壁３ｍ７cm・南壁３ｍ80cmで、ほぼ台形を呈するものと思われる。主軸方位は、カマド袖残存部と火床面をもとに、Ｓ－55°±α－Ｅ、床面積は12.82㎡と推定される。

［壁・床面］東壁は削平されているため不明であるが、他の３つの壁は各壁とも急な立ち上がりを呈し、壁高は南壁４cm前後、西壁８～13cm、北壁６～９cmである。床面はほぼ平坦であるが、地形を反映して東側の方が若干低い。

［壁溝］検出されなかった。

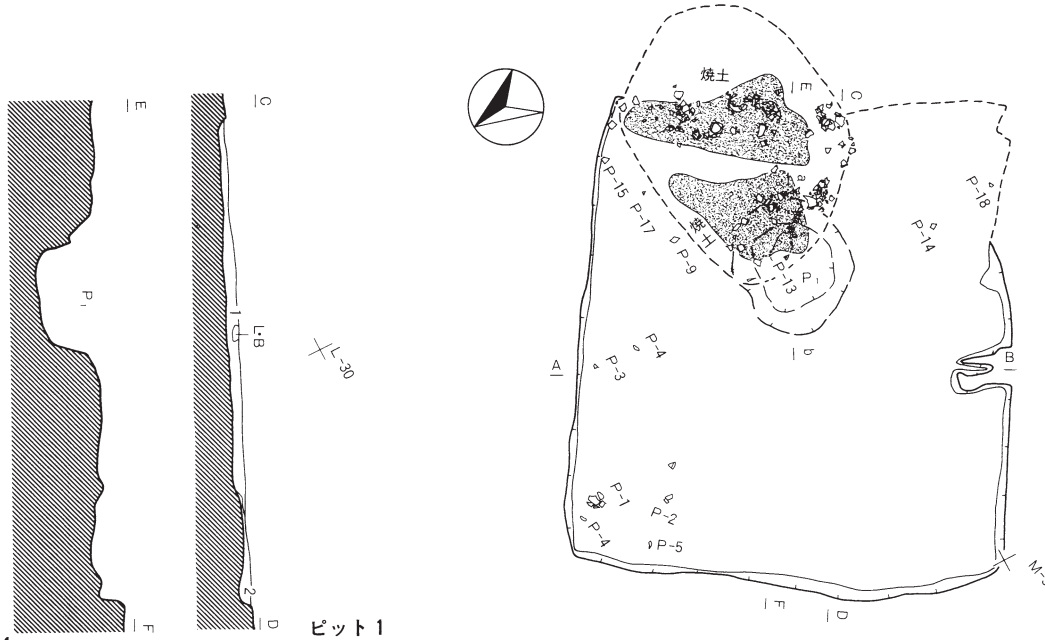
［柱穴・ピット］カマド付近の床下から土坑状のピットを１個検出した。短軸85cm・長軸106cm・深さ48cmである。大半をローム粒や炭化物を含んだ黒色～暗褐色土で覆われており、自然堆積の様相を呈している。規模・位置及び覆土等から貯蔵穴と考えられる。

［カマド］削平された東壁の北寄りに位置し、遺存状態は悪い。火床面は両袖の中央と見られる部分から、直径65cmのほぼ円形状に検出された。なお、火床面以外にも焼土が、ピット１東付近及び東壁北半分付近より検出された。どちらもカマド周辺である。袖はローム質のにぶい黄褐色土で構築され、火床面後方からは土師器小甕２点が支脚として出土している。煙道部他は削平等により検出されなかった。

［堆積土］３層に区分できた。全層とも黒色土で、ローム粒を微量～少量含む。

［出土遺物］床面・床面直上から、土師器の甕５点、小甕・壺・高台付皿(内黒)各１点及び須恵器の大甕片１点が出土した。また、カマド付近からは、支脚の小甕２点がほぼ完形品として出土した。破片では、土師器甕等がデスクトレーで２分の１箱、同坏12点、須恵器甕１点、同大甕１点が出土した。カマド周辺から多数出土している。なお、高台付皿片数点は北壁西端付近の床面直上から出土している。

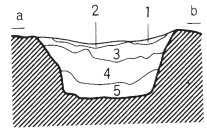
［時期］出土遺物から、９世紀後半の住居跡と思われる。



ピット1

第1層　黒　色　土　10YR2/1
炭化物微量、ローム粒微量含む。
第2層　黒褐色土　10YR3/1
炭化物微量、10㎜程度のローム粒70％含む。
第3層　暗褐色土　10YR3/3
ローム質。
第4層　黒　色　土　10YR2/1
炭化物微量、30㎜程度のＬＢ10％含む。
第5層　黄褐色土　10YR5/6
ローム質。

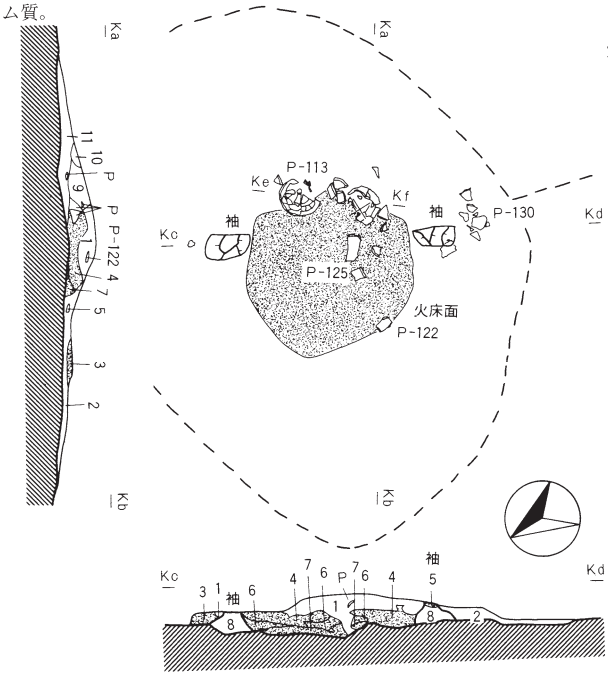
ピット1



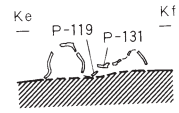
第8号住居跡

第1層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒少量含む。
第2層　黒　色　土　10YR1.7/1　ローム粒微量含む。
第3層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒20％含む。

0　2m



カマド支脚エベレーション

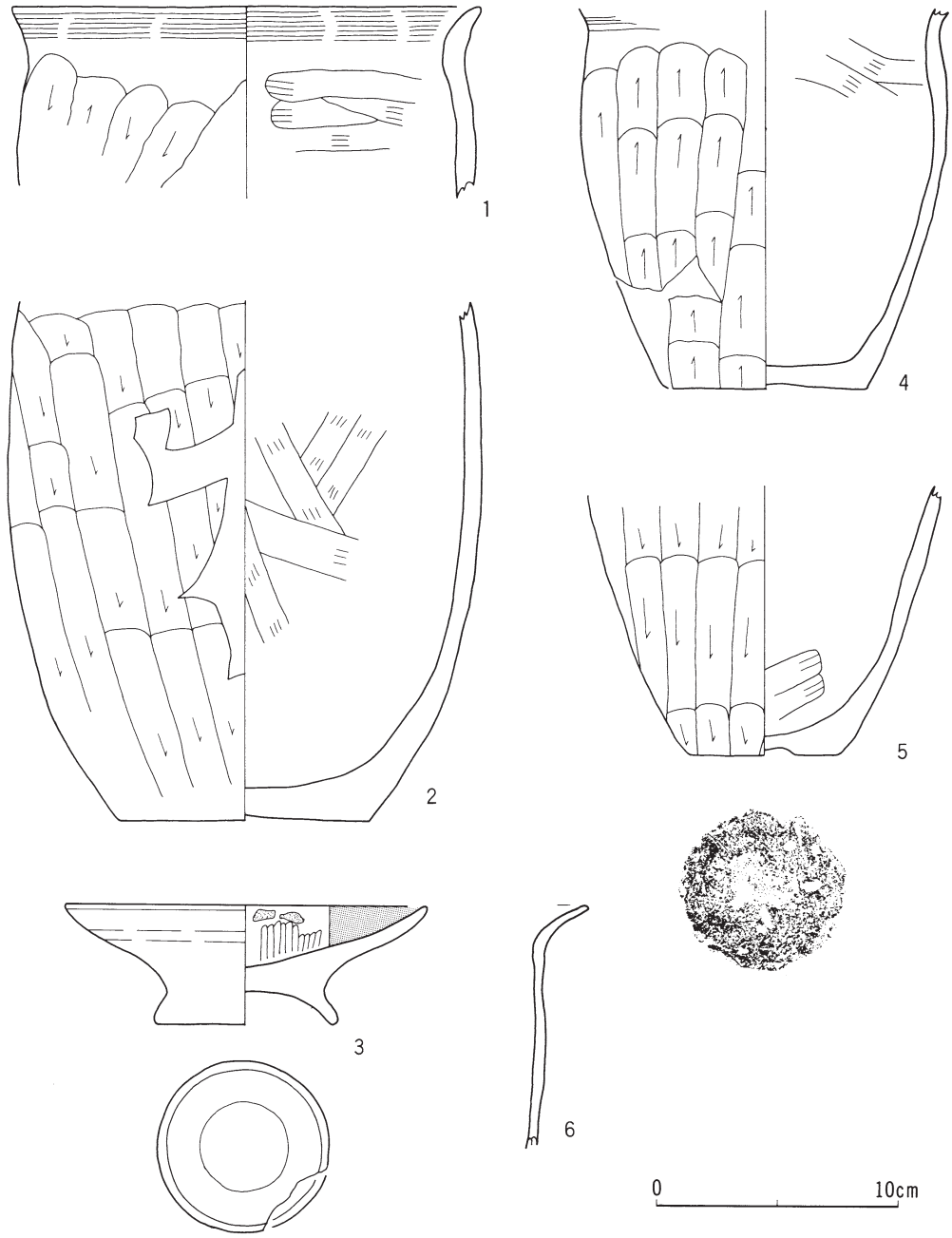


第8号住居跡カマド

第1層　黒　色　土　10YR2/1
炭化物微量、ローム粒微量、焼土微量含む。
第2層　暗褐色土　10YR3/3
ローム粒少量、焼土微量含む。
第3層　黄橙色土　7.5YR7/8
焼土。ローム粒微量含む。
第4層　明褐色土　7.5YR5/8　焼土。
第5層　橙　色　土　7.5YR6/8　焼土。
第6層　暗褐色土　7.5YR3/4　焼土。
第7層　明赤褐色土　5YR5/8　焼土。
第8層　にぶい黄褐色土　10YR5/4
ローム質。
第9層　黒褐色土　10YR2/3
ローム粒微量含む。
第10層　明黄褐色土　10YR7/6
ローム質。
第11層　黒　色　土　10YR2/1
炭化物微量、ローム粒微量含む。

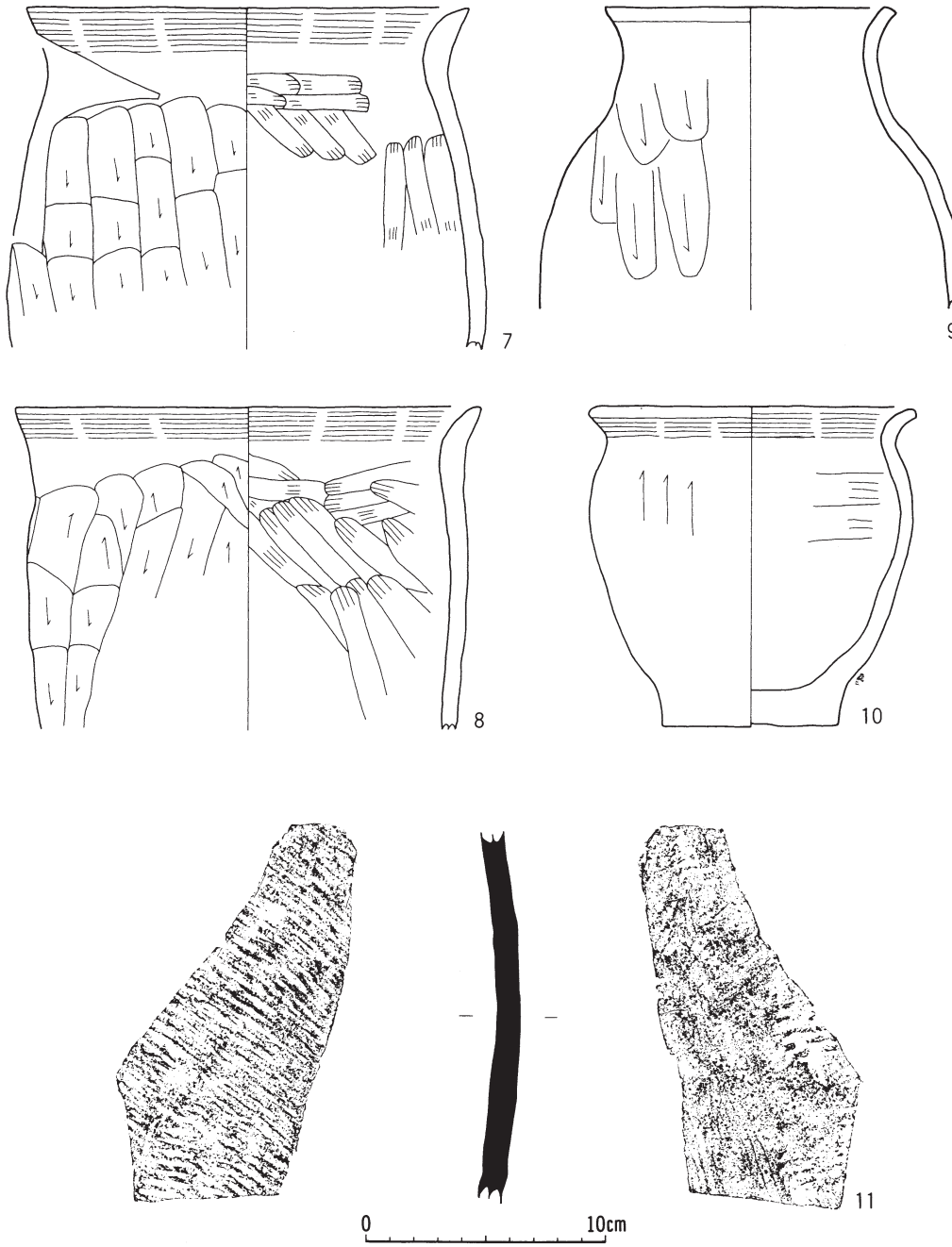
0　1m

第49図　第8号住居跡（1）



番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
1	土師器	甕	口縁部	床直、1M(J-32)	(19.4)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-6
2	土師器	甕	体部下半	床直、10H外周溝	—	10.4	—	ヘラケズリ	ナデ	砂底		P-20・22・41・69・84・107、108(10H)
3	土師器	高台付皿	完形	床直	15.0	7.2	5.0	ロクロ	ヘラミガキ	—		P-1・2 内黒処理、二次加熱
4	土師器	小甕	体部下半	床直・カマド、L-30	—	8.4	—	ヘラケズリ	ナデ	砂底		P-35・119・121・124(支脚)・132・133
5	土師器	小甕	体部下半	床直、10H外周溝	—	6.2	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	—		P-44、92(10H)
6	土師器	甕	口縁部	床直・カマド支脚	(25.4)	—	—	ヨコナデ	ヘラナデ・ヨコナデ	—		P-52・53・64・124

第50図　第8号住居跡(2)



番号	種類	器種	部　位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備　　考
					口径	底径	器高					
7	土師器	甕	口縁部	床直、10H外周溝、L-31Ⅲ層	(18.3)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-31～33・38・58
8	土師器	甕	口縁部	床直・カマド	(19.4)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-49・72・125・128・129
9	土師器	壺	体部上半	床面・確認面、L-31Ⅲ層	(12.2)	—	—	ヘラケズリ	—	—		P-14
10	土師器	小甕	完形	床直・カマド	13.8	7.5	13.4	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—	KⅢ	P-48・111・113～116・118(支脚)
11	須恵器	大甕	—	床面	—	—	—	平行叩き目	ヘラナデ・当て具痕	—		P-82、胎土分析番号2(産地不明)

第51図　第8号住居跡(3)

第９号住居跡（第52図～第57図）

［位置］Ｇ・Ｈ－16・17グリッドに位置する。

［重複］なし。

［平面形・規模］北東壁３ｍ62cm・南東壁３ｍ（ピット４を含むと４ｍ20cm）・南西壁２ｍ77cm（ピット４を含むと４ｍ23cm）・北西壁３ｍ68cmの隅丸方形を呈する。主軸方位はＳ－44°－Ｅ、床面積は14.17㎡である。

［壁・床面］各壁とも急な立ち上がりを呈し、壁高は北東壁17～24cm、南東壁12～17cm、南西壁26～29cm、北西壁28cm前後である。床面には若干の凹凸が見られる。

［壁溝］検出されなかった。

［柱穴・ピット］柱穴状のピットを２個、土坑状のピットを３個（後述）検出した。ピット２はその位置からカマドに関係するものと考えられる。主柱穴は不明である。各ピットの深さは以下の通りである。

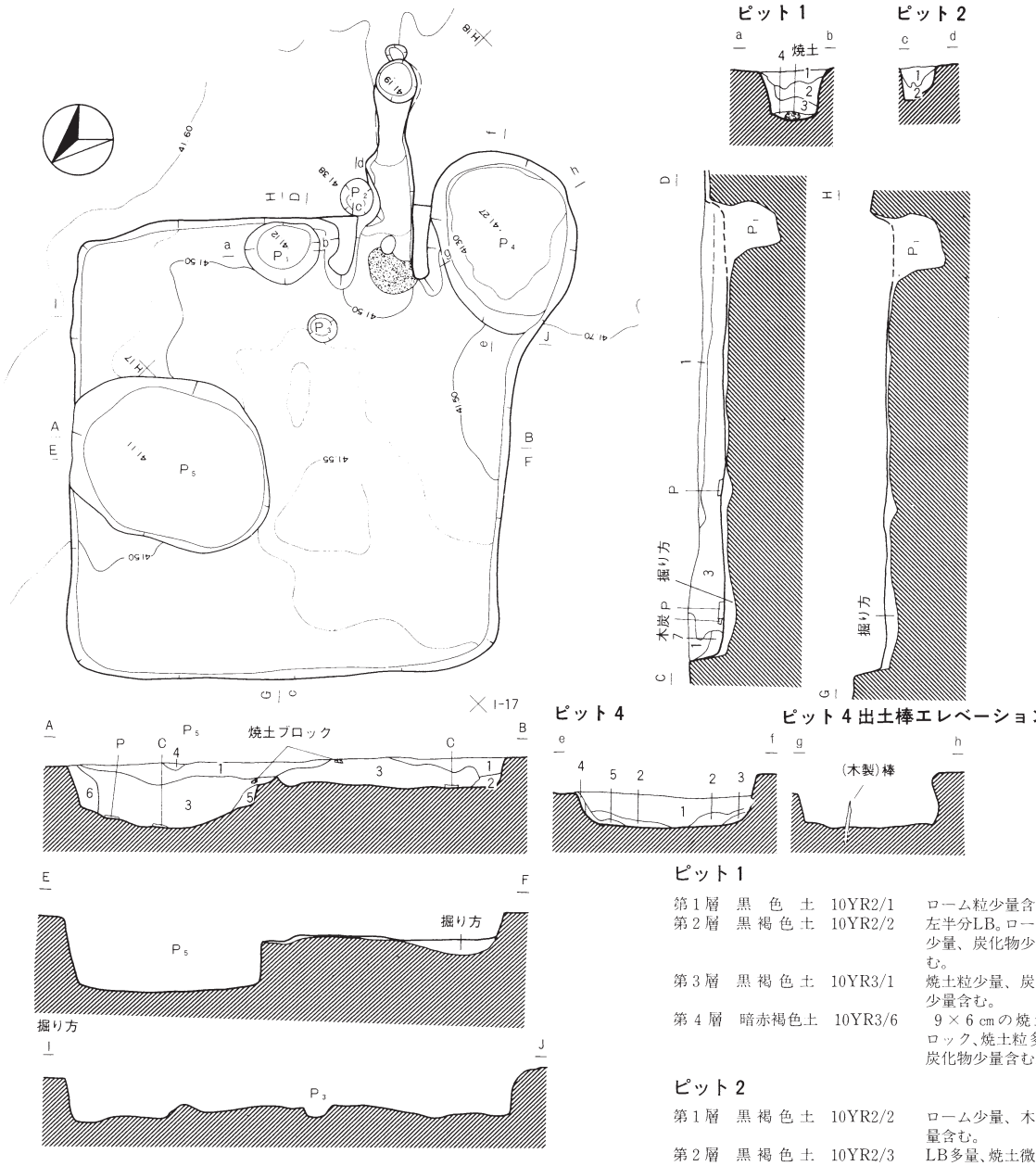
P_1…39cm・P_2…22cm・P_3…23cm・P_4…32cm・P_5…46cm

［カマド］南東壁の西寄りに位置し、火床面は右袖寄りに、30cm×46cmの不整円形状に検出された。火床面の後方の両袖中央からは、土師器小甕の完形品が１点支脚として出土した。袖は、ロームを多量に含むにぶい黄褐色～灰黄褐色土で構築されている。煙道部は南東壁より90cm外側へ突き出て、地山を掘り込んで構築している。煙出し孔は煙道部より緩やかに低く続き、底部が平坦なピット状を呈する。

［その他の施設］カマド左袖付近の床面から、短軸52cm・長軸64cm・深さ39cmの土坑（ピット１）を検出した。土師器甕片や炭化物等を含むことから貯蔵穴と考えられる。また、カマド右袖付近からは、短軸118cm・長軸155cm・深さ32cmの土坑（ピット４）を検出した。全体の約４分の３は、南東壁・南西壁より外方へ張り出している。覆土の主体はローム粒を40％ほど含む軟らかい黒褐色土である。さらに、北東壁ほぼ中央から床面中央にかけて、短軸140cm・長軸180cm・深さ46cmの須恵器大甕を埋設した土坑（ピット５）を検出した。

［堆積土］７層に区分できた。ローム粒を微量～多量、焼土塊を微量～少量含む黒褐色土が主体である。１層上部に小規模ながらＢ－Ｔｍと思われる火山灰が認められた。なお、第３層・第５層・第６層はピット５覆土である。

［出土遺物］床面・床面直上から若干の土師器・須恵器が出土した。土師器には坏・甕・小甕・皿、須恵器は長頸壺及び大甕片である。この他、ピット１から環状鉄製品、ピット５から須恵器大甕、覆土から土師器壺及び磨製石斧片が、各１点出土した。また、カマド燃焼部からは、土師器の小甕１点が完形品で出土した。破片では、土師器の甕等がデスクトレーで1.5箱、同坏がデスクトレーで４分の１箱、須恵器の甕等が10点、同大甕が８点出土している。



第9号住居跡

第1層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒微量、焼土塊微量含む。
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量、焼土塊、焼土粒、炭化物を含む。
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量、ローム塊多量、炭化物少量、焼土粒少量含む。
第4層	褐色土	10YR4/4	B－Tm多量含む。
第5層	黄褐色土	10YR5/4	粘土。
第6層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量、焼土粒少量、炭化物微量含む。
第7層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量、焼土粒微量含む。

ピット1

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒少量含む。
第2層	黒褐色土	10YR2/2	左半分LB。ローム粒少量、炭化物少量含む。
第3層	黒褐色土	10YR3/1	焼土粒少量、炭化物少量含む。
第4層	暗赤褐色土	10YR3/6	9×6㎝の焼土ブロック、焼土粒多量、炭化物少量含む。

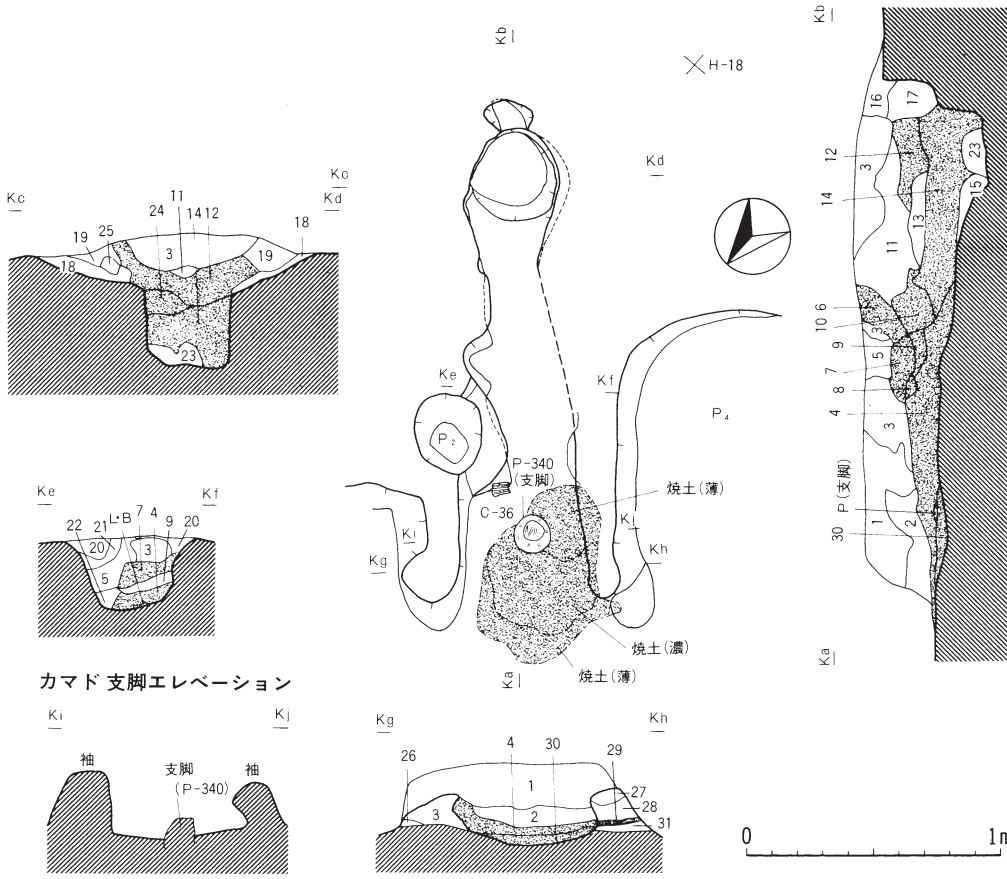
ピット2

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム少量、木炭微量含む。
第2層	黒褐色土	10YR2/3	LB多量、焼土微量含む。

ピット4

第1層	黒褐色土	10YR2/2	2㎝程度のLB少量、ローム粒40%、焼土粒少量含む。
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量含む。
第3層	黄褐色土	10YR5/6	全体がLB。
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒60%、焼土粒微量含む。
第5層	灰白色土	10YR8/1	粘土。黒褐色土少量、焼土少量含む。

第52図　第9号住居跡(1)

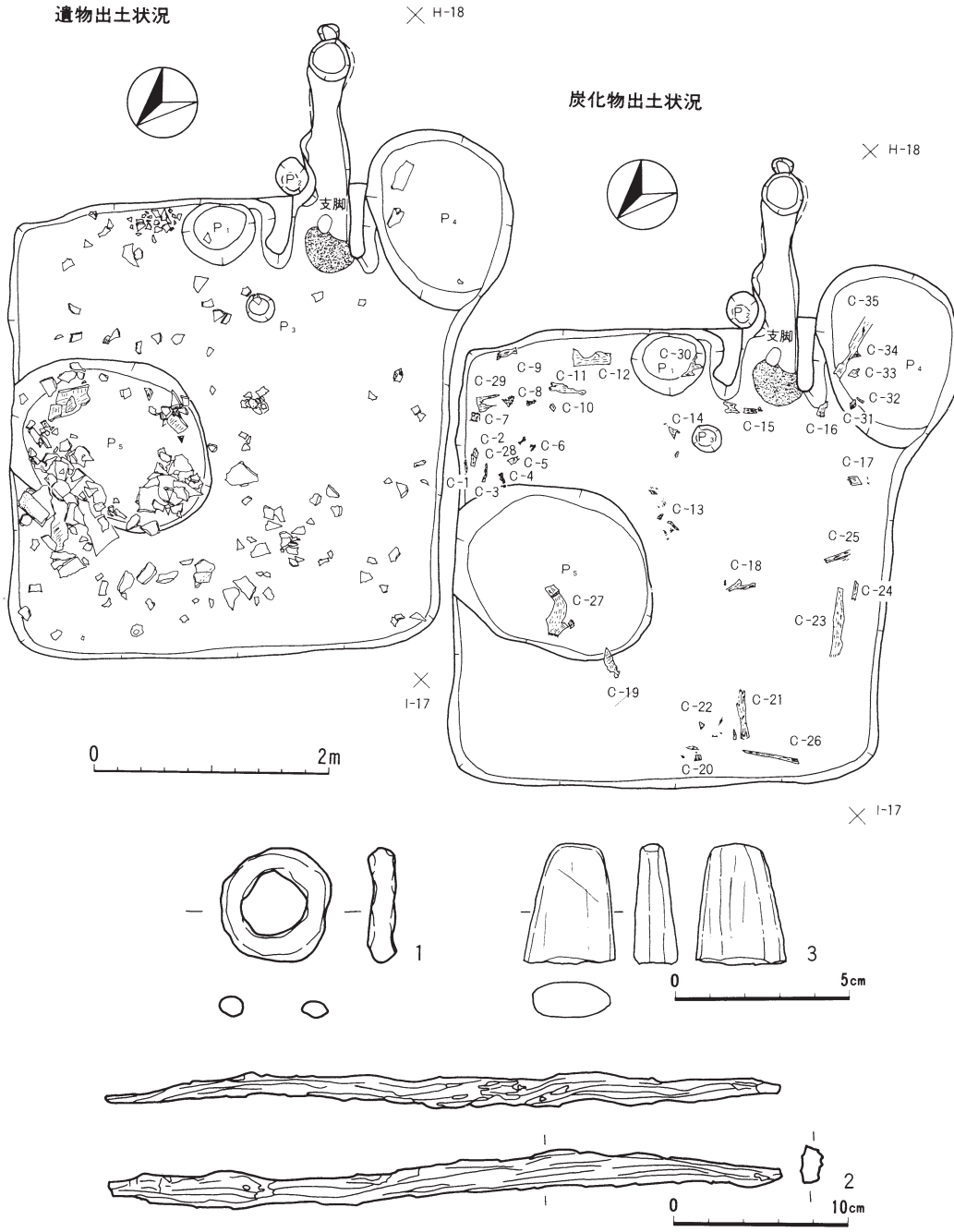


第９号住居跡カマド

第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム少量、焼土少量、木炭微量含む。
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム多量、焼土少量、木炭微量含む。
第３層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ローム多量、焼土少量含む。
第４層	にぶい赤褐色土	5YR4/4	焼土。木炭少量、ローム少量含む。
第５層	黒褐色土	10YR2/2	焼土少量含む。
第６層	明赤褐色土	5YR5/8	焼土。暗褐色土少量含む。
第７層	暗赤褐色土	5YR3/4	焼土。暗褐色土少量含む。
第８層	褐色土	10YR4/4	
第９層	黒褐色土	10YR2/2	焼土少量含む。
第10層	褐色土	10YR4/4	焼土多量、木炭微量含む。
第11層	暗褐色土	10YR3/3	ローム多量、焼土少量含む。
第12層	暗褐色土	10YR3/3	ローム少量、焼土多量、木炭微量含む。
第13層	赤黒色土	2.5YR2/1	焼土少量含む。
第14層	黒褐色土	5YR2/2	焼土多量、ローム少量、木炭微量含む。
第15層	黒色土	10YR2/1	
第16層	黒褐色土	10YR2/2	
第17層	黒褐色土	10YR2/3	
第18層	黄褐色土	10YR5/8	ローム。
第19層	暗褐色土	10YR3/3	
第20層	黒褐色土	10YR2/3	ローム少量、焼土微量含む。
第21層	暗褐色土	10YR3/3	ローム多量、焼土少量含む。
第22層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム少量、焼土少量含む。
第23層	黄橙色土	10YR7/8	LB多量、褐色土少量、炭化物少量含む。
第24層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム少量、焼土多量、木炭微量含む。
第25層	浅黄橙色土	10YR8/4	LB。
第26層	黒色土	10YR2/1	焼土少量含む。
第27層	灰黄褐色土	10YR4/2	焼土微量、ローム多量含む。
第28層	黒褐色土	10YR2/2	ローム少量、焼土少量、炭含む。
第29層	褐色土	7.5YR4/4	焼土多量、ローム少量含む。
第30層	明褐色土	7.5YR5/8	焼土多量含む。
第31層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	炭含む。
第32層	黒色土	10YR1.7/1	LB多量含む。

第53図　第９号住居跡（２）

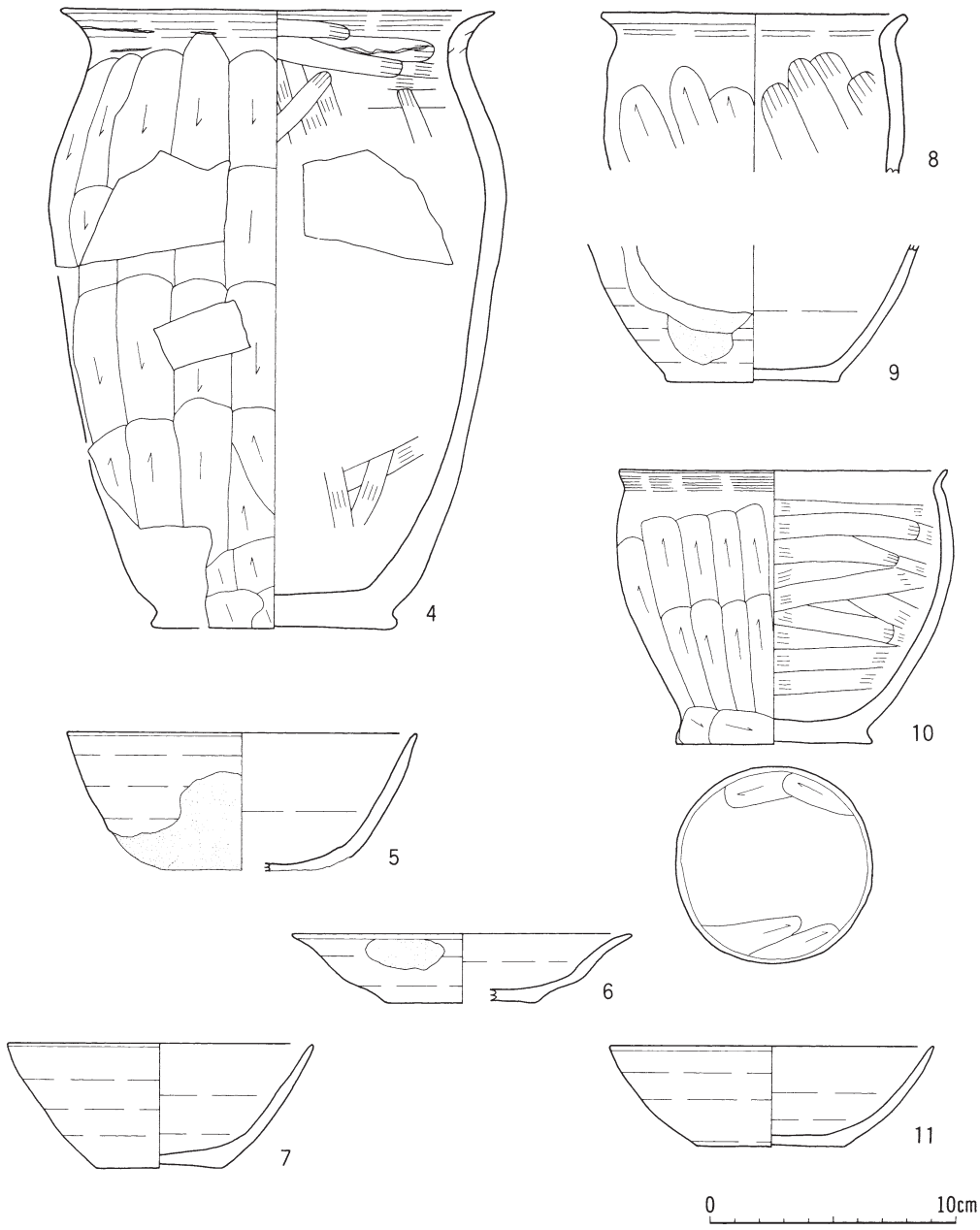
また、カマド右のピット４からは、木の棒（木製品）が１点出土した。さらに、炭化材が床面・床面直上全体から多量に出土した。大甕は、ピット１周辺、ピット５及び同ピット北北西側か



番号	出土位置	最大計測値				種類	備考
		長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
1	Pit1フク土	34	34	7	5	環状鉄製品	
2	Pit4	386	21	—	35	(木製)棒	

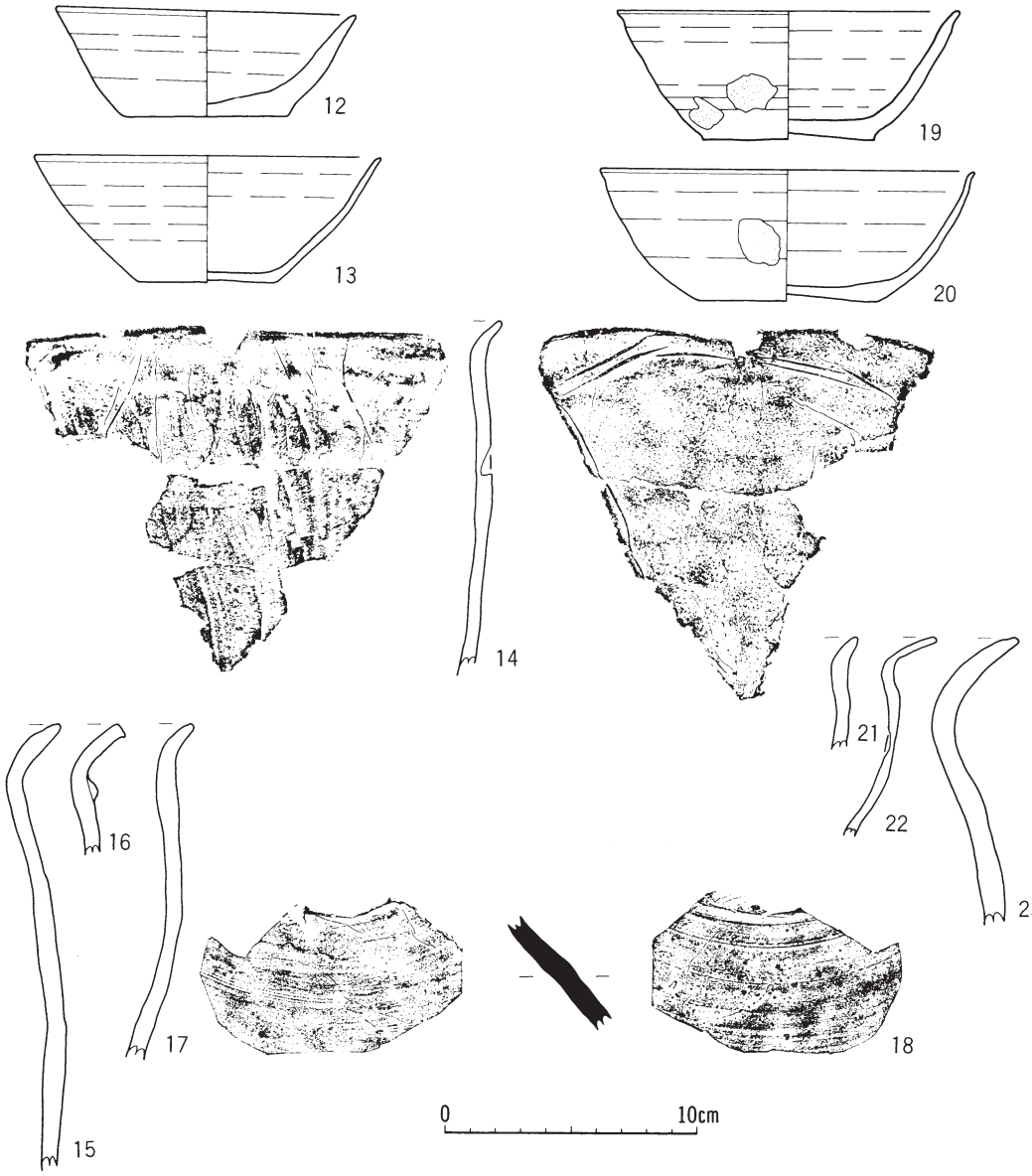
図番号	器種	出土地・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	整理番号	備考
3	磨製石斧	フク土	35	26	12	18.4	頁岩	211	

第54図　第9号住居跡(3)



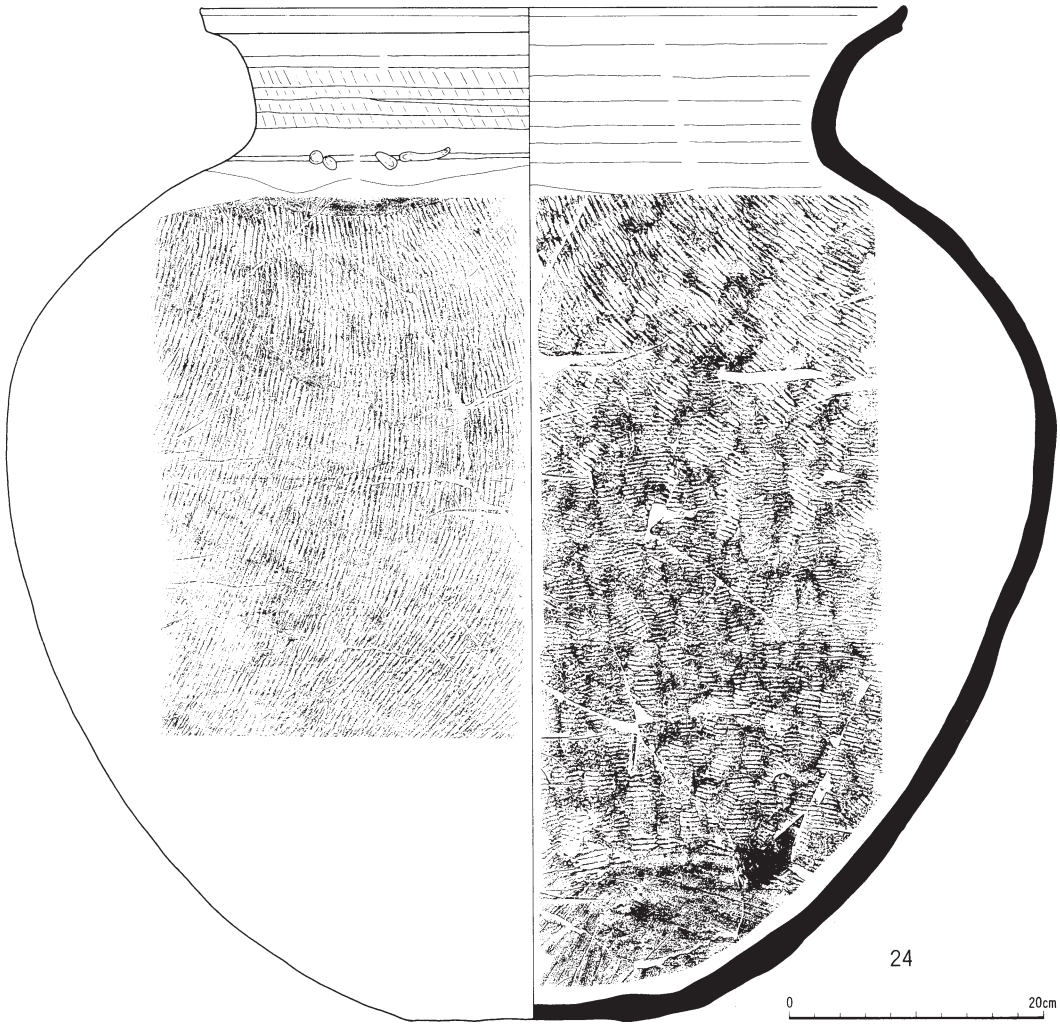
番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
4	土師器	甕	完形	床直・フク土・Pit5、4H床面・Pit9	17.6	(10.0)	25.1	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—	K I	P-193・194・96・155・292・314・316・326・331、75・135(ともに4H)
5	土師器	坏	体部半分	床面・床直	(14.2)	—	—	ロクロ	ロクロ	—	I b	P-132・141・146
6	土師器	皿	完形	床面・床直	13.8	6.1	2.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切		P-197・196
7	土師器	坏	完形	床面・床直	13.3	5.2	5.5	ロクロ	ロクロ	—	I b	P-32・33・22
8	土師器	小甕	口縁部	フク土・Pit5	(12.5)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-156・323
9	土師器	坏	体部下半	Pit5フク土	—	7.0	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-269・324、二次加熱
10	土師器	小甕	完形	カマド4層	13.3	8.0	11.1	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ	ヘラケズリ	K III	P-340(支脚)
11	土師器	坏	体部半分	床直・Pit5フク土	(13.2)	6.0	4.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-13・236

第55図　第9号住居跡(4)



番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
12	土師器	坏	完形	床面・Pit5	12.0	6.5	4.2	ロクロ	ロクロ	モミ痕	Ⅰb	P-313・265
13	土師器	坏	体部半分	Pit5フク土	(13.8)	5.5	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Ⅰb	P-284
14	土師器	甕	口縁部	床面・床直	(20.0)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-172・173・108・71
15	土師器	甕	体部上半	フク土	(22.0)	—	—	—	—	—		P-91・112・150・160
16	土師器	甕	口縁部	床面	(22.0)	—	—	ヨコナデ	ナデ	—		P-91
17	土師器	甕	体部上半	床直・フク土・Pit1フク土	(18.0)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-72・306・92
18	須恵器	長頸壺	肩部	床直	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—		P-63・64・66、胎土分析番号3(産地不明)
19	土師器	坏	体部半分	Pit5フク土	(13.6)	6.8	5.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Ⅰb	P-223・315
20	土師器	坏	体部半分	フク土1層	(14.8)	7.2	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Ⅰb	P-42、二次加熱
21	土師器	小甕	口縁部	フク土	(11.6)	—	—	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		
22	土師器	壺	口縁部	フク土	(16.0)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-130・162
23	土師器	甕	口縁部	フク土・Pit1フク土	(26.0)	—	—	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-67

第56図　第9号住居跡(5)



番号	種類	器種	部　位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備　　考
					口径	底径	器高					
24	須恵器	大甕	完形	Pit5、4HPit3フク土	55.6	15.2	79.6	ロクロ・ヨコナデ・指圧痕・平行叩き目	ロクロ・ヨコナデヘラナデ・当て具痕	平行叩き目		胎土分析番号1・4・6(産地不明)P-91(4H)

第57図　第９号住居跡（６）

ら多数出土している。

［時期］本住居跡は炭化材の出土状況から、焼失家屋と考えられる。火山灰の堆積状況及び出土遺物から、９世紀後半の住居跡と思われる。

第10号住居跡（第58図～第65図）

［位置］K－32～34及びL～N－31～34グリッドに位置する。

［重複］住居跡に重複するものはないが、付属すると考えられる外周溝は、第27号・第28号土坑と重複する。第27号土坑より古く、第28号土坑より新しい。また、第29号・第30号土坑と重複すると推定されるが、新旧関係は不明である。

［平面形・規模］東壁4m86cm・南壁4m66cm・西壁4m84cm・北壁4m82cmのほぼ方形を呈する。カマドは火焼面だけで主軸方位は不明であるが、その位置から、S－71°±α－Eと推定される。床面積は竪穴住居部分が22.54m²、掘立柱建物跡部分を入れると50.03m²ある。

［壁・床面］北壁は上部が削平されたものと思われ、壁高は2～5cmしかない。その他の壁は急な立ち上がりを呈し、壁高は東壁5～8cm・南壁6～10cm・西壁10～19cmである。覆土は全体的にかなり削平されており、床面が一部露出しているところもある。地形を反映して床面は東側へ緩く傾斜し、凹凸が若干見られる。ほぼ中央及びピット3付近の床面はローム質で硬い。南壁中央から西にかけて、床面が25cmほど、横93cm・縦250cmの長方形状に落ちこんでいる。

［壁溝］各壁の直下に検出し、東壁及び西壁の一部で途切れる部分もあるが、ほぼ全周する。幅15～40cm、深さ4～26cmである。

［柱穴・ピット］床面より2個、長方形状の落ち込みより1個、壁溝より13個、柱穴状のピットを検出した。主なピットの深さは以下の通りである。何れも主柱穴と考えられる。

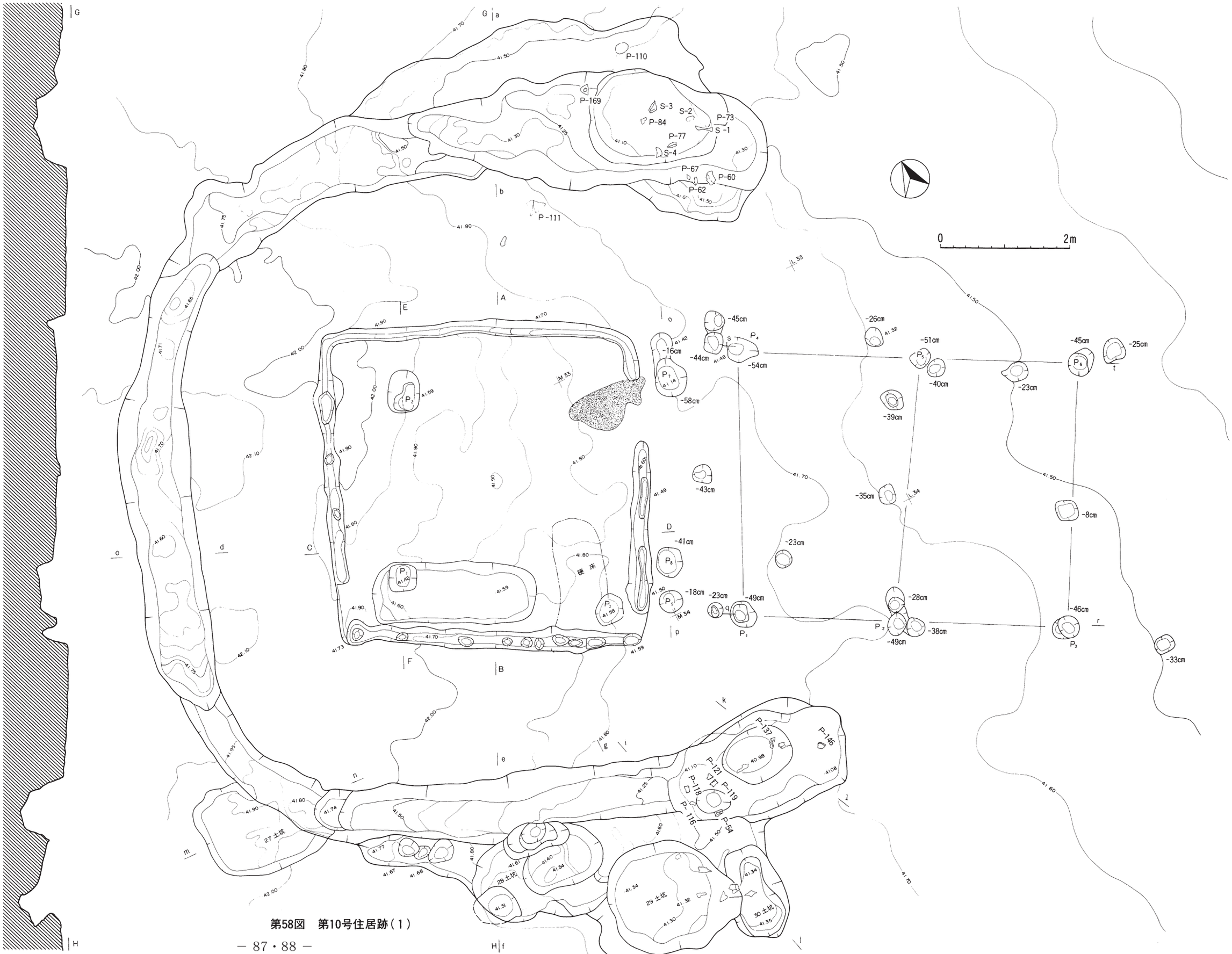
P_1…49cm・P_2…41cm・P_3…26cm

［カマド］東壁北寄りに焼土を検出した。130cm×66cmの不整な楕円形を呈し、その中央西寄りで、大きさ30cm×40cmのほぼ楕円部分は特に焼けている。おそらくここが火床面であろう。

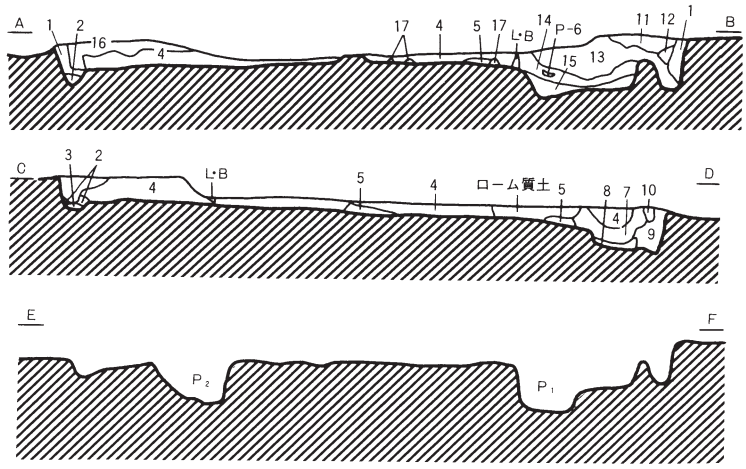
［掘立柱建物跡］検出状況より、本住居跡に付属するものと考えられる。柱穴状のピットを25個検出した。このうち掘り方が対応するピットは1～6である。また、東壁直上付近より5個のピットを検出したが、掘立柱建物跡に属するものか、住居跡に属するものかは不明である。また、多数のピットの配列から、掘立柱建物跡は小から大へと増築された可能性もある。主なピットの深さは以下の通りである。これ以外のピットの深さは8～45cmである。なお、平面図の方にはこれらピットの深さを全て表示している。

P_1…49cm・P_2…49cm・P_3…46cm・P_4…54cm・P_5…51cm・P_6…45cm・P_7…58cm・P_8…41cm・P_9…18cm

［外周溝］検出状況より本住居跡に付属するものと考えられ、開口部を東壁に有し、馬蹄形状を呈する。東側の両末端部はともに膨らんで土坑状を呈し、深さは、北側が50cm前後、南側は80cm前後で、両方から多量の遺物が出土した。両末端部以外の深さは20～50cm前後である。なお、南側には第27号～第30号土坑が重複等するが、第29号・第30号土坑については、堆積状況

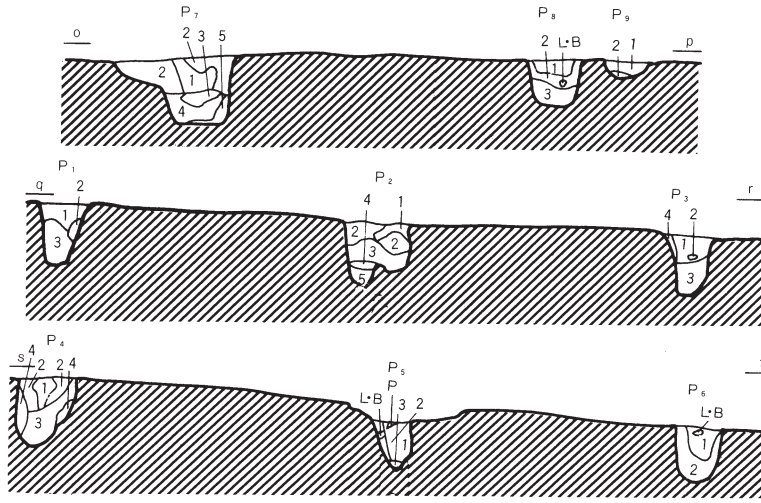


第58図　第10号住居跡（1）



第10号住居跡

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒少量含む。
第2層	黒褐色土	10YR3/1	
第3層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム質。
第4層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量含む。
第5層	褐色土	10YR4/6	
第6層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒30%含む。
第7層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量含む。
第8層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム粒80%含む。
第9層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量含む。
第10層	褐色土	10YR4/4	ローム粒80%含む。
第11層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量含む。
第12層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量含む。
第13層	黒褐色土	10YR3/1	2㎝以上の黄橙色ローム質ブロック60%含む。
第14層	暗褐色土	10YR3/3	2㎝以下の明黄褐色ローム質ブロック30%、炭化物微量含む。
第15層	黒色土	10YR2/1	黄橙色(10YR8/6)のローム質土80%含む。
第16層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量、明褐色(7.5YR5/8)の焼土粒微量含む。
第17層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量含む。



掘立ピット1

第1層	黒褐色土	10YR2/2
第2層	黒色土	10YR1.7/1
第3層	黒褐色土	10YR2/2

掘立ピット4

第1層	黒褐色土	10YR3/2
第2層	黒色土	10YR2/1
第3層	黒色土	10YR1.7/1
第4層	にぶい黄褐色土	10YR4/3

掘立ピット7

第1層	黒色土	10YR1.7/1
第2層	黒褐色土	10YR2/2
第3層	にぶい黄褐色土	10YR5/4
第4層	黒褐色土	10YR3/1
第5層	にぶい黄褐色土	10YR5/4

掘立ピット2

第1層	黒褐色土	10YR2/2
第2層	黒色土	10YR1.7/1
第3層	黒褐色土	10YR2/3
第4層	にぶい黄褐色土	10YR4/3
第5層	黒褐色土	10YR2/2

掘立ピット5

第1層	黒色土	10YR1.7/1
第2層	黒褐色土	10YR2/2
第3層	明黄褐色土	10YR6/6

掘立ピット8

第1層	明黄褐色土	10YR6/6
第2層	黒色土	10YR1.7/1
第3層	黒色土	10YR1.7/1

掘立ピット3

第1層	黒褐色土	10YR2/2
第2層	黒褐色土	10YR2/2
第3層	黒褐色土	10YR2/3
第4層	黒褐色土	10YR2/2

掘立ピット6

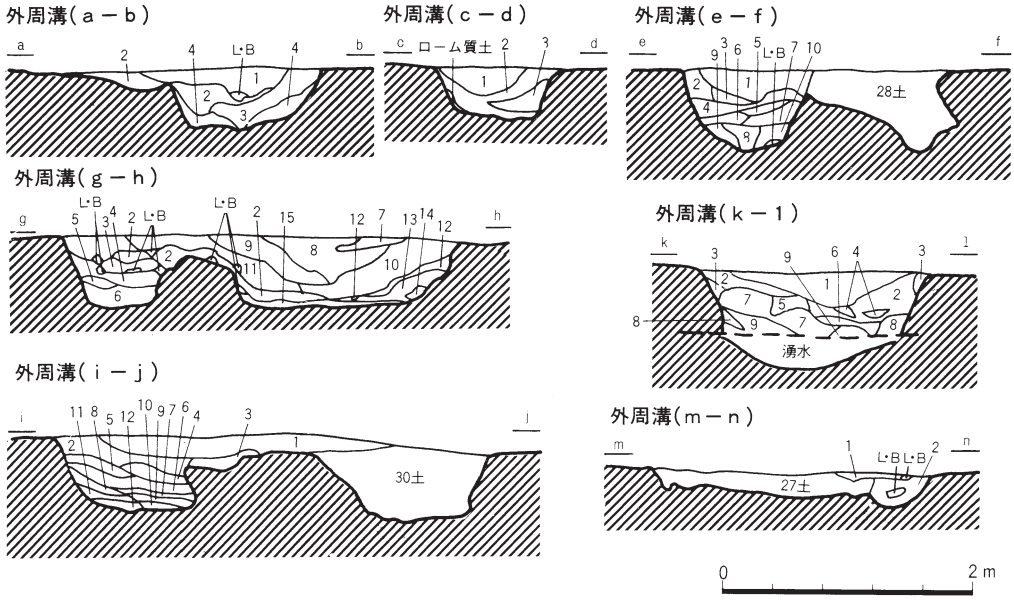
第1層	黒色土	10YR1.7/1
第2層	黒色土	10YR2/1

掘立ピット9

第1層	黒褐色土	10YR2/2
第2層	黄褐色土	10YR5/6

0　2m

第59図　第10号住居跡(2)



外周溝(a－b)

第1層	黒色土	10YR2/1	炭化物微量、ローム粒微量、焼土微量含む。
第2層	黒色土	10YR2/1	LB40%含む。
第3層	黒褐色土	10YR3/1	ローム塊70%含む。
第4層	黄褐色土	10YR5/8	ローム質。

外周溝(c－d)

第1層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒多量含む。
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量含む。
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量含む。

外周溝(e－f)

第1層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量含む。
第2層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム粒中量含む。
第3層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ローム粒多量含む。
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒ごく微量含む。
第5層	褐色土	10YR4/6	ローム粒多量含む。
第6層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒少量含む。
第7層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒ごく微量含む。
第8層	灰黄褐色土	10YR4/2	ローム粒中量、赤色土中量含む。
第9層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒中量含む。
第10層	褐色土	10YR4/4	ローム粒多量含む。

外周溝(k－1)

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒少量、炭化物少量含む。
第2層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量含む。
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量含む。
第4層	褐色土	10YR4/6	焼土多量含む。
第5層	褐灰色土	10YR4/1	ローム粒多量含む。
第6層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量含む。
第7層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム質。
第8層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒多量含む。
第9層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒少量、炭化物少量含む。

外周溝(m－n)

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量含む。
第2層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・ローム塊多量含む。

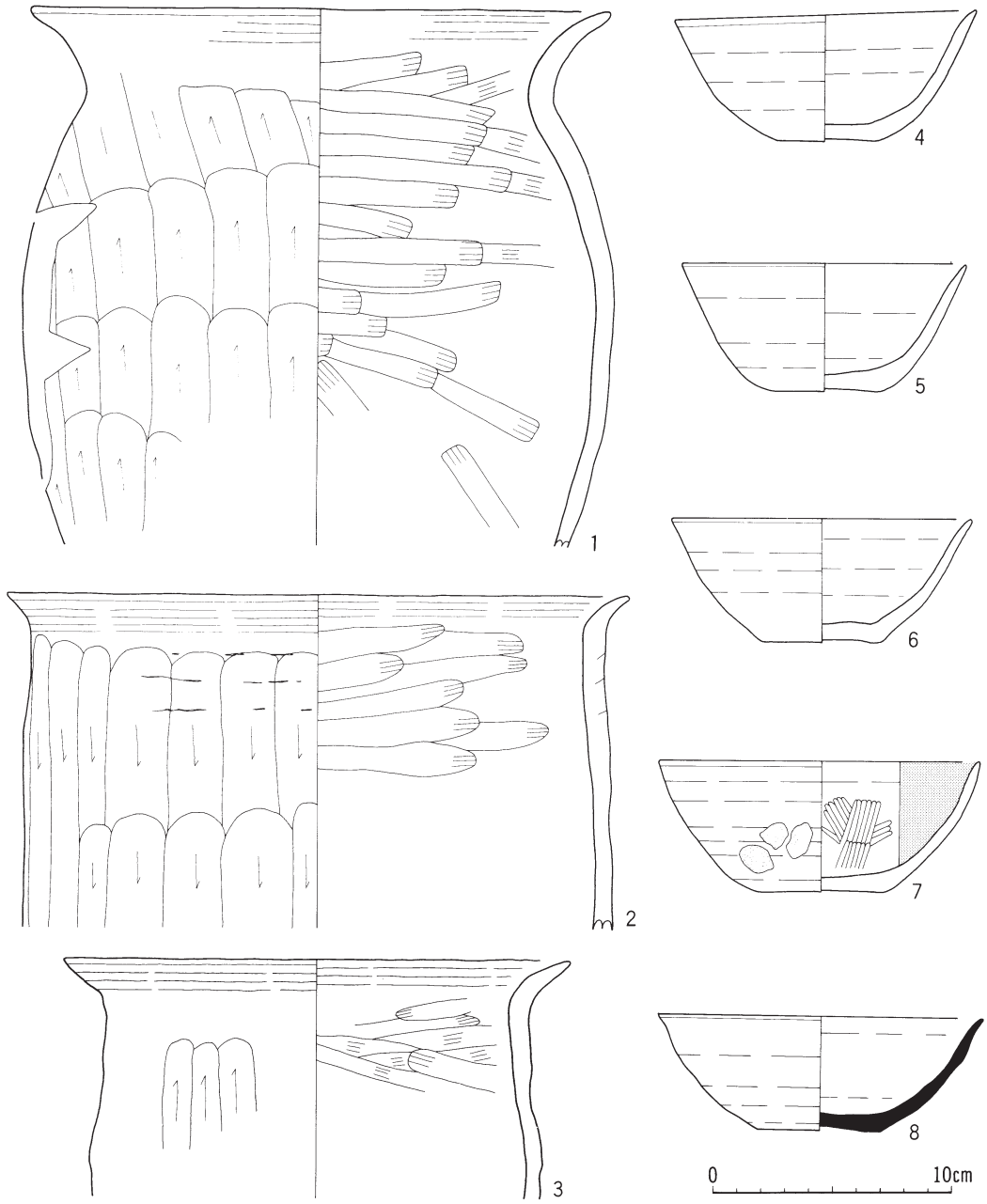
外周溝(g－h)

第1層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒多量含む。
第2層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量含む。
第3層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量含む。
第4層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒少量含む。
第5層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量、焼土もしくは酸化鉄少量含む。
第6層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒多量含む。
第7層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量含む。
第8層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒・炭化物微量含む。
第9層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量含む。
第10層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量含む。
第11層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒と炭化物少量含む。
第12層	黄褐色土	10YR5/6	ローム質。
第13層	褐色土	10YR4/4	ローム粒多量含む。
第14層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒微量、焼土もしくは酸化鉄微量含む。
第15層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ローム質。

外周溝(i－j)

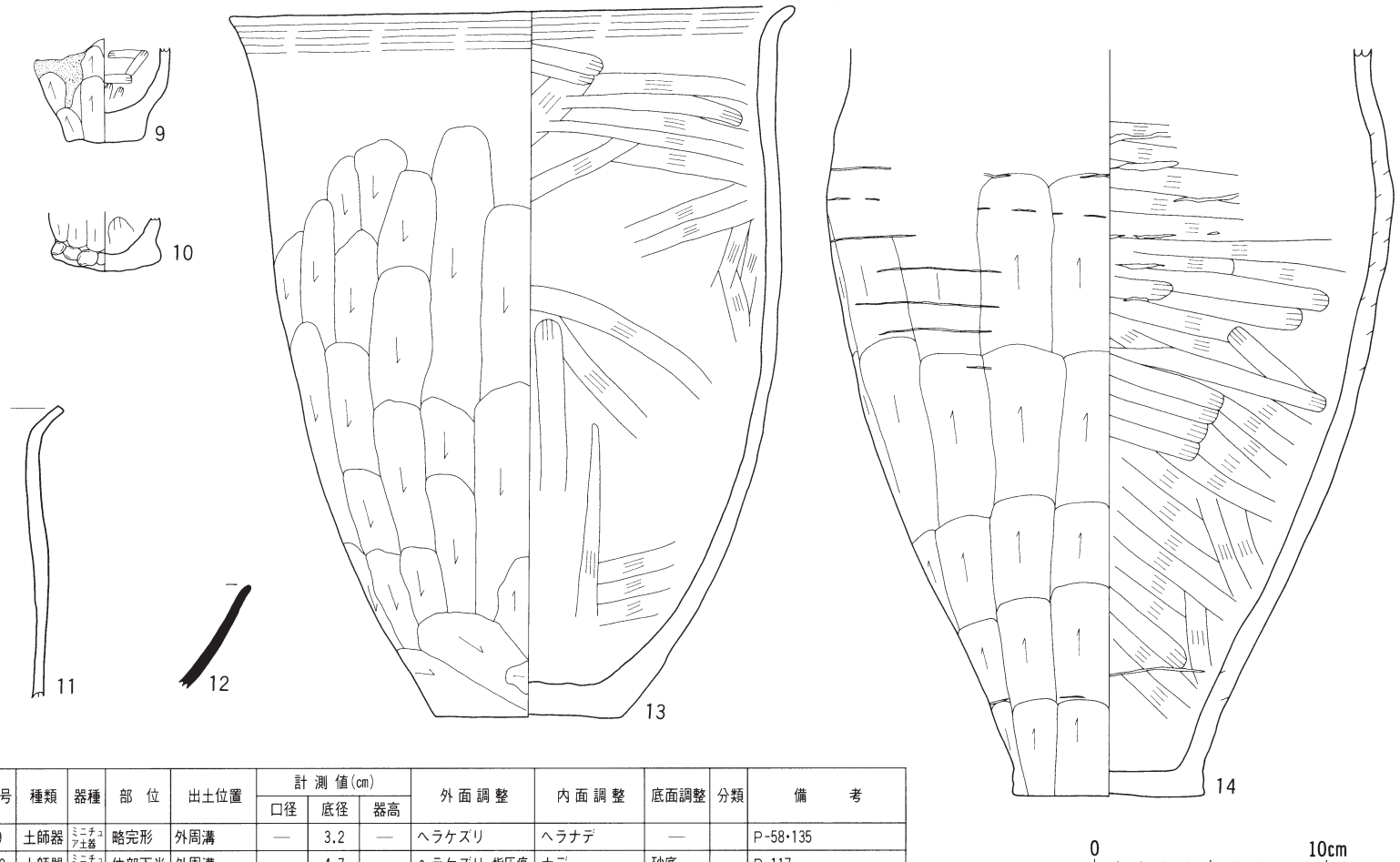
第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒・炭化物少量含む。
第2層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒多量含む。
第3層	褐色土	10YR4/4	炭化物微量、ローム粒少量含む。
第4層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒少量含む。
第5層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ローム質。
第6層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量含む。
第7層	褐色土	10YR4/4	ローム粒多量含む。
第8層	黒褐色土	10YR2/2	焼土・酸化鉄少量含む。
第9層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム質。
第10層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム粒多量含む。
第11層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒多量含む。
第12層	黄褐色土	10YR5/6	ローム質。

第60図　第10号住居跡(3)



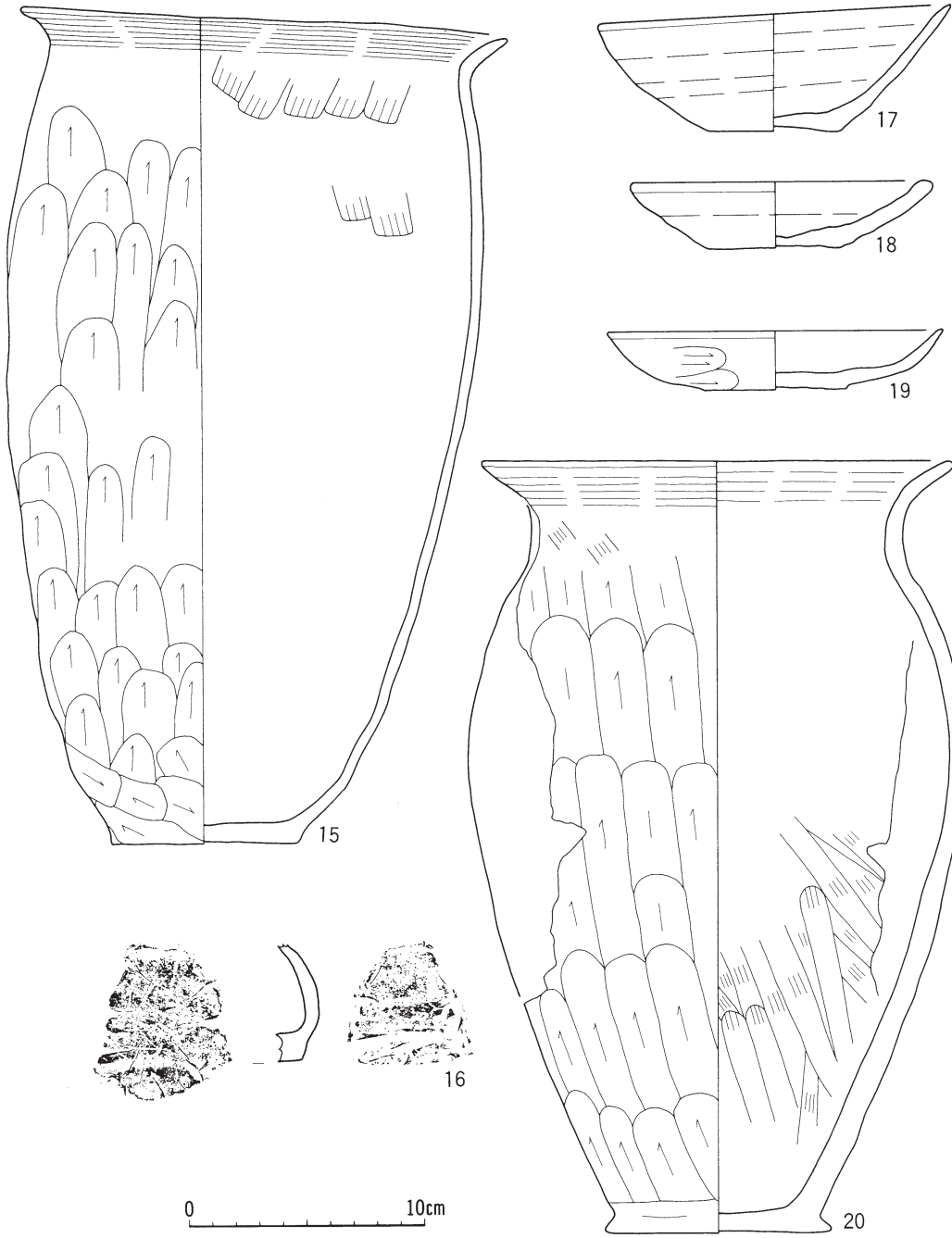
番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
1	土師器	甕	口縁部	外周溝・掘立柱Pit1	(24.2)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	—		P-66・77(外周溝)
2	土師器	甕	口縁部	外周溝、26土フク土	26.0	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	—		P-24・27、51(26土)
3	土師器	甕	口縁部	外周溝、26土フク土	(21.2)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—		P-8・9、15(26土)
4	土師器	坏	完形	外周溝	12.7	4.4	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Ⅰb	
5	土師器	坏	体部半分	外周溝	(11.8)	4.4	5.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Ⅰb	P-60
6	土師器	坏	完形	外周溝	12.6	5.1	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Ⅰb	P-52
7	土師器	坏	完形	Pit1フク土・外周溝	13.5	5.4	5.5	ロクロ	ロクロ・ヘラミガキ	回転糸切	Ⅰa	P-7・43、二次加熱、内黒処理
8	須恵器	坏	略完形	外周溝	(13.6)	5.1	4.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切		胎土分析番号5(産地不明)

第61図　第10号住居跡(4)



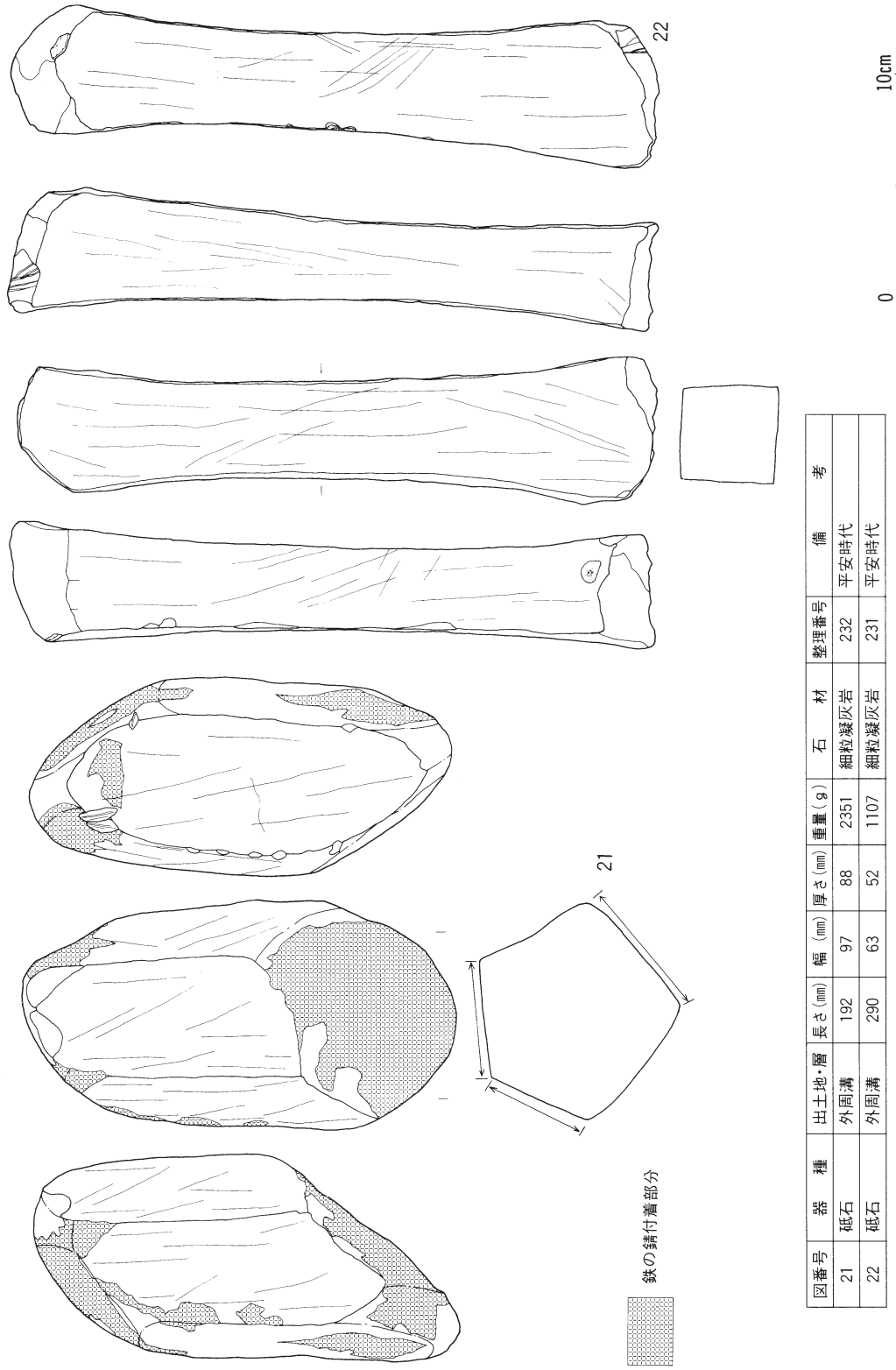
番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
9	土師器	ミニチュア土器	略完形	外周溝	—	3.2	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	—		P-58・135
10	土師器	ミニチュア土器	体部下半	外周溝	—	4.7	—	ヘラケズリ・指圧痕	ナデ	砂底		P-117
11	土師器	甕	口縁部	外周溝、K-32Ⅱ層	(21.2)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	—		
12	須恵器	坏	口縁部	外周溝、26土フク土	(14.0)	—	—	ロクロ	ロクロ	—		P-13(26土)
13	土師器	甕	完形	Pit2・外周溝、26土、2M(J-33)	24.5	8.0	30.5	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—	K Ⅰ	P-12・42・57・126～128・131・132・137・139・140
14	土師器	甕	体部下半	外周溝フク土	—	8.3	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	砂底		P-22・23・35・121・141～143・145～147

第62図　第10号住居跡(5)



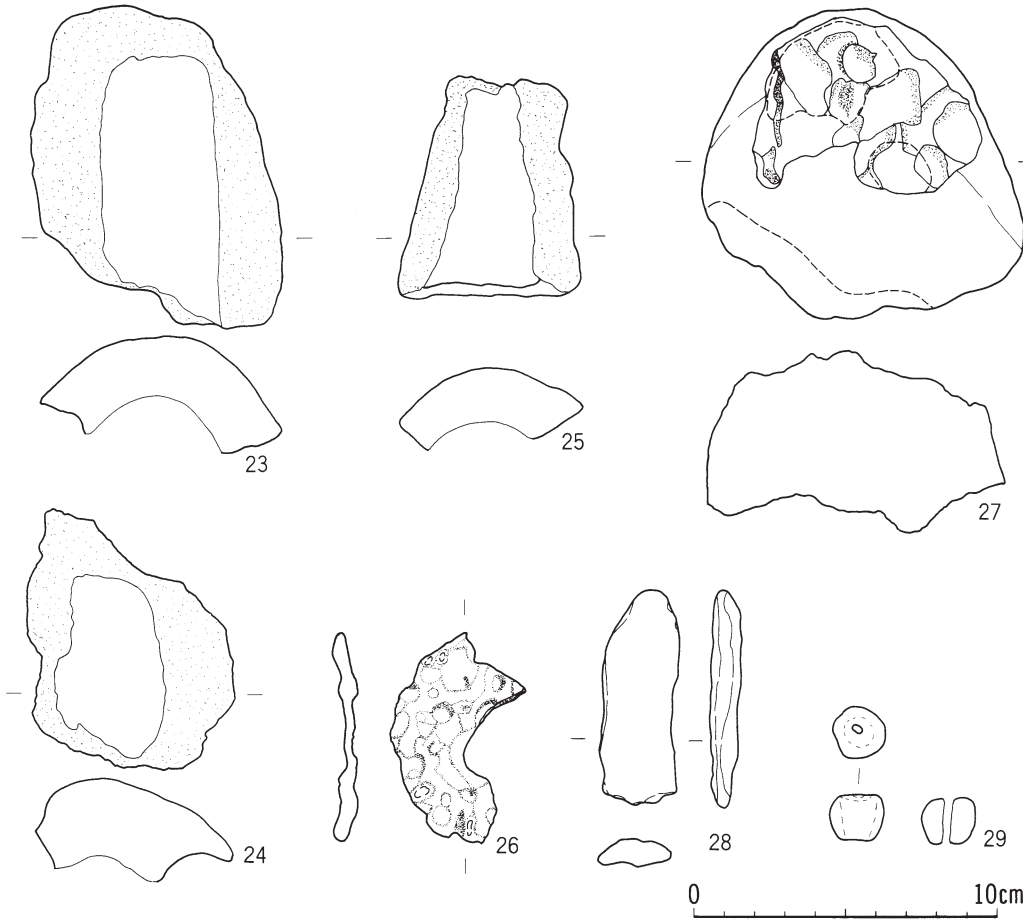
番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
15	土師品	甕	完形	外周溝、30土	20.7	8.0	35.1	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラナデ・ヨコナデ	砂底	K I	P-40・42、113(30土)
16	土師品	ミニチュア土器	胴部	外周溝	(6.0)	(4.4)	(5.3)	ヘラケズリ	ヨコナデ	—		P-25
17	土師品	坏	略完形	Pit2フク土	15.0	5.6	4.9	ロクロ	ロクロ	回転糸切	I b	P-4
18	土師品	皿	略完形	外周溝	12.5	5.7	2.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切		P-109
19	土師品	皿	体部半分	掘立柱Pit2	14.2	6.0	2.5	ヘラケズリ	—	—		
20	土師品	甕	略完形	外周溝・焼土	20.0	9.6	32.9	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	砂底	K I	P-30・31・56・110・116・121・125・127・132・1

第63図　第10号住居跡(6)



図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
21	砥石	外周溝	192	97	88	2351	細粒凝灰岩	232	平安時代
22	砥石	外周溝	290	63	52	1107	細粒凝灰岩	231	平安時代

第64図　第10号住居跡（7）



番号	出土位置	最大計測値				種類	備考
		長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
23	外周溝	外径(100)	内径(44)	—	—	羽口	P-54
24	外周溝	外径(100)	内径(40)	—	—	羽口	P-55
25	外周溝	外径(84)	内径(36)	—	—	羽口	P-28、外面に指圧痕あり
26	外周溝	径(80)	—	8	27	鉄滓	F-9、環状
27	外周溝	—	—	—	—	鉄滓	
28	フク土	73	35	9	27	鎌?	F-1
29	外周溝	口径 13	底径 10	器高 15	—	土玉	

第65図　第10号住居跡(8)

等から外周溝と同時期の可能性が高い。

［堆積土］17層に区分できた。ローム粒を微量含む黒色土が主体である。

［出土遺物］住居内からは、遺物はほとんど出土しなかった。外周溝から、多量の土師器、若干の須恵器・羽口・鉄滓等が出土した。土師器には、坏・甕・皿・ミニチュア土器、須恵器には坏がある。この他に、砥石２点、土玉１点が出土した。なお、覆土からは、鎌とみられる鉄製品１点が出土している。破片では、土師器の甕がデスクトレーで２箱、同坏が59点、須恵器の甕等３点、大甕２点、鉄器１点が出土した。遺物は、ほとんど外周溝両東端から出土してい

る。

［時期］出土遺物から、９世紀後半の住居跡と思われる。

第11号住居跡（第66図・第67図）

［位置］G～I－22～23グリッドに位置する。

［重複］第５号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。

［平面形・規模］北東壁・北西壁とも４m34cmで、南東壁・南西壁は、第５号溝跡に切られているため規模は不明であるが、それぞれ、３m74cm・４m64cmと推定され、ほぼ隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位は、N－54°±α－W、床面積は17.51m²である。

［壁・床面］各壁の上部及び覆土はかなり削平されており、壁高は北東壁２～４cm、南東壁３～10cm、南西壁１～４cm、北西壁３～５cmと全て10cm以下である。床面の西半分ほどは削平され掘り方のみである。検出された床面には若干の凹凸が見られる。

［壁溝］各壁の直下に検出し、攪乱や第５号溝跡と重複しているところを除けば一周する。幅５～10cm、深さ２～24cmである。

［柱穴・ピット］住居跡内からは10個のピットを検出した。このうちピット４・５は掘り方調査時に検出したものである。主柱穴は不明である。カマド左袖付近のピット３は、短軸45cm・長軸70cm・深さ27cmで土坑状を呈する。覆土から土師器坏、炭化物が出土している。位置的にカマドに関係するものであろう。主なピットの深さは以下の通りである。

P_1…59cm・P_2…55cm・P_3…27cm・P_4…30cm・P_5…24cm

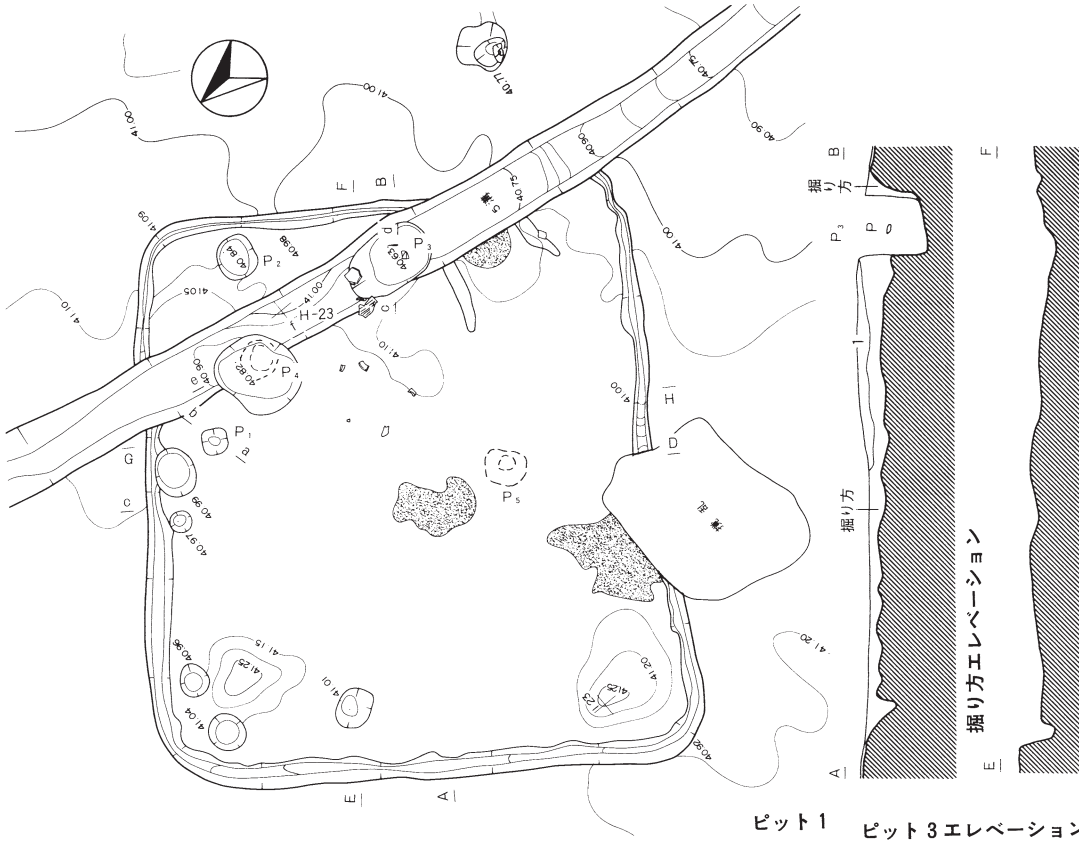
［カマド］南東壁の南隅寄りに位置するものの、燃焼部の約半分及び煙道部は第５号溝跡あるいは削平により破壊されている。火床面は両袖に挟まれるように検出された。なお、この他にも焼土が床面のほぼ中央並びに南西壁の攪乱部分付近から検出された。袖はロームを含む黒褐色土で構築されているが、両袖とも南東壁に対して直角ではなく、同壁北側とは110°～120°の角度を有している。南東壁から90cm外方に煙出し孔と見られる深さ13cmのピットを検出した。ここからは土師器の甕片及び炭化物が数点出土した。

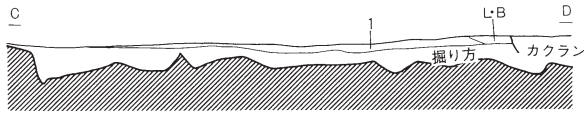
［堆積土］ローム粒を含む黒色土の１層のみである。

［出土遺物］遺物は、ピット３とカマド煙出し孔から、少量出土した。具体的には、ピット３から、土師器の坏１点、ミニチュア土器２点、カマド煙出し孔から甕１点出土している。破片では、土師器の甕がデスクトレーで４分の１箱出土した。なお、ピット３と煙出し孔から、炭化材が少量出土した。

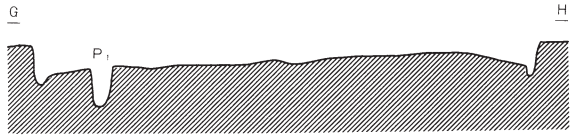
［時期］出土遺物より、本住居跡は９世紀後半と思われる。

（伊藤昭雄）





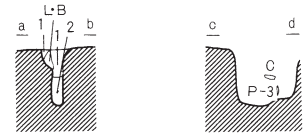
掘り方エレベーション



第11号住居跡

第１層　黒　色　土　10YR2/1　　５～10㎜程度のローム粒含む。

ピット１　ピット３エレベーション

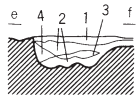


ピット１

第１層　黒　色　土　10YR1.7/1　柱痕
第２層　褐　色　土　10YR4/4

0　2m

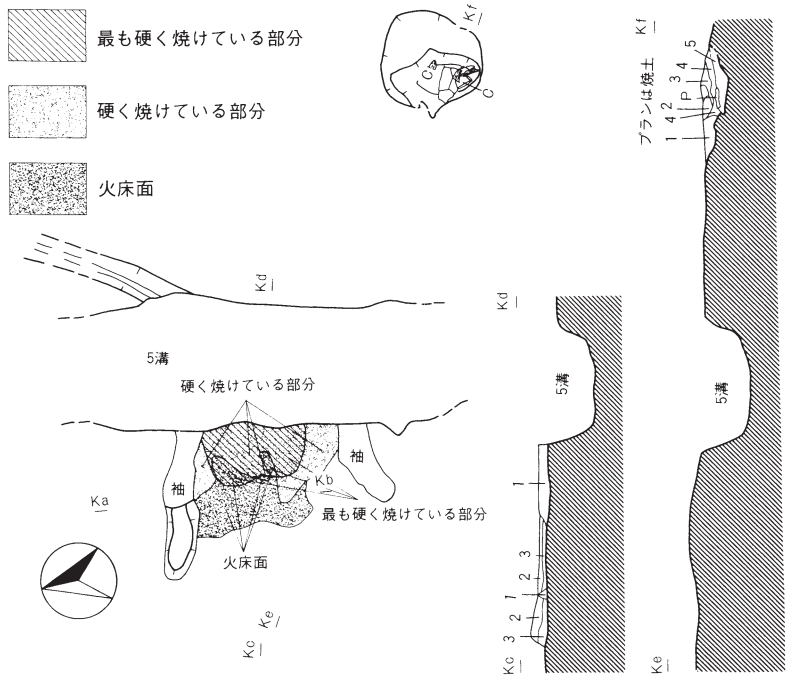
ピット４



ピット４

第１層　黒褐色土　10YR3/2　　にぶい黄橙色(10YR7/4)ロームを含む。
第２層　黒　色　土　10YR2/1　　にぶい黄橙色(10YR7/4)ローム10％含む。
第３層　黒　色　土　10YR2/1　　にぶい黄橙色(10YR7/4)ローム20％含む。
第４層　明黄褐色土　10YR7/6　　ローム。ブロック状に堆積。

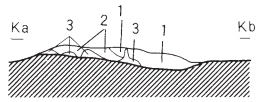
第66図　第11号住居跡（１）



第11号住居跡　カマド煙出し孔

第1層　黒　色　土　10YR2/1
第2層　黒褐色土　10YR2/2
　　焼土を少量含む。
第3層　褐　色　土　7.5YR4/4
　　焼土。
第4層　暗褐色土　10YR3/3
　　炭化物を含む。
第5層　黒　色　土　10YR2/1
　　炭化物を微量含む。

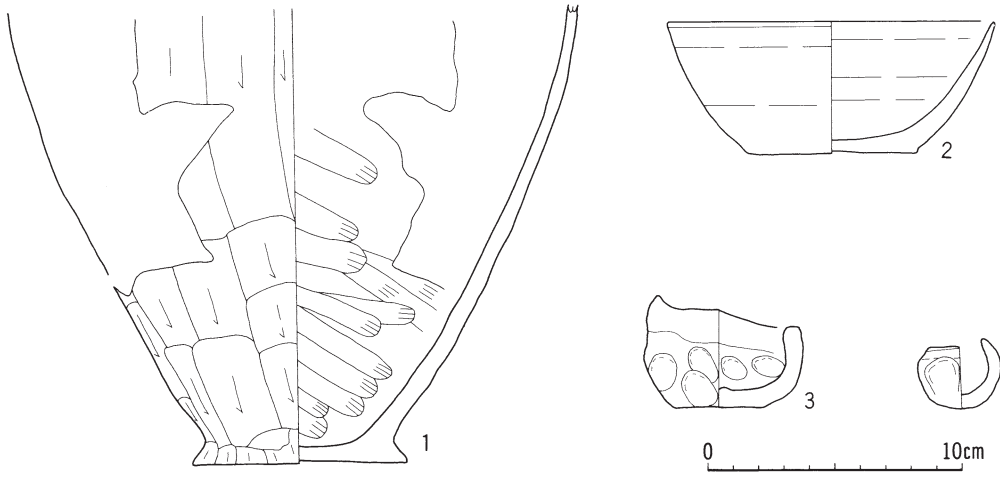
第11号住居跡　カマド



第1層　黒褐色土　10YR3/1　30%程のロームを含む。火床面付近には、10mm程の焼土粒が5～7粒程混入している。

第2層　黒褐色土　10YR3/2
第3層　黒褐色土　10YR2/3　40%程のロームを含む。

0　1m



番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
1	土師器	甕	体部下半	カマド煙出し孔	—	8.4	—	ヘラケズリ	ナデ	砂底		P-1・2
2	土師器	坏	略完形	Pit3フク土	12.8	6.6	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Ⅰb	P-1
3	土師器	ミニチュア土器	略完形	Pit3フク土	5.7	3.6	4.5	指圧痕	指圧痕	不明		
4	土師器	ミニチュア土器	完形	Pit3フク土	2.0	—	2.7	指圧痕	—	—		手捏ね、P-27

第67図　第11号住居跡（2）

2　土　坑

平安時代ほかの土坑は19基あるが、覆土に含まれる土器やB－Tm等より、平安時代に属すると考えられる土坑は、第6号、第11号、第15号、第16号、第18号、第19号、第23号、第26号、第27号、第29号及び第30号の11基である。時代不明のものは、第12号、第13号、第17号、第20号、第22号、第25号及び第28号の7基である。このうち、第12号、第13号の2基については壁面が焼け、焼土と化している。これら時代不明のものについては、確認状況からみて、平安時代以降に構築・廃棄された可能性が高い。ただし、第20号、第22号の2基については、堆積土から縄文時代晩期以降の可能性がある。なお、第31号土坑については、底面直上から採取した木炭の放射性炭素年代測定結果が、30±70年B.P.(before physics)ということより、明治～昭和時代のある限られた時期に使用されたものといえる。

第6号土坑（第68図・第73図）

［位置］I－12グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸240cm、短軸214cmの不整な円形で、深さ68cmである。

［壁・底面］南・西・北壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁はやや緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］5層に区分できた。主体はしまりのある黒褐色土である。なお、第1層にはB－Tmが認められた。その平面形は環状、断面形は盆状かつレンズ状である。

［出土遺物］覆土から、土師器の坏及び小甕の体部破片が各1点、須恵器の大甕口縁部破片及び長頸壺胴部片がそれぞれ4点と1点出土した。土師器の甕等の破片は、デスクトレーで4分の1箱出土した。他に、縄文土器の高台付坏底部が1点、それ以外が約60点、石器ではフレイクが2点、不定形石器（スクレイパー）が1点出土した。なお、須恵器の大甕破片は第9号住居跡出土の大甕に接合することができた。

第11号土坑（第68図・第73図）

［位置］M－26グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸225cm、短軸200cmの不整な円形で、深さは48cmである。

［壁・底面］西壁はほぼ垂直に近い状態で、東・南・北壁は緩やかに立ち上がる。底面には凹凸が認められる。また、西壁よりに深さ13cmのピットが掘り込まれている。

［堆積土］7層に区分できた。第1層と第2層には焼土が混入し、第3層～第6層はローム粒・ロームブロックを含んだ黒色土である。

［出土遺物］覆土より土師器のミニチュア土器完形品が1点、甕等破片が98点、坏の破片が1点、須恵器の坏の破片が1点出土した。

第12号土坑（第68図）

［位置］N・O－27グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸175cm、短軸165cmのほぼ円形で、深さは40cmである。

［壁・底面］壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。また、壁面は焼けて焼土と化している。

［堆積土］3層に区分できた。主体はローム粒・ロームブロックを多量に含む硬い黒褐色土である。

［出土遺物］なし。

第13号土坑（第69図）

［位置］O－26グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸160cm、短軸125cmの隅丸長方形で、深さは42cmである。

［壁・底面］壁は緩やかに立ち上がり、壁の上部は焼けて焼土と化している。底面には凹凸が認められ、中央部が南北に5cmほど一段低くなっている。

［堆積土］4層に区分できた。全体にローム粒、炭化物を含む黒褐色～黒色土である。

［出土遺物］なし。

第15号土坑（第69図）

［位置］I－16グリッドに位置している。

［重複］第16号土坑及び第4号溝跡東端と重複し、本遺構の方が新しい。

［平面形・規模］長軸173cm、短軸160cmのほぼ円形で、深さは52cmである。

［壁・底面］壁はやや緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］12層に区分できた。全体にローム粒、ロームブロックを含む黒褐色～黒色土である。

［出土遺物］覆土から土師器の甕等破片が11点、須恵器甕の破片が1点、縄文土器片が7点出土した。

第16号土坑（第69図）

［位置］I－16グリッドに位置している。

［重複］第15号土坑と重複し、本遺構の方が古い。

［平面形・規模］全体の形状は不明だが、調査部分から推定して平面形はほぼ楕円形とみられ、規模は、長軸145cm（推定）、短軸123cm、深さは30cmである。

［壁・底面］壁はやや緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

［堆積土］5層に区分できた。主体はローム粒を含む黒褐色～黒色土である。

［出土遺物］覆土より土師器の甕等破片が4点出土した。

第17号土坑（第69図）

［位置］I－20・21グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸203cm、短軸143cmの隅丸長方形で、深さは62cmである。

［壁・底面］壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面には凹凸が認められる。

［堆積土］6層に区分できた。主体はローム粒を含む黒色土及び黒褐色土である。

［出土遺物］なし。

第18号土坑（第69図・第73図）

［位置］J－23・24グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸240cm、短軸130cmの不整な楕円形で、深さは76cmである。

［壁・底面］東壁は袋状に掘り込まれ、北・南・西壁は緩やかに立ち上がる。底面には凹凸が認められる。

［堆積土］5層に区分できた。主体はローム粒を微量含む黒色土である。なお、第1層と第4層の間に、B－Tmが厚さ16cmほど挟在している。

［出土遺物］覆土より土師器の坏破片が3点出土した。

第19号土坑（第70図）

［位置］H－35グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸150cm、短軸137cmのほぼ円形で、深さは28cmである。

［壁・底面］壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が認められる。中央部は東西方向に長く、

周囲より７cmほど一段低くなっている。

［堆積土］14層に区分できた。全層にローム粒を含む黒褐色～黒色土である。また大半の層に炭化物を含む。

［出土遺物］覆土から、土師器か縄文土器か識別不能の微細な破片が４点、羽口片１点及び鉄器片１点が出土した。

第20号土坑（第70図）

［位置］H－19グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸80cm、短軸70cmのほぼ円形で、深さは63cmである。

［壁･底面］壁は袋状に掘り込まれ、断面がフラスコ状を呈している。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］３層に区分できた。主体はローム粒を微量含む黒色土である。

［出土遺物］なし。

第22号土坑（第70図）

［位置］G－30グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸155cm、短軸124cmの隅丸長方形で、深さは36cmである。

［壁・底面］壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が認められる。

［堆積土］３層に区分できた。主体はローム粒を少量含む黒色土である。

［出土遺物］なし。

第23号土坑（第70図・第74図）

［位置］G・H－27グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸120cm、短軸110cmの不整円形で、深さは17cmである。

［壁・底面］北壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁は極めて緩やかに立ち上がる。底部には凹凸が認められ、北東部は10cmほど一段低くなっている。また、底面中央部には焼土が薄く認められる。

［堆積土］６層に区分できた。主体は黒色～黒褐色土である。

［出土遺物］底面直上より土師器の甕底部が１点出土している。また、覆土より甕等破片が２点、坏破片が１点出土した。

第25号土坑（第71図）

［位置］K－38グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸145cm、短軸123cmの隅丸長方形で、深さは16cmである。

［壁・底面］壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。また南東隅にピットが認められる。

［堆積土］2層に区分できた。黒褐色土が大半を占める。

［出土遺物］なし。

第26号土坑（第71図・第74図）

［位置］H－33・34グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸194cm、短軸147cmの楕円形で、深さは42cmである。

［壁・底面］壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］8層に区分できた。主体は黒色～黒褐色土で、確認面にはB－Tmと推定される火山灰が認められた。

［出土遺物］覆土より土師器の坏、甕底部、小甕口縁部及び完形の皿が、それぞれ3点、2点、1点、1点、須恵器の坏体部下半が1点、羽口片が1点、環状鉄製品が1点出土した。なお、土師器の甕等破片はデスクトレーで2分の1箱、坏破片は23点、須恵器甕破片は1点、坏破片は14点出土している。

第27号土坑（第71図）

［位置］N－33・34グリッドに位置している。

［重複］第10号住居跡外周溝と重複し、本遺構の方が新しい。

［平面形・規模］長軸は不明であるが、185cmと推測される。短軸は140cm、深さは19cmである。平面形は確認できた部分から、隅丸長方形であると推定される。

［壁・底面］壁は急に立ち上がり、底面には凹凸が認められる。また西壁から底面中央にかけて焼けている。

［堆積土］4層に区分できた。第3層は焼土層であり、本遺構の底部である。なお、第4層は掘り方である。

［出土遺物］覆土から土師器の甕等破片が5点出土した。

第28号土坑（第72図）

［位置］M・N－34グリッドに位置している。

［重複］第10号住居跡外周溝と重複し、本遺構の方が古い。

［平面形・規模］平面形は確認できた部分からほぼ楕円形であると推定される。規模の詳細は不明であるが、確認できた部分で長軸210cm、短軸136cm、深さ64cmである。

［壁・底面］西南の壁は袋状に掘り込まれ、断面がフラスコ状を呈する。他の壁はやや緩やかに立ち上がる。底面には凹凸があり、大・中・小３つのピットが認められる。

［堆積土］５層に区分できた。主体はローム粒を含む黒褐色土である。

［出土遺物］なし。

第29号土坑（第72図）

［位置］M－34・35グリッドに位置している。

［重複］第10号住居跡外周溝と重複すると推定されるも、新旧関係は不明である。また、第30号土坑とも重複する様相を呈するが、同じく新旧関係は不明である。

［平面形・規模］平面形は確認できた部分からほぼ円形と推定される。規模の詳細は不明であるが、確認できた部分で直径170cm、深さ55cmである。

［壁・底面］北・西壁は急に立ち上がるが、東・南壁はやや緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

［堆積土］第10号住居跡外周溝覆土も含めて15層に区分できた。主体はローム粒を含む暗褐色～黒褐色土である。

［出土遺物］覆土から土師器の内黒坏片が１点出土した。

第30号土坑（第72図）

［位置］M－34・35グリッドに位置している。

［重複］第10号住居跡外周溝と重複すると推定されるも、新旧関係は不明である。また、第29号土坑とも重複する様相を呈するが、同じく新旧関係は不明である。

［平面形・規模］平面形は確認できた部分からほぼ楕円形と推定される。規模の詳細は不明であるが、確認できた部分で長軸87cm、深さ60cmである。

［壁・底面］南壁はほぼ垂直に立ち上がり、北・東・西壁はやや緩やかに立ち上がる。底面には凹凸が認められる。

［堆積土］第10号住居跡外周溝覆土上部も含めて５層に区分できた。主体はローム粒を含む黒褐色～暗褐色土である。

［出土遺物］覆土より土師器の甕破片が2点、縄文土器片が９点出土した。

第31号土坑（第71図）

［位置］Ｉ・Ｊ－36グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］長軸220cm、短軸190cmの不整隅丸長方形であり、深さは28cmである。

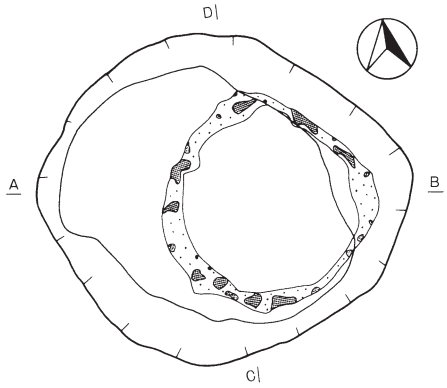
［壁・底面］壁はやや急に立ち上がり、底面には凹凸が認められる。底面中央部はほぼ南北に５cmほど一段低くなっている。また中央部に深さ９cmの小ピットが掘り込まれている。また、南東の不整な張り出し部分を除く壁面と底面は焼けて硬い。

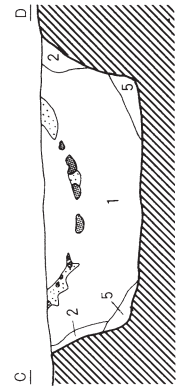
［堆積土］４層に区分できた。主体は軟らかい黒色土である。

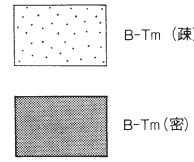
［出土遺物］覆土から土師器の坏破片が１点出土した。

（伊藤昭雄）

第6号土坑



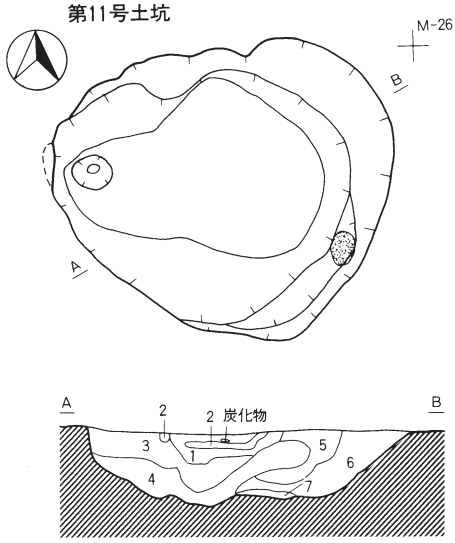




第6号土坑

第1層　黒褐色土　10YR2/2　しまりあり。
第2層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒を少量含む。
第3層　明黄褐色土　10YR6/6　ローム。暗褐色土を約1割含む。
第4層　暗褐色土　10YR3/3　明黄褐色ロームを多量含む。
第5層　明黄褐色土　10YR6/6　褐色土を少量含む。

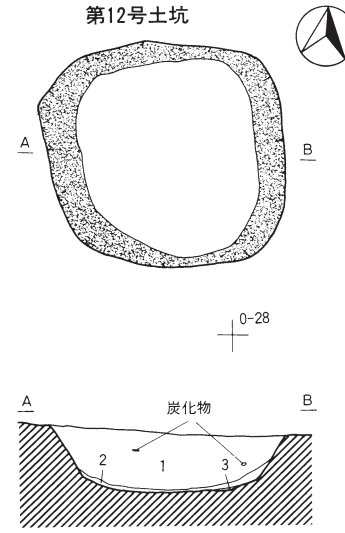
第11号土坑



第11号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/2	焼土を微量、炭化物を含む。
第2層	褐色土	7.5YR4/4	焼土。
第3層	黒色土	10YR2/1	ロームブロックを少量含む。
第4層	黒色土	10YR2/1	ロームブロック、ローム粒を多量含む。
第5層	黒色土	10YR2/1	ローム粒を少量含む。
第6層	黒色土	10YR1.7/1	ロームブロックを少量、ローム粒を微量含む。
第7層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	硬く、粘性あり。粘土。

第12号土坑

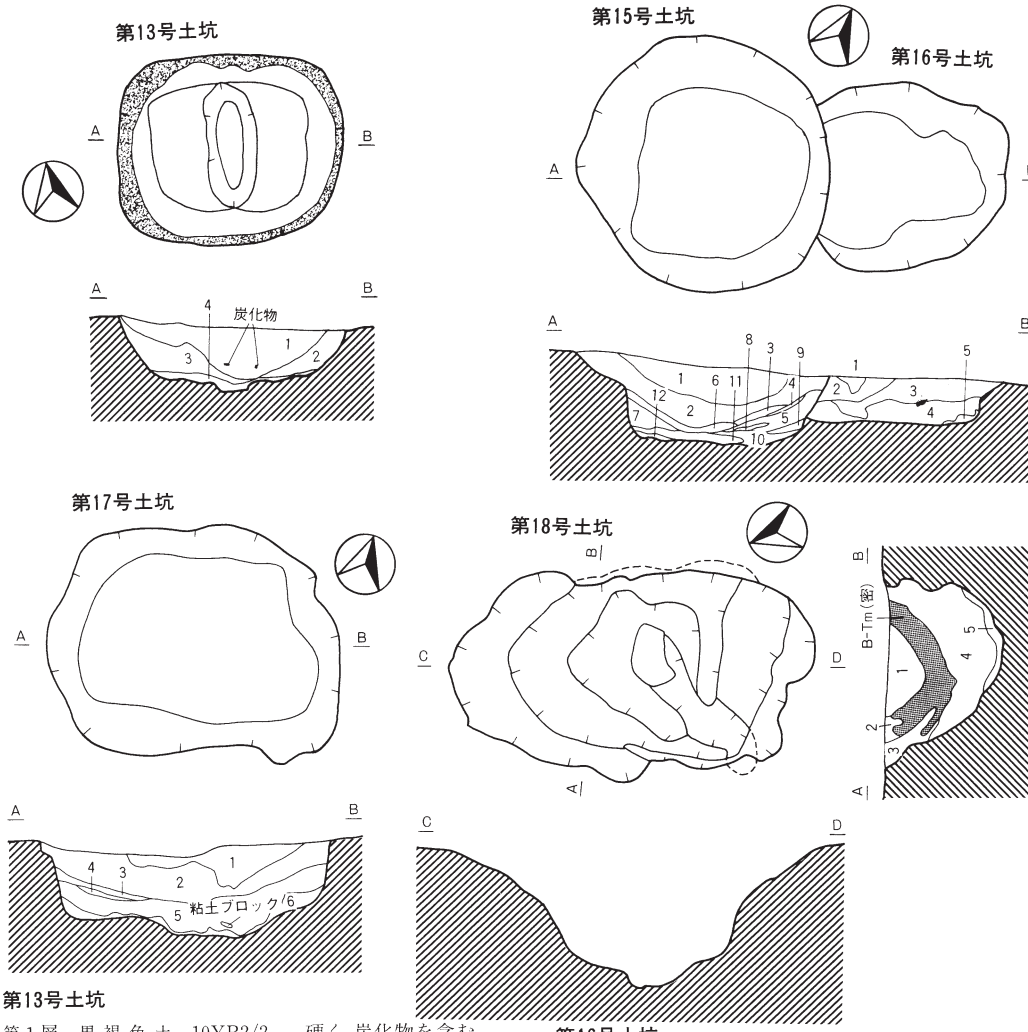


第12号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/2	硬く、ロームブロック・ローム粒を多量含む。粘土、炭化物を含む。壁面が焼けている。
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム粒を微量含む。
第3層	黒色土	10YR1.7/1	軟らかく、粘性あり。炭化物を多量含む。ローム粒を微量含む。

0　2m

第68図　土　坑（1）



第13号土坑

第１層	黒褐色土	10YR2/2	硬く、炭化物を含む。ロームブロック・ローム粒を多量含む。
第２層	黒褐色土	10YR2/2	やや硬く、炭化物を含む。ローム粒を中量含む。壁面が焼けている。
第３層	黒　色　土	10YR2/1	ロームブロックを微量、ローム粒を少量、炭化物を含む。壁面が焼けている。
第４層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒を微量、炭化物を多量含む。

第15号土坑

第１層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒を微量含む。
第２層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒を多量含む。
第３層	黒褐色土	10YR3/3	ローム粒を多量含む。
第４層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒を微量含む。
第５層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒を少量含む。
第６層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒を微量含む。
第７層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒を多量含む。
第８層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒を微量含む。
第９層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒を少量含む。
第10層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒を多量含む。
第11層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒を微量含む。
第12層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒を少量含む。

第16号土坑

第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒を微量含む。
第２層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒を微量含む。
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒を多量含む。
第４層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒を多量含む。
第５層	褐　色　土	10YR4/4	硬く、粘性あり。

第17号土坑

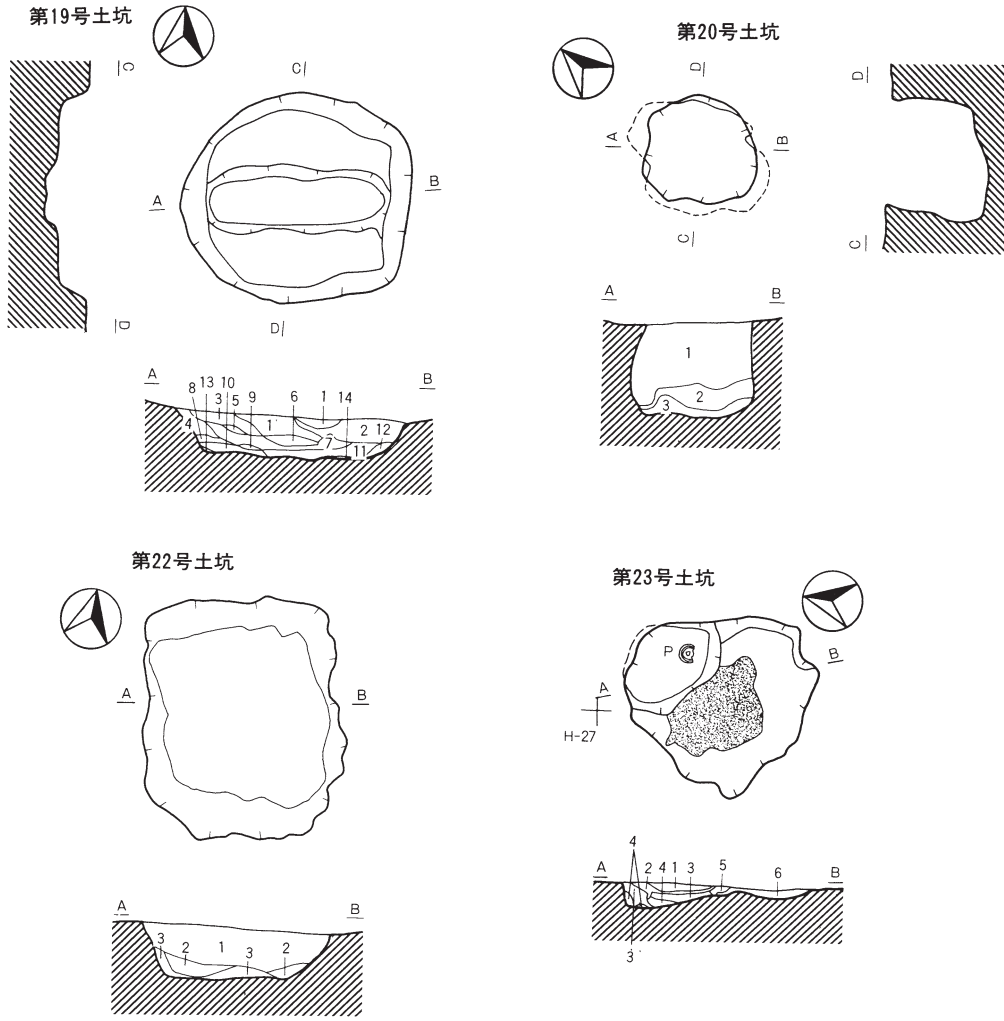
第１層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒を少量含む。
第２層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒を少量含む。
第３層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒を少量含む。
第４層	黒　色　土	10YR2/1	硬く、しまりあり。
第５層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒を多量含む。
第６層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	粘性あり。ローム質。

第18号土坑

第１層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒を微量含む。
第２層	黒　色　土	10YR2/1	
第３層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒を微量含む。
第４層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒を微量含む。
第５層	にぶい黄橙色土	10YR6/4	硬く、しまりあり。

0　2m

第69図　土　　坑（２）



第19号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・炭化物を含む。
第2層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒・炭化物を含む。
第3層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒・炭化物を含む。
第4層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・炭化物を含む。
第5層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・炭化物を含む。
第6層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・炭化物、焼土を含む。
第7層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒・炭化物を含む。
第8層	黒褐色土	10YR3/4	ローム粒・炭化物、焼土を含む。
第9層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒を微量含む。
第10層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒・炭化物、焼土、灰を含む。
第11層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒、焼土を含む。
第12層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒・炭化物、焼土、灰を含む。
第13層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒・炭化物、焼土、灰を含む。
第14層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒・炭化物を含む。

第20号土坑

第1層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒を微量含む。
第2層	黒褐色土	10YR3/1	ロームブロックを多量含む。
第3層	にぶい黄橙色土	10YR6/3	軟らかく、粘性あり。

第22号土坑

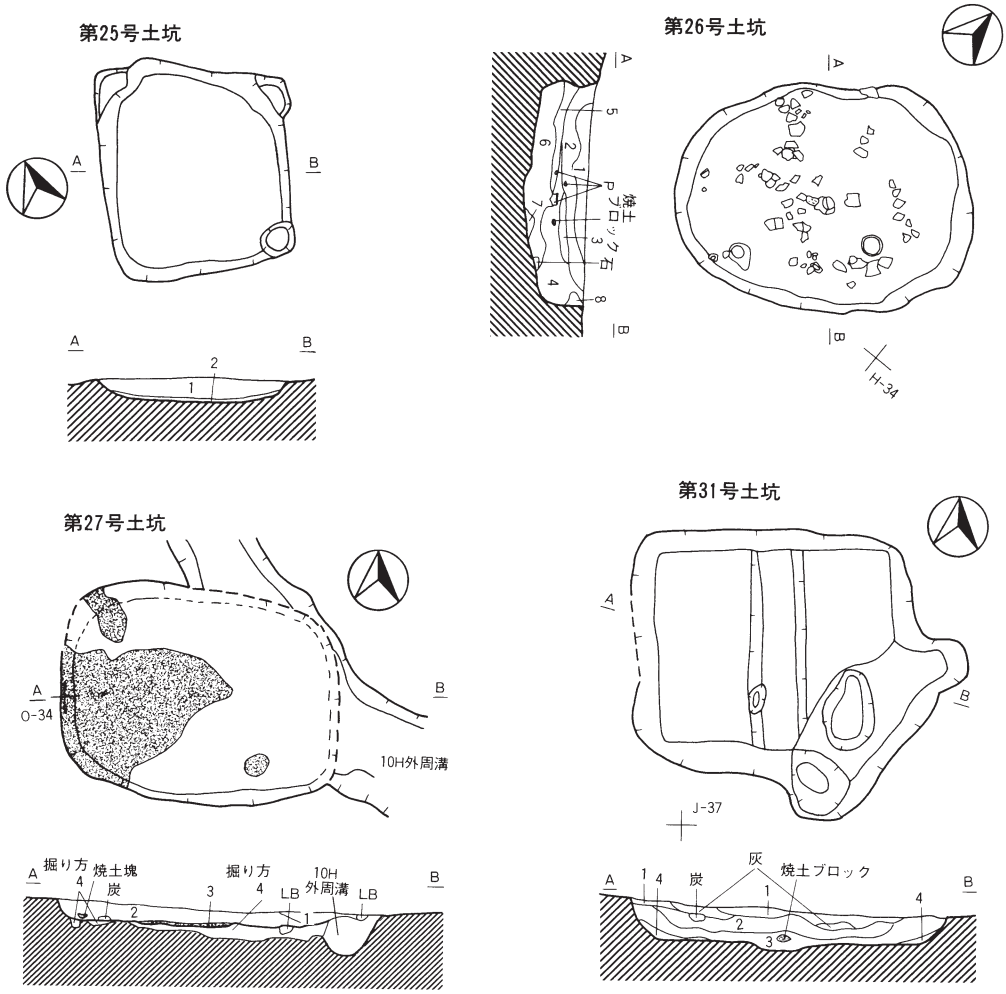
第1層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒を少量含む。
第2層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒を多量含む。
第3層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	やや硬く、ローム質土。

第23号土坑

第1層	黒　色　土	10YR2/1	焼土を少量含む。
第2層	黒褐色土	10YR3/1	焼土を多量含む。
第3層	黒　色　土	N1.5/0	
第4層	黒褐色土	10YR3/1	ロームを多量含む。
第5層	黒褐色土	10YR3/2	硬く、ロームを多量含む。
第6層	黒　色　土	10YR2/1	ロームを少量含む。

0　2m

第70図　土　　坑(3)



第25号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/3	軟らかく、ローム粒を中量含む。壁面は部分的に焼土化している。
第2層	黒色土	10YR2/1	軟らかく、小枝状の炭化物を多量含む。底面は部分的に焼土化している。

第26号土坑

第1層	黒色土	10YR1.7/1	確認面にB－Tmと思われる火山灰あり。ローム粒および焼土粒を微量含む。
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム粒、焼土粒そして炭化物を少量含む。
第3層	黒褐色土	10YR2/2	焼土粒を多量含む。炭化物を微量含む。
第4層	黒色土	10YR2/1	ローム粒、焼土ブロックそして炭化物を少量含む。
第5層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	粘性あり。ロームを多量含む。焼土ブロックおよび粘土を少量含む。
第6層	黒褐色土	10YR2/2	ロームブロックを多量含む。炭化物を微量含む。
第7層	灰黄褐色土	10YR4/2	硬く、非常にしまりあり。ロームを多量含む。
第8層	黒褐色土	10YR3/1	ロームを多量含む。

第27号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒を微量含む。
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム塊・ローム粒を少量含む。
第3層	赤褐色土	2.5YR4/6	焼土。硬く、底面が焼けている。
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊・ローム粒を多量含む。

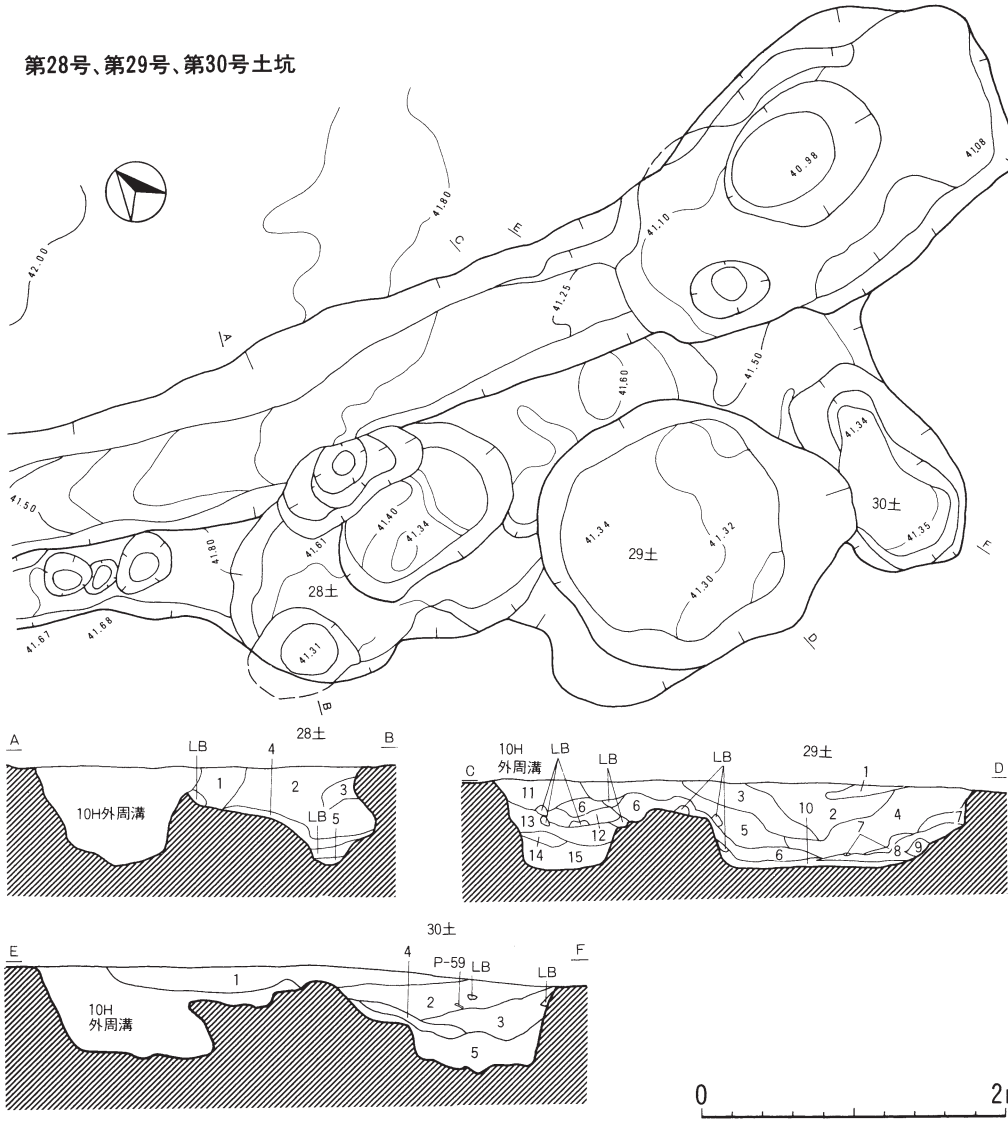
第31号土坑

第1層	黒色土	10YR2/1	軟らかく、しまりなし。炭化物・灰を多量含む。炭化物は一部焼けていないものもある。
第2層	黒色土	10YR2/1	軟らかく、焼土粒を微量含む。
第3層	黒色土	10YR2/1	軟らかく、焼土粒を少量含む。
第4層	暗赤褐色土	5YR3/6	硬く、黒～黒褐色土を斑状に含む。底面～壁面は焼けて、硬い。

0　2m

第71図　土　坑(4)

第28号、第29号、第30号土坑



第29号土坑

第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量含む。
第2層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒、炭化物微量含む。
第3層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量含む。
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量含む。
第5層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒と炭化物少量含む。
第6層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量含む。
第7層	黄褐色土	10YR5/6	ローム質。
第8層	褐色土	10YR4/4	ローム粒多量含む。
第9層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒微量。
第10層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ローム質。
第11層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒多量含む。
第12層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量含む。
第13層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒少量含む。
第14層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量含む。
第15層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒多量含む。

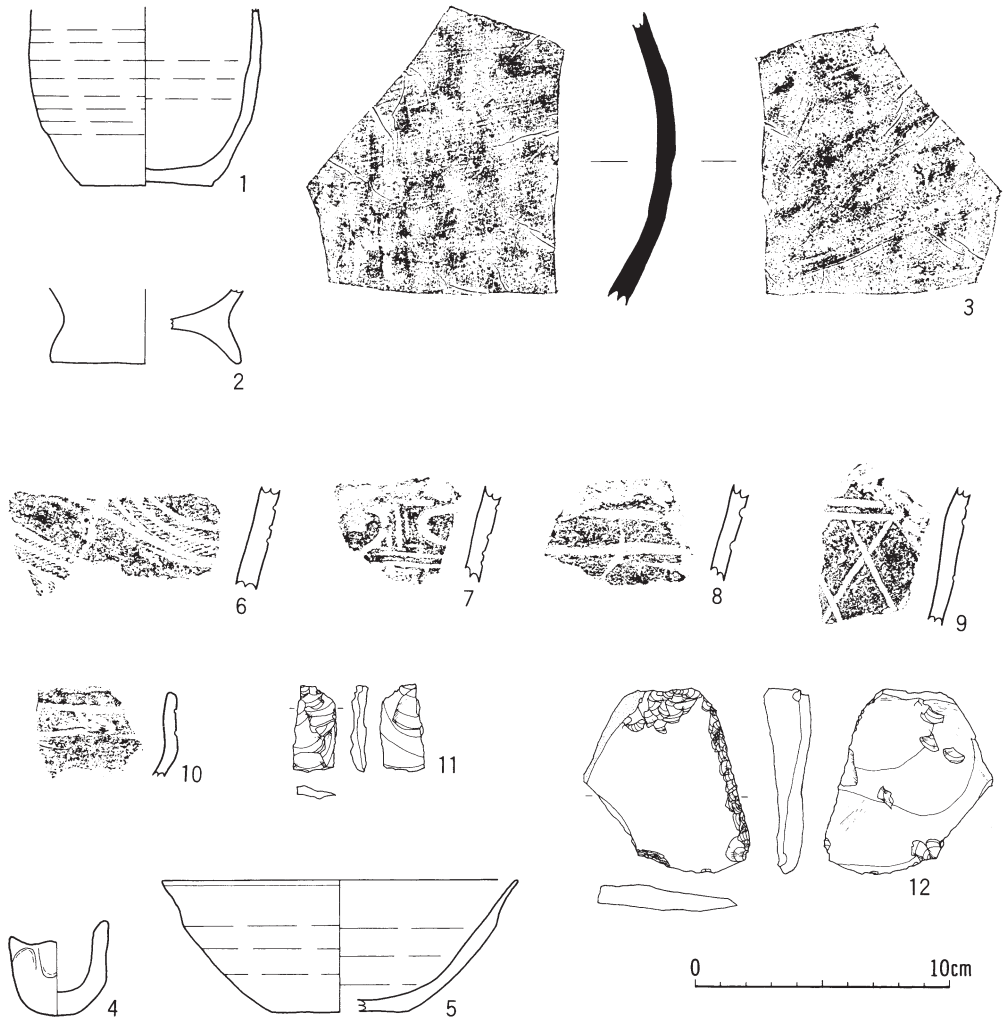
第28号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒中量含む。
第2層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒ごく微量含む。
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量含む。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・炭化物含む。
第5層	褐色土	10YR4/4	ローム質。

第30号土坑

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒、炭化物少量含む。
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒、炭化物微量含む。
第3層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量含む。
第4層	褐色土	10YR4/4	ローム質。
第5層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒多量含む。

第72図　土　　坑(5)

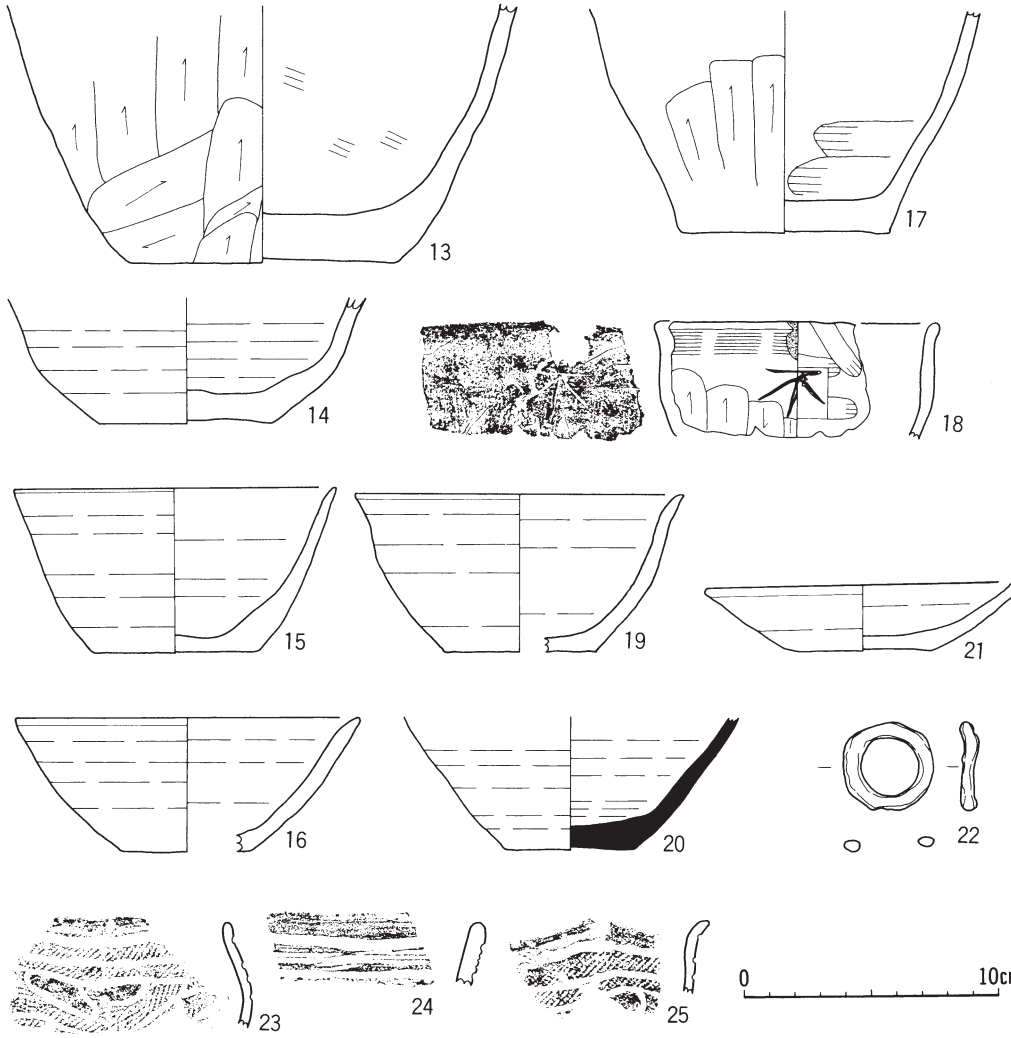


番号	種類	器種	部位	出土位置	計測置(cm) 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
1	土師器	小甕	体部半分	6土確認面・6土フク土,J-21Ⅰ層	—	5.2	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切		P-2
2	縄文土器	高台付坏	底部	6土フク土	—	7.5	—	—	—	—		
3	須恵器	長頸壺	胴部	6土フク土	—	—	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	—		胎土分析番号7(五所川原群産)
4	土師器	ミニチュア土器	完形	11土フク土	3.8	1.8	3.6	指圧痕	—	—		手捏ね、P-1
5	土師器	坏	体部半分	18土フク土(J-24)	(14.0)	(5.2)	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Ⅰb	

図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
6	6土フク土	沈線文、磨消縄文(RL)	J—93	
7	6土フク土	沈線文	J—94	
8	6土フク土	沈線文	J—95	
9	6土フク土	沈線文	J—96	
10	6土フク土	沈線文	J—97	

図番号	器種	出土地・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	整理番号	備考
11	フレイク	6土フク土	34	16	5	3.0	珪質頁岩	27	
12	不定形石器	6土フク土	74	57	16	62.5	珪質頁岩	28	

第73図　土坑出土遺物(1)



番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
13	土師器	甕	底部	26土フク土	—	10.4	—	ヘラケズリ	ナデ	—		P-38
14	土師器	甕	底部	23土底面直上	—	6.9	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切		
15	土師器	坏	体部半分	26土フク土	(12.6)	6.6	6.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Ⅰb	P-54
16	土師器	坏	体部半分	26土フク土	(13.6)	(5.0)	5.3	ロクロ	ロクロ	—	Ⅰb	P-53
17	土師器	甕	底部	26土フク土	—	8.3	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	—		P-36
18	土師器	小甕	口縁部	26土フク土	(11.0)	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ	—		線刻記号「不」、P-49
19	土師器	坏	体部上半	26土フク土	(13.0)	(6.0)	6.2	ロクロ	ロクロ	—	Ⅰb	
20	須恵器	坏	体部下半	26土フク土	—	(5.2)	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切		胎土分析番号8(産地不明)、P-10・21
21	土師器	皿	完形	26土フク土	12.4	5.4	2.6	ロクロ	ロクロ	—		P-55

番号	出土位置	最大計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	種類	備考
22	26土フク土	35	35	6	6	環状鉄製品	F-3

図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
23	26土フク土	沈線文、磨消縄文（RL）	J—109	
24	26土フク土	櫛目状沈線文	J—110	
25	26土フク土	沈線文、磨消縄文（RL）	J—111	

第74図　土坑出土遺物(2)

3　焼土遺構（第75図～第80図）

21基確認したが、第20号以外は全て29ラインより南から検出された。そのいくつかは群を形成するように分布する。第２表に一覧表として載せる。

第２表　焼 土 遺 構 一 覧 表

No.	位　　置	長軸×短軸×深さ(cm)	平面形	分層	形　　態	出土遺物
1	Q－37	380×310×25	不整円形	5層	掘り込み	
2	N・O－38	295×255×23	不整楕円形	8層	掘り込み	
3	N－37	190×150×25	ほぼ円形	5層	盛り土	
4	M－38・39	190×120×23	不整楕円形	2層	盛り土～掘り込み	
5	J－35・36	590×230×35	不整楕円形	9層	掘り込み	
6	J－34・35	220×150×30	不整楕円形	4層	掘り込み	
7	J－32・33	220×150×40	不整楕円形	5層	掘り込み	
8	H－29	94×82×15	ほぼ円形	3層	掘り込み	土師器甕破片1点，自然石1点
9	F－31	210×190×24	不整円形	3層	掘り込み	
10	E－31	114×102×17	不整円形	2層	半掘り込み	
11	E・F－31・32	270×230×30	不整円形	3層	盛り土～掘り込み	
12	F－32・33	267×195×28	楕円形	4層	掘り込み	
13	H－39	30×23×13	円形	3層	掘り込み	
14	H・I－37・38	320×164×29～52	不整楕円形	7層	掘り込み	
15	F・G－38	320×245×30	ほぼ楕円形	5層	掘り込み	
16	N・O－30・31	375×115×15	不整楕円形	3層	掘り込み	
17	E・F－37	70×45×8	不整楕円形	5層	掘り込み	
18	E・F－33	109×66×13	不整楕円形	3層	掘り込み	
19	E－32・33	216×－×42	不明	3層	掘り込み	
20	G－17	95×95×51	円形	5層	掘り込み	土師器甕破片11点
21	J・K－21	170×82×19	ほぼ楕円形	2層	盛り土	

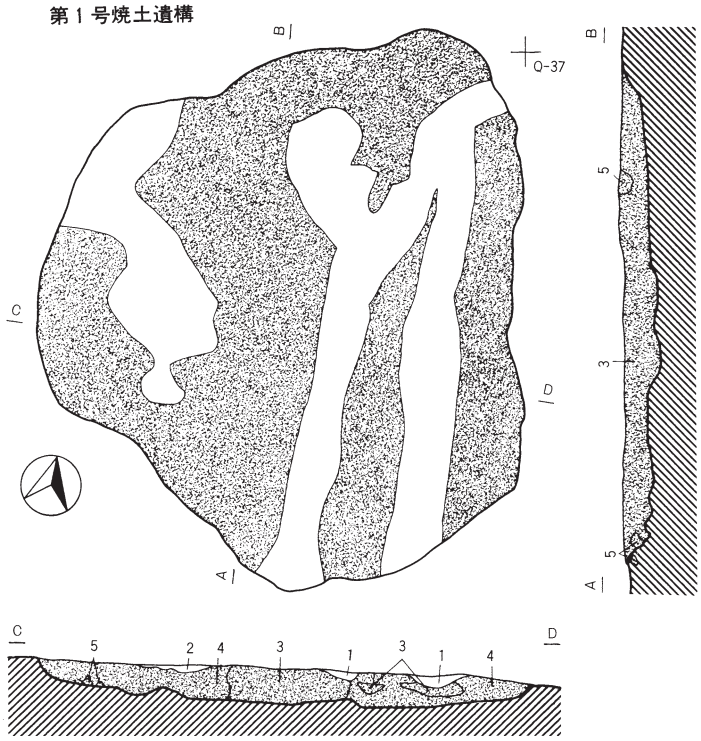
この中で、第13号は極めて小規模、第17号は小規模である。第16号は大１基、小３基の計４基で構成され、それぞれ不整楕円形を呈する。第19号は東側が調査区外、第20号は土坑のように掘り込みが深い。

また、他の遺構と重複関係にあるのは、第７号、第13号、第14号の３基である。第７号焼土は第２号溝に切られており、この溝より古い。第13号焼土は第１号溝に切られており、この溝より古い。第14号焼土は第１・２号溝に切られており、両溝より古い。

第８号及び第20号焼土からは土師器の甕破片が出土していることから、これら２基については平安時代に構築されたものと考えられる。他の19基の焼土遺構については、確認状況より平安時代以降に構築・廃棄されたものと考えられる。

（伊藤昭雄）

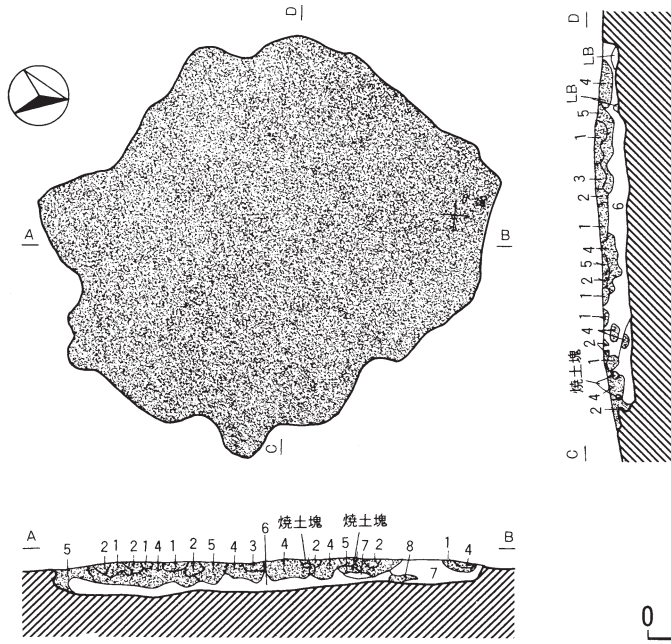
第１号焼土遺構



第１号焼土遺構

第１層　黒色土　10YR1.7/1
軟らかく、湿性あり。
第２層　暗褐色土　10YR3/4
やや軟らかく、湿性あり。
第３層　黄褐色土　10YR5/6
焼土、ローム粒を多量含む。
第４層　黒褐色土　10YR2/3
焼土を中量含む。硬く、しまりあり。
第５層　褐色土　7.5YR4/6
焼土塊。

第２号焼土遺構



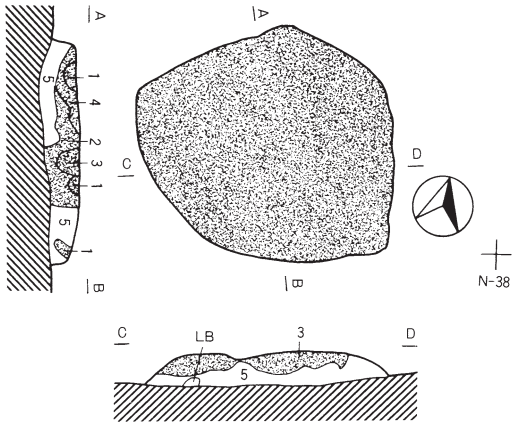
第２号焼土遺構

第１層　明褐色土　7.5YR5/8
焼土。硬く、しまりあり。
第２層　黒褐色土　10YR2/2
焼土を少量含む。
第３層　褐色土　7.5YR4/4
20～30㎜の焼土塊を多量含む。硬く、しまりあり。
第４層　暗褐色土　10YR3/4
軟らかく、しまりなし。焼土、ローム粒を中量含む。
第５層　褐色土　7.5YR4/6
焼土を多量含む。
第６層　黒色土　10YR2/1
焼土、ローム粒を微量含む。
第７層　黒褐色土　10YR2/2
軟らかく、しまりなし。焼土、ローム粒を微量含む。
第８層　黒褐色土　10YR2/2
３～４㎜の焼土を中量含む。硬く、しまりあり。

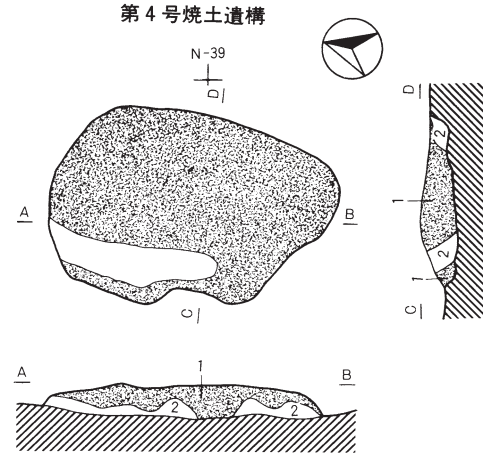
0　2m

第75図　焼土遺構（１）

第３号焼土遺構



第４号焼土遺構



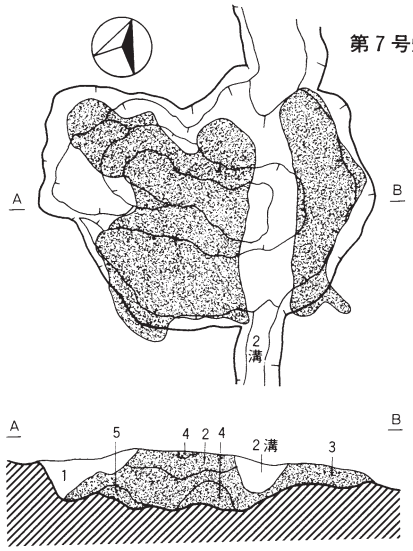
第３号焼土遺構

第１層	暗褐色土	7.5YR3/4	焼土を多量含む。硬く、しまりあり。
第２層	黒褐色土	10YR2/3	焼土を中量含む。硬く、しまりあり。
第３層	暗褐色土	10YR3/4	焼土を中量含む。しまりあり。
第４層	黒褐色土	10YR2/2	焼土を少量含む。しまりあり。
第５層	黒　色　土	10YR2/1	焼土を微量含む。湿性、しまりあり。

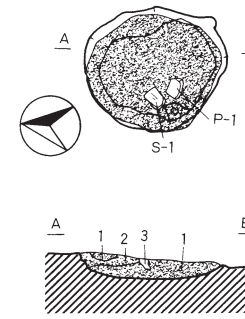
第４号焼土遺構

第１層	褐　色　土	7.5YR4/6	焼土を多量含む。
第２層	黒　色　土	10YR2/1	焼土、ローム粒を微量含む。

第７号焼土遺構



第８号焼土遺構



第７号焼土遺構

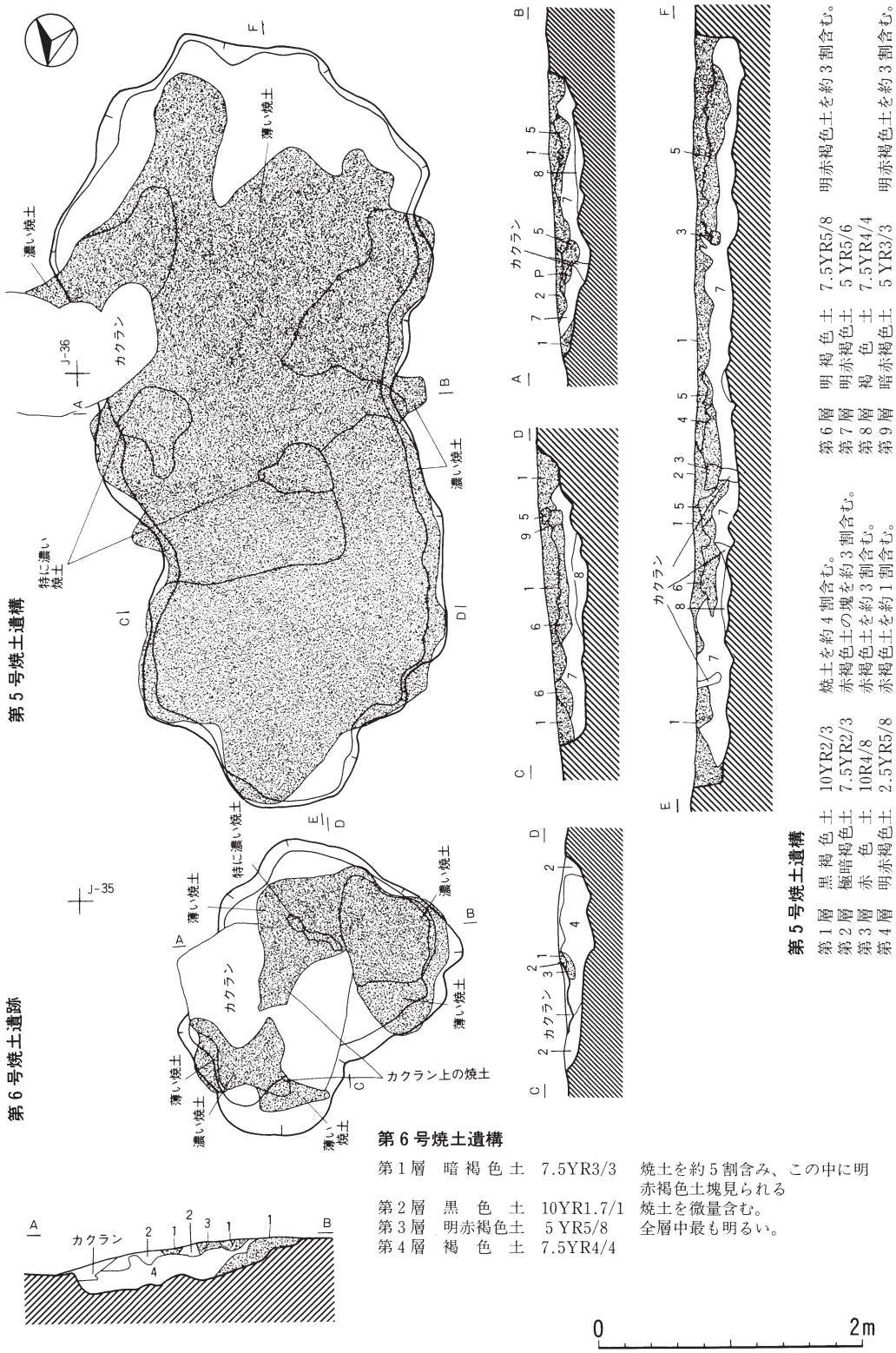
第１層	黒　色　土	10YR1.7/1	焼土を微量含む。
第２層	黒褐色土	10YR2/3	焼土を少量含む。
第３層	褐　色　土	10YR4/4	焼土を多量含む。
第４層	黒褐色土	10YR3/1	焼土を少量含む。
第５層	黒　色　土	10YR2/1	焼土を少量含む。

第８号焼土遺構

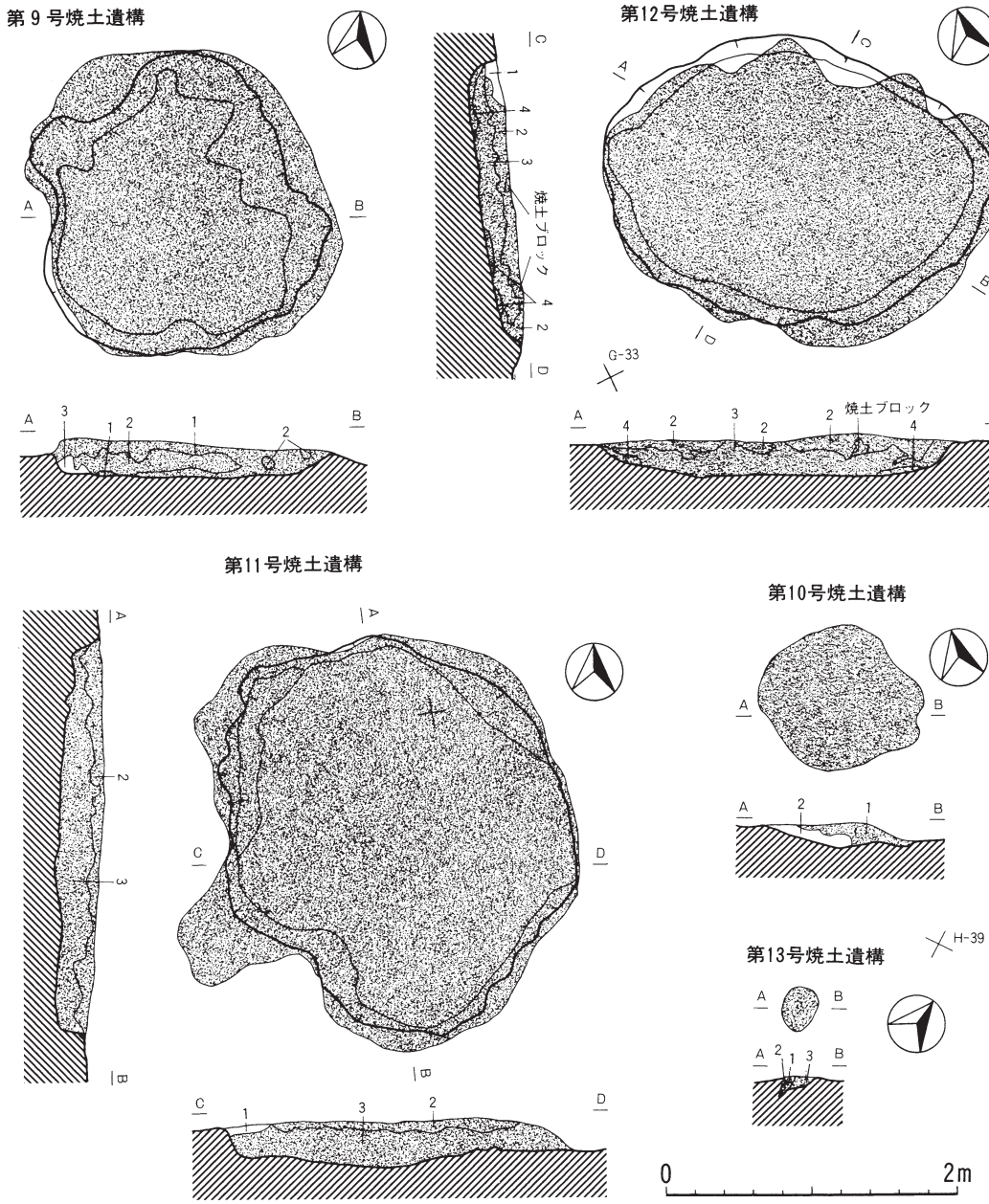
第１層	褐　色　土	10YR4/4	非常にしまりあり。粘性あり。全体的にローム質で、硬い。径１～２cmの粘土ブロックを多量含む。焼土粒を少量、炭化物を微量含む。
第２層	橙　色　土	5 YR6/6	硬く、しまりあり。ローム粒を少量含む。
第３層	黒　色　土	10YR2/1	

0　2m

第76図　焼土遺構（２）


第5号焼土遺構
第6号焼土遺跡
J-36
J-35
カクラン
濃い焼土
薄い焼土
特に濃い焼土
カクラン上の焼土
第6号焼土遺構
第1層　暗褐色土　7.5YR3/3　焼土を約5割含み、この中に明赤褐色土塊見られる
第2層　黒　色　土　10YR1.7/1　焼土を微量含む。
第3層　明赤褐色土　5YR5/8　全層中最も明るい。
第4層　褐　色　土　7.5YR4/4
第5号焼土遺構
第1層　黒褐色土　10YR2/3　焼土を約4割含む。
第2層　極暗褐色土　7.5YR2/3　赤褐色土の塊を約3割含む。
第3層　赤　色　土　10R4/8　赤褐色土を約3割含む。
第4層　明赤褐色土　2.5YR5/8　赤褐色土を約1割含む。
第5層　明赤褐色土　5YR5/8　明赤褐色土を約3割含む。
第6層　明褐色土　7.5YR5/8　明赤褐色土を約3割含む。
第7層　明赤褐色土　5YR5/6
第8層　褐　色　土　7.5YR4/4
第9層　暗赤褐色土　5YR3/3　明赤褐色土を約3割含む。
0
2m

第77図　焼土遺構（3）



第９号焼土遺構

第１層	黒　色　土	N2/0	暗赤褐色土を少量含む。
第２層	橙　色　土	7.5YR6/8	暗赤褐色土を少量含む。
第３層	黒　色　土	N1.5/0	しまりあり。

第10号焼土遺構

第１層	黒　色　土	10YR2/1	赤褐色焼土を少量含む。
第２層	黒　色　土	10YR1.7/1	赤褐色焼土を微量含む。

第11号焼土遺構

第１層	黒　色　土	10YR1.7/1	赤褐色焼土を微量含む。
第２層	黒　色　土	10YR2/1	赤褐色焼土を多量含む。
第３層	明赤褐色土	10YR5/8	焼土。

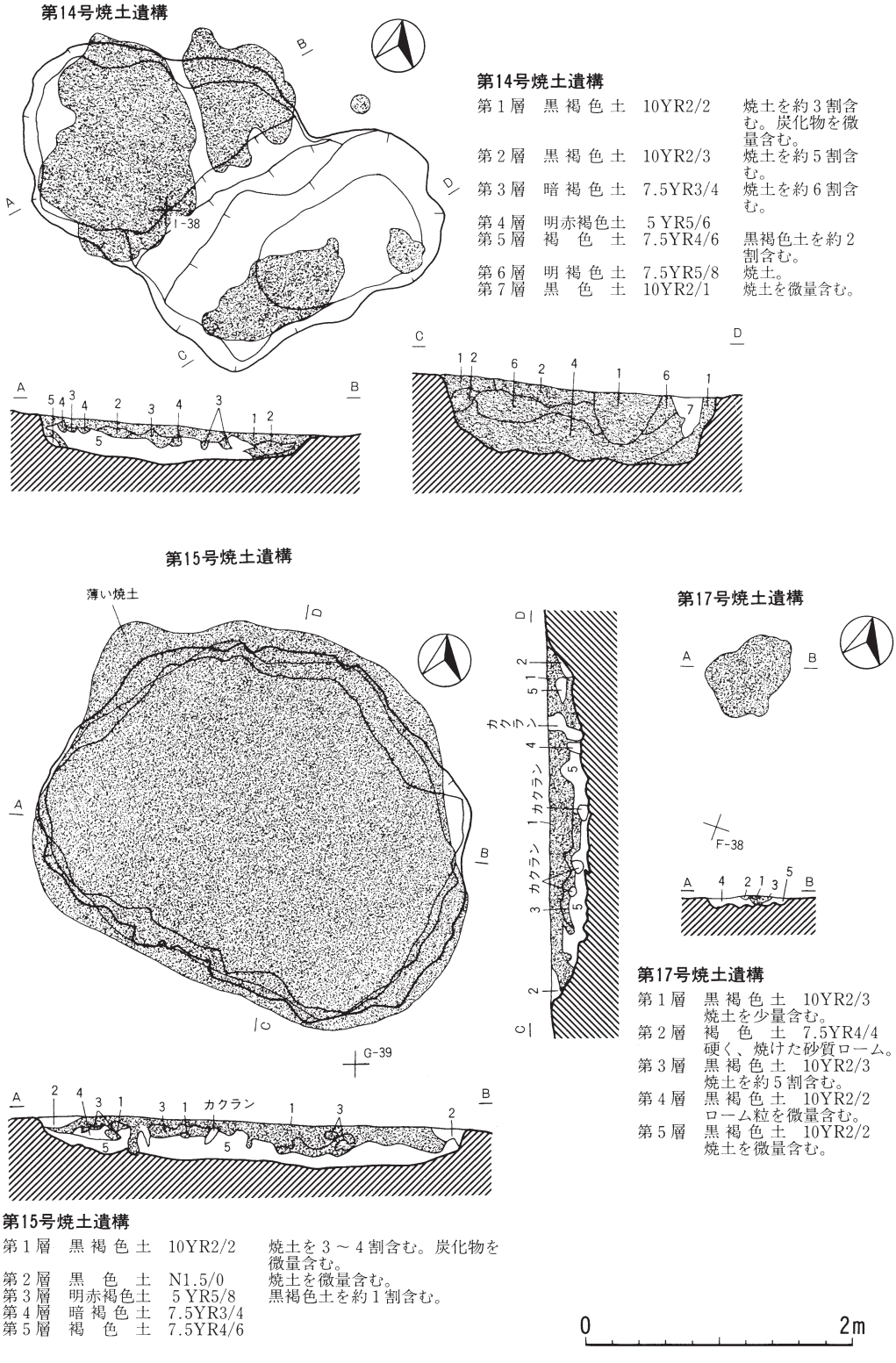
第12号焼土遺構

第１層	黒　色　土	10YR2/1	焼土を微量含む。
第２層	黒褐色土	7.5YR2/2	焼土塊少量含む。
第３層	褐　色　土	7.5YR4/6	焼土。
第４層	黒　色　土	10YR2/1	焼土を少量含む。

第13号焼土遺構

第１層	黒褐色土	7.5YR2/2	焼土を約４割含む。
第２層	褐　色　土	7.5YR4/4	焼土を約８割、灰を微量含む。
第３層	黒　色　土	10YR1.7/1	焼土を少量含む。

第78図　焼土遺構（４）



第14号焼土遺構

第1層	黒褐色土	10YR2/2	焼土を約3割含む。炭化物を微量含む。
第2層	黒褐色土	10YR2/3	焼土を約5割含む。
第3層	暗褐色土	7.5YR3/4	焼土を約6割含む。
第4層	明赤褐色土	5YR5/6	
第5層	褐色土	7.5YR4/6	黒褐色土を約2割含む。
第6層	明褐色土	7.5YR5/8	焼土。
第7層	黒色土	10YR2/1	焼土を微量含む。

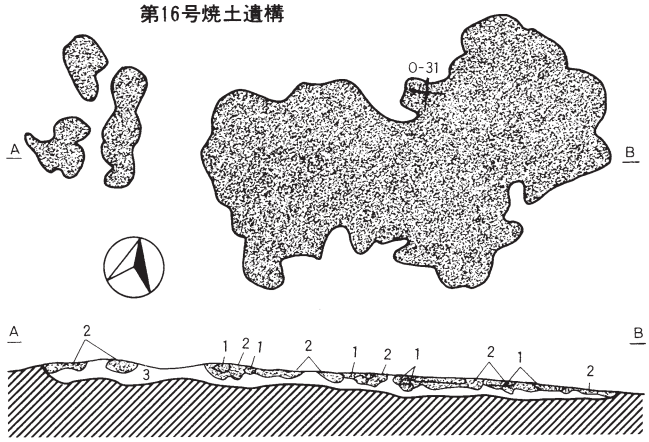
第15号焼土遺構

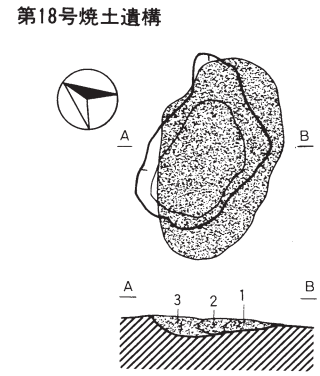
第1層	黒褐色土	10YR2/2	焼土を3～4割含む。炭化物を微量含む。
第2層	黒色土	N1.5/0	焼土を微量含む。
第3層	明赤褐色土	5YR5/8	黒褐色土を約1割含む。
第4層	暗褐色土	7.5YR3/4	
第5層	褐色土	7.5YR4/6	

第17号焼土遺構

第1層	黒褐色土	10YR2/3	焼土を少量含む。
第2層	褐色土	7.5YR4/4	硬く、焼けた砂質ローム。
第3層	黒褐色土	10YR2/3	焼土を約5割含む。
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒を微量含む。
第5層	黒褐色土	10YR2/2	焼土を微量含む。

第79図　焼土遺構（5）



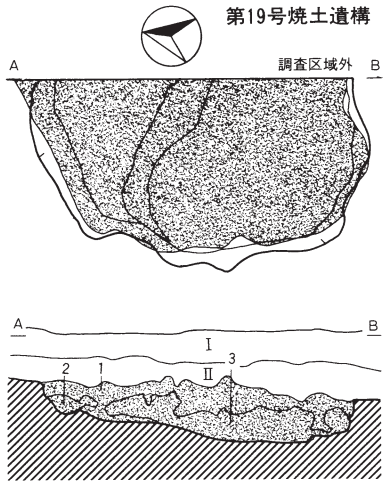


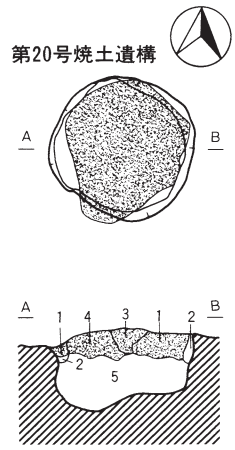
第16号焼土遺構

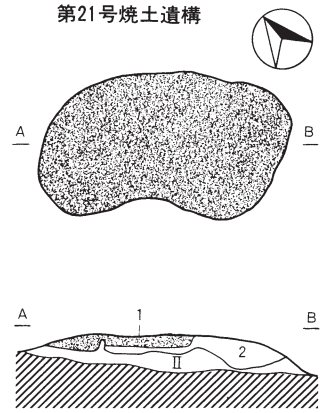
第１層　褐　色　土　10YR4/6　　焼土。
第２層　黒 褐 色 土　10YR2/3　　焼土を少量含む。
第３層　黒　色　土　10YR1.7/1　ローム粒を微量含む。

第18号焼土遺構

第１層　黒　色　土　10YR1.7/1　焼土を含む。
第２層　暗 褐 色 土　10YR3/3　　焼土を含む。
第３層　黒　色　土　10YR1.7/1　暗褐色土を少量含む。
　　焼土を含む。







第19号焼土遺構

第１層　黒 褐 色 土　10YR2/2　　軟らかく、焼土を６割含む。
第２層　褐　色　土　7.5YR4/4　　焼土。褐色土を４割含む。
第３層　明赤褐色土　５YR5/8　　焼土。やや硬く、しまりあり。褐色土を１割含む。

第20号焼土遺構

第１層　黒 褐 色 土　10YR2/2　　焼土を少量含む。炭化物を含む。
第２層　暗 褐 色 土　10YR3/3　　ローム粒を多量含む。
第３層　黒 褐 色 土　10YR2/3　　焼土、ローム粒を少量含む。炭化物を含む。
第４層　褐　色　土　7.5YR4/4　　焼土を多量含む。
第５層　黒 褐 色 土　10YR2/2　　ローム粒を少量、焼土を微量含む。炭化物を含む。

第21号焼土遺構

第１層　黒　色　土　7.5YR1.7/1 硬く、粘性あり。焼土を少量含む。焼土塊あり。
第２層　黒　色　土　10YR2/1　　焼土を微量含む。

0　　2m

第80図　焼土遺構（６）

4　溝　跡

第1号溝跡（第81図・第86図）

［位置］O－9～G－42グリッドに位置している。

［重複］第1号・第7号住居跡、第13号・第14号焼土遺構及び第4号溝跡の5遺構と重複しており、全てにおいて本遺構の方が新しい。

［規模］幅60cm～90cm、深さ65cm～80cmで、135mほどの長さを検出した。

［堆積土］4層に区分できた。軟らかい黒色～黒褐色土が主体である。

［出土遺物］覆土より、縄文時代の土器片9点、平安時代の土師器甕等片32点、同坏片4点、ミニチュア土器1点が出土した。

［時期］遺構の重複関係及び堆積土の状況から、平安時代以降に構築されたものと考えられるが、正確な時期は不明である。近代から現代にかけての可能性もある。

第2号溝跡（第81図）

［位置］O－11～H－40グリッドに位置している。

［重複］第1号・第2号・第7号住居跡、第7号・第14号焼土遺構及び第4号溝跡の6遺構と重複しており、全てにおいて本遺構の方が新しい。

［規模］幅30cm～48cm、深さ20cm～30cmで、120mほどの長さを検出した。

［堆積土］2層に区分できた。主体は、やや硬くしまりのある黒褐色土である。

［出土遺物］覆土より、縄文時代の土器片1点、平安時代の土師器甕等破片が8点、同坏片が2点、須恵器大甕片が1点出土した。

［時期］遺構の重複関係及び堆積土の状況から、平安時代以降に構築されたものと考えられるが、正確な時期は不明である。近代から現代にかけての可能性もある。第1号溝跡とセットになって構築されたものと考えられる。

第3号溝跡（第82図・第86図）

［位置］M－8～E－20グリッドに位置している。

［重複］第4号溝跡及び小ピット群と重複しており、本遺構の方が新しい。また、5号溝跡北端とも重複しているが、ここでの新旧関係は不明である。

［規模］幅105cm～150cm、深さ43cm～70cmで、62mほどの長さを検出した。K・J－16グリッドで緩くカーブする。

［堆積土］10層に区分できた。軟らかい黒色～黒褐色土が主体である。

［出土遺物］覆土より、縄文時代の土器片が180点、石器７点(スクレイパー１点、フレイク６点)、平安時代の土師器甕等破片13点、同坏片７点、須恵器の甕破片が１点出土した。

［時期］遺構の重複関係及び堆積土の状況から、平安時代以降に構築されたものと考えられるが、正確な時期は不明である。

第４号溝跡（第83図・第86図）

［位置］O－15・16～I－16グリッドに位置している。

［重複］第１号、第２号、第３号溝跡及び第15号土坑の４遺構と重複しており、全てにおいて本遺構の方が古い。

［規模］幅55cm～80cm、深さ15cm～55cmで、24.4mほどの長さを検出した。

［堆積土］６層に区分できた。全体にローム粒・ロームブロックを含む黒色～暗褐色土及び褐色土である。

［出土遺物］覆土から、縄文時代の土器片が４点出土した。

［時期］遺構の重複関係、出土遺物及び堆積土の状況から、縄文時代以降に構築されたものと考えられるが、正確な時期は不明である。

第５号溝跡（第84図）

［位置］G－19～H－29グリッドに位置している。

［重複］第11号住居跡と重複しており、本遺構の方が新しい。また、北端が第３号溝跡と、南端が第７号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

［規模］幅35cm～55cm、深さ８cm～19cmで、45.5mほどの長さを検出した。

［堆積土］４層に区分できた。主体は黒色～黒褐色土である。

［出土遺物］覆土より、平安時代の土師器甕等破片が４点、同坏片が１点出土した。

［時期］遺構の重複関係及び堆積土の状況から、平安時代以降に構築されたものと考えられるが、正確な時期は不明である。近代から現代にかけての可能性もある。第６号溝跡とセットになって構築された可能性も考えられる。

第６号溝跡（第84図・第86図）

［位置］F－21～F－37グリッドに位置している。

［重複］中央部付近で第７号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

［規模］幅45cm～80cm、深さ８cm～18cmで、48.8mほどの長さを検出した。

［堆積土］３層に区分できた。主体は黒色～黒褐色土である。

［出土遺物］G－28グリッド内覆土より、須恵器長頸壺の口縁・頸部が１点出土した。他に土師器甕等の破片７点が出土している。

［時期］出土遺物及び堆積土の状況から、10世紀前半に構築された可能性が高い。

第７号溝跡（第82図）

［位置］H－30～E－30グリッドに位置している。

［重複］第５号、第６号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

［規模］幅25cm～45cm、深さ８cm～17cmで、13mほどの長さを検出した。

［堆積土］黒色土の１層のみである。

［出土遺物］覆土より平安時代の土師器坏片が１点出土した。

［時期］出土遺物及び堆積土の状況から、平安時代以降に構築されたものと考えられるが、正確な時期は不明である。

第８号溝跡（第82図）

［位置］L－22～I－33グリッドに位置している。

［重複］なし。

［規模］幅12cm～35cm、深さ２cm～10cmで、42.6mほどの長さを検出した。

［出土遺物］覆土より土師器甕等の破片が２点出土した。

［時期］出土遺物及び堆積土の状況から、平安時代以降に構築されたものと考えられるが、正確な時期は不明である。

第９号溝跡（第85図）

［位置］K－17～L－19グリッドに位置している。

［重複］なし。

［規模］幅10cm～35cm、深さ２cm～11cmで、11mほどの長さを検出した。

［堆積土］黒色土の１層のみである。

［出土遺物］なし。

［時期］不明である。

第10号溝跡（第84図）

［位置］I－15・16グリッドに位置している。

［重複］なし。

［規模］幅55cm～100cm、深さ17cm～30cmで、４ｍほどの長さを検出した。

［出土遺物］なし。

［時期］不明である。

第11号溝跡（第85図）

［位置］D－38～E－40グリッドに位置している。

［重複］なし。

［規模］幅22cm～32cm、深さ５cm～29cmで、７ｍほどの長さを検出した。

［出土遺物］覆土より、縄文時代か平安時代の区別のつかない土器片が４点出土した。

［時期］不明である。第12号溝跡とセットになって構築されたものと考えられる。

第12号溝跡（第85図）

［位置］D－39・40グリッドに位置している。

［重複］なし。

［規模］73cm～80cm、深さ41cm～86cmで、７ｍほどの長さを検出した。

［堆積土］土層断面図は作成していないが、主体は黒色～黒褐色土及び暗褐色土である。

［出土遺物］覆土より、縄文時代の土器片が12点、平安時代の須恵器甕等破片が２点出土した。

［時期］出土遺物及び堆積土の状況から、平安時代以降に構築されたものと考えられるが、正確な時期は不明である。

第13号溝跡（第83図）

［位置］I－38・39グリッドに位置している。

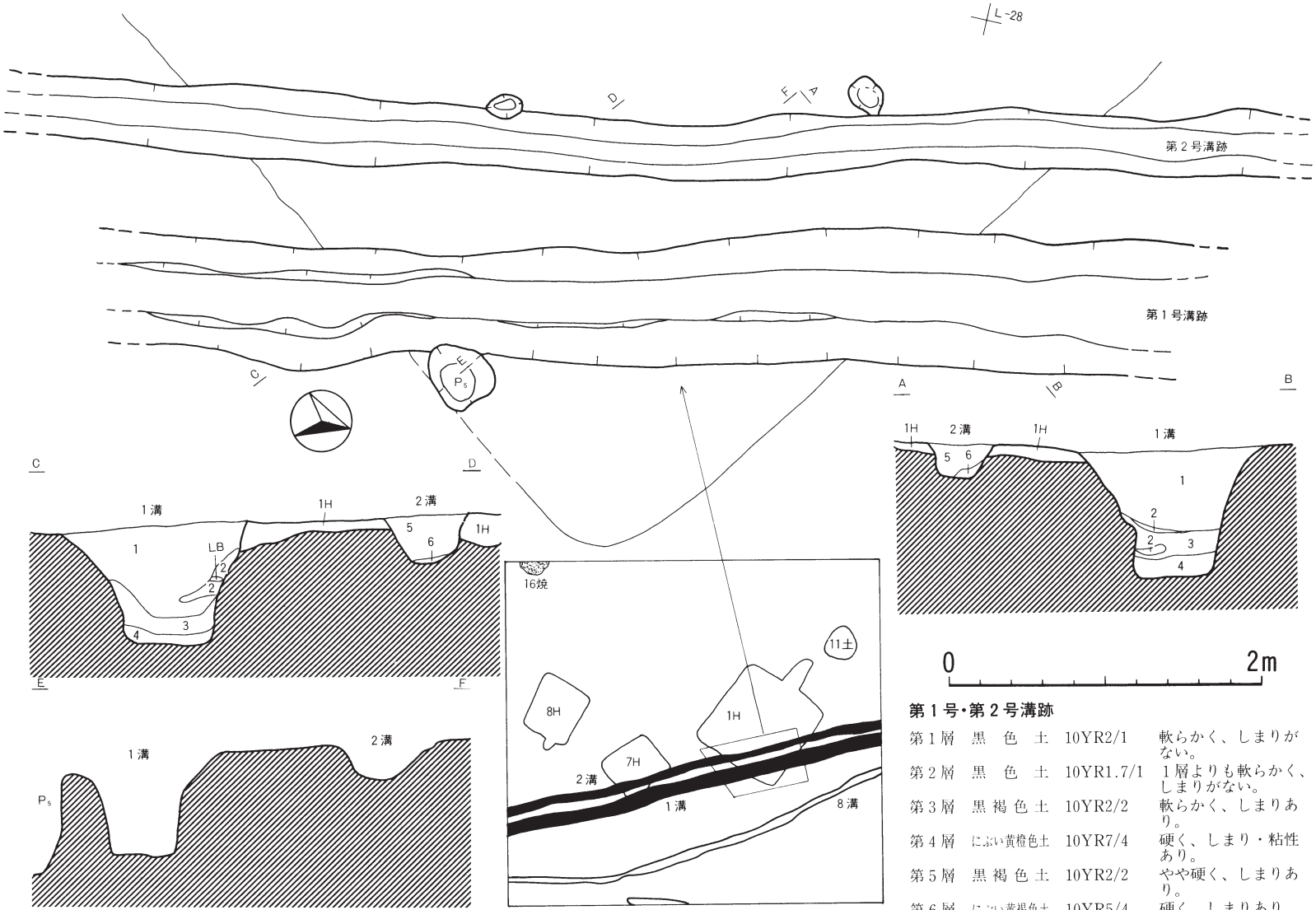
［重複］なし。

［規模］幅37cm～51cm、深さ5cm～25cmで、4.6ｍほどの長さを検出した。

［出土遺物］なし。

［時期］不明である。

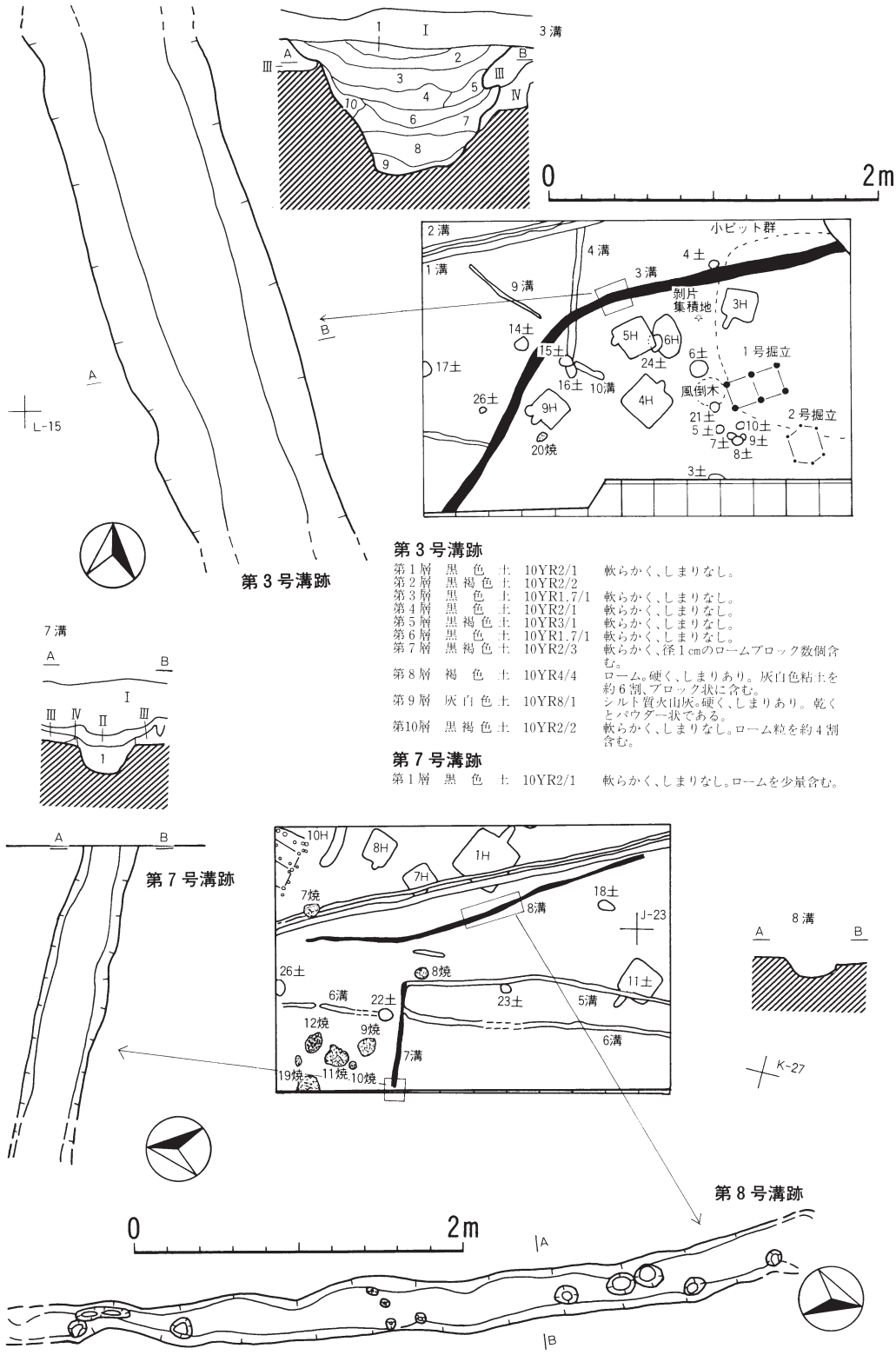
（伊藤昭雄）



第１号・第２号溝跡

第１層	黒　色　土	10YR2/1	軟らかく、しまりがない。
第２層	黒　色　土	10YR1.7/1	１層よりも軟らかく、しまりがない。
第３層	黒褐色土	10YR2/2	軟らかく、しまりあり。
第４層	にぶい黄橙色土	10YR7/4	硬く、しまり・粘性あり。
第５層	黒褐色土	10YR2/2	やや硬く、しまりあり。
第６層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	硬く、しまりあり。粘性若干あり。非常に細かい砂の粒を含む。黒色土を少量含む。

第81図　溝(1)　第１号・第２号溝跡



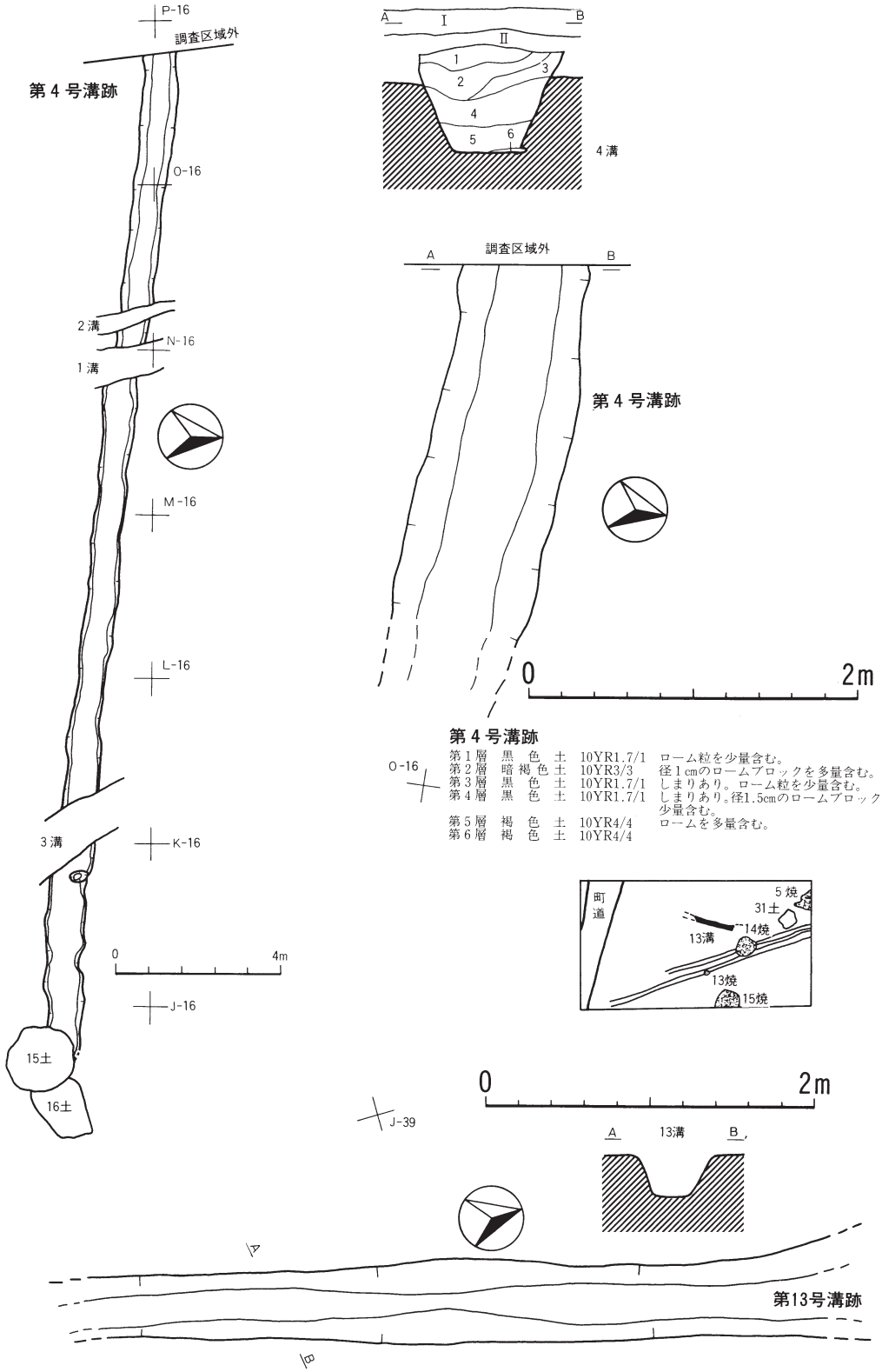
第3号溝跡

第1層	黒色土	10YR2/1	軟らかく、しまりなし。
第2層	黒褐色土	10YR2/2	
第3層	黒色土	10YR1.7/1	軟らかく、しまりなし。
第4層	黒色土	10YR2/1	軟らかく、しまりなし。
第5層	黒褐色土	10YR3/1	軟らかく、しまりなし。
第6層	黒色土	10YR1.7/1	軟らかく、しまりなし。
第7層	黒褐色土	10YR2/3	軟らかく、径1㎝のロームブロック数個含む。
第8層	褐色土	10YR4/4	ローム。硬く、しまりあり。灰白色粘土を約6割、ブロック状に含む。
第9層	灰白色土	10YR8/1	シルト質火山灰。硬く、しまりあり。乾くとパウダー状である。
第10層	黒褐色土	10YR2/2	軟らかく、しまりなし。ローム粒を約4割含む。

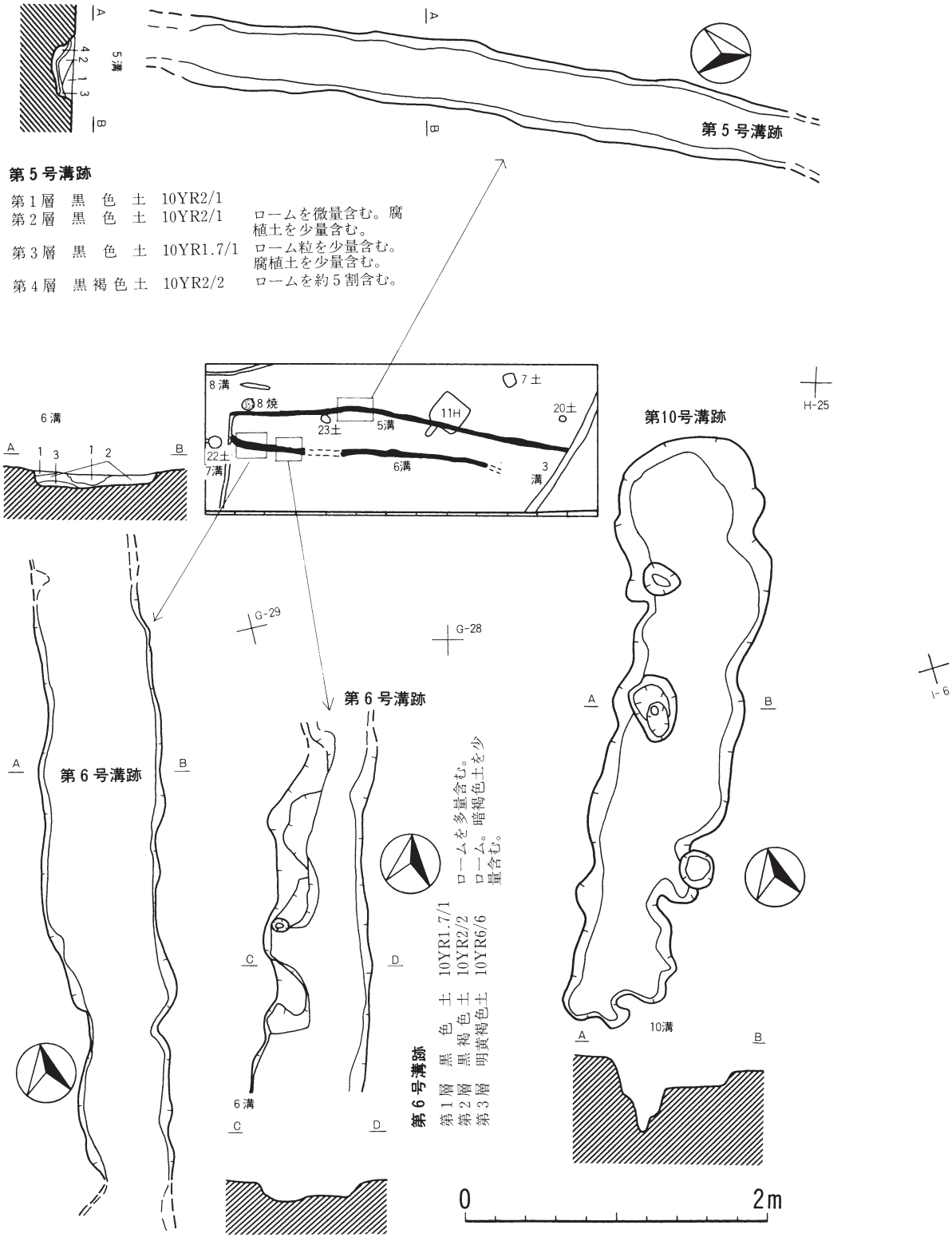
第7号溝跡

第1層	黒色土	10YR2/1	軟らかく、しまりなし。ロームを少量含む。

第82図　溝(2)　第3号・第7号・第8号溝跡



第83図　溝（３）　第４号・第13号溝跡



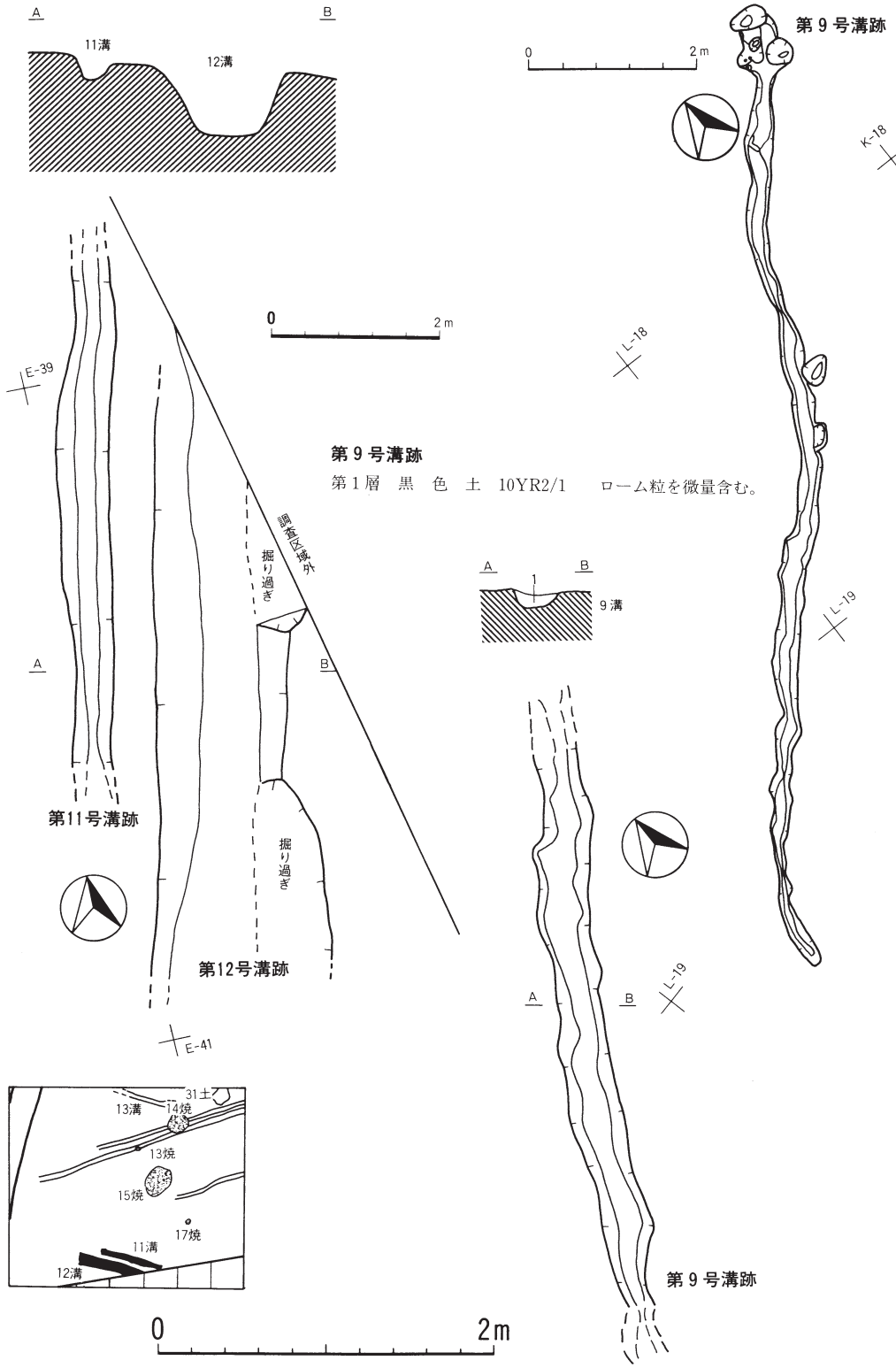
第5号溝跡

第1層	黒	色	土	10YR2/1
第2層	黒	色	土	10YR2/1 ローム を微量含む。腐植土を少量含む。
第3層	黒	色	土	10YR1.7/1 ローム粒を少量含む。腐植土を少量含む。
第4層	黒褐色		土	10YR2/2 ローム を約5割含む。

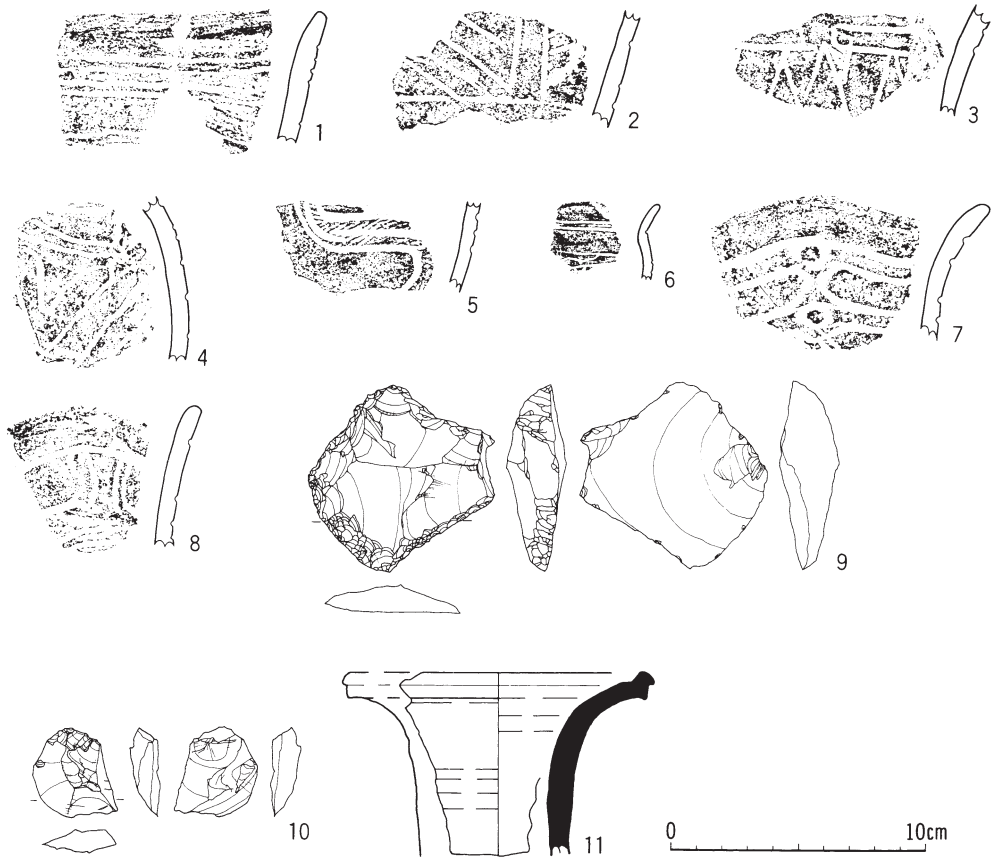
第6号溝跡

第1層	黒	色	土	10YR1.7/1 ローム を多量含む。
第2層	黒	褐	色土	10YR2/2 ローム。暗褐色土を少量含む。
第3層	明黄褐色土			10YR6/6

第84図　溝（4）　第5号・第6号・第10号溝跡



第85図　溝（5）　第 9 号・第11号・第12号溝跡



図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
1	1号溝	沈線文	J—113	O—10 グリッド
2	3号溝	沈線文	J—114	L—8 グリッド
3	3号溝	沈線文	J—115	L—9 グリッド
4	3号溝	沈線文	J—116	L—10 グリッド
5	3号溝	沈線文、磨消縄文（L）	J—117	L—12 グリッド
6	3号溝	沈線文	J—118	L—10 グリッド
7	3号溝	沈線文	J—223	L—12 グリッド
8	4号溝	沈線文	J—119	M—16 グリッド

図番号	器種	出土地・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	整理番号	備考
9	不定形石器	3号溝フク土	65	70	19	90.8	珪質頁岩	21	L—9 グリッド
10	フレイク	3号溝フク土	33	29	10	10.0	珪質頁岩	19	L—8 グリッド

番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	底径	器高					
11	須恵器	長頸壺	口縁・頸部	6号溝フク土	(11.6)	—	—	ロクロ	ロクロ	—		G-28グリッド、胎土分析番号9(五所川原群産)

第86図　溝跡出土遺物

第Ⅴ章　遺構外出土遺物

第１節　縄文時代の遺物

遺構外から出土した縄文時代の遺物は段ボール箱で22箱分である。その出土の分布は調査区域の北側－調査区域の北端の沢から15ラインまでの区域に集中している。以下、土器、石器、土製品等について記述する。

１　縄文土器

Ⅰ群土器（第87図１・２）

縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器で、数点の出土である。

Ⅱ群土器（第87図～第96図）

縄文時代後期前葉の土器で、出土土器の大部分を占めている。深鉢形土器が多く出土している。

１類　沈線文が主体の土器で、平行沈線文、円形文、楕円形文、渦巻き状文、Ｓ字状沈線文、格子状の沈線文が施文されているもの（１、２、４、５、26～66　103～105)。

口縁には波状口縁と平縁とがあり、波状口縁の頂端部には刻み目が見られるものが多い。文様は２～３状の沈線文で施文されるものが多い。

２類　櫛目状沈線文が施文されているもの（67～70)。

沈線間に櫛歯状の工具を用いて施文したものが多く見られる。全般に出土数は少ない。

３類　粘土紐の張り付け（隆帯）が見られるもの（74～81)。

波状口縁の頂端部に粘土紐を弧状あるいはボタン状に張り付けているもの、波状部分の垂下部に８の字状・Ｙ字状・楕円形状に張り付けているものがある。隆帯上に刺突文が見られるものもある。また、隆帯を縁どるように沈線が施文されている隆沈線のものも多く見られる。全般に出土数は少ない。

４類　磨消縄文が施文されているもの（３、６～13　82～99)。

深鉢・鉢・壺等に見られ、Ｌ及びＬＲ縄文による充塡縄文がほとんどである。

５類　無文及び縄文施文のもの（106～109)。

Ⅲ群土器（第22図15～18)

縄文時代晩期の土器で、遺構外からは出土していない。第14号土坑から少量出土したのみである。

（畠山　昇）

2　石　器（第97図～第105図）

遺構外から出土した石器は以下の通りである。

石鏃（1）　1点。平基有茎鏃。両面とも、比較的丁寧な調整が加えられている。

石錐（2・3）　2点。2は凸基有茎鏃に似た形状で、中央部が肉厚である。3は剝片の縁辺に浅い調整を加え、一端を錐部としている。

石匙（4～6）　3点。いずれも縦型で、つまみ部の抉りは小さい。4には、ほとんど調整が加えられていない。

石箆（8・9）　2点。基部がややすぼまり、刃部に向けて幅広となる形状である。

不定形石器

A：スクレイパーの類（7、10～18ほか）　25点。

急斜度の調整の刃部を持ち石箆に似た形状のもの（8、10～13）、一端が尖頭状のもの（15）、は剝片の側縁部に浅い調整が加えられているもの（14～18、21、23、25など）等がある。

7は大石平型石箆の頭部破片の可能性が考えられる。

B：R－フレイクの類（35～44ほか）　27点。

剝片の一部に簡単な細部調整が加えられているものである。

剝片（45、46）　109点。45は黒曜石の剝片である。

磨製石斧（56～58）　3点。いずれも基部破片である。

敲磨器（47～54）　9点。このうち6点が平坦面の中央付近に凹孔が見られ、いわゆる凹石と磨石との複合石器である。平坦部の凹孔には浅いもの（これには軽い敲打痕の見られるものも含んでいる）とやや深いものがある。また、平坦部は磨かれて滑らかになっているものもある。これには、花崗岩を石材としたものに多い。側面部は両側面が利用され磨痕と敲打痕とが単独または複合して見られ、使用面は平坦気味になっているのが一般的である。しかし、47・50の側面は敲打により波うっており、とくに47は指をそろえるのに都合がよいようになっている。

石皿（55）　1点の出土である。　（畠山　昇）

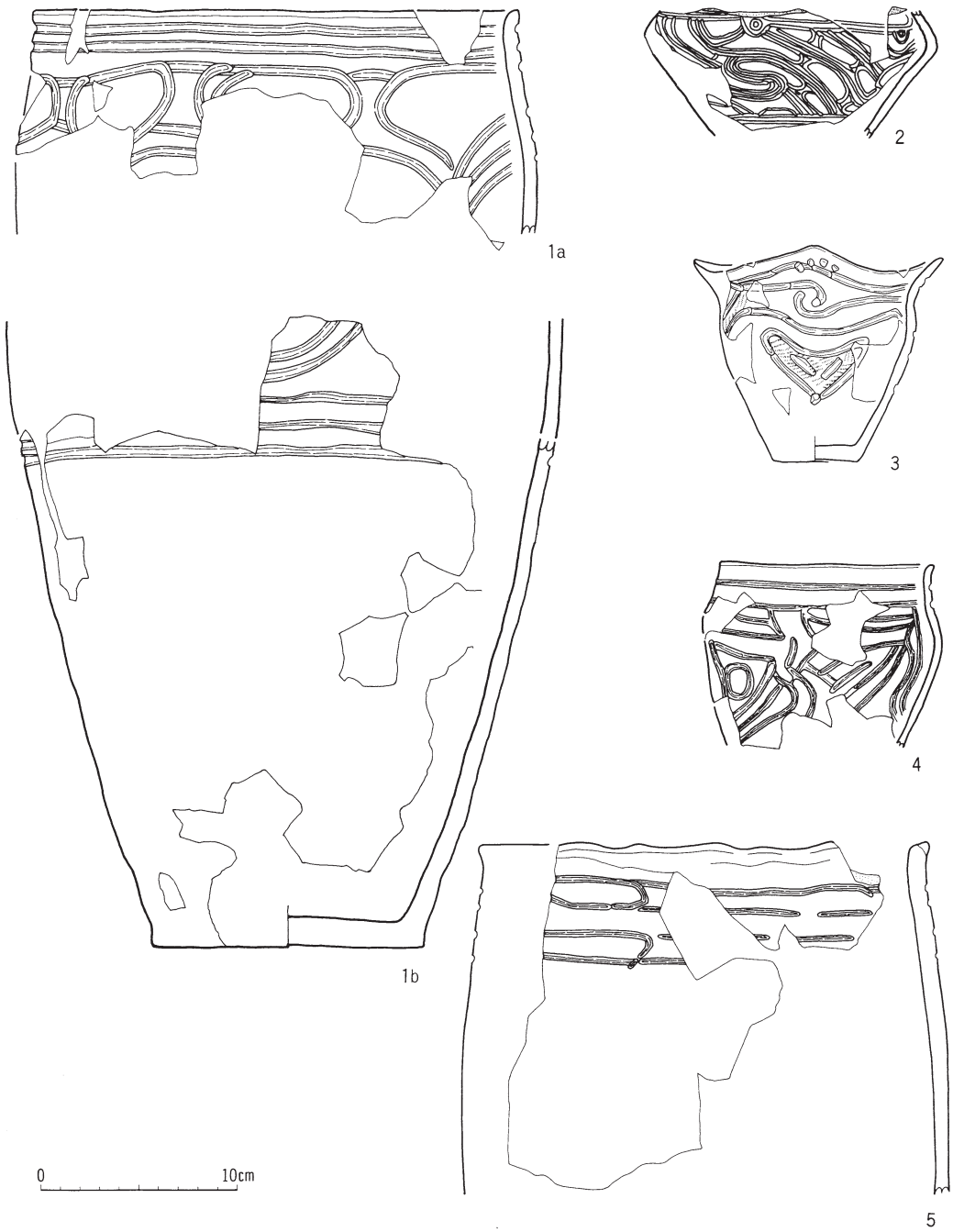
3　土製品（第105図）

土偶（59）　右肩部の破片が1点出土している。

キノコ型土製品（60）　1点の出土である。

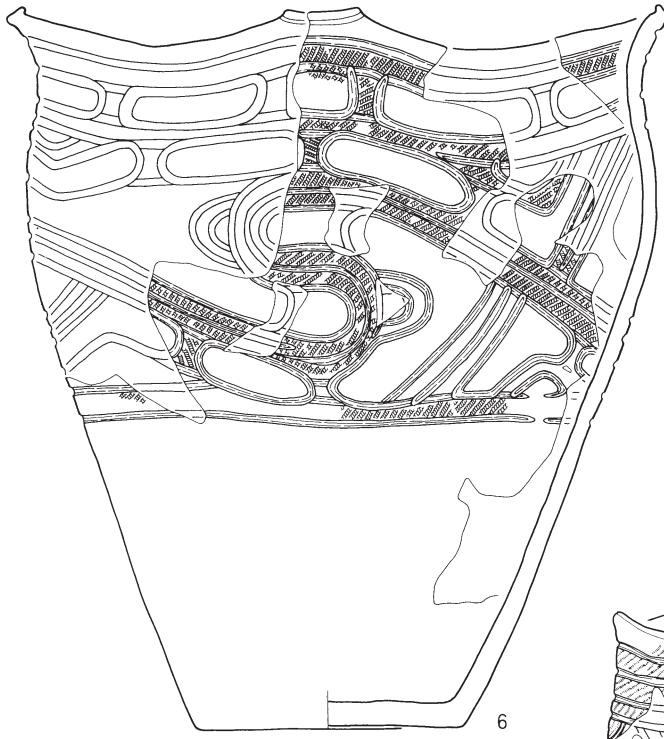
円盤状土製品（61・62）　土器片を円形または楕円形に加工したもので、2点の出土である。

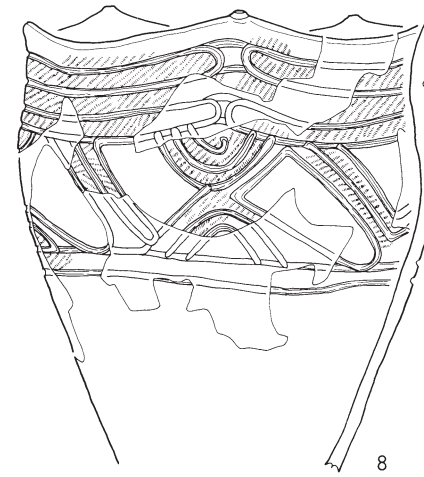
鐸形土製品（63）　1点の出土である。　（畠山　昇）

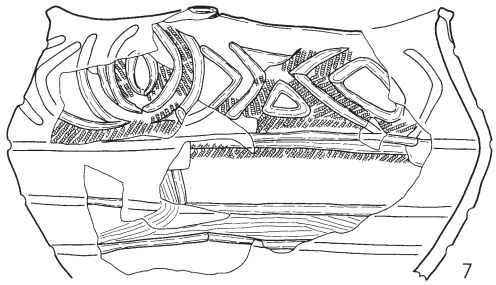


図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
1	L—10・Ⅲ	平行沈線文、入組状文	J—14	a・bは同一個体、深鉢
2	M—11・Ⅰ	沈線文、入組状文	J—11	鉢
3	I—9・Ⅰ	沈線文、波状文、三角形文、刺突文	J—7	深鉢
4	H—6・Ⅱ	沈線文、入組状文	J—12	深鉢
5	K—10・Ⅱ	平行沈線文、楕円形文、隆帯	J—20	深鉢

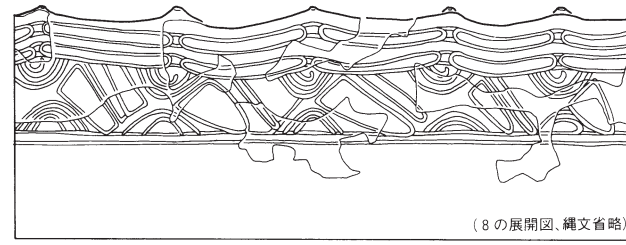
第87図　遺構外出土遺物（縄文時代１）





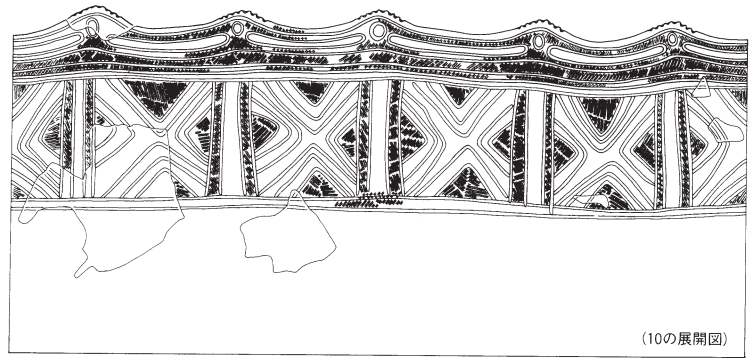


0　　10cm



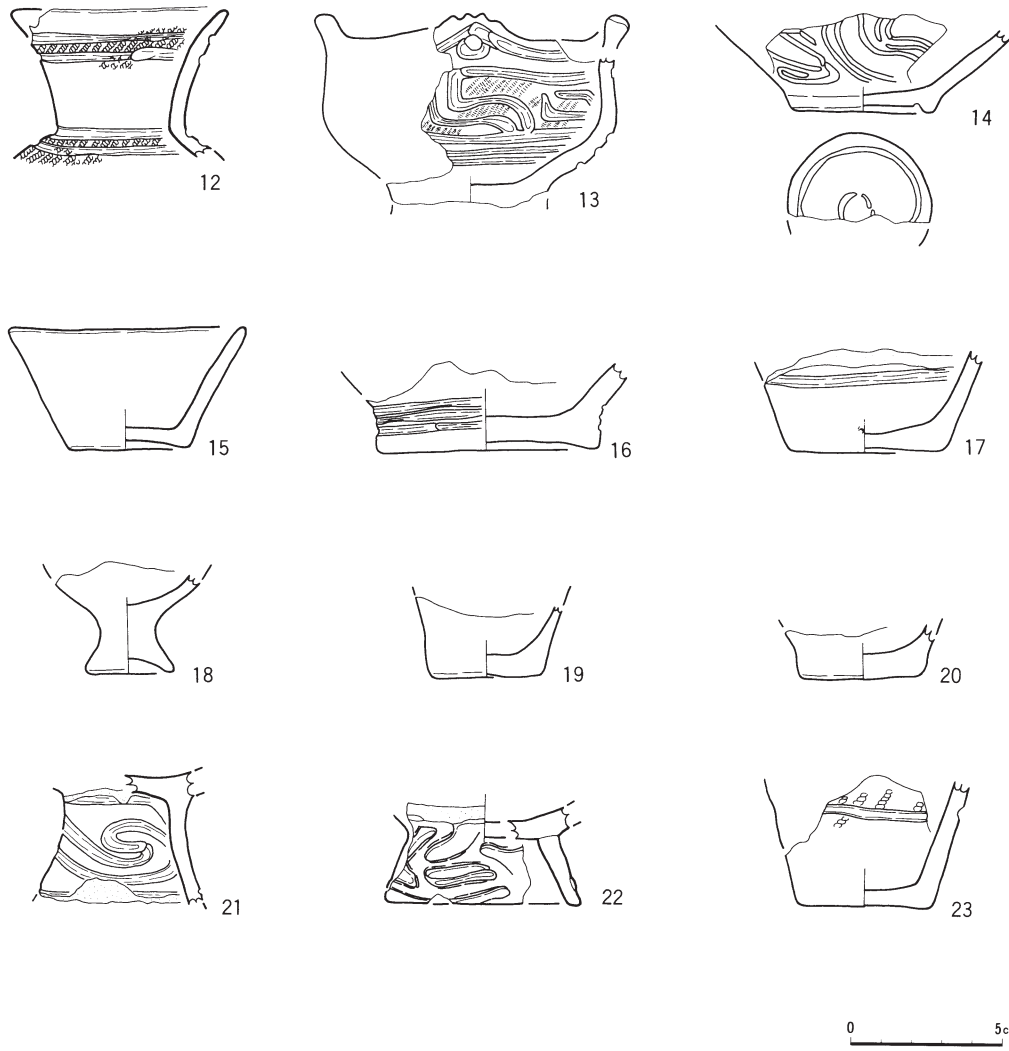
図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
6	L・R－15	沈線文、楕円形文、波状文、LR縄文	J－22	深鉢
7	O－9・Ⅱ	沈線文、円形文、LR縄文	J－17	鉢
8	L－15・Ⅰ、Ⅱ	沈線文、楕円形文、弧状文、L縄文	J－23	深鉢

第88図　遺構外出土遺物（縄文時代２）



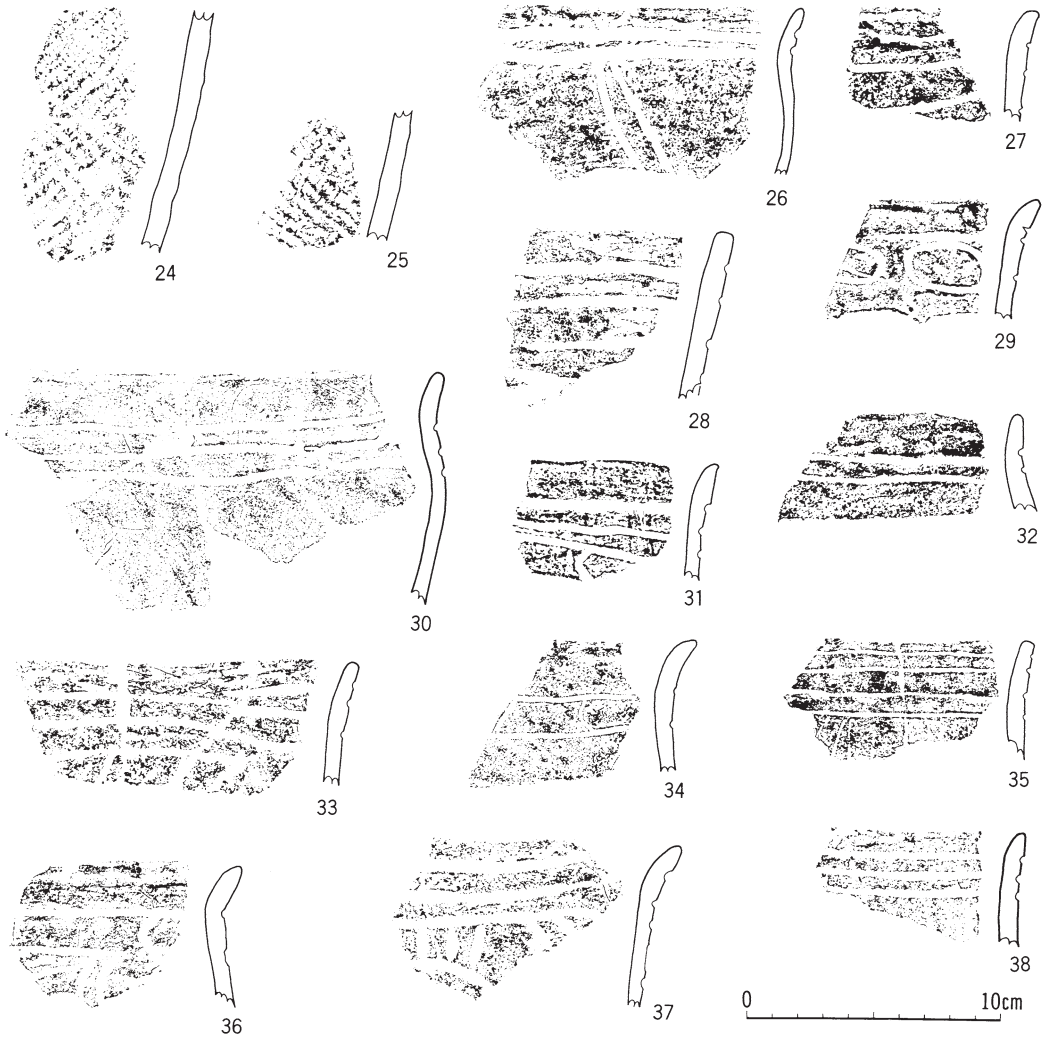
図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
9	Ⅰ－9・Ⅱ	隆帯、沈線文、ＬＲ縄文	Ｊ－9	壺
10	風倒木	沈線文、区画文、ＬＲ縄文	Ｊ－8	深鉢
11	Ｇ－4・Ⅱ	沈線文、区画文、ＬＲ縄文	Ｊ－19	深鉢

第89図　遺構外出土遺物（縄文時代３）



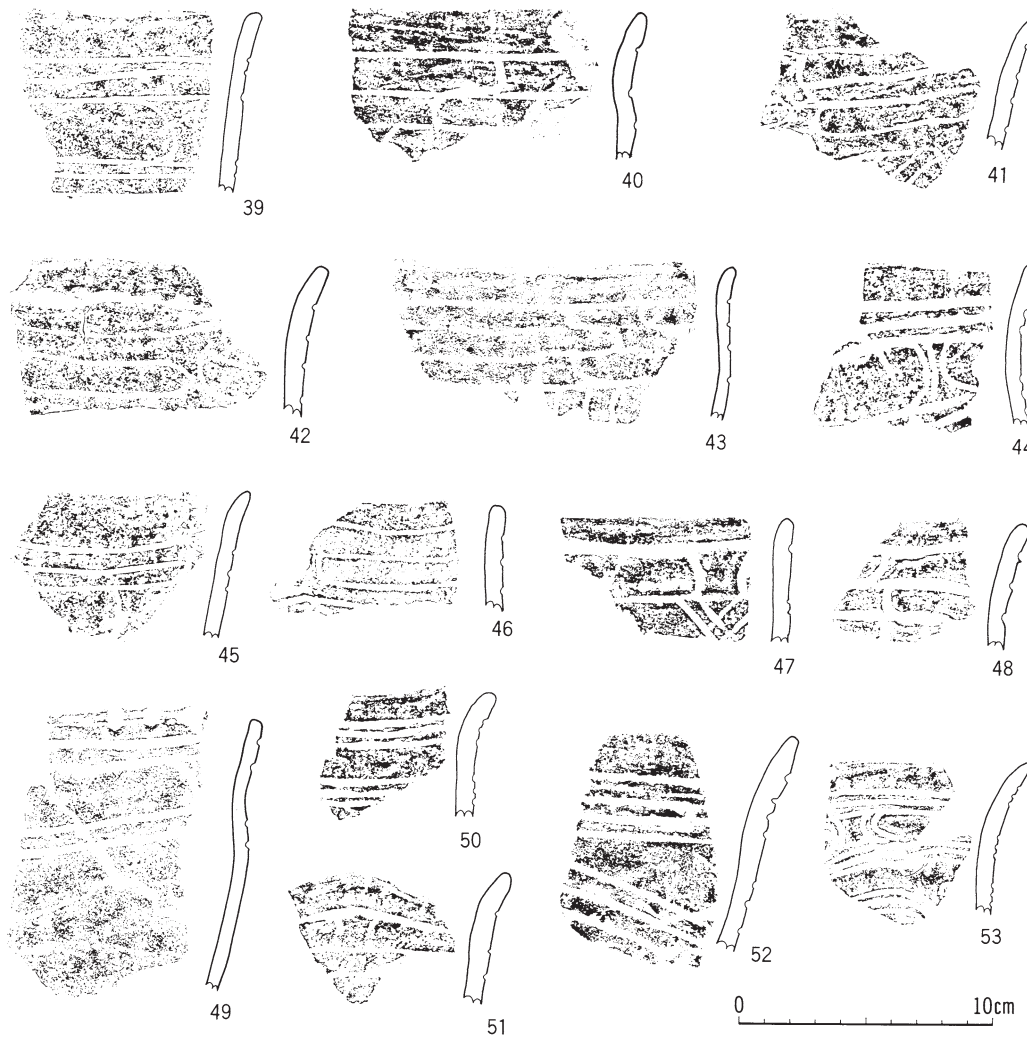
図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
12	Ⅰ—11・Ⅱ	沈線文、ＬＲ縄文	Ｊ—282	壺
13	Ｈ—３・Ⅱ	沈線文、Ｌ縄文	Ｊ—10	台付鉢
14	Ｍ—９・Ⅱ	沈線文	Ｊ—269	鉢？
15	Ｌ—11・２	無文	Ｊ—273	ミニチュア
16	Ｏ—９・Ⅱ	沈線文	Ｊ—278	鉢？
17	Ｈ—12・Ⅲ	沈線文	Ｊ—277	鉢？
18	Ｊ—９・Ⅱ	無文	Ｊ—267	ミニチュア、台部
19	Ｈ—７・Ⅰ	無文	Ｊ—274	ミニチュア
20	Ｎ—10・Ⅱ	無文	Ｊ—275	ミニチュア
21	Ｇ—８・Ⅱ	渦巻状沈線文	Ｊ—281	台部
22	Ｌ—12・Ⅱ	沈線文	Ｊ—272	台部
23	Ｍ—15・Ⅱ	沈線文、ＲＬ縄文	Ｊ—276	鉢

第90図　遺構外出土遺物（縄文時代４）



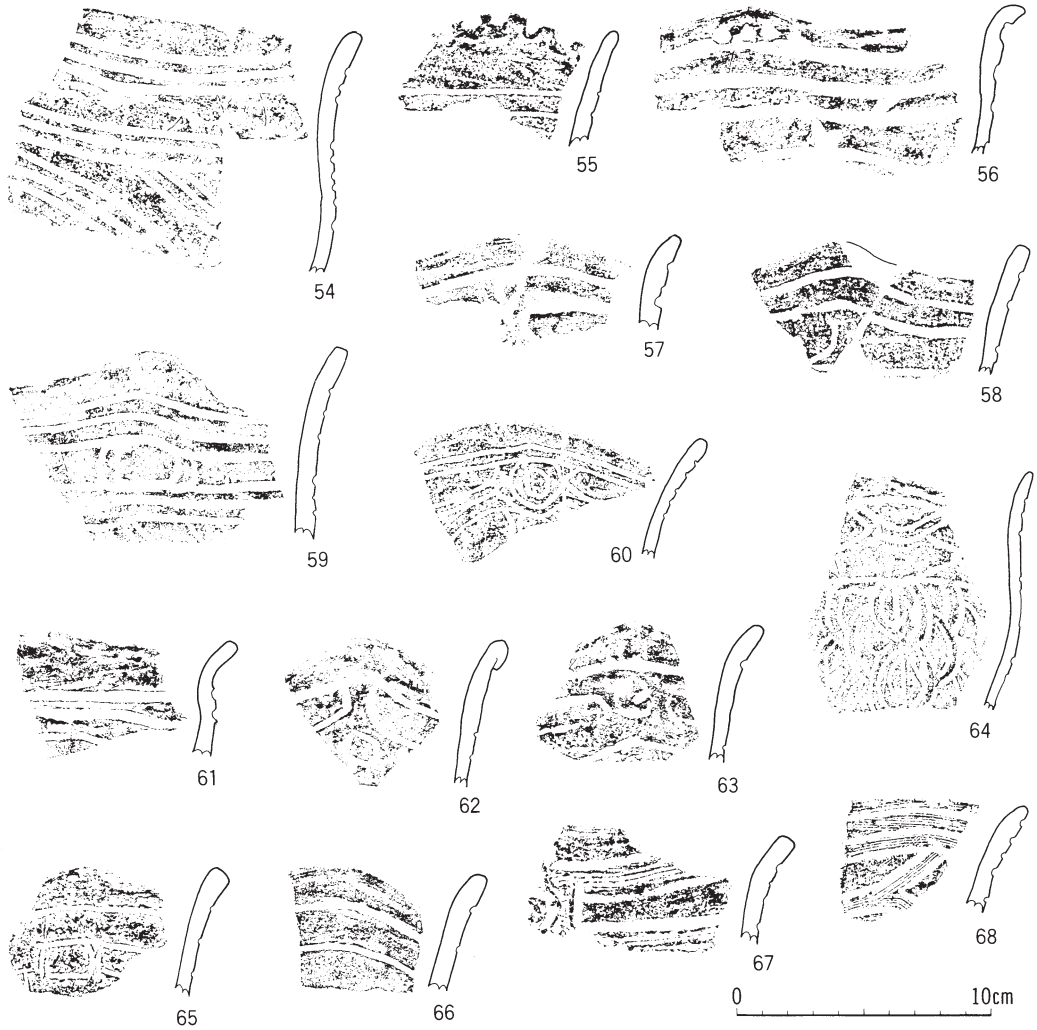
図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
24	Ⅰ－4・Ⅲ	ＬＲ縄文、ＲＬ縄文	Ｊ－288	深鉢、繊維混入
25	Ⅰ－4・Ⅲ	羽状縄文（ＲＬ、ＬＲ）	Ｊ－289	深鉢、繊維混入
26	Ｍ－16・Ⅱ	沈線文	Ｊ－172	深鉢
27	Ｍ－9・Ⅰ	沈線文	Ｊ－239	深鉢
28	Ｌ－9・Ⅱ	沈線文	Ｊ－140	深鉢
29	Ｏ－12・Ⅱ	沈線文（楕円形文）、折り返し口縁	Ｊ－233	深鉢
30	Ｌ－13・Ⅱ	平行沈線文	Ｊ－134	深鉢
31	Ｇ－6・Ⅱ	平行沈線文	Ｊ－242	深鉢
32	Ｈ－5・Ⅱ	平行沈線文	Ｊ－246	深鉢
33	Ｍ－9・Ⅰ	平行沈線文	Ｊ－208	深鉢
34	Ｋ－9・Ⅱ	平行沈線文	Ｊ－145	深鉢
35	Ｇ－4・Ⅲ	平行沈線文	Ｊ－240	深鉢
36	Ｎ－11・Ⅱ	平行沈線文	Ｊ－144	深鉢
37	Ｇ－13・Ⅱ	平行沈線文	Ｊ－201	深鉢
38	Ｏ－13・Ⅲ	平行沈線文	Ｊ－241	深鉢

第91図　遺構外出土遺物（縄文時代５）



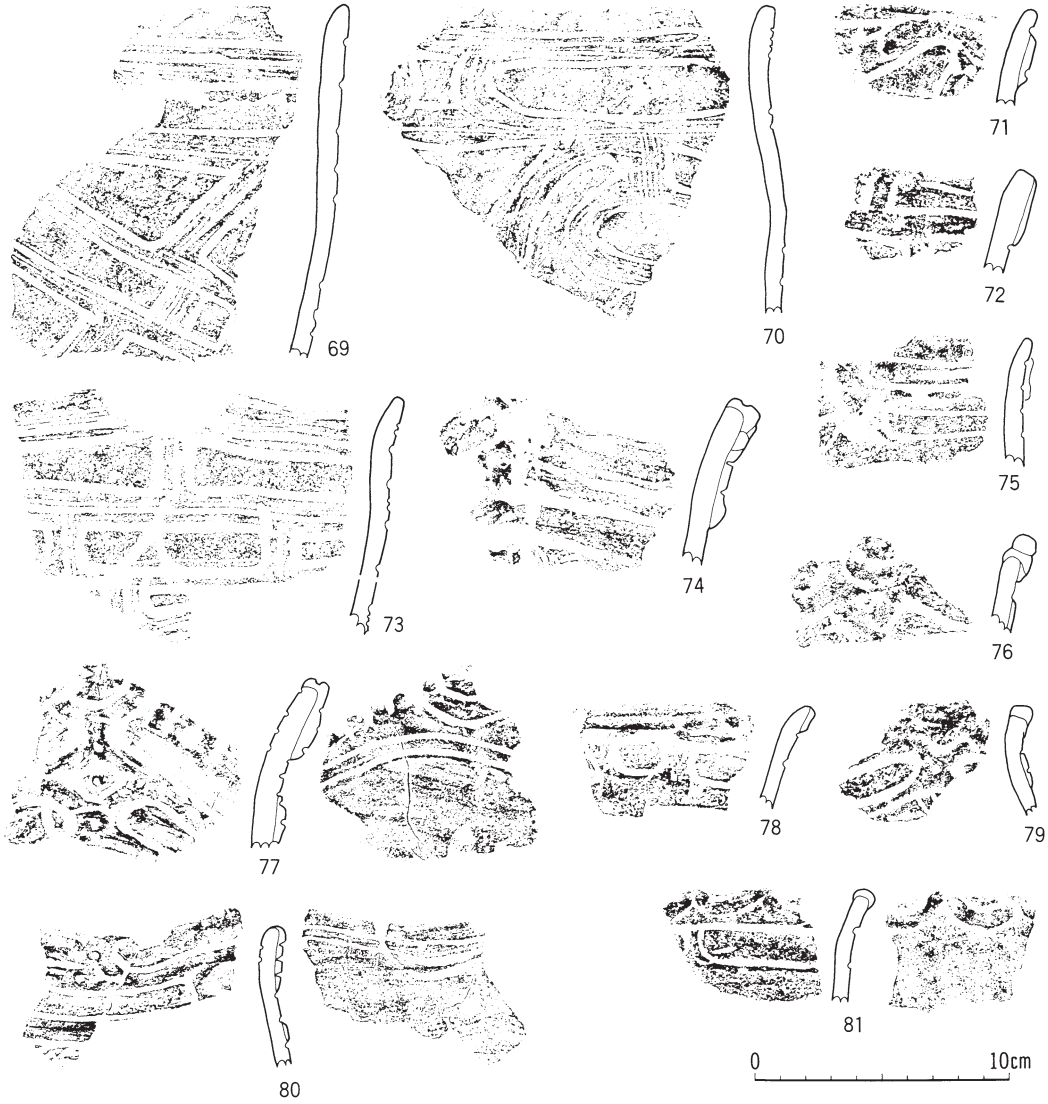
図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
39	J－6・Ⅲ	平行沈線文、楕円形文	J－143	深鉢
40	M－12・Ⅰ	平行沈線文、S字状連結文	J－232	深鉢
41	M－11・Ⅰ	平行沈線文、楕円形文、刺突文	J－200	深鉢
42	H－7・Ⅰ	沈線文、楕円形文	J－137	深鉢
43	H－5・Ⅰ	沈線文、S字状連結文	J－139	深鉢
44	L－12・Ⅱ	平行沈線文、楕円形文	J－212	深鉢
45	K－6・Ⅲ	平行沈線文	J－202	深鉢
46	I－11・Ⅰ	平行沈線文	J－230	深鉢
47	G－10・Ⅰ	沈線文、楕円形文	J－237	深鉢
48	G－8・Ⅱ	沈線文、楕円形文	J－225	深鉢
49	L－37・Ⅰ	沈線文、口唇部に刻目	J－136	深鉢
50	H－9・Ⅰ	平行沈線文	J－211	深鉢
51	L－13・Ⅱ	平行沈線文	J－221	深鉢
52	I－4・Ⅲ	平行沈線文	J－235	深鉢
53	M－12・Ⅰ	平行沈線文	J－213	深鉢

第92図　遺構外出土遺物（縄文時代６）



図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
54	L—11・Ⅰ	平行沈線文	J—204	深鉢
55	H—3・Ⅱ	平行沈線文、波状部に刻目	J—222	
56	M—9・Ⅰ	平行沈線文、波状部に刺突文	J—227	深鉢
57	I—11・Ⅱ	沈線文	J—218	
58	G—7・Ⅰ	沈線文	J—228	深鉢
59	I—11・Ⅱ	平行沈線文、楕円形文	J—224	深鉢
60	G—4・Ⅰ	平行沈線文、円形文	J—215	
61	K—12・Ⅲ	平行沈線文、波状部に刻目	J—220	深鉢
62	H—12・Ⅲ	沈線文、円形文、折り返し口縁	J—216	深鉢
63	L—9・Ⅲ	沈線文、円形文	J—217	深鉢
64	M—11・Ⅰ	沈線文、縦位弧状文、円弧文	J—193	鉢
65	F—15・Ⅱ	沈線文、方形文	J—205	深鉢
66	G—8・Ⅱ	沈線文	J—219	深鉢
67	L—9・Ⅱ	櫛目状沈線文	J—206	深鉢
68	H—14・Ⅱ	沈線文、櫛目状沈線文	J—247	

第93図　遺構外出土遺物（縄文時代７）

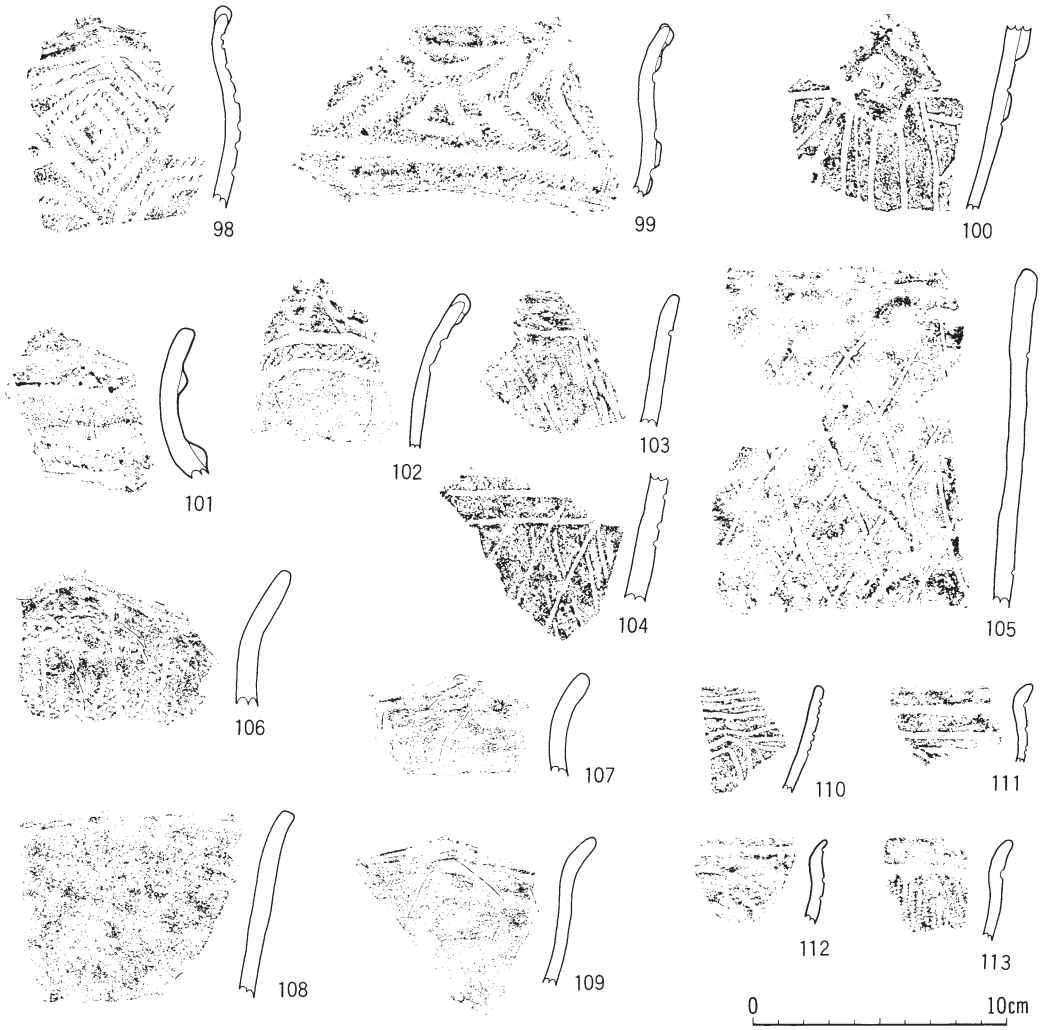


図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
69	J－6	沈線文、櫛目状沈線文	J－234	深鉢
70	J－6	沈線文、櫛目状沈線文	J－231	深鉢
71	F－9・Ⅱ	隆帯、刺突文、沈線文	J－121	深鉢
72	G－5・Ⅱ	隆帯、沈線文	J－127	深鉢
73	G－4・Ⅰ	沈線文、櫛目状沈線文	J－135	深鉢
74	O－9・Ⅱ	隆帯、沈線文、刺突文	J－123	深鉢
75	H－5・Ⅰ	隆帯、沈線文	J－133	深鉢
76	M－9・Ⅱ	隆帯、沈線文	J－128	深鉢
77	M－10・Ⅰ	隆帯、沈線文、刺突文、内面に沈線文	J－124	深鉢
78	F－7・Ⅱ	隆帯、沈線文、内面に沈線文	J－132	深鉢
79	G－7・Ⅱ	隆帯、沈線文、刺突文	J－120	深鉢
80	L－8・Ⅰ	隆帯、沈線文、刺突文	J－122	深鉢
81	G－8・Ⅱ	隆帯、沈線文	J－129	深鉢

第94図　遺構外出土遺物（縄文時代８）

図番号	出土地・層	外面の文様	整理番号	備考
82	H－3・Ⅰ	沈線文、ＬＲ縄文	Ｊ－170	深鉢
83	M－16・Ⅱ	沈線文、Ｌ縄文	Ｊ－209	深鉢
84	M－10・Ⅱ	沈線文、ＲＬ縄文	Ｊ－176	深鉢
85		沈線文、Ｌ縄文	Ｊ－172	深鉢
86	K－10・Ⅱ	沈線文、ＬＲ縄文	Ｊ－175	深鉢
87	M－11・Ⅰ	沈線文、Ｌ縄文	Ｊ－166	
88	H－5・Ⅰ	沈線文、Ｌ縄文	Ｊ－192	
89	K-12、L-12・Ⅱ	沈線文、円形文、Ｌ縄文	Ｊ－162	深鉢
90	G－8・Ⅱ	沈線文、刺突文、ＬＲ縄文	Ｊ－171	深鉢
91	L－8・Ⅲ	沈線文、ＬＲ縄文	Ｊ－168	深鉢
92	G－11・Ⅱ	沈線文、Ｌ縄文	Ｊ－177	深鉢
93	H－5・Ⅰ	沈線文、Ｌ縄文	Ｊ－167	深鉢
94	L－11・Ⅰ	沈線文、Ｌ縄文	Ｊ－178	深鉢
95	K－10・Ⅱ	沈線文、ＬＲ縄文	Ｊ－164	深鉢
96	G－11・Ⅲ	沈線文、Ｌ縄文	Ｊ－163	深鉢
97	J－6・Ⅰ	沈線文、刺突文、隆帯、ＬＲ縄文	Ｊ－165	鉢

第95図　遺構外出土遺物（縄文時代９）



図番号	出土地・層	外　面　の　文　様	整理番号	備　考
98	L—11・Ⅰ	沈線文、L縄文、刺突文、貼付文	J—169	鉢
99	O—9・Ⅱ	沈線文、LR縄文、隆帯	J—174	深鉢
100	F—7・Ⅰ	沈線文、隆帯、赤色顔料塗布	J—126	壺
101	M—10・Ⅱ	無文、隆帯	J—252	壺
102	I—7・Ⅱ	沈線文、隆帯、LR縄文	J—251	
103	G—11・Ⅲ	沈線文	J—245	深鉢
104	M—10・Ⅱ	沈線文、格子状沈線文	J—156	深鉢
105	O—9・Ⅱ	格子状沈線文、折り返し口縁	J—146	深鉢
106	M—11・Ⅰ	網目状撚糸文（L）	J—173	深鉢
107	H—7・Ⅰ	無文	J—194	鉢
108	H—12・Ⅱ	無文	J—199	深鉢
109	H—6・Ⅱ	無文	J—196	
110	H—7・Ⅱ	沈線文	J—256	
111	G—7・Ⅱ	沈線文	J—265	
112	F—10・Ⅱ	沈線文、LR縄文	J—258	
113	G—8・Ⅱ	沈線文、RL縄文	J—261	

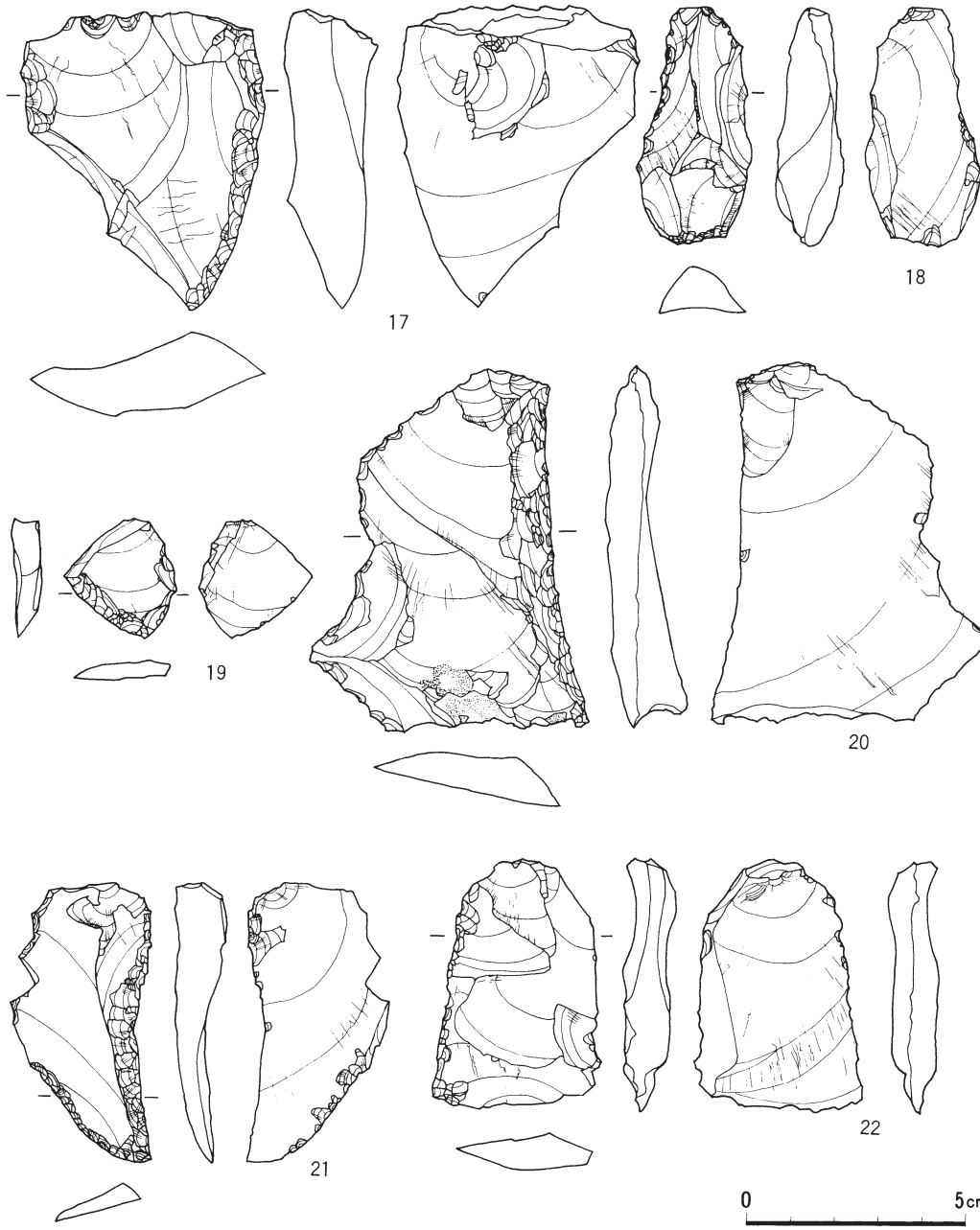
第96図　遺構外出土遺物（縄文時代10）

図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
1	石鏃	F—14・Ⅲ	31	11	5	1.3	珪質頁岩	35	平基有茎
2	石錐	F—8・Ⅱ	45	18	14	8.3	珪質頁岩	34	石鏃に似る
3	石錐	H—10・Ⅲ	38	22	5	3.6	珪質頁岩	64	
4	石匙	L—9・Ⅰ	55	36	11	20.1	珪質頁岩	169	縦形。ピッチ付着
5	石匙	L—9・Ⅱ	42	20	6	5.6	珪質頁岩	170	縦形
6	石匙	H—5・Ⅰ	61	27	7	11.8	珪質頁岩	52	縦形
7	スクレイパー	H—4・Ⅱ	22	25	6	2.3	珪質頁岩	50	大石平型石箆の頭部破片か
8	石箆	K—9・Ⅰ	48	37	17	28.7	珪質頁岩	118	両極剝片を素材？
9	石箆	F—2・Ⅱ	69	43	13	42.4	珪質頁岩	32	

第97図　遺構外出土遺物（縄文時代11）

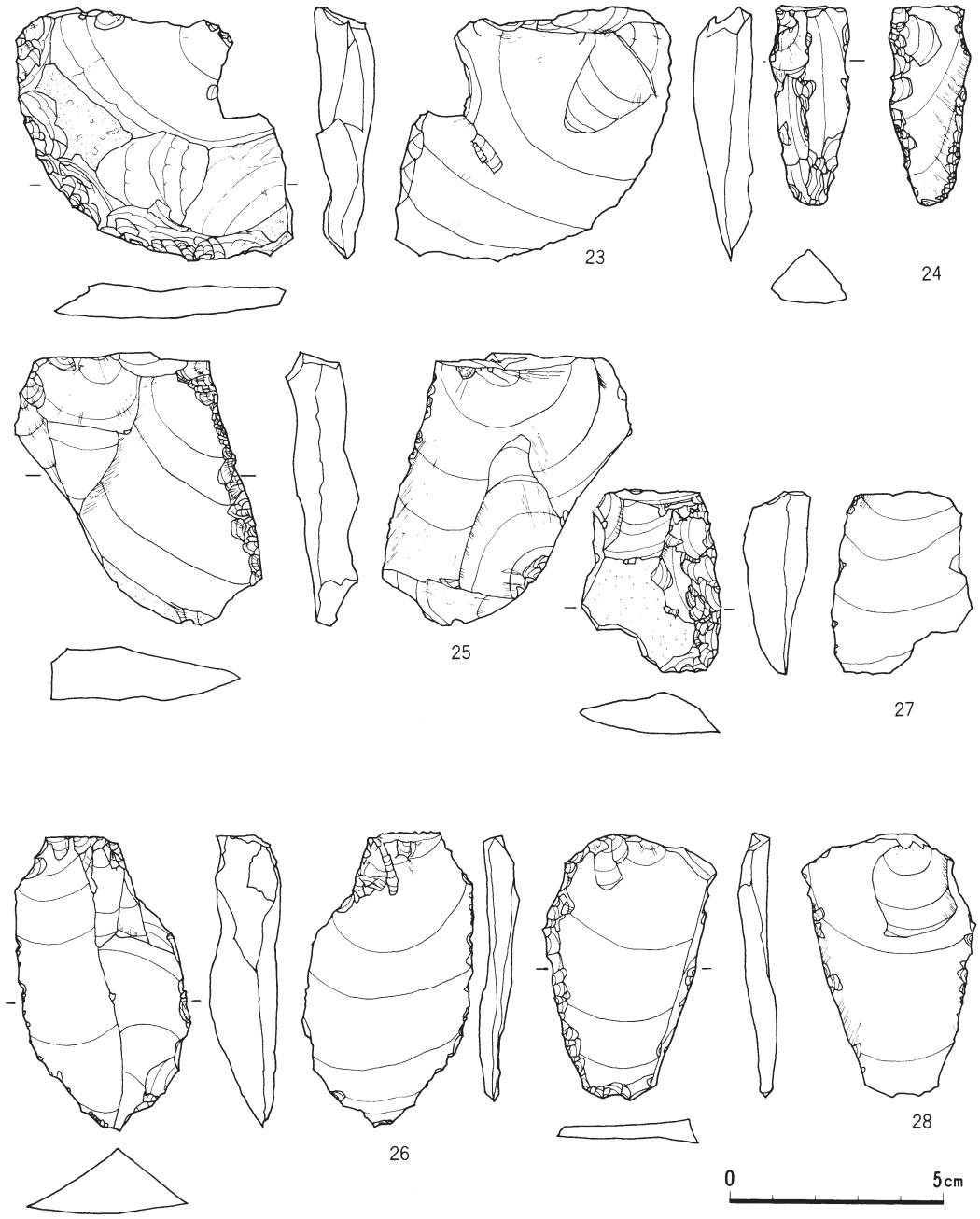
図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
10	スクレイパー	Ⅰ－4・Ⅱ	52	34	13	21.6	珪質頁岩	70	石篦に似る
11	スクレイパー	Ⅰ－4・Ⅲ	51	32	12	18.9	珪質頁岩	69	
12	スクレイパー	J－7・Ⅱ	71	44	9	26.5	珪質頁岩	95	
13	スクレイパー	J－6・Ⅲ	42	24	7	9.2	玉髄	89	
14	スクレイパー	Ⅰ－4・Ⅰ	59	32	8	18.4	珪質頁岩	73	
15	スクレイパー	H－9・Ⅱ	52	35	9	14.7	珪質頁岩	63	尖頭状
16	スクレイパー	M－10・Ⅱ	27	32	5	6.0	珪質頁岩	186	

第98図　遺構外出土遺物（縄文時代12）



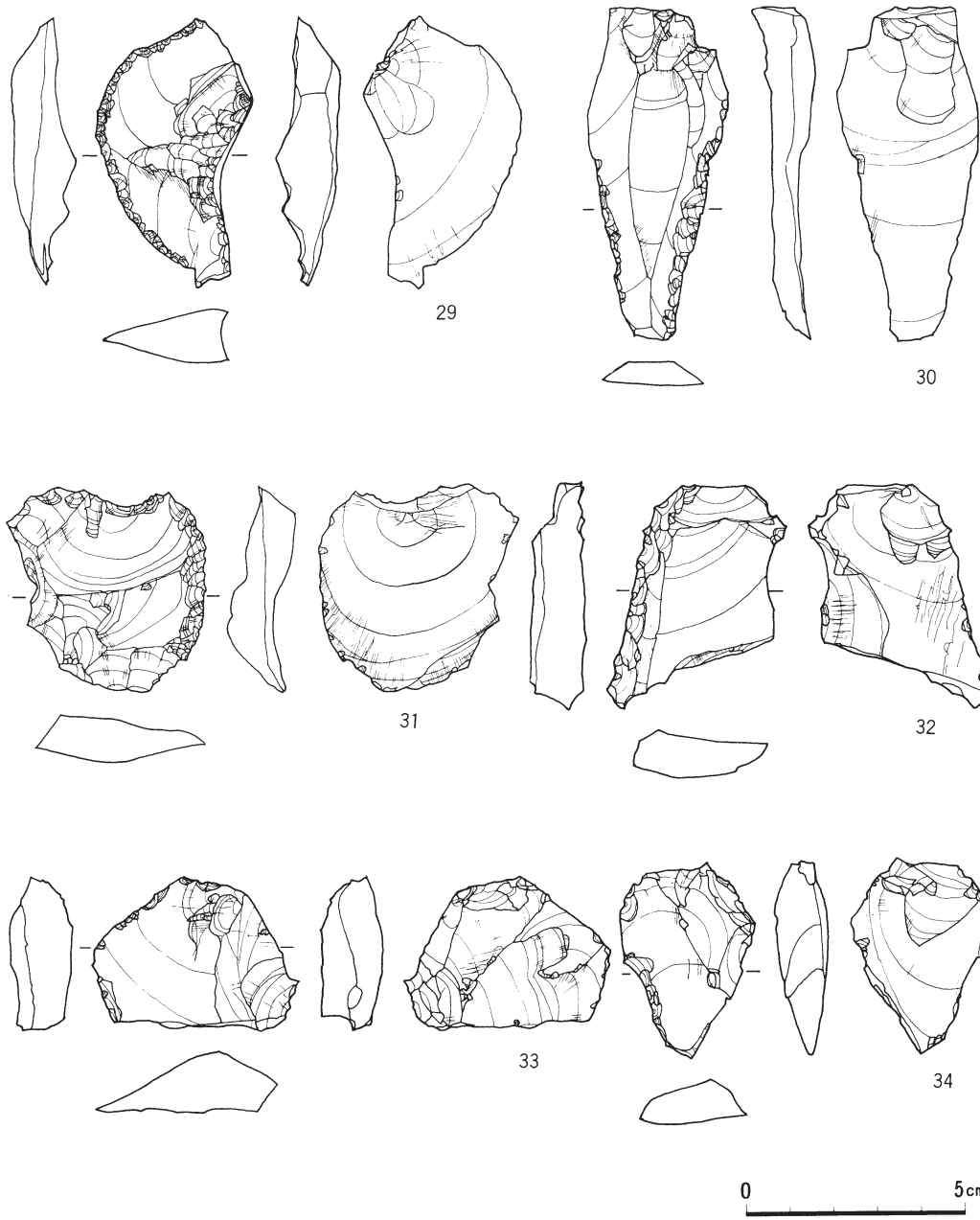
図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
17	スクレイパー	N—10・Ⅲ	62	53	19	51.8	玉髄	200	
18	スクレイパー	L—11・Ⅰ	52	26	11	9.8	珪質頁岩	173	
19	スクレイパー	L—11・Ⅰ	24	23	6	4.2	珪質頁岩	175	
20	スクレイパー	K—13・Ⅱ	82	58	9	44.6	珪質頁岩	209	
21	スクレイパー	G—3・Ⅱ	64	30	8	13.6	珪質頁岩	37	
22	スクレイパー	H—6・Ⅲ	55	38	10	21.6	珪質頁岩	59	

第99図　遺構外出土遺物（縄文時代13）



図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
23	スクレイパー	J—11・Ⅱ	58	52	13	47.0	珪質頁岩	110	
24	スクレイパー	J—9・Ⅱ	46	18	13	11.4	珪質頁岩	104	
25	スクレイパー	J—13・Ⅰ	63	48	14	42.3	珪質頁岩	114	
26	スクレイパー	H—4・Ⅱ	68	39	15	36.9	珪質頁岩	51	
27	スクレイパー	L—8・Ⅰ	43	33	14	18.9	珪質頁岩	167	
28	スクレイパー	J—37・Ⅱ	61	35	6	15.2	珪質頁岩	115	

第100図　遺構外出土遺物（縄文時代14）

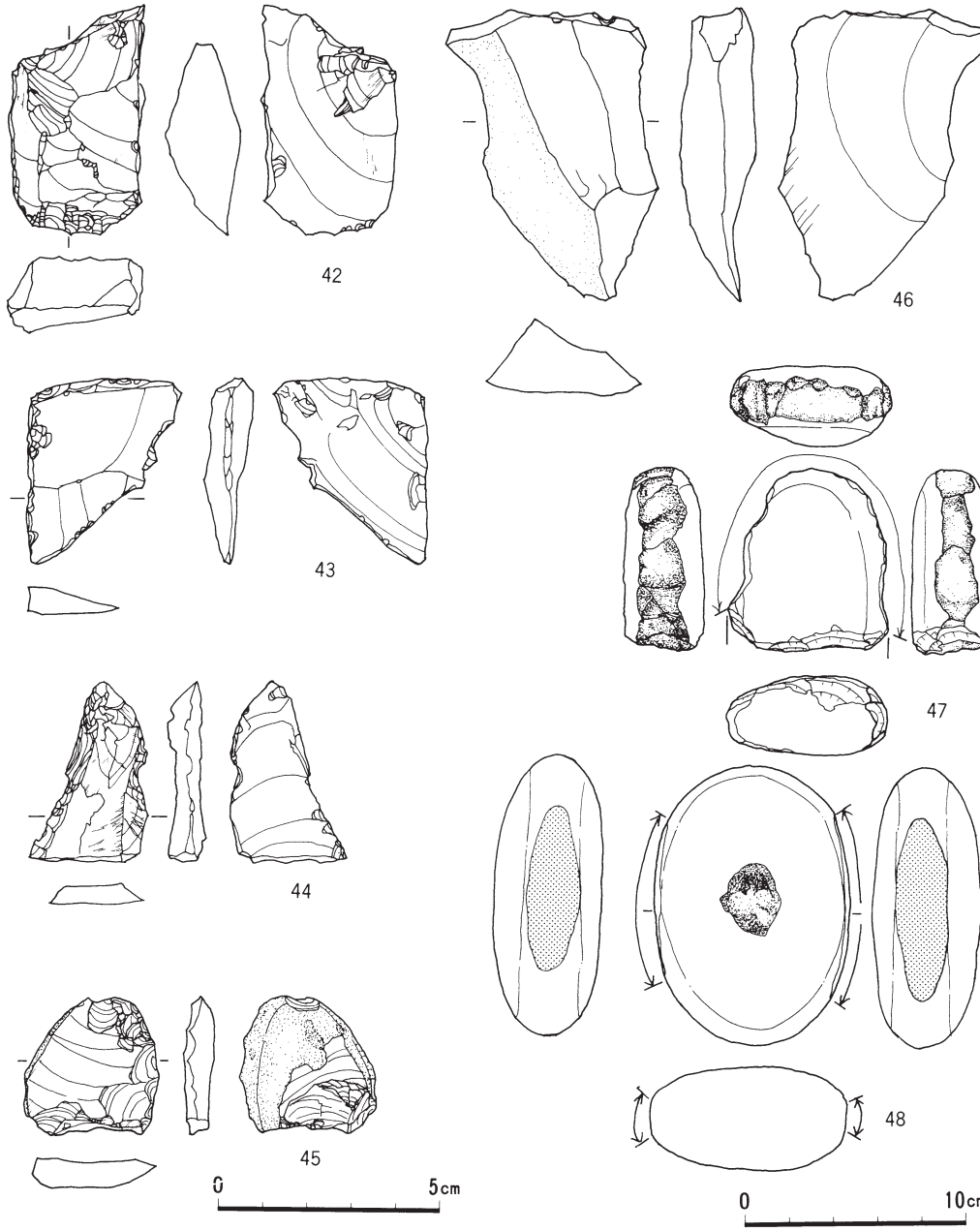


図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
29	スクレイパー	J－7・Ⅰ	38	55	13	19.2	珪質頁岩	90	
30	スクレイパー	M－10・Ⅰ	74	32	10	18.9	珪質頁岩	183	
31	スクレイパー	N－11・Ⅱ	44	43	10	20.3	珪質頁岩	204	
32	スクレイパー	L－16・Ⅲ	40	35	10	20.4	珪質頁岩	176	
33	R－フレイク	M－13・Ⅱ	34	42	14	21.3	珪質頁岩	188	
34	R－フレイク	J－10・Ⅰ	30	44	11	13.3	珪質頁岩	107	

第101図　遺構外出土遺物（縄文時代15）

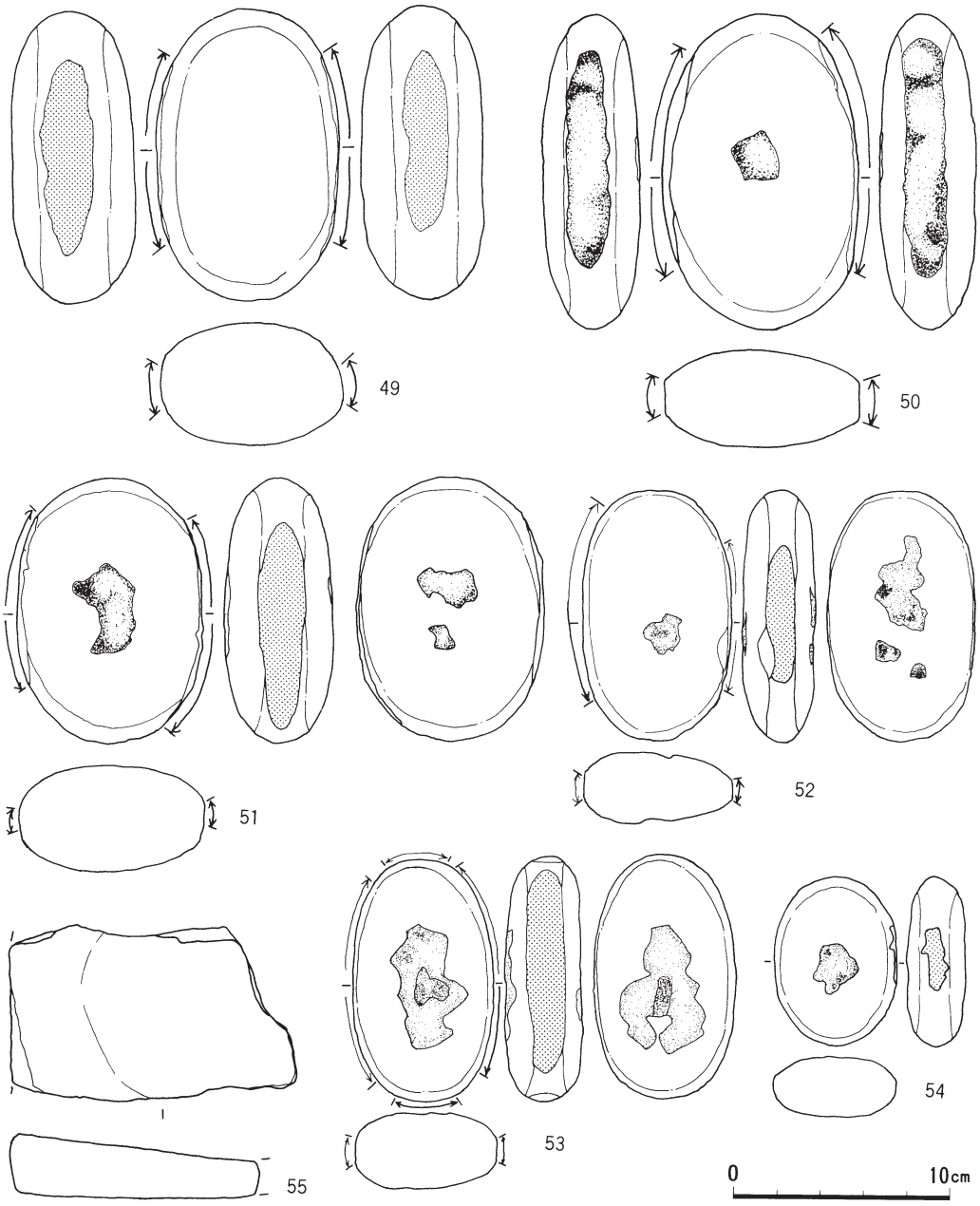
図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
35	R－フレイク	K－12・Ⅱ	41	57	11	24.1	珪質頁岩	121	S－1
36	R－フレイク	I－6・Ⅱ	51	25	10	11.7	珪質頁岩	78	
37	R－フレイク	I－20・Ⅰ	40	58	11	30.2	珪質頁岩	86	
38	R－フレイク	I－9・Ⅲ	38	20	7	4.8	珪質頁岩	83	
39	R－フレイク	M－10・Ⅰ	27	31	8	7.0	珪質頁岩	182	
40	R－フレイク	H－8・Ⅱ	81	47	10	34.5	珪質頁岩	62	
41	R－フレイク	L－7・Ⅲ	57	29	11	15.9	珪質頁岩	165	

第102図　遺構外出土遺物（縄文時代16）



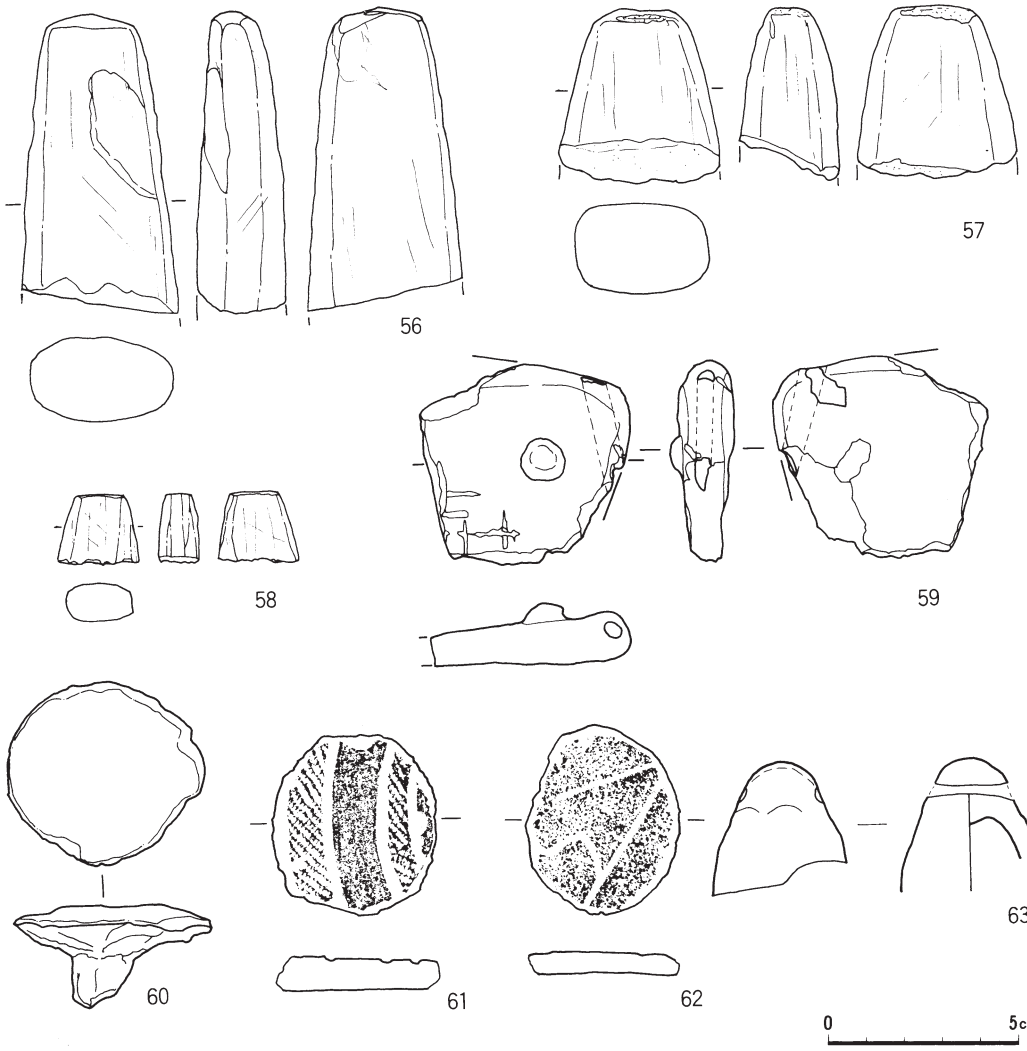
図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
42	R－フレイク	Ⅰ－4・Ⅱ	54	30	14	28.1	珪質頁岩	71	
43	R－フレイク	G－5・Ⅱ	31	51	9	10.7	珪質頁岩	40	
44	R－フレイク	J－9・Ⅱ	40	24	7	6.4	珪質頁岩	103	
45	フレイク	J－7・Ⅰ	30	29	7	8.6	黒曜石	99	
46	フレイク	M－26・Ⅱ	66	42	17	28.3	珪質頁岩	189	焼け
47	敲磨器	Ⅰ－7・Ⅰ	81	72	36	345	花崗岩	223	
48	敲磨器	K－9・Ⅱ	125	89	47	840	花崗岩	226	磨石＋凹石

第103図　遺構外出土遺物（縄文時代17）



図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
49	敲磨器	Ⅰ—12・Ⅲ	134	85	57	1019	安山岩	218	磨石
50	敲磨器	風倒木・5	145	90	44	902	花崗岩	225	凹石
51	敲磨器	Ⅰ—7・Ⅱ	121	86	49	818	花崗岩	221	磨石＋凹石
52	敲磨器	L—9・Ⅱ	115	68	32	431	花崗岩	220	磨石＋凹石
53	敲磨器	K—9・Ⅱ	112	65	37	437	花崗岩	224	磨石＋凹石
54	敲磨器	Ⅰ—12・Ⅲ	78	57	28	197	花崗岩	217	磨石＋凹石
55	石皿	K—9・Ⅱ	(130)	(79)	(25)	(199)	凝灰岩	234	

第104図　遺構外出土遺物（縄文時代18）



図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
56	磨製石斧	L—12・Ⅱ	(72)	(41)	(23)	(125.7)	緑色凝灰岩	216	頭部片
57	磨製石斧	G—11・Ⅱ	(45)	(42)	(27)	(76.7)	細粒凝灰岩	214	頭部片
58	磨製石斧	I—7・Ⅰ	(18)	(21)	(10)	(7.3)	緑色凝灰岩	215	頭部片

図番号	種　類	出土地・層	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
59	土偶	H—7・Ⅰ	(5.5)	(5.2)	1.4	(36.9)	右肩・胸部破片
60	キノコ型土製品	G—7・Ⅱ	5.2	4.9	2.7	27.2	完形
61	円盤状土製品	H—4・Ⅱ	4.7	4.2	0.9	18.7	土器片利用
62	円盤状土製品	P—34・Ⅱ	5.0	4.1	0.6	12.3	土器片利用
63	鐸形土製品	I—10・風	(3.2)	(3.5)	(0.6)	(15.4)	風倒木痕出土

第105図　遺構外出土遺物（縄文時代19）

第２節　平安時代ほかの遺物

１　土師器（第106図）

復原できたものは１個体もない。坏片は139片、甕等破片は53片＋デスクトレー5.4箱分出土した。

（伊藤昭雄）

２　須恵器（第106図）

実測したのは、坏２点、甕１点の計３点で、完形品は１点もない。３点とも胎土分析を行ったが、坏２点は産地不明、甕は新潟県佐渡の小泊窯群産であった。

G－34グリッドIII層出土の坏は、割れ口が１層のみで、灰白色(N8/0)を呈する。I－５グリッドII層出土の坏は、割れ口が３層で、サンドイッチ状である。外側の厚さは、一様に約１㎜、中は最大約４㎜ある。内外面は灰白色(7.5Y8/1)、中は浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。M－31グリッドII・III層出土の甕は底部付近と考えられ、割れ口が基本的に５層で、サンドイッチ状である。内面は灰白色(5Y7/1)、外面は灰白色(5Y8/1)、中央部は灰白色(5Y7/2)、そして内外面と中央部の間２層は、浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。５層中最も厚いのは中央部で、３～９㎜ある。なお、内外面と中央部の間に見られる浅黄橙色層は、一部中央部にまで拡がっている。

上の他に、坏片11点、大甕片12点、甕・壺等その他の破片は106点出土している。

（伊藤昭雄）

３　鉄　器

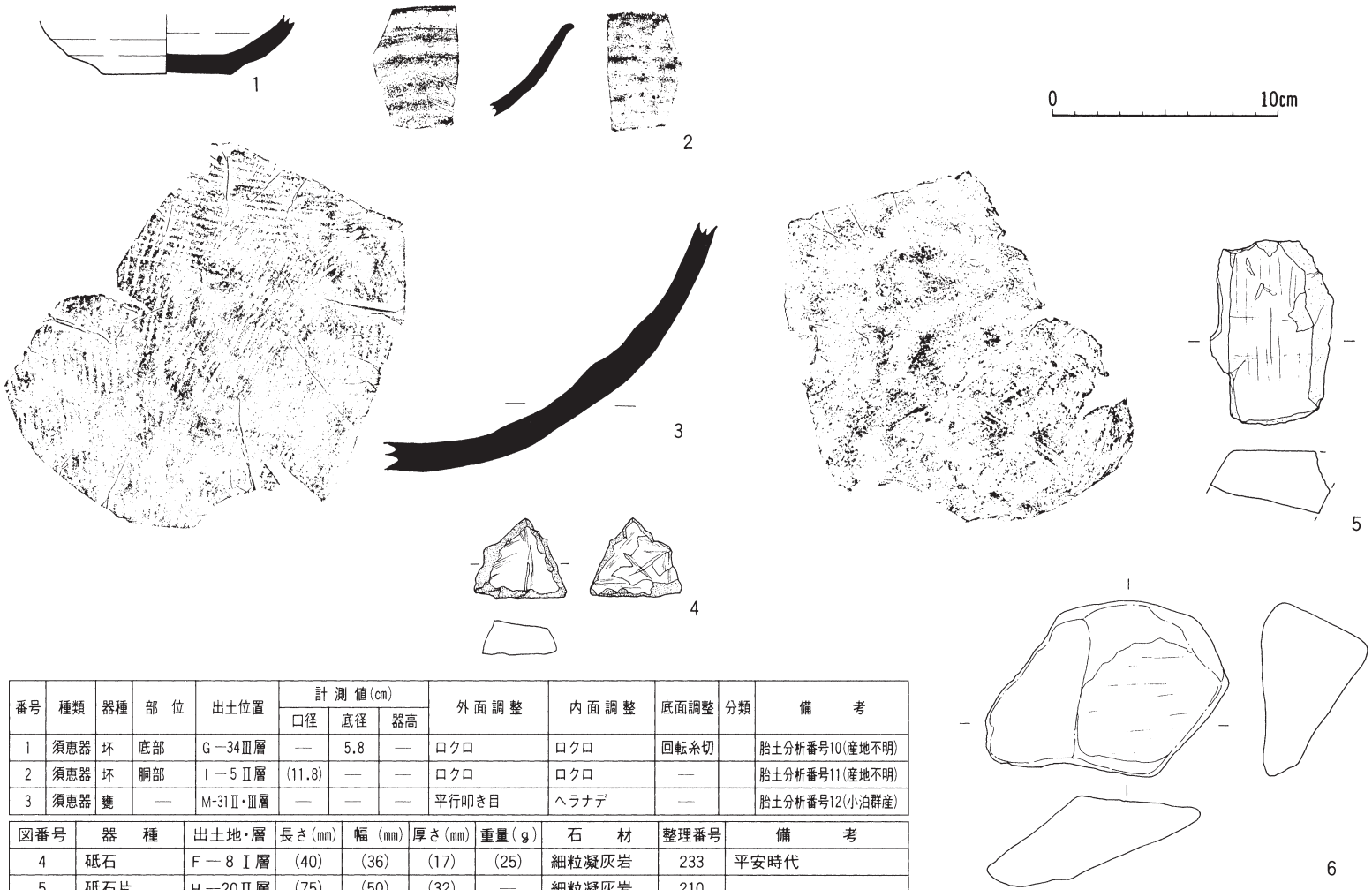
鉄器片は８点出土している。

（伊藤昭雄）

４　その他の遺物（第106図・第107図）

砥石が４点、砥石片が１点、21ラインより北から出土した。このうち４点は、10ラインより北から出土している。石質は全て凝灰岩～細粒凝灰岩である。なお、３点については、平安時代のものと考えられる。

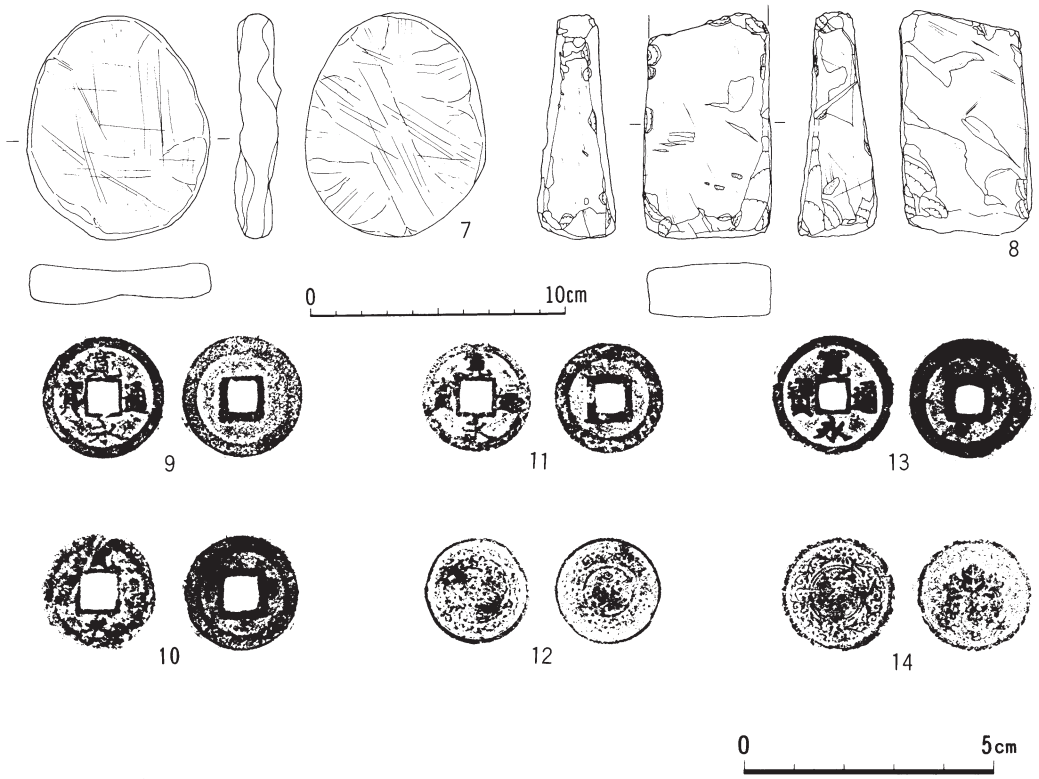
陶磁器片は29点出土している。これ以外に、肥前陶器片７点(このうち４点はIV期)、唐津片１点、近世の火鉢片10点、近現代陶磁器片６点が出土している。



番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
1	須恵器	坏	底部	G－34Ⅲ層	—	5.8	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切		胎土分析番号10(産地不明)
2	須恵器	坏	胴部	Ⅰ－5Ⅱ層	(11.8)	—	—	ロクロ	ロクロ	—		胎土分析番号11(産地不明)
3	須恵器	甕	—	M-31Ⅱ・Ⅲ層	—	—	—	平行叩き目	ヘラナデ	—		胎土分析番号12(小泊群産)

図番号	器種	出土地・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	整理番号	備考
4	砥石	F－8Ⅰ層	(40)	(36)	(17)	(25)	細粒凝灰岩	233	平安時代
5	砥石片	H－20Ⅱ層	(75)	(50)	(32)	—	細粒凝灰岩	210	
6	砥石	Ⅰ－9Ⅱ層	113	75	51	362	凝灰岩	238	

第106図　遺構外出土遺物(平安時代ほか1)



図番号	器　種	出土地・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	整理番号	備　考
7	砥石	Ｉ－７Ⅱ層	86	70	13	119	細粒凝灰岩	222	平安時代
8	砥石	Ｊ－６Ⅰ層	(85)	49	30	(17.5)	細粒凝灰岩	229	平安時代

番号	整理番号	出土位置	種類	外径(mm)	内径(mm)	外縁厚(mm)	重量(g)	備　考
9	214	Ｆ－３Ⅰ層	銭貨	24.0	6.5	1.0	2.5	「寛永通宝」
10	218	Ｊ－37Ⅱ層	銭貨	22.5	7.0	1.0	1.3	「寛永通宝」
11	215	Ｇ－３Ⅰ層	銭貨	22.5	6.0	2.0	1.9	「寛永通宝」
12	219	Ｎ－14Ⅰ層	銭貨	21.0	—	1.5	3.4	
13	216	Ｇ－10Ⅰ層	銭貨	24.0	6.0	1.0	2.6	「寛永通宝」
14	217	Ｉ－20Ⅰ層	銭貨	23.0	—	1.0	3.2	

第107図　遺構外出土遺物(平安時代ほか２)

上以外に、古銭７点、現代の１円玉が１点出土している。古銭について判読できたものは寛永通宝４点である。

(伊藤昭雄)

第VI章　調査の成果

第１節　縄文時代

１　検出遺構

（１）竪穴住居跡

竪穴住居跡は１軒しか検出されなかった。住居跡の所属時期は、出土土器から、縄文時代後期前半の十腰内Ｉ式期と考えられる。平面形は楕円形を呈し、ほぼ中央に地床炉をもつ。柱穴配置は不明であるが、北壁の中央が階段状の段差を有している。

住居跡が検出された位置は、小ピット群の外縁部にあたり、その長軸方向は２号掘立柱建物跡とほぼ同方向を向いている。今回の調査では１軒だけであるが、調査区域外にも数軒存在している可能性が考えられる。

（２）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は２基検出した。あたかも、住居跡と小ピット群との中間に位置しているようにも見える。ピットから出土した遺物はともに十腰内Ｉ式土器であることから、当該時期の所産と考えられる。

形態は、第１号が１間×２間の長方形プラン、第２号は長六角形を呈した、いわゆる亀甲型プランである。長軸方向は直交するように位置している。

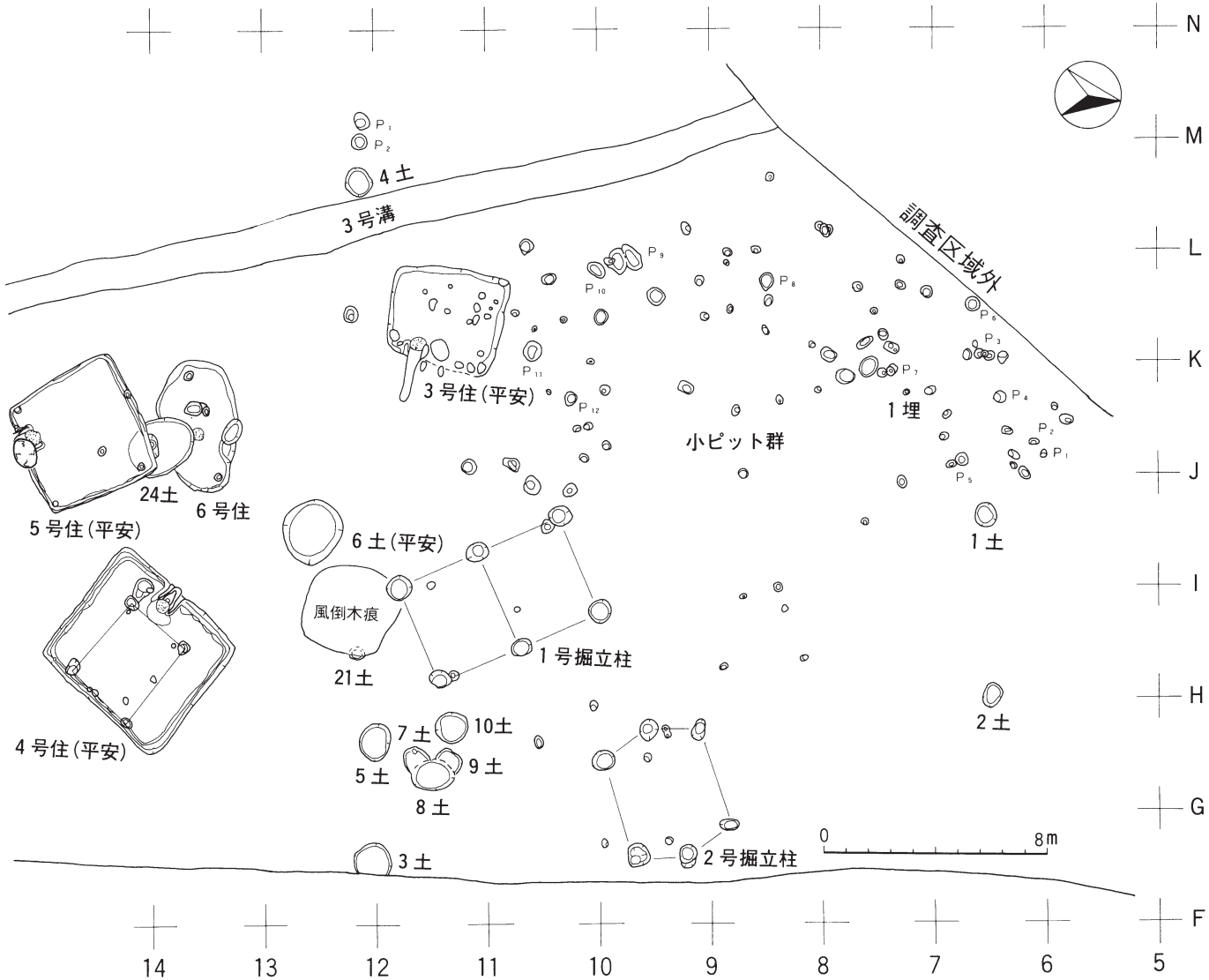
各ピット間の寸法は、第１号は短辺（南西～北東）が360cm～368cmで、平均すると364.5cm、長辺（南東～北西）が306cm～315cmで、平均すると311.0cmである。

同様に第２号は、短辺（北西～南東、南～北）が180cm～189cmで、平均すると186.0cm、長辺（南西～北東）が368cmと370cmで、中軸線は470cmである。また、中軸線上の２個のピットを除いて、ピット２と６、ピット３と５の間の寸法はそれぞれ358cm、360cmである。この寸法は第１号の短辺方向の柱間とほぼ同じ寸法である。

第１号と第２号とは平面形が異なっているが、各ピット間の寸法は近似した数値を示している。

（３）土　坑

調査区域の北側に集中して検出されており、とくに第１号・第２号掘立柱建物跡の南側、Ｆ



第108図　縄文時代の遺構配置図

-11～H-12グリッドで囲まれた区域に多い。

検出した12基の土坑のうち、出土遺物から構築時期を見てみると、第１～３、５、７～10、21、24号土坑は縄文時代後期前半の十腰内Ⅰ式期、第14号土坑は縄文時代晩期の大洞Ｂ式期である可能性が考えられる。

また、第21号土坑は風倒木により大部分を破壊されているが、土器埋設遺構の可能性も考えられる。

（４）小ピット群

調査区の北側の区域から、性格の不明な小ピットをおよそ100個ほど検出した。ピットの一部は、縄文時代以外のものが含まれている可能性があるが、堆積土の状況や出土遺物から、大部分が縄文時代後期前半の十腰内Ⅰ式期の所産と考えられる。

この種の小ピット群は本県六ヶ所村の富ノ沢遺跡や大石平遺跡、上尾駮遺跡等でも類例が報告されているが、墓域に関わる遺構の可能性が考えられている。

（５）まとめ

検出した遺構数は少ないが、住居跡、土坑、掘立柱建物跡、土器埋設遺構、小ピット群が集中して検出され、小規模ながらも当時の集落の様相を示している。

調査区域外にも当該時期の遺構の存在が考えられるが、平成６年度の野尻（４）遺跡の調査では沢の向かい側には、縄文時代の遺構は検出されなかったし、遺物もほとんど出土していないという。したがって、集落の規模は調査区の両側に幾分広がるくらいの規模と考えられる。

２　出土遺物

（１）土　器

縄文式土器の出土量は段ボール箱で25箱分である。第Ⅰ群土器及び第Ⅲ群土器が少量出土しているが、ほとんどが第Ⅱ群土器である。

第Ⅰ群土器は縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器で、数点の出土である。

第Ⅲ群土器は縄文時代晩期の土器で、大洞Ｂ式に比定される。第14号土坑から少量出土したのみである。

第Ⅱ群土器は、遺構が検出された調査区の北側に集中して出土している。深鉢形土器が大部分を占め、鉢、台付き鉢、壺、ミニチュア土器等が少量出土している。ここでは、もっとも多量に出土した深鉢形土器について、文様上の特徴を見てみたい。

深鉢形土器の器形は、口縁が若干外反するか直立し、胴部のふくらみは上半部か口縁近くに

有するものが多い。口縁には波状口縁と平口縁とがあり、波状口縁には4～6個の波状部を有している。体部文様は器高の半分か、あるいはこれよりやや下った部分から上部に集中し、文様帯下部は平行沈線文で区画されているものが多い。

施文文様には沈線文を主体としたものが多く見られる。磨消縄文のものもやや多く見られるが出土量はそれほどではない。このほかには、櫛目状沈線文、隆沈線、縄文、無文等が少量出土している。

口頸部には平行沈線文や円形文、楕円形文等が施文されているものや、粘土紐の張り付け等が見られるものがある。また、隆帯上に刺突文が付されているものも少数見られる。これらの文様は、波状口縁の土器の場合には波状部分に対応して施文されている。また、口頸部が無文のものも少数見られる。

胴部には口縁波状部に対応した文様構成をとるものが多い。これには、S字状・渦巻き状等の文様が横位に展開しているもの、縦位・斜位・弧状の沈線文が見られるもの等がある。平口縁の土器の場合は、口縁部文様帯に施文した円形文に呼応して先の文様が展開されている。また、胴部文様には格子状の沈線文や網目状撚糸文等が見られるものも少量見られる。

以上のような特徴を持つ第II群土器は、従来の編年に照らして考えると、縄文時代後期前葉の十腰内I式に相当する。

（2）石　器

今回の調査で出土した石器は以下の表の通りである。

	石鏃	石錐	石匙	石篦	不定形石器		剥片	磨製石斧	敲磨器	石皿
					スクレイパー	R－フレイク				
遺構内	2	0	0	1	6	6	16	2	2	3
遺構外	1	2	3	2	25	27	109	3	9	1
小　計	3	2	3	3	31	33	125	5	11	4

（遺構内には平安時代の遺構から出土した石器も含んでいる）

石鏃は3点の出土である。平基無茎1点、平基有茎1点、欠損1点である。

石錐は2点の出土である。1点は石鏃に似た形状で、石鏃の未製品を利用したのかもしれない。もう1点は剥片の一端に調整をくわえたもので小さな頭部を持っている。

石匙は3点の出土である。いずれも縦型石匙で、つまみ部の抉りは浅い。

石篦は3点の出土である。うち1点は大石平型石篦（5号住居跡出土）で、他の2点は基部から刃部に向かって広がる、一般的な形状のものである。

不定形石器は64点の出土である。いわゆるスクレイパーが31点、R－フレイクが33点である。

剝片は129点の出土である。黒曜石が１点含まれる。

以上の剝片石器及び剝片の石材は珪質頁岩が主体であり、ほかに玉髄、玉髄質珪質頁岩、凝灰岩、細粒凝灰岩、黒曜石、鉄石英等がある。

磨製石斧は５点の出土である。すべて、頭部片である。石材は緑色凝灰岩が２点で、頁岩、輝緑岩、細粒凝灰岩が１点ずつである。

敲磨器は11点の出土である。石材は花崗岩が９点と多く、安山岩、細粒凝灰岩が各１点である。

石皿は４点の出土である。完形品が１点あるが(６号住居跡出土)、他は破片である。石材は凝灰岩３点、安山岩１点である。

以上見てきたように、石器の出土数はそれほど多くない。また、石器組成では石槍を欠いている。これらの石器は、出土土器から第II群土器に伴うものと考えられる。

（畠山　昇）

第２節　平安時代

今回の調査により検出した、縄文時代を除く遺構（主として平安時代）は、住居跡10軒、土坑19基、焼土遺構21基、溝跡13条である。このうち、住居跡と出土遺物（土師器・須恵器）について、若干のまとめを行うことにする。

１　住居跡

住居跡の時期については、それからの出土土器及び降下火山灰を基に推定した。前者を基にした時期推定については、当センターの三浦圭介調査第二課長によるものである。後者においては、第９号住居跡確認面（覆土第１層上部）にのみ、Ｂ－Ｔｍとみられる降下火山灰を確認した。この火山灰については、残念ながら蛍光Ｘ線分析にかけていないので、推定の域を出ないが、肉眼上並びに感触上Ｂ－Ｔｍに酷似するものである。

時期		住居跡	計
Ⅰ期	９世紀中頃から後半	１Ｈ、２Ｈ、３Ｈ、４Ｈ	４　軒
Ⅱ期	９世紀後半	５Ｈ、７Ｈ、８Ｈ、９Ｈ、10Ｈ、11Ｈ	６　軒

上から、これら住居跡群を時期別に二分して、変遷をみたのが第109図である。時期が重複する部分もあるが、各時期の住居跡の概要を以下に述べたい。

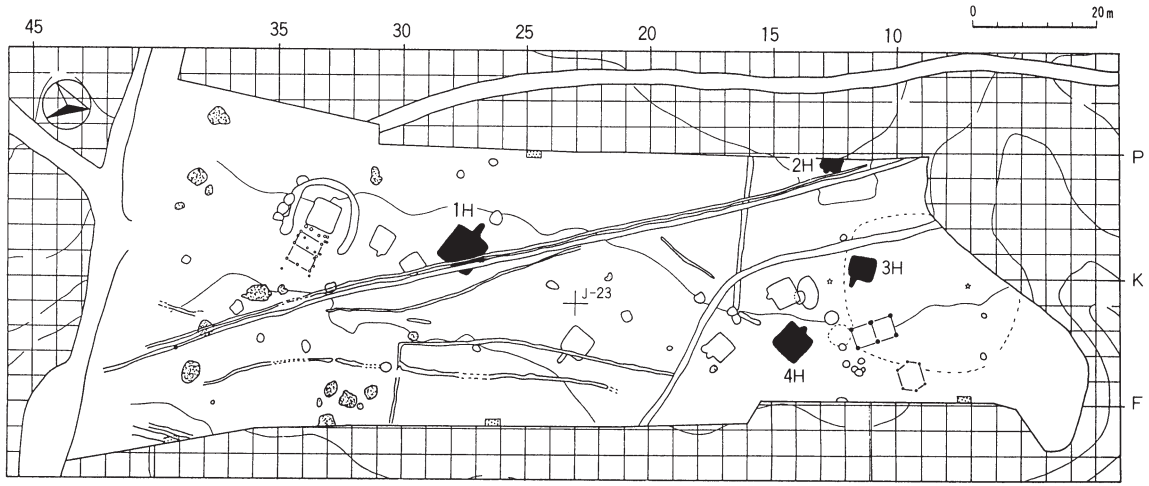
（１）９世紀中頃から後半

第１号から第４号までの４軒である。床面積は25.45㎡から40.30㎡まである。40.30㎡は第１号で、本遺跡では最大である。第２号については、西側四半分が調査区域外にあるため不明であるが、検出された部分が7.51㎡であることから、10㎡内外と推定される。

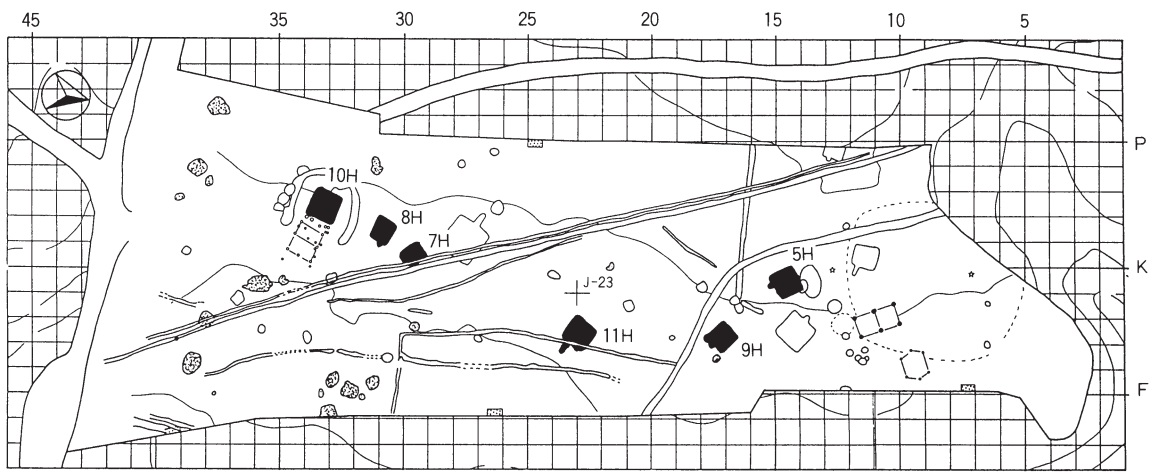
住居の主軸方位は、北西が第１・４号の２軒、東が第２・３号の２軒である。

カマドの設置された位置は、北西壁中央に位置するものが第１・４号の２軒、東壁の南寄りに位置するものが第２・３号の２軒である。後者は壁長の４分の１のところに位置している。カマドの構造は全て半地下式で、煙道部が検出されたのは第１・３号の２軒であり、ともに長い。煙出し孔は煙道部より若干低くなっている。第１号の袖及び天井部は、粘土と礫で構築されているが、他の住居は粘土が使用されているのみである。なお、第４号では新旧のカマドが検出され、どちらにも土師器の甕等が支脚として使用されているのが確認された。

Ⅰ期
9世紀中頃～後半



Ⅱ期
9世紀後半



第109図　住居跡の変遷

柱穴配置の分るものは第１・４号の２軒である。ともに４本の主柱穴が検出され、後者においては柱痕が２本確認された。

付属施設としては、第１・４号では炉、第２号では床下土坑、第３号ではカマド左袖脇に貯蔵穴とみられるピットが検出された。

壁溝は全てに検出され、第３号以外は一周する。第３号もカマドを有する東壁に一部ないのみである。

第３・４号は、炭化材の出土状況から焼失家屋とみられる。前者についてはカマド左脇ピット１覆土から採取した木炭の放射性炭素年代はA.D.440年という値が出ている。出土土器を基にした時期より400年強古いことになる。

出土土器の接合から住居の関係を捕えると、第４号と次に述べる第９号は、それぞれ床面・床面直上出土の土器において、接合できるものが少なくなく、同時期の可能性がかなり高い。

（２）９世紀後半

第５号及び第７号から第11号までの合せて６軒である。床面積は7.30m²から22.54m²まである。第10号については、掘建柱建物跡部分も入れると50.03m²ある。

住居の主軸方位は、南東が第５・７・９・11号の４軒、東が第８・10号の２軒である。

カマドの設置された位置は、南東壁中央に位置するものが第７号の１軒、南東壁の西寄りに位置するものが第５・９・11号の３軒、東壁の北寄りに位置するものが第８・10号の２軒である。第５・８・９・11号は壁長の３分の１、第10号は壁長の４分の１のところにそれぞれ位置している。カマドの構造は、第５・７・９号は半地下式であり、第８・11号については半地下式と推定される。煙道部が検出されたのは第７・９号の２軒であり、ともに長い。煙出し孔は煙道部より若干低くなっている。なお、第11号については、煙出し孔とみられるピットが南東壁より90cm外方に検出され、しかも両袖は同壁北側とは110°～120°の角度を有する。火床面とみられるもののみ検出された第10号を除くと、他は皆袖に粘土が使用されている。また、第８・９号については、土師器の小甕が支脚として使用されているのが確認された。

柱穴配置の分るものは第７・10号の２軒である。第７号は２隅に、第10号はピット３個を確認し、どれも主柱穴とみられる。

付属施設としては、第８・９号では床下土坑、第９号では須恵器埋設土坑及びカマド右袖脇に張出した土坑、第10号では掘立柱建物跡及び外周溝、第11号ではカマド左袖脇に貯蔵穴とみられるピットがそれぞれ検出された。

壁溝は第５・10・11号の３軒にのみ検出され、ほぼ全周する。

第９号は、炭化材の出土状況から焼失家屋とみられ、カマド燃焼部直上から採取した木炭の

放射性炭素年代はA.D.440年という値が出ている。出土土器を基にした時期より450年ほど古いことになる。なお、第11号住居跡ピット3覆土から採取した木炭の放射性炭素年代はA.D.700年で、出土土器を基にした時期と大差はない。

出土土器の接合から遺構の関係を捕えると、前述以外に、第10号住居跡外周溝と第26号土坑は、それぞれの覆土から出土した土器片数点が接合でき、同時期の可能性がかなり高い。

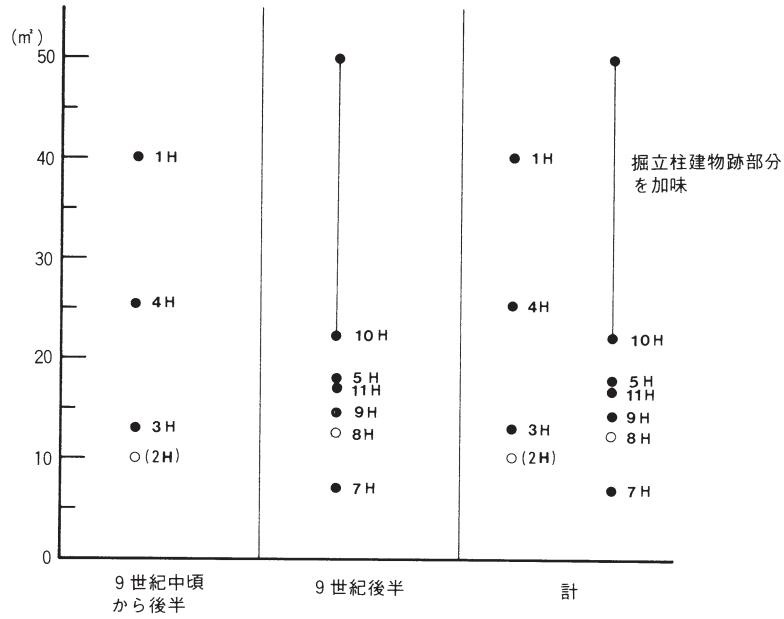
最後に第10号住居跡については、竪穴住居跡に掘立柱建物跡及び外周溝が伴っている。昭和62年に調査された六ヶ所村の発茶沢（1）遺跡においては、竪穴住居跡に掘立柱建物跡が併設されているものが10軒検出されている。掘立柱部分はカマド側に全てあり、竪穴の外側で、カマドのある壁側を除く三方に土盛が造られているものがある。また、平成２～４年に調査された青森市の朝日山遺跡では、竪穴住居跡に掘立柱建物跡及び馬蹄形の外周溝が隣接しているものがいくつかみられた。県による平成５・６年の浪岡町管内での、本遺跡を除く発掘調査でもこのような３点セットの遺構が次々検出されてきている。　（伊藤昭雄）

第３表　住居跡一覧表

No.	平面形	床面積 (m²)	主軸方位	柱穴の配置	カマド 位置	カマド 構造	付属施設	壁溝	降下火山灰	時期	備考
1	方形	40.30	N-52°-W	４本主柱穴	北西壁中央 O	粘土・礫 半地下式	中央に炉	有	無	９Ｃ中頃～９Ｃ後半	１・２溝よりも古い。
2	方形?	(10内外)	S-85°-E	ピット３個?	東壁南側 R１／４	粘土 半地下式	床下土坑	有	無	９Ｃ中頃～９Ｃ後半	２溝よりも古い。西側の１／４は未調査。
3	隅丸台形	13.20	S-77°-E	不明	東壁南側 R１／４	粘土 半地下式	カマド左袖脇に貯蔵穴?	有	無	９Ｃ中頃～９Ｃ後半	焼失家屋、小ピット群よりも新しい。
4	ほぼ方形	25.45	N-46°-W	４本主柱穴－柱痕２本確認	北西壁中央 O	粘土・支脚 半地下式	ピット５と６の間中央に炉	有	無	９Ｃ中頃～９Ｃ後半	焼失家屋、新旧カマド
5	台形	18.05	S-21°±α-E	不明	南東壁西側 R１／３	粘土 半地下式		有	無	９Ｃ後半	24土よりも新しい。カマドの一部は攪乱
7	ほぼ方形	7.30	S-44°-E	ピット２個	南東壁中央 O	粘土 半地下式		無	無	９Ｃ後半	２溝よりも古い。
8	ほぼ台形?	(12.82)	S-55°±α-E	ピットなし	東壁北側 L１／３	粘土・支脚 半地下式?	床下土坑	無	無	９Ｃ後半	
9	隅丸方形	14.17	S-44°-E	ピット１個 不明	南東壁西側 R１／３	粘土・支脚 半地下式	床下土坑及び須恵器埋設土坑	無	B-T m?	９Ｃ後半	焼失家屋、カマド右袖脇に張出した土坑あり。
10	ほぼ方形	22.54	S-71°±α-E	ピット３個 不明	東壁北側 L１／４	不明	掘立柱建物跡及び外周溝	有	無	９Ｃ後半	外周溝は27土より古く、28土より新しい。
11	ほぼ隅丸方形	17.51	N-54°±α-W	不明	南東壁西側 R１／３	粘土 半地下式?	カマド左袖脇に貯蔵穴?	有	無	９Ｃ後半	５溝よりも古い。カマド主軸方向は壁と斜め。

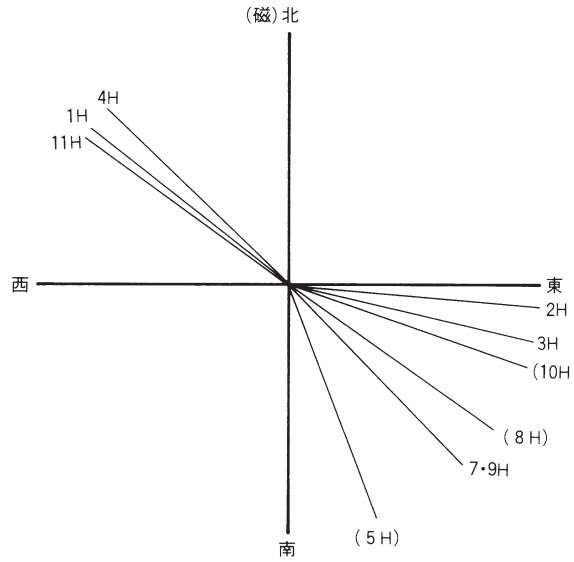
注；　カマドの位置の項で記述したアルファベットは、カマドが壁の中央に位置するものがO、向かって右に片寄っているものがR、左に片寄っているものがLを表している。また、この次に記述してある数字は、壁長のどの位置に設置されているかを表している。
例）　R１／４では、カマドは壁に向かって右側にあり、カマドの軸線が壁長の４分の１のところに設置されている。

1　住居跡の面積



※白丸は推定値、２Ｈの西側四半分は調査区域外

2　主軸方位



※（　）は推定

第110図　住居跡の面積と主軸方位

2　土師器

本遺跡において最も多く出土した遺物である。復原できたものは全て遺構内出土のものである。器形は坏が50点と最も多く、これに続いて、甕41点、小甕19点、皿９点、ミニチュア土器８点、壺３点、鉢２点、堝１点となっている。以下に、分類を行えた坏と甕(小甕を含む)についてそれら詳細を述べる。

(1) 坏

坏に分類された器形のものは総数50点、報告書に実測図を載せている。製作技法の違いから、ロクロ使用のもの（Ⅰ類)、ロクロ非使用のもの（II類)、ロクロ使用の可能性の高いもの（III類）の３類に分けられた。Ⅰ類は、ロクロ成形後に調整を加えているもの（Ⅰａ類）と、ロクロ成形後に調整を加えないもの（Ⅰｂ類）に二分される。

Ⅰａ類

内面を黒色処理し、ヘラミガキ調整を施している。底部に回転糸切痕が観察され、３点ある。

Ⅰｂ類

底部には回転糸切痕が観察される。45点あり、全体の90％を占める。

II類

巻き上げ成形後、内外面にヘラナデ、底部にヘラケズリの見られるもの１点のみである。

III類

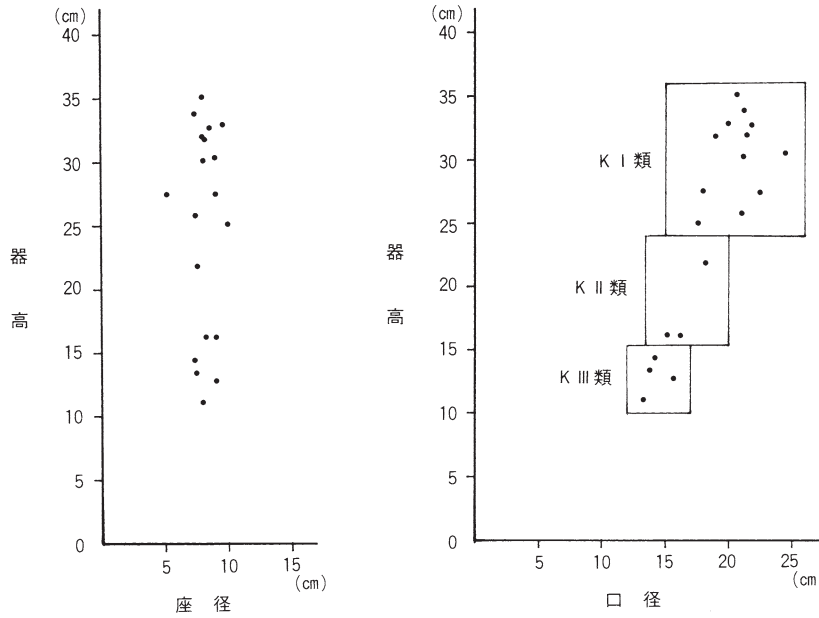
内外面ともヘラミガキが施され、底面にまで及んでいる。また全面に黒色処理している。高台付坏の１点のみである。

(2) 甕(小甕を含む)

甕に分類された器形のものは総数60点報告書に実測図を載せている。このうち、ロクロ使用の確認されたものは４点のみである。第111図は計測可能な19点の底径と器高、口径と器高の相関を示したグラフである。このグラフによると、甕の大きさによって３つの形態に分類できることが分る。その分類基準は、ＫⅠ類－器高が25cm以上のもの、ＫII類－器高が16～22cmのもの、ＫIII類－器高が15cm未満のものである。

ＫⅠ類

12点確認した。器高を細分すると、25～28cmのものが４点、30～34cmのものが７点、35cm代１点である。調整は、外面がヨコナデ・ヘラケズリ、内面がヨコナデ・ナデのものが７点、外面がヨコナデ・ヘラケズリ、内面がヨコナデ・ヘラナデのものが３点、外面がヨコナデ・ヘラナデ、内面がヨコナデ・ナデのものが１点、外面がロクロ・ヘラケズリ、内面がロクロ・ヨコ



第111図　甕の底径・器高、口径・器高の相関図

ナデ・ナデのものが１点である。これらのうち底面調整が砂底と確認できたものは７点、輪積み痕の確認されたものは１点のみである。

ＫⅡ類

３点確認した。調整は、外面がヨコナデ・ヘラケズリ、内面がヨコナデ・ナデのものが１点、外面がヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ、内面がヨコナデ・ナデのものが１点、外面がヨコナデ・ヘラケズリ、内面がヨコナデ・ヘラケズリのものが１点である。砂底は２点認められた。

ＫⅢ類

４点確認した。調整は、外面がヨコナデ・ヘラケズリ、内面がヨコナデ・ナデのものが３点、外面がヨコナデ・ヘラケズリ、内面がナデのものが１点である。砂底は１点認められた。

３　須恵器

報告書に実測図を載せ得たものは13点のみで、土師器の同133点の10％しかない。器形は坏５点、大甕４点、長頸壺３点、甕１点となっている。このうち、第９号住居跡から出土した完形品の大甕は特筆に値するもので、第４号住居跡ピット３及び第６号土坑の各覆土から出土した大甕片もこれに接合することができた。これら各遺構出土大甕片の３試料について蛍光Ｘ線分析を依頼した結果、全て産地不明であることが分った。同分析によって、この他に遺構から出土した須恵器片６点のうち、第６号土坑覆土出土の長頸壺胴部及び第６号溝跡覆土出土の長頸壺口縁・頸部はともに五所川原窯群産であることが分った。他４点は産地不明である。なお、Ｍ－31グリッドⅡ層出土の須恵器甕片１点については、小泊窯群産であった。　（伊藤昭雄）

第Ⅶ章　自然科学的分析

第１節　出土火山灰の蛍光Ｘ線分析

奈良教育大学教授　三辻　利一

１）はじめに

大陸性の花崗岩類にはK、Rb量が多く、海洋性の玄武岩にはCa、Sr量が多い。このことは前者にはカリ長石が多く、後者は斜長石に富むことを意味する。そして、長石類は全火成岩を構成する鉱物の過半数を占める。それほど長石類は主要な鉱物である。元素分析では鉱物種がわかる訳ではないが、主成分元素K、Caは火成岩中の長石類に由来することは間違いない。火山灰も花崗岩類も同じマグマから生じる場合はK、Caの両因子からみた場合、同じ化学特性をもつ。さらに、微量元素Rb、Srはそれぞれ、主成分元素K、Caと正の相関性をもつことが実験データから確かめられている。このことはRbはカリ長石中にKとともに、また、Srは斜長石中にCaとともに共存することを示す。

現在、日本の各地で採取される第四紀の火山灰はCa、Sr量が多く、逆に、K、Rb量は少ないという特徴をもつ。白頭山火山灰のように、K、Rb量が多く、Ca、Sr量が少ないという化学特性をもつ火山灰はない。青森県下の平安時代の遺跡に堆積する火山灰の中に、この特性をもつ火山灰がしばしば出土するが、それはまぎれもなく、白頭山火山灰そのものである。そして、十和田ａ火山灰と組になって同じ遺構に堆積している場合には、必ず、上位火山灰が白頭山火山灰であり、下位火山灰は十和田ａ火山灰である。扶桑略記によると、十和田ａ火山灰は915年と比定されるから、白頭山の大噴火はそれ以後である。

白頭山火山灰と十和田ａ火山灰の化学特性は対照的であるので、蛍光Ｘ線分析によって容易に相互識別される。

一方、青森県内にはこれまでに見つけられている須恵器窯は五所川原窯群のみである。その操業期間は10世紀代といわれる。ところが、最近、五所川原窯群の須恵器よりも、もう少し、年代の古い須恵器が青森県内各地の遺跡のみならず、北海道の遺跡からも出土している。そして、それらがどの地域から搬入されたのかという問題が注目されるようになってきた。筆者も、それらの須恵器試料を多数分析したが、必ずしも、一ヶ所での製作品ではなく、いくつかの異なる胎土をもつ須恵器がまざっていることがわかっている。そうすると、改めて、これら県外からの搬入品とみられる須恵器の年代を再確認する必要がある。その際、白頭山火山灰と十和

田ａ火山灰が鍵層として重要な役割を果たすことが期待されることになる。こうした観点から、青森県内の平安時代の遺跡に堆積する火山灰の分析作業が進められている。

本報告では、野尻（２）遺跡から出土した２点の火山灰試料の蛍光Ｘ線分析の結果について報告する。

２）分析方法

すべての試料は実験室に持ち帰ってのち、電気乾燥器の中で、150℃で数時間乾燥したのち、粉砕した。粉末試料は15トンの圧力をかけてプレスし、内径20㎜、厚さ３～５㎜の錠剤試料を作成し、蛍光Ｘ線分析を行った。

波長分散型の全自動式蛍光Ｘ線分析装置（理学電気製3270型機）でK、Ca、Fe、Rb、Sr、Naの４元素が定量分析された。標準試料には岩石標準試料JG－１を使用した。分析値はJG－１による標準化値で表示された。

３）分析結果

分析結果は第４表にまとめられている。すべての分析値は標準試料として使用した岩石標準試料JG－１による標準化値で示されている。

結果をわかり易く説明するため、いくつかの分布図を作成した。第112図にはRb－Sr分布図を示す。この図には白頭山領域を示してあるが、これまでの多数の火山灰試料の分析データを包含するようにして白頭山領域を描いてある。この領域は十和田ａ火山灰の領域とは全く異なる。そうすると、No.１、２の２点の火山灰試料はともに、白頭山領域に分布した。

第113図にはＫ－Ca分布図を示してある。この図でも、２点の試料は白頭山領域に分布することがわかる。

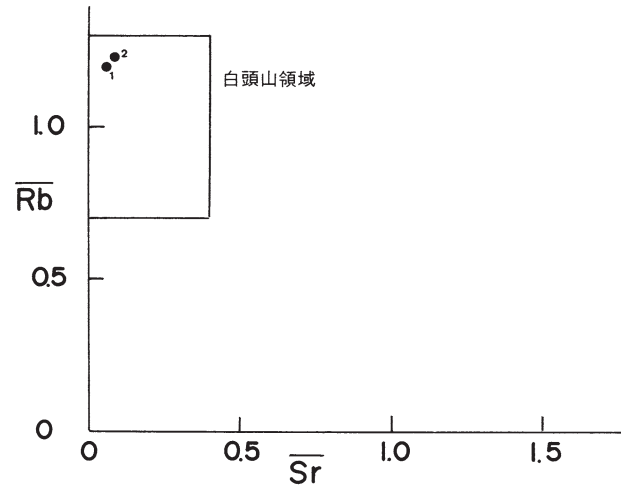
最近ではFe因子も、白頭山領域と十和田ａ領域では異ることがわかってきた。白頭山火山灰にはFe量がやや多く、黄色味をおびる。２点の火山灰はFe因子でも白頭山領域に分布することが予想される。第114図にはFe因子を比較してあるが、予想どおり、２点とも白頭山領域に分布することがわかる。

この結果、２点の火山灰は十和田ａ火山灰とは考えられず、白頭山火山灰と推定された。

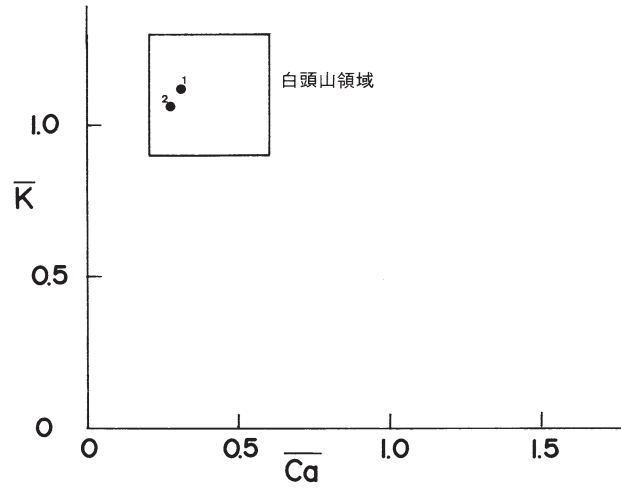
第４表　野尻（２）遺跡出土火山灰の分析データ

試料番号	出土地点	層位	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	推定結果
1	６号土坑	－	1.12	0.305	2.36	1.20	0.054	1.35	白頭山火山灰
2	18号　〃	３層	1.06	0.277	2.37	1.23	0.084	1.31	白頭山火山灰

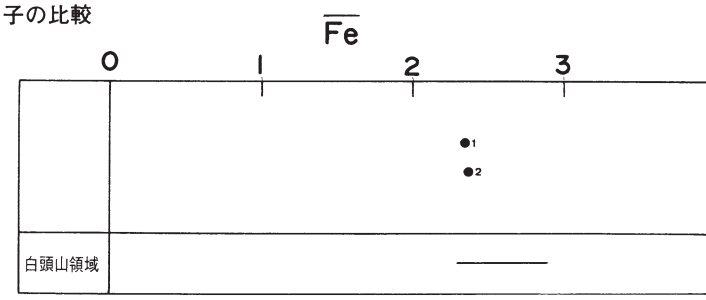
第112図　Rb-Sr分布図



第113図　K-Ca分布図



第114図　Fe因子の比較



第2節　出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学教授　三辻　利一

1）はじめに

青森県内の遺跡から、5～6世紀代の須恵器が出土したという報告はほとんどない。7世紀代とみられる須恵器は八戸市の阿光坊古墳群などから出土している。勿論、県外からの搬入品であるが、筆者の分析データから関東の南比企地域および、東海の湖西地域が産地の有力候補に上げられている。この時期に福島県相馬郡の善光寺窯が操業していたが、ここの製品の胎土とは一致しなかった。未だ、東北地方では本格的な須恵器生産に入っていない時期である。

8世紀代に入ると、隣接する秋田県内では小規模な須恵器生産が県内の数ヶ所でも行われた。当然、東北地方の各県（青森県を除く）でも、小規模な須恵器生産が行われた。

9世紀代に入ると、福島県会津若松市の大戸窯群で大規模な須恵器生産が行われ、その結果、長頸瓶、短頸瓶などは東北地方最大の国衙である宮城県の多賀城、および、その周辺の遺跡へも供給されたことが確認されている。奇妙なことに、大戸窯群の製品は東北地方の日本海側の遺跡や青森県、北海道の遺跡にも検出されていない。

10世紀代に入って、青森県内では五所川原窯群で本格的な須恵器生産に入る。五所川原窯群は本邦、最北端の須恵器窯群である。この窯群が本格的に操業に入ると、津軽、下北両半島を含む青森県全域、および、秋田県北部地域の遺跡から、五所川原窯群産の須恵器が検出される。さらに、北海道全域の遺跡からも検出され、五所川原窯群の工人集団を掌握する豪族の活発な活動状況を示唆する。

東北地方北部地域や北海道の遺跡出土須恵器の胎土分析が進むにつれて、興味深い事実が出て来た。北海道の遺跡から出土する須恵器は必ずしも、五所川原窯群の製品とは限らなかったのである。異なる化学特性をもつ須恵器が小樽、札幌、旭川各市の遺跡から次々に出土してきたのである。この様相は北海道だけに留まらなかった。青森県内の遺跡からも、続々と非五所川原窯群の化学特性をもつ須恵器が出土することが蛍光X線分析による胎土分析によって示されてきた。最近では五所川原市内の遺跡からも出土している。

このように、五所川原窯群産の須恵器と非五所川原窯系の須恵器が、北海道、東北地方北部地域の遺跡から次々に出土してきた段階で、果して、これらの須恵器が同時期のものなのであるかどうかが問題となって来た。一説には、共伴して出土する土師器などから、非五所川原窯系の須恵器の方が少し古いともいわれている。そして、外部地域から青森県内の遺跡に供給さ

れた須恵器は一体、何処から搬入されたものなのか、その産地問題が重要な考古学上の問題として浮上してきた。産地が1個所であるかどうかも問題である。筆者の分析データをみる限り、須恵器胎土の化学特性は単純ではなく、何種類かの胎土が含まれており、複数の産地から搬入されたことはほぼ間違いない。そして、大まかな推察からはこれら搬入品の産地は東北地方から北陸地方へかけての日本海側にあるとみられている。大まかな推察といったのは、これら日本海沿岸地域の母集団(窯群)の整理が十分ではないからである。窯群出土須恵器の化学特性とその操業時期についてのデータが整備されると、これら搬入須恵器の産地問題は解決されるものとみられる。

上述したような東北地方北部地域の須恵器の伝播・流通の概観を背景にして、野尻(2)遺跡から出土した須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2)分析方法

従来通り、須恵器表面を研磨して、灰釉等の付着物を除去したのち、100メッシュ以下に粉砕した。粉末試料は塩化ビニール製リン5を枠にして、13トンの圧力でプレスし、内径20㎜、厚さ3～5㎜の錠剤試料を作成した。錠剤試料は試料ホールダーに固定し、全自動式の波長分散型の蛍光X線分析装置で分析した。本装置には48個の試料が同時にマウントできる自動試料交換器が連結されている。48試料のうち、1個は必ず岩石標準試料JG－1である。JG－1は標準試料としての役割をもつとともに、定常状態で分析作業が進行しているかどうかをチェックするモニターの役割ももっている。本装置はきわめて安定性がよく、年間を通して、変動係数はどの元素（Na、K、Ca、Fe、Rb、Sr）についても1％以下であった。

3)分析結果

分析値は第5表にまとめられている。判別分析、クラスター分析などの多変量解析を行うため、データを取扱い易いように、JG－1による標準化値で表示した。

はじめに、何種類の胎土の須恵器が混ざっているかをみるため、クラスター分析を行った。K、Ca、Rb、Srの4因子を使って群平均法でクラスター分析した結果を第115図に示す。4因子を使う理由がある。これら4因子は火成岩中では主として、長石類に含まれている。K、Caは主成分元素であり、Rb、Srは微量元素であるが、RbはKと、SrはCaとそれぞれ、正の相関性をもつことが確認されている。したがって、花崗岩類などの火成岩中にはK、Rbは主としてカリ長石中に、また、Ca、Srは斜長石中に含まれる。このことから、須恵器の素材粘土中のこれら4元素は母岩の長石類から由来したものと考えられる。全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから、これら4因子が有効に地域差を表わすことが立証された。

これに対して、Fe因子は母岩中の雲母、角閃石、輝石などに含有されている。Siと同様、複数の鉱物中に共通に含まれる元素はあまり有効に地域差を表示しない。Fe因子はK、Ca、Rb、Srの長石系因子ほど有効に地域差を表示しないが、五所川原窯群の須恵器のように、Fe因子が特徴を示す場合もある。長石系4因子が有効に地域差を表示するのは、多分、日本列島の地質的生因に関係があるものと思われる。つまり、日本列島はアジア大陸の東端にあり、その東縁では太平洋プレート、フィリピンプレートが地下深く潜り込む。大陸を構成する花崗岩類にはカリ長石が多く、他方、プレートの玄武岩は斜長石に富む。カリウムに富む大陸的な岩石とカルシウムに富む海洋的な岩石がぶつかり合う日本列島の地下構造が、そして、それを母岩として形成される粘土を素材として使った須恵器の化学特性に反映されているのである。白頭山火山灰と十和田a火山灰にみられる化学特性の対照性も同じ原因に起因するものと思われる。

地球上ではほとんどの元素は単独の元素状態では存在しない。他の元素と結合し、より安定な化合物（鉱物）として存在する。筆者は鉱物ごとに分けて、多変量解析をしてみようと考えているので、クラスター分析では雲母、角閃石などの鉄化合物をはずして、長石類中の元素のみを使用したのである。

第115図をみると、A群（№1、2、4、6、8、10)、B群（№7、9、12)、C群（№3、5、11)の3群に分類できることがわかる。この分類が妥当であることは第116図のRb－Sr分布図でわかる。A、B群はそれぞれ、よくまとまっているが、C群の3点は大きくばらついており、同じC群に分類されたものの、№3、5、11は同じ産地の製品であるかどうかはわからない。少なくとも、第115図では3群に分類できるという意味であり、C群がさらに細分比される可能性はある。

さて、ここで、これら12点の須恵器の産地を推定するため、代表的な3つの母集団からのマハラノビスの汎距離を計算してみた。3つの母集団とは新潟県佐渡の小泊窯群、秋田県の竹原窯群、そして、地元、五所川原窯群である。通常、K、Ca、Rb、Srの4因子を使って判別分析を行うが、五所川原窯群の製品にはFeがきわだって多いという特徴があるので、微量元素のSrに代わってFe因子を使用した。計算結果は第6表にまとめられている。

4因子で、母集団の試料数が50点程度のとき、HotellingのT^2検定をかけると、マハラノビスの汎距離の二乗値が10以下で帰属条件を満足する。この結果を適用すると、№7、9の2点は五所川原群産、№12は小泊群産と判定される以外はすべて、産地不明となる。

そこで、確認のため、第117図にはFe因子を比較してある。№7、9の2点は明らかに五所川原領域に分布することがわかる。第116図のRb－Sr分布図では№7、9のみならず、№3、12も五所川原領域に分布したが、後者の2点は第117図のFe因子では明らかに五所川原領域をずれることがわかる。

なお、№1、2、4、6、8、10はA群に属しており、Rb－Sr分布図でもよくまとまって分布しているが、他の全因子でも類似していることは第5表から読みとれる。すなわち、これら6点の須恵器は同一産地の製品である可能性が高い。さらに、Feの含有量や、Rb－Sr分布図での分布位置から、東北地方太平洋側の産物である可能性をもつ。秋田県産の須恵器にはFe量が少なく、Rb量はもう少し多いので、秋田県産である可能性は少ない。これに対して、K、Rb量が多い№3、5、11の3点は太平洋岸側の産物である可能性は少ない。日本海沿岸側産の須恵器である可能性が高い。

蛍光X線分析による以上の結果は、考古学的形式論による分類結果と比較すると、さらに興味ある情報が引き出されるかもしれない。

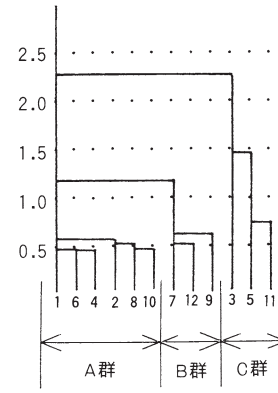
第5表　分析値

試料番号	部　位	出土地点	層位	器　種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類
No. 1		4 H	覆土	大甕	0.262	0.434	2.15	0.298	0.578	0.263	A
No. 2		8 H	床面	大甕	0.250	0.380	1.87	0.338	0.471	0.282	A
No. 3	肩部	9 H	床直	長頸壺	0.552	0.178	2.53	0.533	0.417	0.392	C
No. 4	口縁部	9 Hピット5	覆土	大甕	0.270	0.424	2.20	0.295	0.553	0.267	A
No. 5	口縁部	10H(外周溝)	覆土	坏	0.503	0.313	2.66	0.658	0.540	0.264	C
No. 6	頸部	6土	覆土	大甕	0.273	0.444	2.20	0.302	0.570	0.267	A
No. 7		6土	覆土	長頸壺	0.325	0.279	3.61	0.393	0.338	0.244	B
No. 8	胴部下半	26土	覆土	坏	0.295	0.368	2.35	0.314	0.528	0.260	A
No. 9	頸部	6溝(G−28)	覆土	長頸壺	0.355	0.334	3.37	0.434	0.391	0.261	B
No.10	胴部下半	G−34	III層	坏	0.288	0.358	2.40	0.310	0.535	0.248	A
No.11	胴部下半	I−5	II層	坏	0.462	0.408	2.20	0.712	0.651	0.338	C
No.12		M−31	II層	甕	0.331	0.206	2.63	0.387	0.337	0.161	B

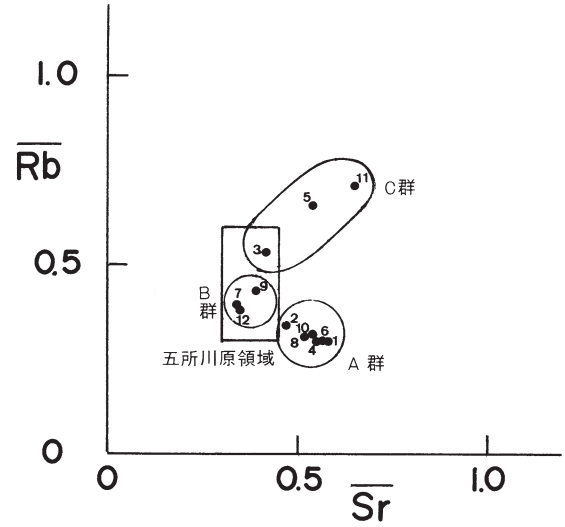
第6表　母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値

試料番号	五所川原群(青森県)	小泊群(新潟県)	竹原群(秋田県)	推定産地
No. 1	53	23	60	不明
No. 2	54	25	32	不明
No. 3	79	34	56	不明
No. 4	53	24	58	不明
No. 5	59.2	21	56	不明
No. 6	52	27	65	不明
No. 7	3.6	23	127	五所川原群
No. 8	46	15	43	不明
No. 9	1.7	35	117	五所川原群
No.10	44	12	42	不明
No.11	43	35	64	不明
No.12	34	6.6	21	小泊群

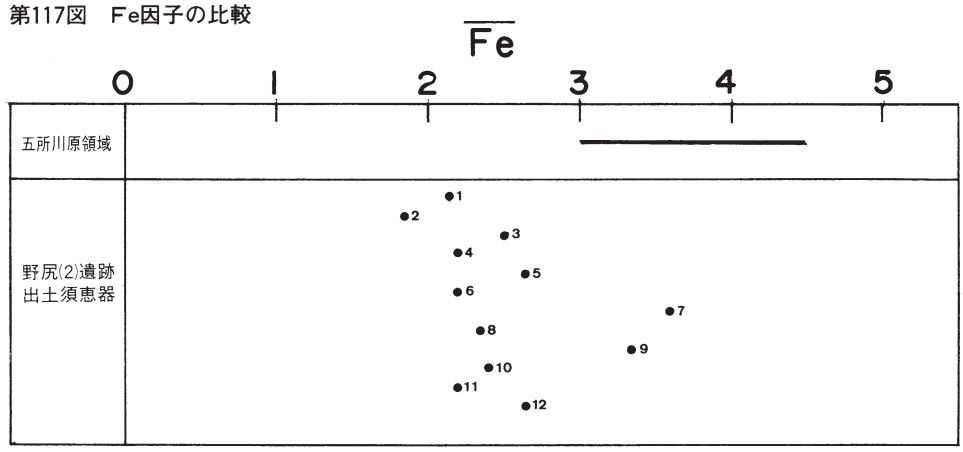
第115図　クラスター分析
（K，Ca，Rb，Sr因子）



第116図　Rb-Sr分布図



第117図　Fe因子の比較



第3節　放射性炭素年代測定

学習院大学教授　木越　邦彦

1994年3月26日

1993年12月24日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLIBBYの半減期 5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また、試料のβ線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、δ^{14}C%を付記してあります。

記

Code No.	試料	年代(1950年よりの年数)
GaK－17743	木炭 from 野尻(2)遺跡	1510±80(A.D. 440)
	No.1 第3号住居跡カマド左脇ピット1覆土から採取	
	確認面から約50cm下部(床面から約40cm下部)	
GaK－17744	木炭 from 野尻(2)遺跡	1510±80(A.D. 440)
	No.2 第9号住居跡カマド燃焼部直上から採取(C－36)	
	確認面から約30cm下部	
GaK－17745	木炭 from 野尻(2)遺跡	1250±80(A.D. 700)
	No.3 第11号住居跡ピット3覆土から採取	
	確認面から約20cm下部	
GaK－17746	木炭 from 野尻(2)遺跡	30±70(A.D.1920)
	No.4 第31号土坑底面直上から採取	
	確認面から約24cm下部	

第4節　出土鉄器の金属学的解析

岩手県立博物館主任専門学芸調査員　赤沼　英男

青森県浪岡町に立地する野尻(2)遺跡からは、土器を始めとする関連出土品によって、9世紀後半に比定可能な住居跡が検出されている。ちょうどこの頃、鰺ヶ沢町の杢沢遺跡にみられるように、岩木山麓一帯に炉跡を伴った鉄生産関連炉が出現するようになる(1)。このような鉄生産関連炉の急増は、その周辺に分布する住居跡内での鉄器の利用と密接な関連があるものと考えることもできる。

このたび青森県埋蔵文化財調査センターの依頼により、同遺跡から出土した鉄器の金属学的解析を行う機会に恵まれた。

分析の結果、野尻(2)遺跡内では、鉄鉱石を始発原料として製造された鋼を素材とする鉄器が確認された。製品鉄器として遺跡内にもたらされた可能性が高く、鉄器の流通を検討するうえで興味深い結果といえる。以下では、上述の結果が導き出された実験の過程を報告する。

1　分析資料

分析を行った資料は、9世紀後半と推定される住居跡から出土した№1刀子および№3環状鉄器の2点である。資料の名称ならびに出土遺構を第7表に、外観を第118図に示す。

2　分析用試料の調製

分析には、保存処理の際に採取することができた微小な錆試料片を用いた。試料の採取にあたっては、資料の形状を損ねることのないよう細心の注意を払った。採取した試料片を2分し、小さい方の試料片については表層面の土砂および錆層を除去した後化学成分分析に、もう一方についてはそのまま組織観察に供した。

3　分析方法

組織観察用試料は樹脂に埋め込み、表面の垂直面をできるだけ浅く削り取った後、ダイヤモンドペーストを用いて仕上げ研磨を行った。研磨の工程では試料中の化学成分の溶出を避けるため、水を一切使用しない方法をとった。研磨した試料は金属顕微鏡によるミクロ観察に供し、さらに地金に残存する非金属介在物の中で、地金の製造法を推定する上で重要と判断されたものについては、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）によりその組成を

決定した。

化学分析用試料片はメタノールで超音波洗浄し乾燥した後、王水・弗化水素酸を使って完全に溶解し、誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP－AES 法）により各含有成分を定量した。

4　分析結果ならびに考察

4-1　鉄器の化学成分

第 8 表は鉄器から採取された試料片の化学成分分析値である。No. 1 刀子およびNo. 3 環状鉄器の T.Fe は、それぞれ59.60、43.80％であり、錆化が相当に進んだ試料が分析に供されたことがわかる。

上述の 2 点の鉄器には P 分が、それぞれ0.112、1.31％含有されている。錆化が進んだ試料のため、埋蔵環境からの富化の可能性もあり、検出された P 分を直ちにもとの健全な地金に含有されていたものとして扱うことはできない。このような場合、同じ埋蔵環境下にあった他の遺物との化学成分上の対比を行い、埋蔵環境下からの富化の有無を検討する必要があるが、同じ遺構から出土した他の鉄器の分析値がないため困難である。したがって、上述の 2 点の鉄器から検出された P 分を、化学成分分析値でもって直ちにもとの健全な地金に含有されていたものとみなすことはできない。

4-2　鉄器から採取された試料片のマクロおよびミクロ組織

第119図は、No. 1 刀子、No. 3 環状鉄器から採取した試料片のマクロ組織である。白色部は健全なメタル、灰色部は黒錆、暗灰色部は赤錆、黒色部は亀裂および欠落孔に対応する。No. 1 刀子の断面中央部には健全なメタルがみられるものの、その周辺は黒錆層と赤錆層からなる。No. 3 環状鉄器にいたっては試料のほとんどが赤錆層によって構成されており、錆化が相当に進んでいることがわかる。No. 1 刀子については、残存するメタル部分を酸で腐食させることにより、地金の炭素含有量を推定することができるが、錆化の進行と非金属介在物の喪失を考慮して、今回は見合わせた。また、No. 3 環状鉄器については、もとの健全な地金の状態を推定できる組織を見出すことができなかった。

4-3　鉄器から採取した試料片に見出された非金属介在物組成

第120図はNo. 1 刀子から採取した試料片に見出された非金属介在物の EPMA による 2 次電子像と反射電子像、ならびに定性分析結果である。介在物は、FeO-SiO_2-Al_2O_3-CaO-K_2O-Na_2O-P_2O_5-MgO-TiO_2-SO_3系のガラス質珪酸塩(D)からなる。また、ガラス質珪酸塩には相当量の P 分が含有されている。なお、No. 3 環状鉄器から採取した試料片には非金属介在物を見出すこと

はできなかった。

4-4　古代末および中世における鋼の製造法

古代・中世の鋼の製造方法については未だに不明な点が多く、幾つかの仮説が提示されているが、それらを整理すると以下の３つの段階に区分することができる。

ア　原料鉱石（砂鉄もしくは鉄鉱石）から鉄分を抽出する段階

イ　アで抽出された鉄分を精製し目的とする鋼を製造する段階

ウ　イで製造された鋼から鉄器を製作する段階

以下ではアを製錬、イを精錬、ウを小鍛冶と呼ぶことにする。

アの製錬によって得られる鉄塊は鋼塊と銑鉄塊の２つである。前者の鋼塊はそのままウの小鍛冶によって目的とする最終製品へと加工される。後者の銑鉄塊は、溶解し鋳型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器となる。また、銑鉄中の炭素分を低減させる、すなわち脱炭することによって鋼を製造することもできる。上述を整理すると第121図のごとくになる。

これまで古代・中世の鉄生産関連遺構の発掘調査によって、炉跡とともに流状滓を含む相当量の鉄滓、鉄塊が検出され、さらに炉周辺に利用可能な原料鉱石（砂鉄かもしくは鉄鉱石）と木炭資源が存在すれば、その炉は一応製錬炉とみなされてきた。しかし、北沢遺跡の例にみられるように、炉跡が確認されてもその炉は製錬炉ではなく、銑鉄を素材とし脱炭材として砂鉄を使用する精錬炉である可能性の高いことが金属学的解析によって指摘されている(2)。したがって、鉄滓の化学組成と鉱物組成のみを根拠としての、あるいは炉の検出だけでもって直ちに遺跡の性格を判定することは困難である。炉跡に伴って出土した鉄滓と鉄塊、および遺構内もしくはその周辺から採取される原料鉱石の組成を総合的に検討し、併せて炉内反応の状況を推定しながら慎重に遺跡の性格を判定しなければならない。

4-5　鉄器の製作に使用された地金の材質

非金属介在物組成から、№１刀子は鍛造鉄器であることが明らかである。№３環状鉄器については、ミクロ組織観察に基づき鍛造および鋳造の区別をすることができないが、器形からやはり鍛造鉄器である可能性が高い。

鋼の製造過程において砂鉄が使用された場合、砂鉄中のチタン化合物は炉内の温度と還元雰囲気に応じチタン分が濃縮された化合物へと変わり、その一部が非金属介在物中に残る。したがって、鉄器の非金属介在物中にチタン化合物が見出されれば、一応砂鉄の使用によって製造された鋼(3)によって製作されたものとして扱うことができる。

№１刀子の非金属介在物にはチタン化合物が観察されないことから、鉄鉱石を始発原料とし

て製造された鋼を素材としていたものと判定される。さらに、№1刀子からはP分が0.1%強検出されている。非金属介在物のガラス質珪酸塩中にもP分が相当量含有されていることを考慮すると、検出されたP分はもともと地金の中に含まれていた可能性が高い。始発原料は含リンの鉄鉱石が有力である。№3環状鉄器については非金属介在物を見出すことができなかったため、鋼の製造時に砂鉄が使用されたかどうかは不明である。ただし、1%強のP分が含有されていることから、鋼の製造に使用された始発原料として、含リンの鉄鉱石を考えることができる。

遺跡内にいたる経路としては、製品として持ち込まれた、鉄素材、すなわち鋼か銑鉄の供給を受け遺跡内で製品鉄器へと加工された、原料鉱石から最終製品にいたるまで遺跡内で一貫生産された、という3つの可能性が考えられる。この点については、今後遺跡内およびその周辺で検出された炉跡を含む鉄生産関連遺構から出土する、鉄塊、鉄滓の金属学的解析結果に基づき慎重に検討する必要があるが、これまでの東北地方北部で発見された鉄生産関連炉および住居跡から検出された鉄滓の多くにチタン化合物が認められるという事実を考慮すると、少なくとも№1刀子については製品レベルで持ち込まれた可能性が高い。

5　まとめ

野尻(2)遺跡から出土した鉄器の金属学的解析を行ったところ、鉄鉱石を始発原料として製造された鋼をもとに製作された鉄器が確認された。製品として持ち込まれた可能性が高い。今後、他の同時代に比定される住居跡から出土した鉄器の材質および形態との比較検討を行うことにより、東北地方北部の平安期における鉄器の流通の実態をより明確にすることができるであろう。

註

(1)　岡田康博　「青森県における古代～中世の鉄・鉄器生産」
『北の鉄文化シンポジウム予稿集』　岩手県立博物館　1994年　P1～8

(2)　赤沼英男、岡田康博、川上貞雄　「遺物の解析からみた半地下式竪型炉の性格」
平成4年度たたら研究会大会口頭発表

(3)　古代・中世における鋼の製造方法としては、砂鉄を始発原料としての直接製鋼法と、銑鉄を素材とし脱炭材として砂鉄を使用する間接製鋼法の2通りの方法が指摘されている。非金属介在物中に検出されたチタン化合物が始発原料として用いられた砂鉄か脱炭材として投入された砂鉄かを区別することができないため、砂鉄の使用という表現をとった。

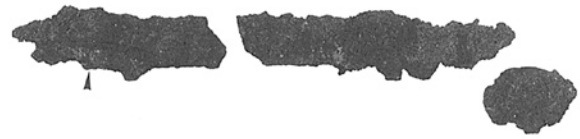
第７表　分析を行った鉄器

No.	資料名	出土層位
1	No.１刀子	１Ｈ　床面
2	No.３環状鉄器	９ Ｈピット1覆土

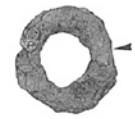
第８表　出土鉄器の分析結果

No.	資料名	化学成分（%）												ミクロ組織	N.M.I
		T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V		
1	No.１刀子	59.60	0.005	tr	0.112	0.007	0.028	0.008	0.488	0.014	0.153	0.007	tr	no	D
2	No.３環状鉄器	43.80	0.011	0.008	1.31	0.026	0.029	0.044	－	－	－	－	－	no	no

注１　tr は痕跡、－は分析せず、no は観察できずを表す。
注２　N.M.I は非金属介在物組成、D はガラス質珪酸塩を表す。



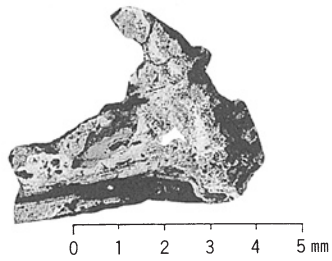
a：No. 1刀子



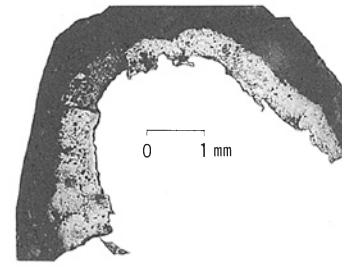
b ：No. 3環状鉄器

第118図　分析を行った鉄器の外観

矢印で示した部分は分析用試料採取位置である。

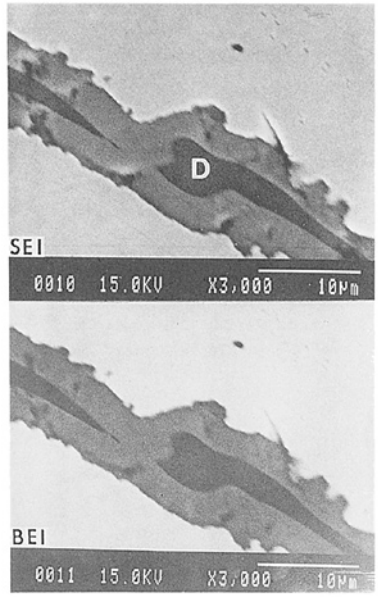


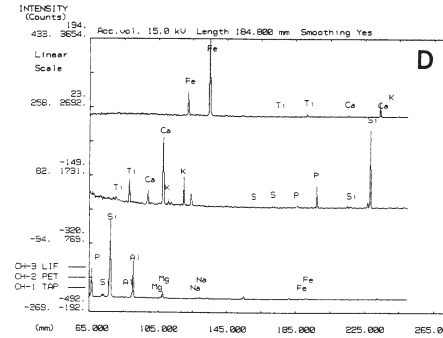
a： No. 1刀子



b：No. 3環状鉄器

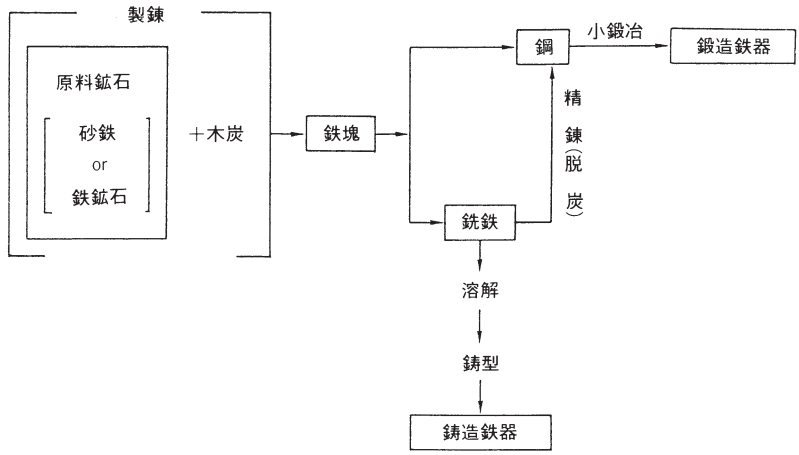
第119図　No 1 刀子，No 3 環状鉄器から採取した試料片のマクロ組織





D：ガラス質珪酸塩

第120図　No 1 刀子に見いだされた非金属介在物の EPMA による2次電子像と反射電子像、ならびに定性分析結果



第121図　推定される鋼製造法

☆　引用・参考文献

1　青森県教育委員会　『山本遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第105集　1987

2　〃　『発茶沢(1)遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集　1989

3　〃　『朝日山遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第152集　1993

4　〃　『山元(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第159集　1994

5　〃　『図説ふるさと青森の歴史－大地から甦った祖先の足跡－総括編』1990

6　玉口時雄・小金井靖『土師器・須恵器の知識』(東京美術) 1984

7　文化庁文化財保護部『埋蔵文化財発掘調査の手びき』(国土地理協会) 1966

8　北林八洲晴　「古代(奈良・平安時代)」『青森県の考古学』(青森大学出版局) 1983

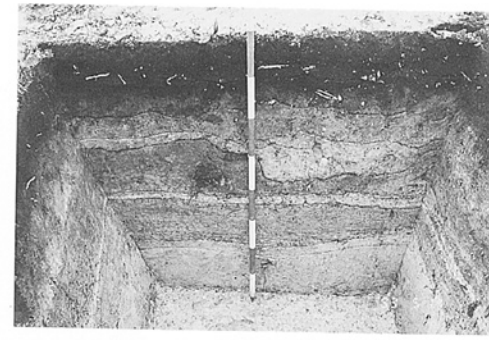
9　三浦　圭介　「北部日本の南北問題」『日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム，北からの視点』(日本考古学協会1991年度宮城・仙台大会実行委員会) 1991

写　真　図　版

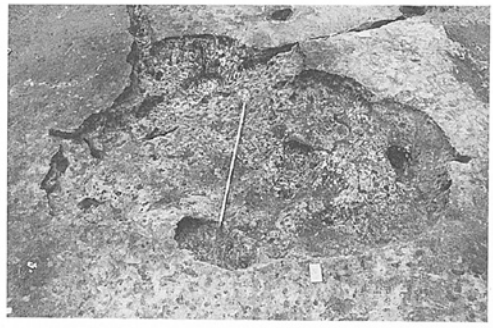
調査風景

作業風景

調査風景



基本層序（F－7グリッド）



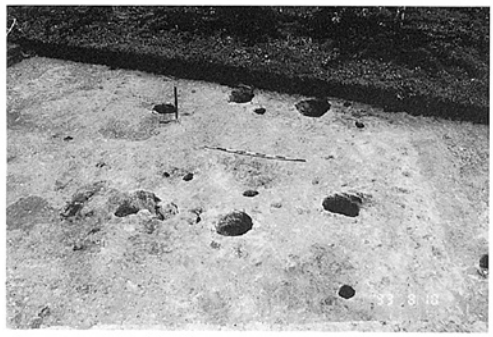
第６号住居跡完掘

第６号住居跡遺物出土状況

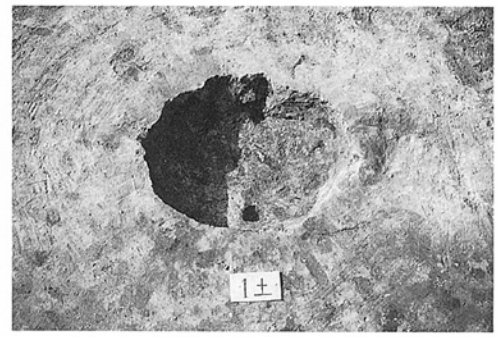
第６号住居跡、第24号土坑真上写真

第Ｉ号掘立柱建物跡

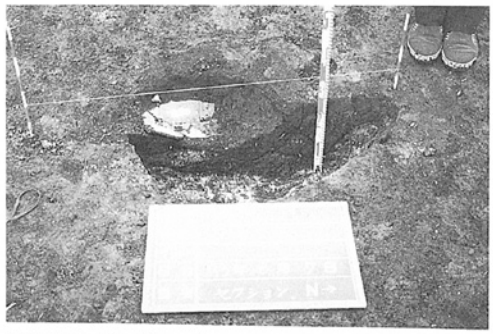
写真１　調査風景・基本層序、遺構(1)



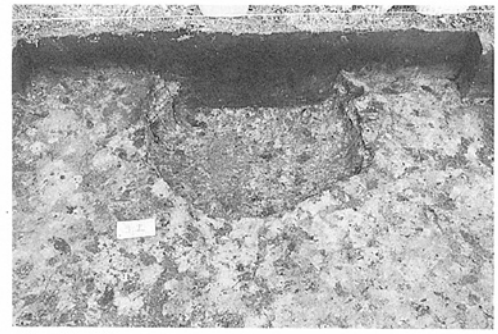
第２号掘立柱建物跡



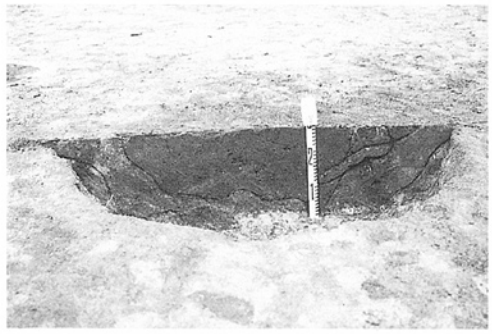
第１号土坑



第２号土坑セクション



第３号土坑



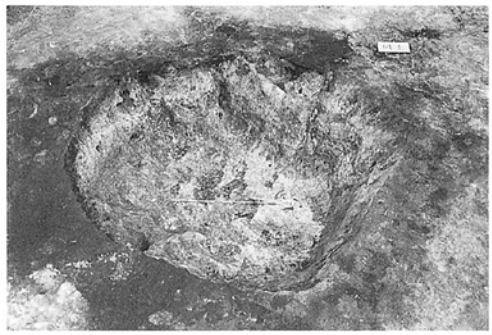
第４号土坑セクション

第５号土坑

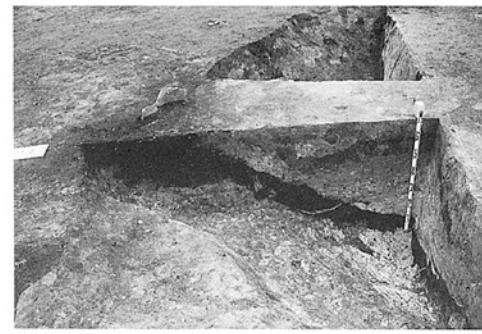
第７号(上)・第８号(中)・第９号(下)土坑

第10号土坑

写真２　遺構(2)

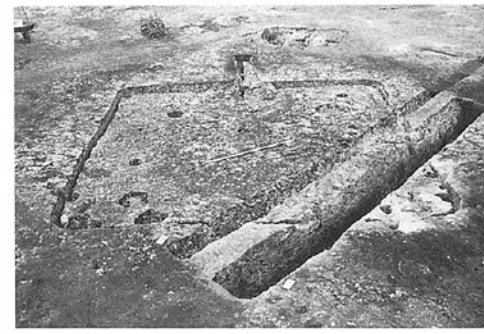


第14号土坑



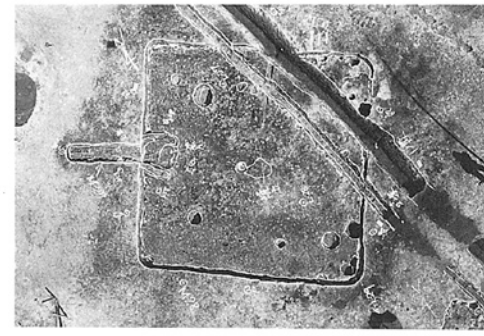
第21号土坑セクション

第１号縄文土器埋設遺構



第１号住居跡完掘

第１号住居跡カマド

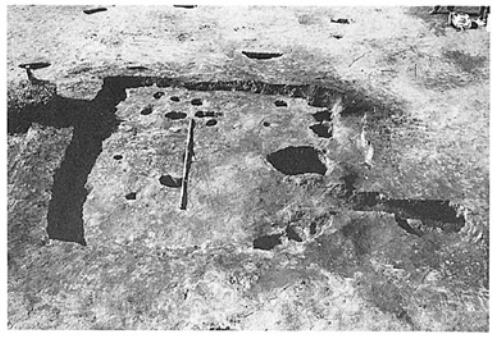


第１号住居跡、第１号・第２号溝跡真上写真

第２号住居跡完掘

第２号住居跡掘り方

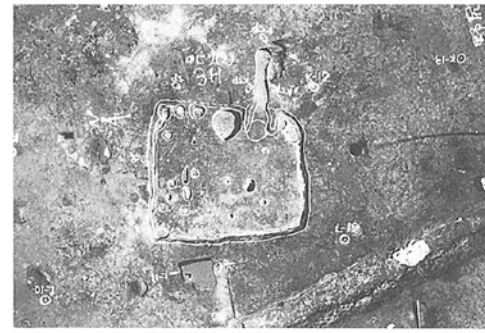
写真３　遺構(3)



第３号住居跡完掘

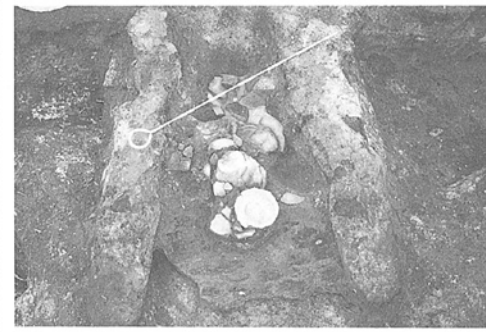
第３号住居跡カマド遺物出土状況

第３号住居跡ピット１セクション

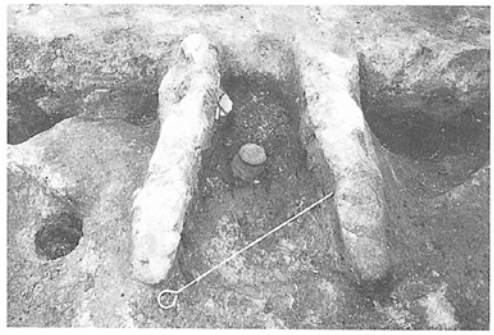


第３号住居跡、第３号溝跡真上写真

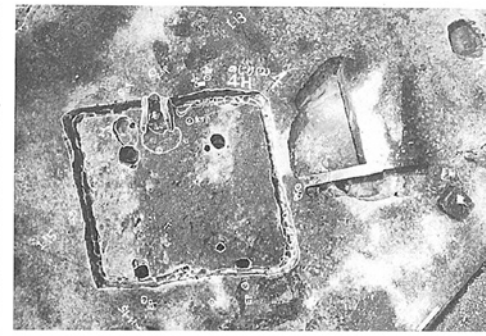
第４号住居跡完掘



第４号住居跡新カマド遺物出土状況



第４号住居跡旧カマド遺物出土状況



第４号住居跡真上写真

写真４　遺構(4)

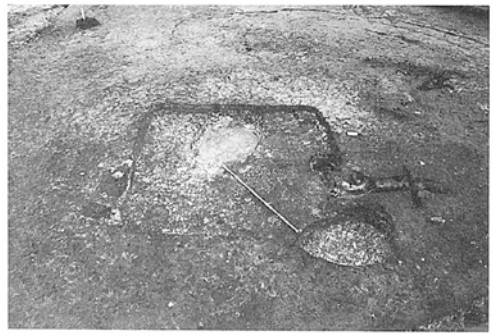
第 5 号住居跡完掘

第 5 号住居跡カマド

第 7 号住居跡完掘

第 7 号住居跡、第 1 号・第 2 号溝跡真上写真

第 8 号住居跡完掘

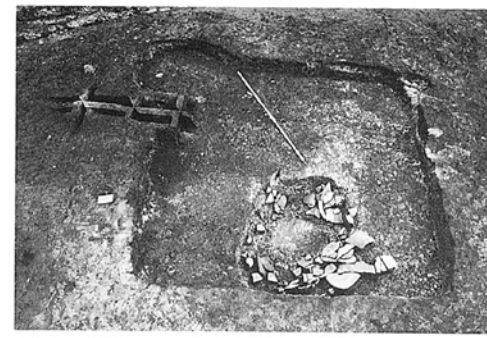


第 9 号住居跡完掘

第 9 号住居跡カマド遺物出土状況

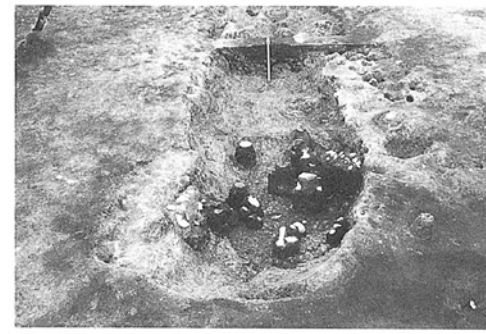
写真 5　遺構(5)

第９号住居跡遺物出土状況

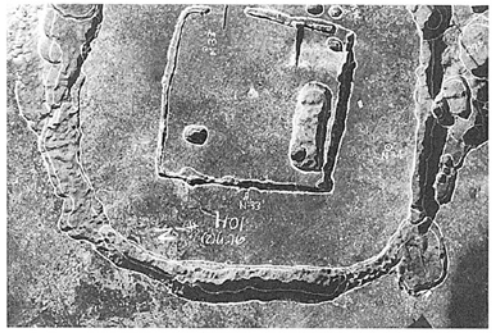


第９号住居跡ピット５遺物出土状況

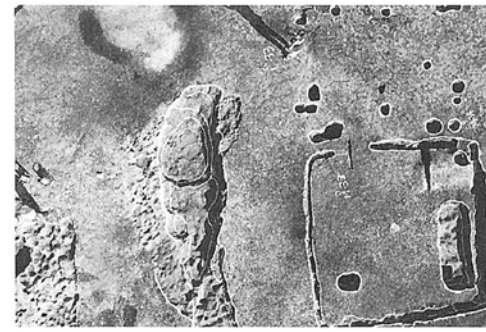
第10号住居跡完掘



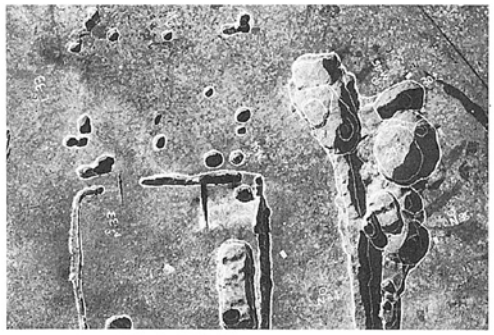
第10号住居跡外周溝遺物出土状況



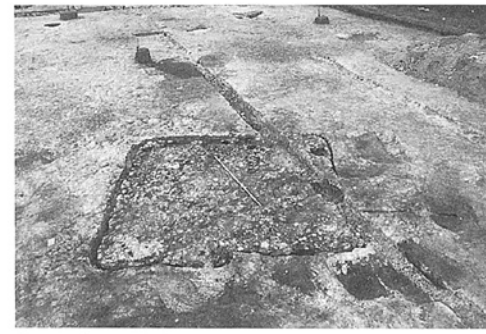
第10号住居跡真上写真(1)



第10号住居跡真上写真(2)

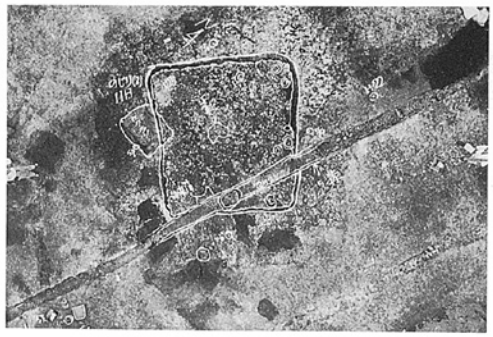


第10号住居跡真上写真(3)

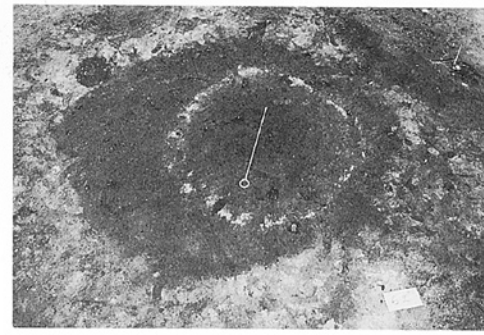


第11号住居跡完掘

写真６　遺構(6)

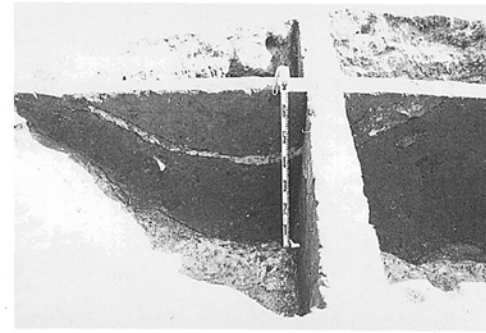


第11号住居跡真上写真



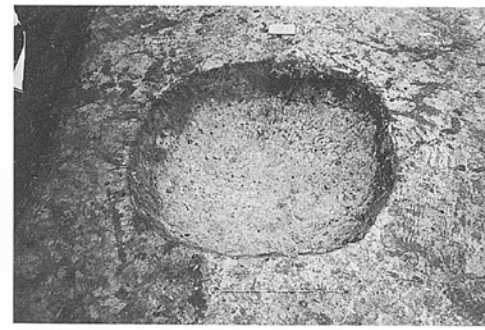
第6号土坑確認面(環状B-Tm)

第6号土坑完掘



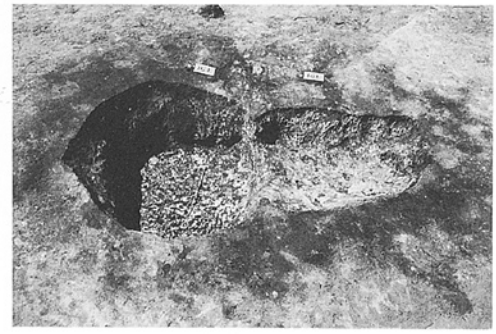
第6号土坑セクション(B-Tm挟在)

第11号土坑



第12号土坑

第13号土坑

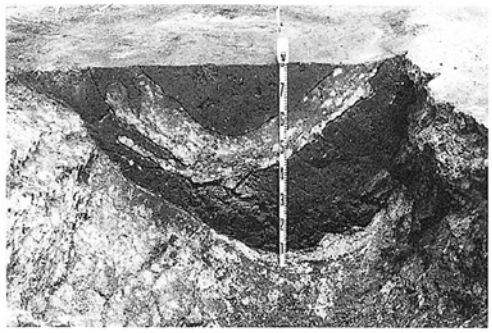


第15号(左)・第16号(右)土坑

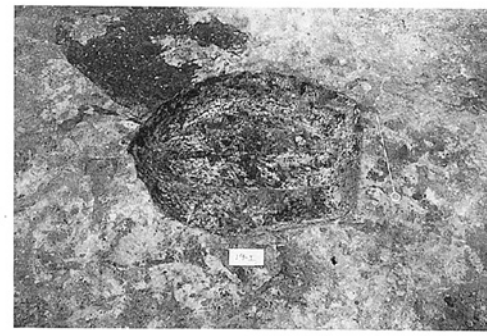
写真7　遺構(7)

第17号土坑

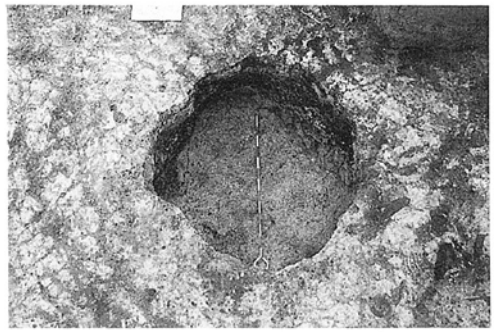
第18号土坑完掘



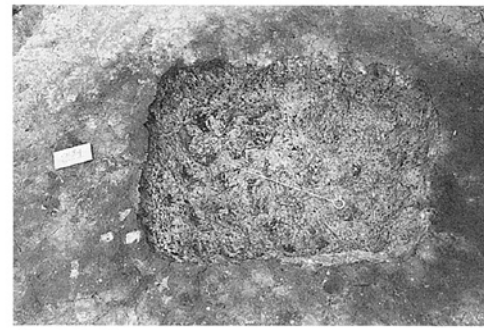
第18号土坑セクション(B-Tm挟在)



第19号土坑



第20号土坑



第22号土坑

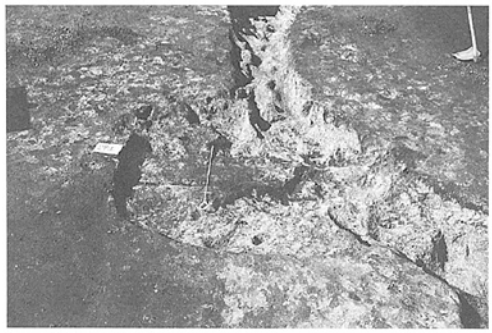
第23号土坑

第25号土坑

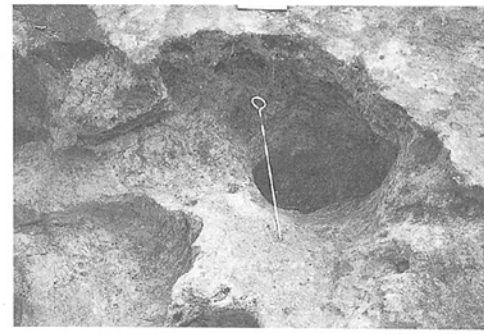
写真8　遺構(8)

第26号土坑完掘

第26号土坑遺物出土状況

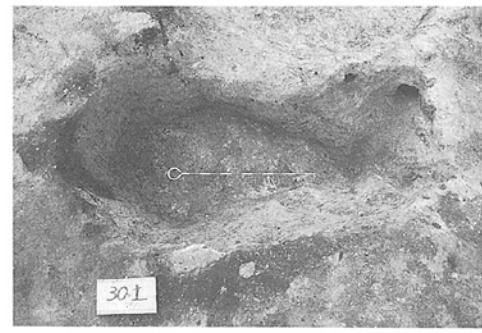


第27号土坑・第10号住居跡外周溝



第28号土坑

第29号土坑



第30号土坑

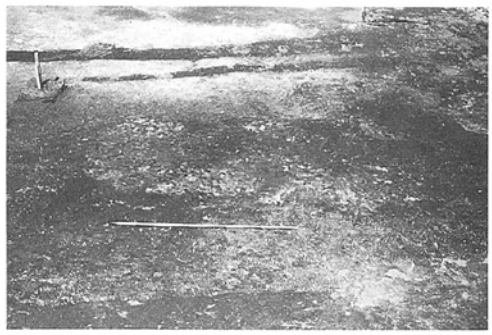
第１号焼土遺構確認面

第２号焼土遺構確認面

写真９　遺構(9)

第 3 号焼土遺構確認面

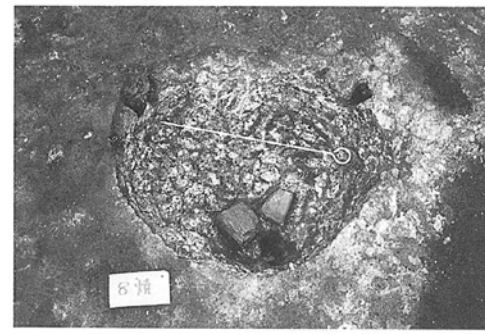
第 4 号焼土遺構確認面



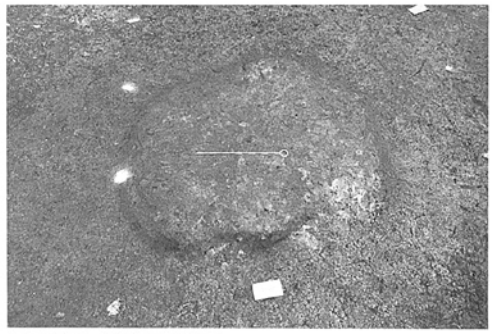
第 5 号(右)・第 6 号(左)焼土遺構確認面

第 5 号焼土遺構セクション

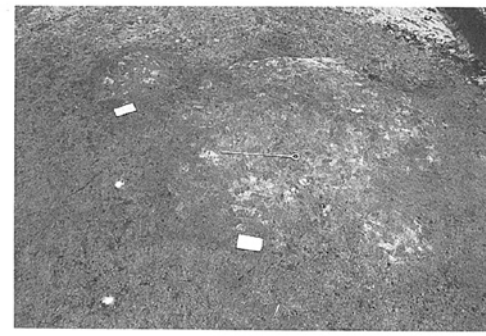
第 7 号焼土遺構確認面



第 8 号焼土遺構遺物出土状況



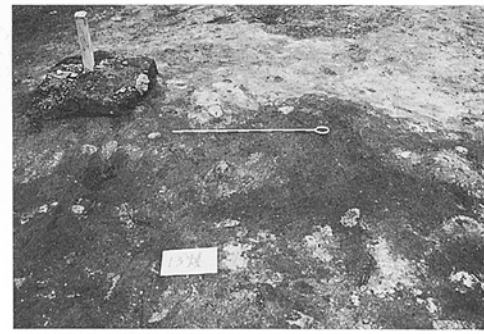
第 9 号焼土遺構確認面



第10号(左)・第11号(右)焼土遺構確認面

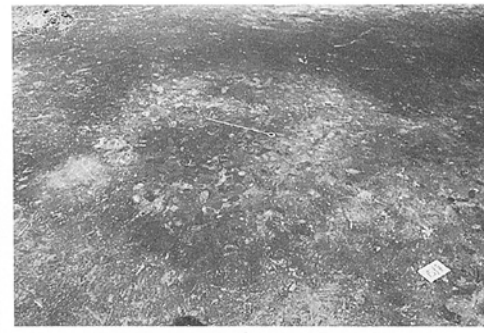
写真10　遺構(10)

第12号(下)・第18号(右中央)・第19号(上)焼土遺構確認面

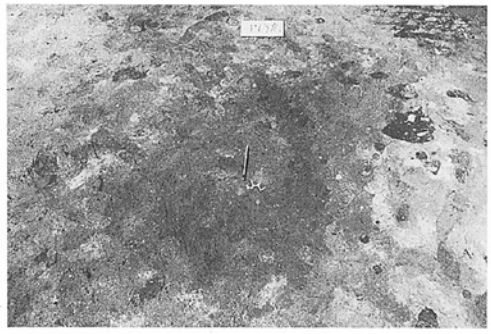


第13号焼土遺構確認面

第14号焼土遺構確認面

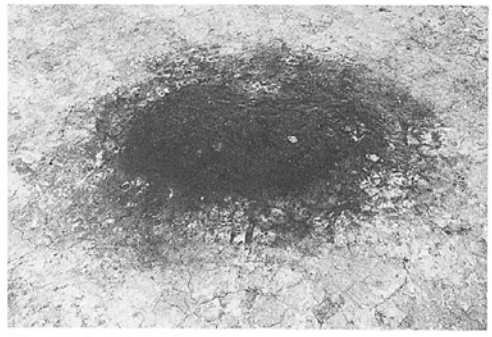


第15号焼土遺構確認面



第17号焼土遺構確認面

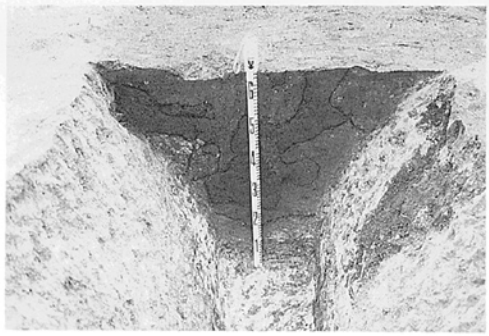
第20号焼土遺構確認面



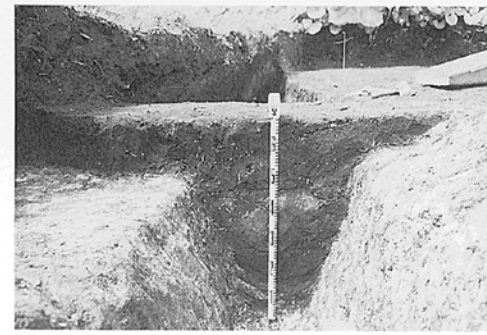
第21号焼土遺構確認面

第1号(中央)・第2号(左)・第8号(右)溝跡

写真11　遺構(11)

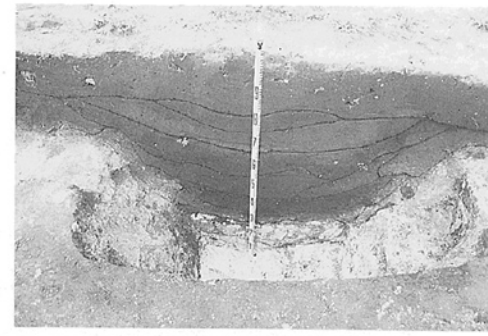


第１号溝跡セクション

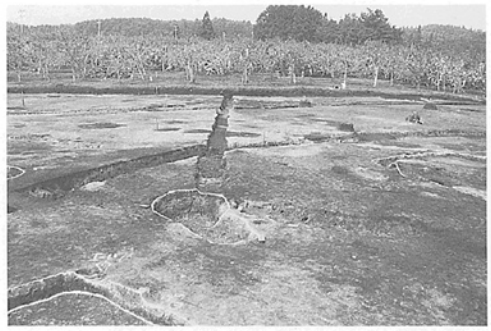


第２号溝跡セクション

第３号溝跡（左下から右上）



第３号溝跡セクション(11ライン)



第４号(中央の土坑上)・第10号(中央の土坑右)溝跡

第５号(左前)・第６号(左奥)・第７号(中央)溝跡

第９号溝跡

第11号(左)・第12号(右)溝跡

写真12　遺構(12)

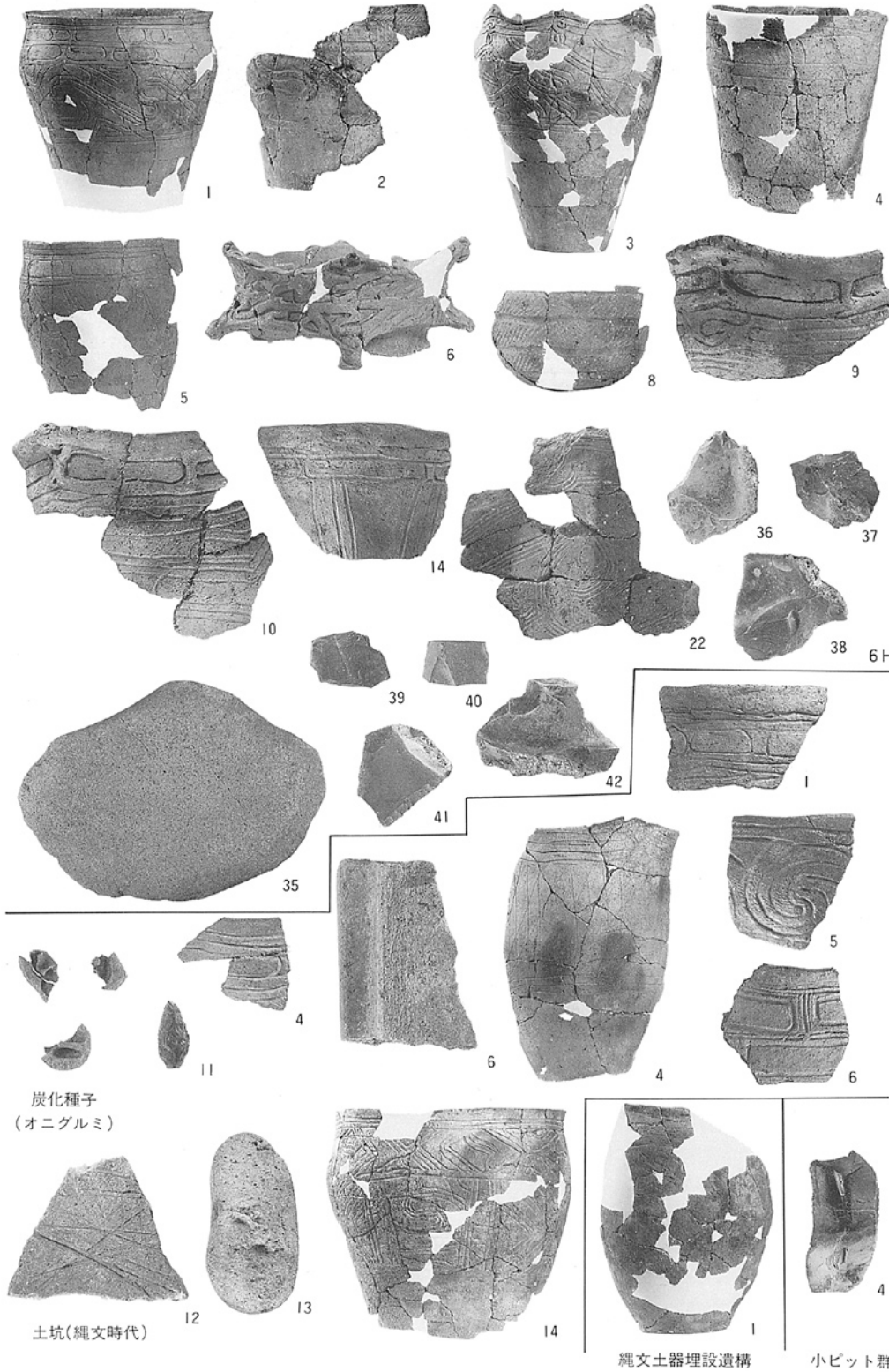

1
2
3
4
5
6
8
9
10
14
22
36
37
38
6H
39
40
41
42
35
1
5
4
11
6
4
6
炭化種子
（オニグルミ）
12
13
14
1
4
土坑（縄文時代）
縄文土器埋設遺構
小ピット群

写真13　遺物(1)

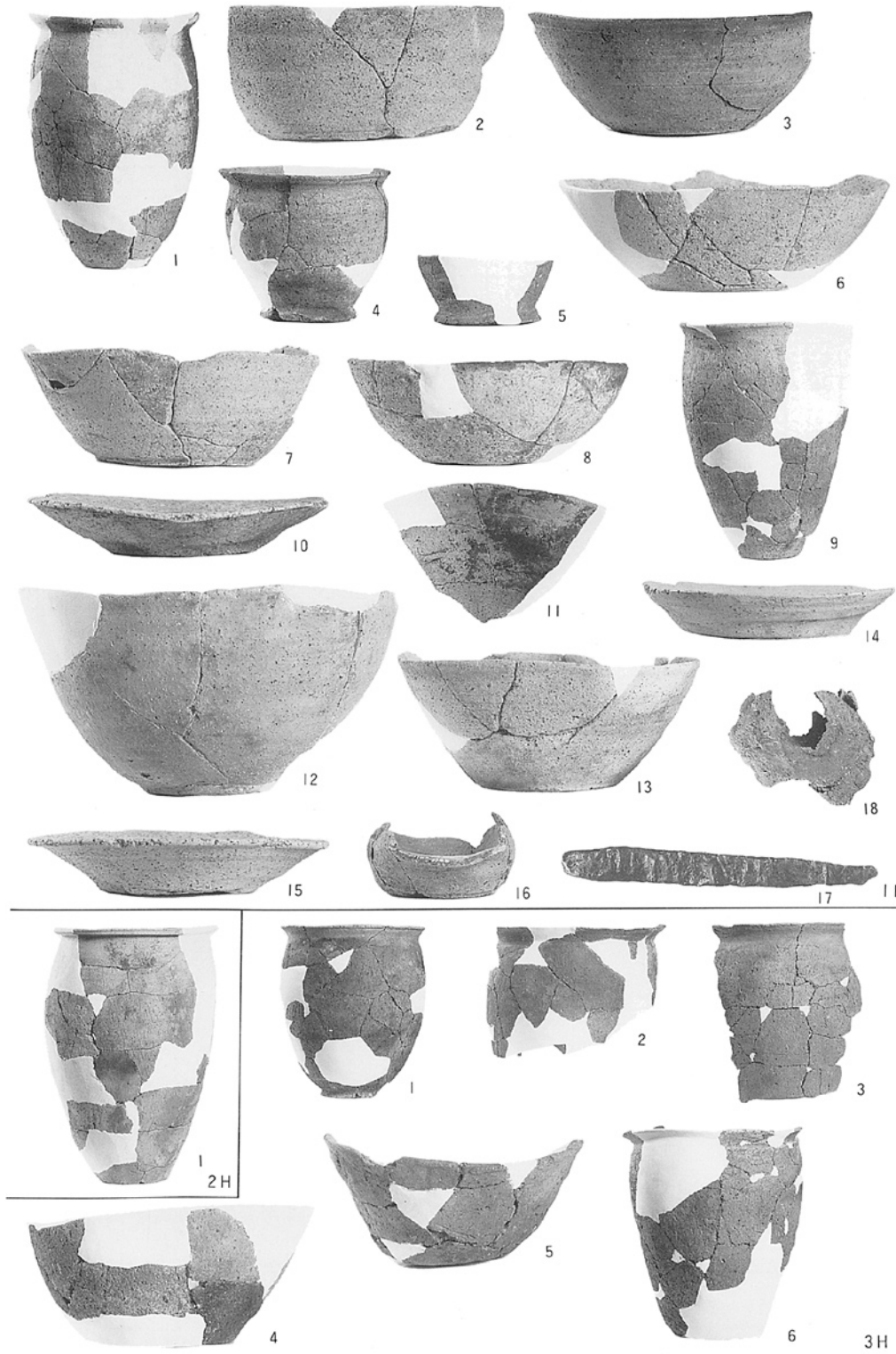


写真14　遺物(2)

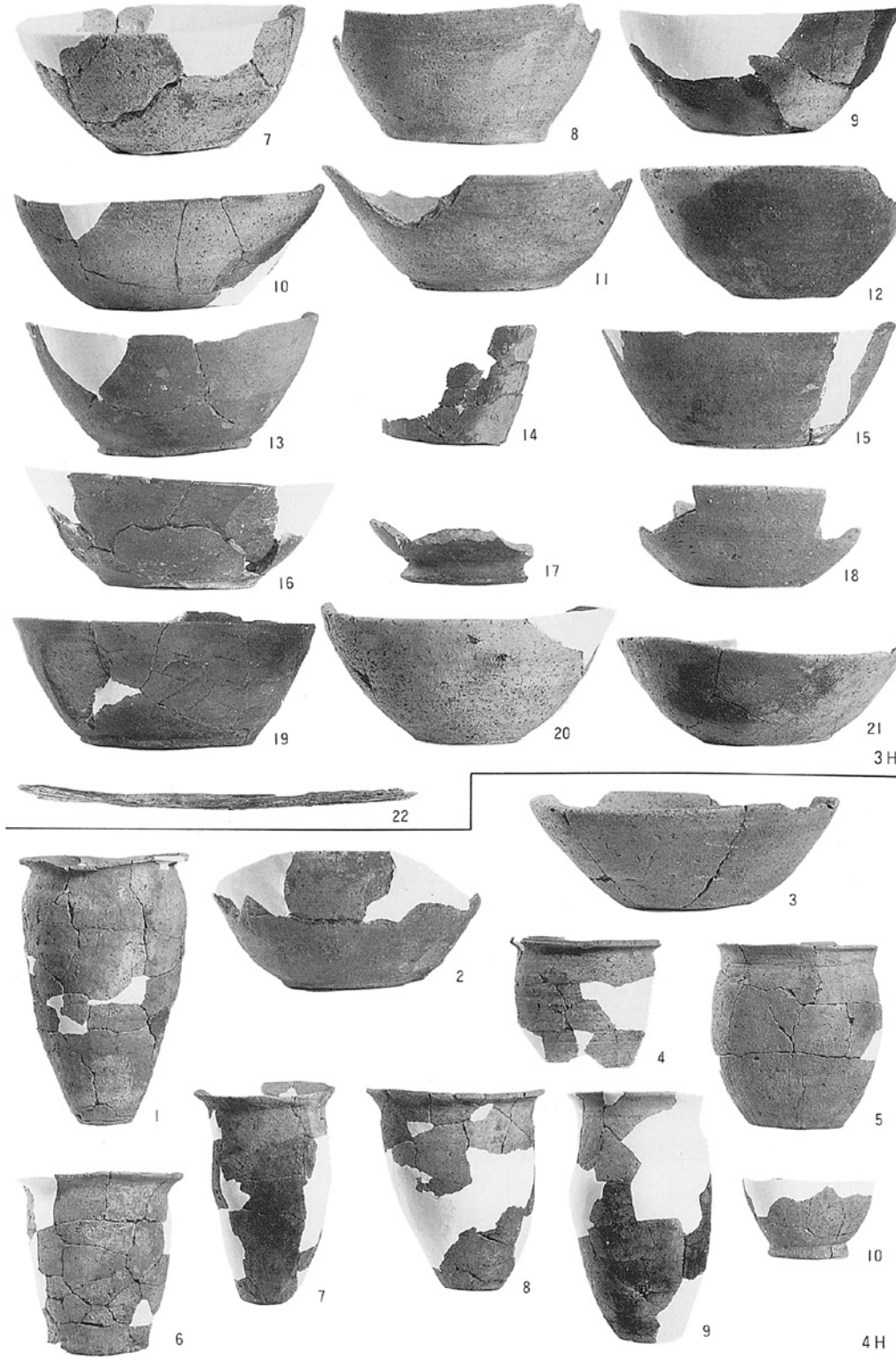


写真15　遺物(3)

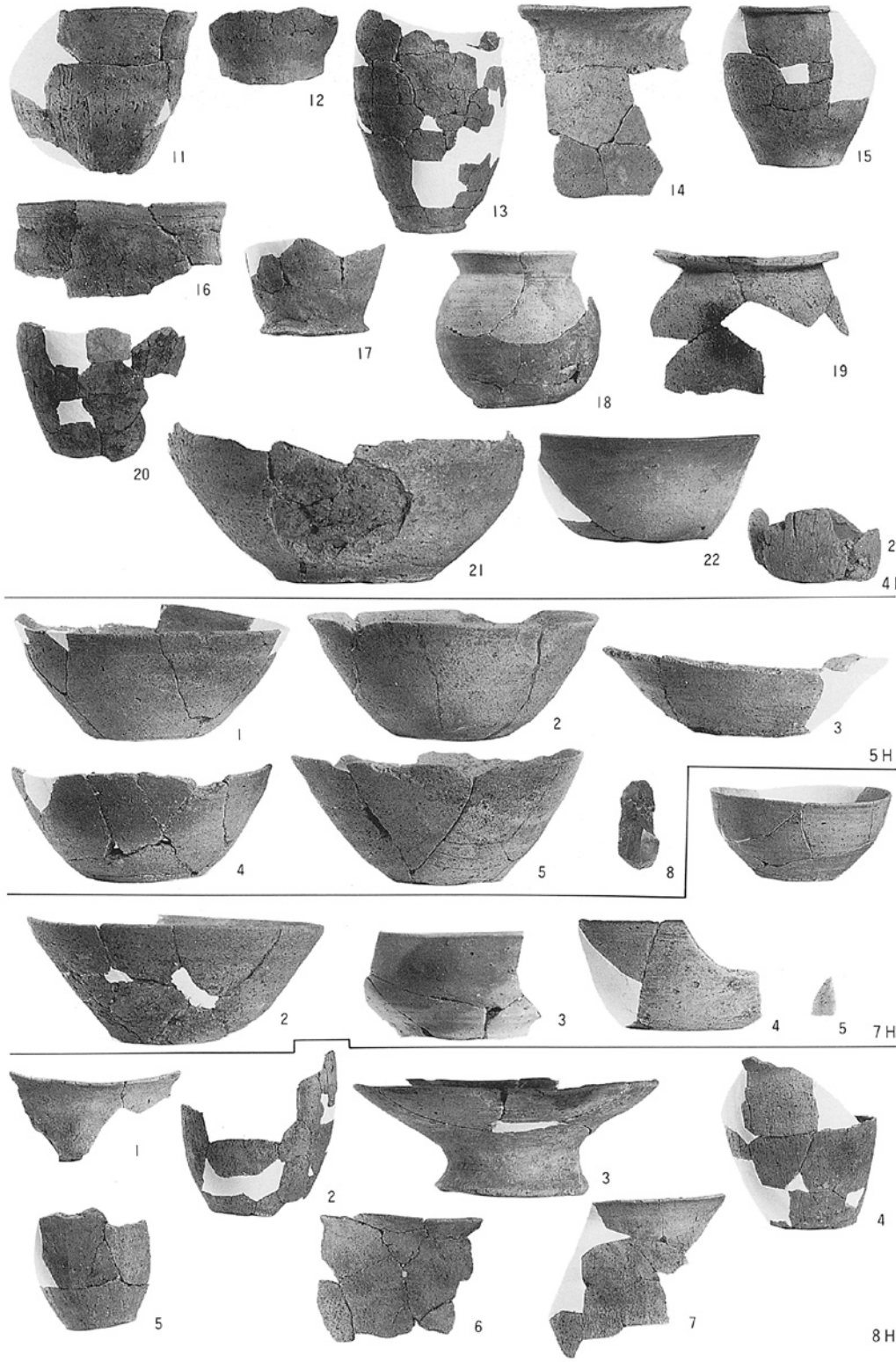

11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
4H
1
2
3
5H
4
5
8
2
3
4
5
7H
1
2
3
4
5
6
7
8H

写真16　遺物(4)

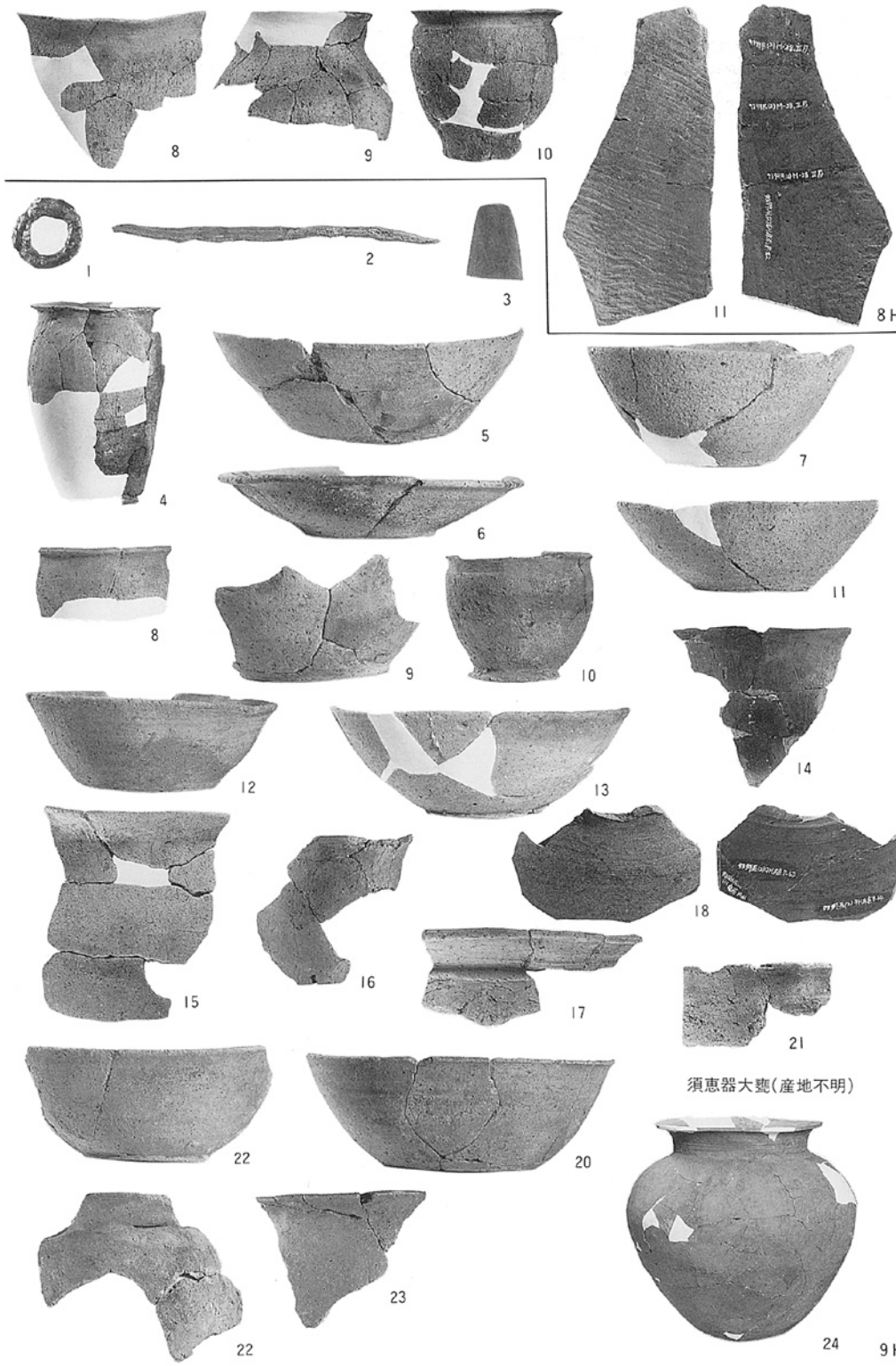

8
9
10
1
2
3
11
8H
4
5
7
6
8
9
10
11
12
13
14
15
16
18
17
21
須恵器大甕(産地不明)
22
20
22
23
24
9H

写真17　遺物(5)

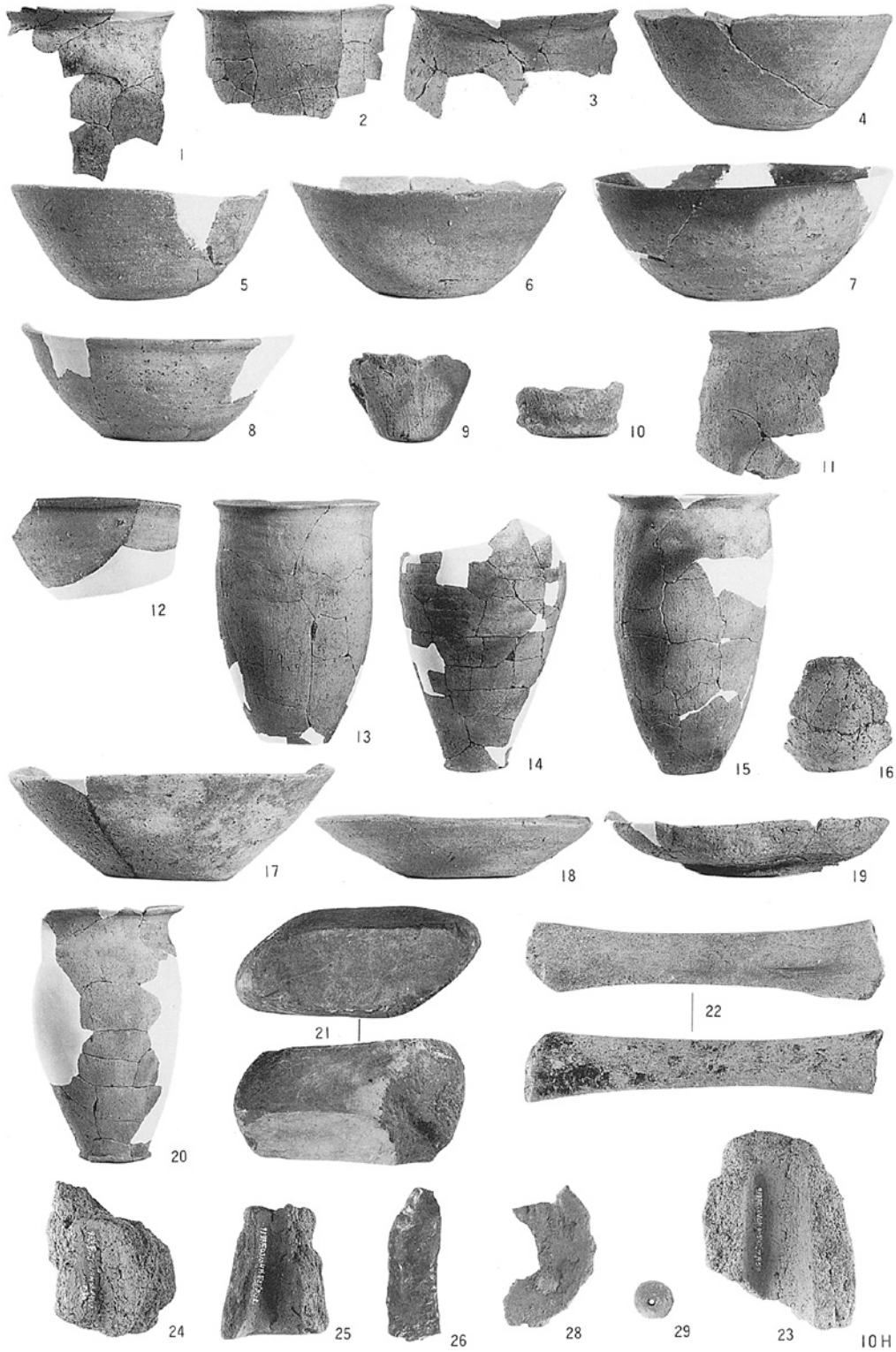

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
24
25
26
28
29
23
10H

写真18　遺物(6)

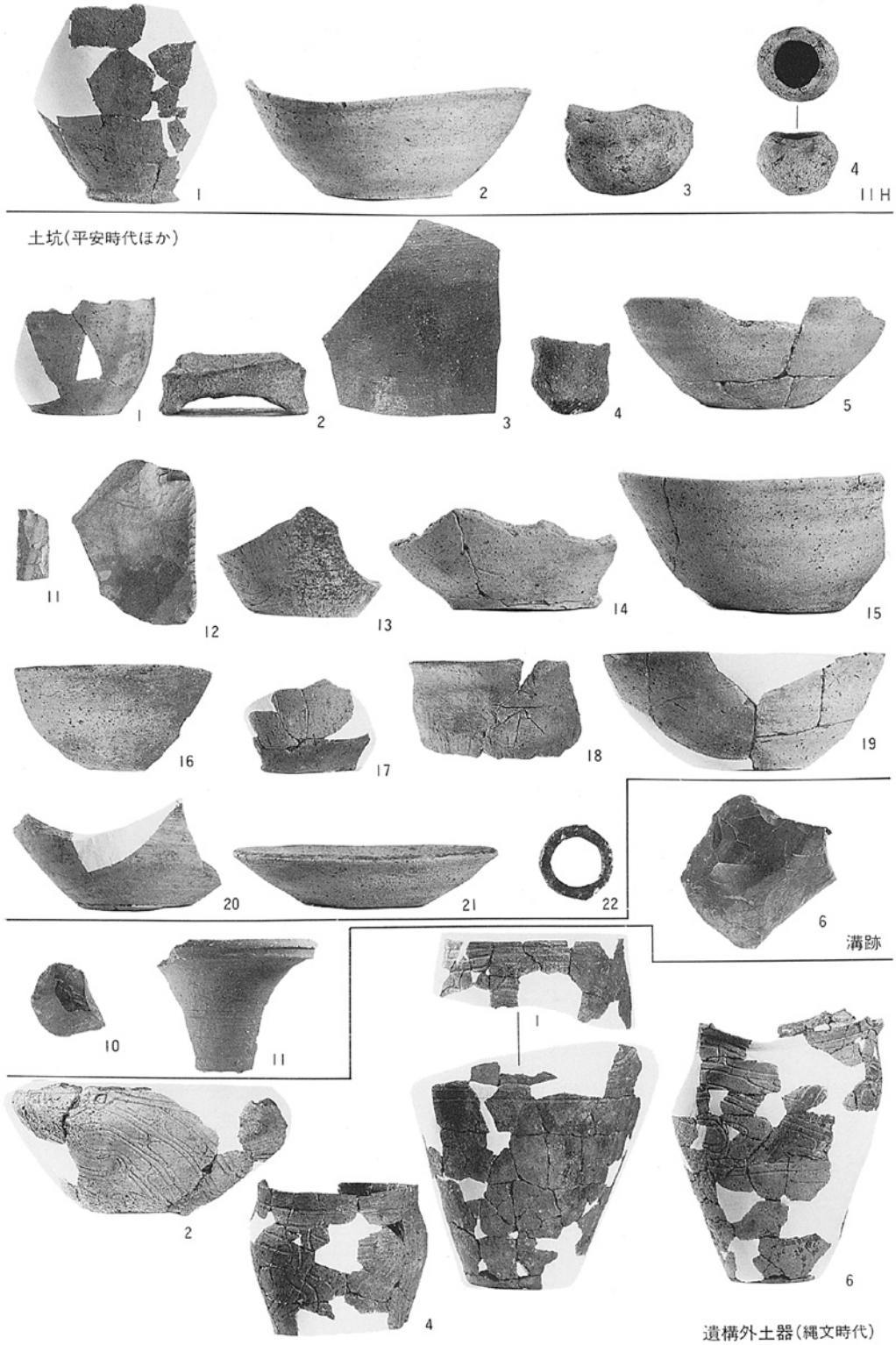
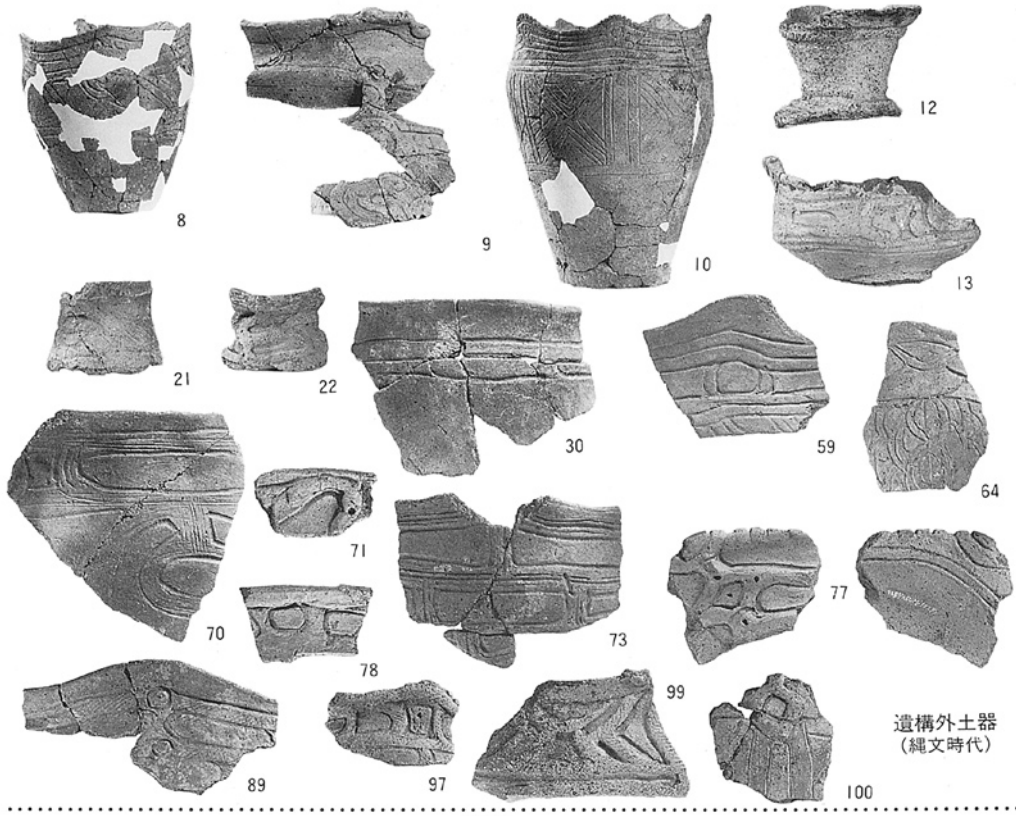
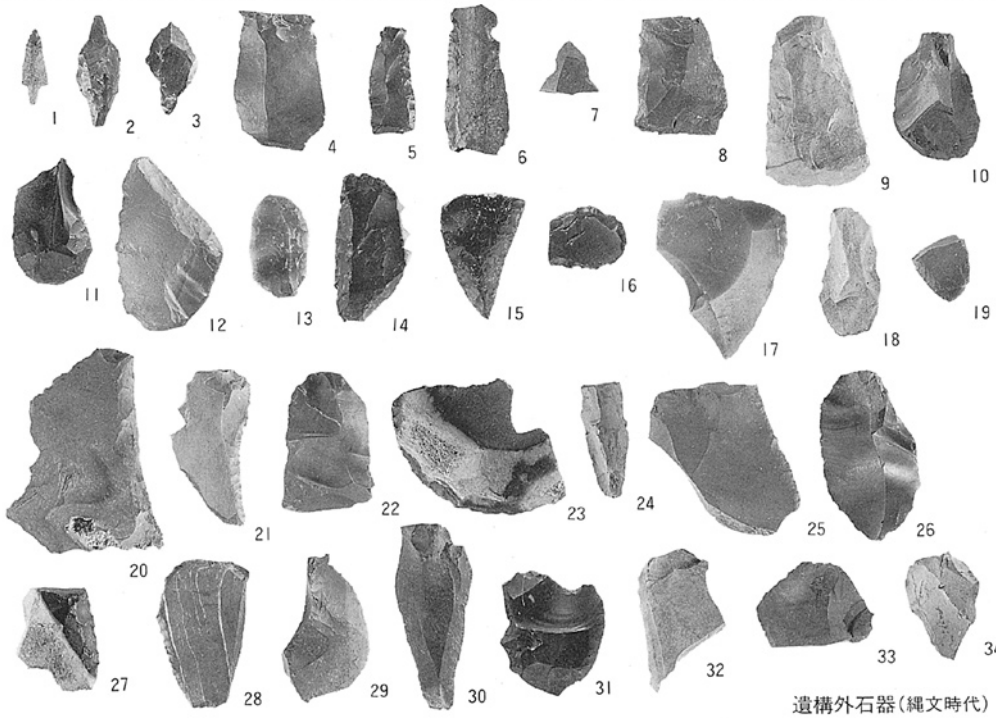

1
2
3
4
11H
土坑(平安時代ほか)
1
2
3
4
5
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
6
溝跡
10
11
1
2
4
6
遺構外土器(縄文時代)

写真19　遺物(7)

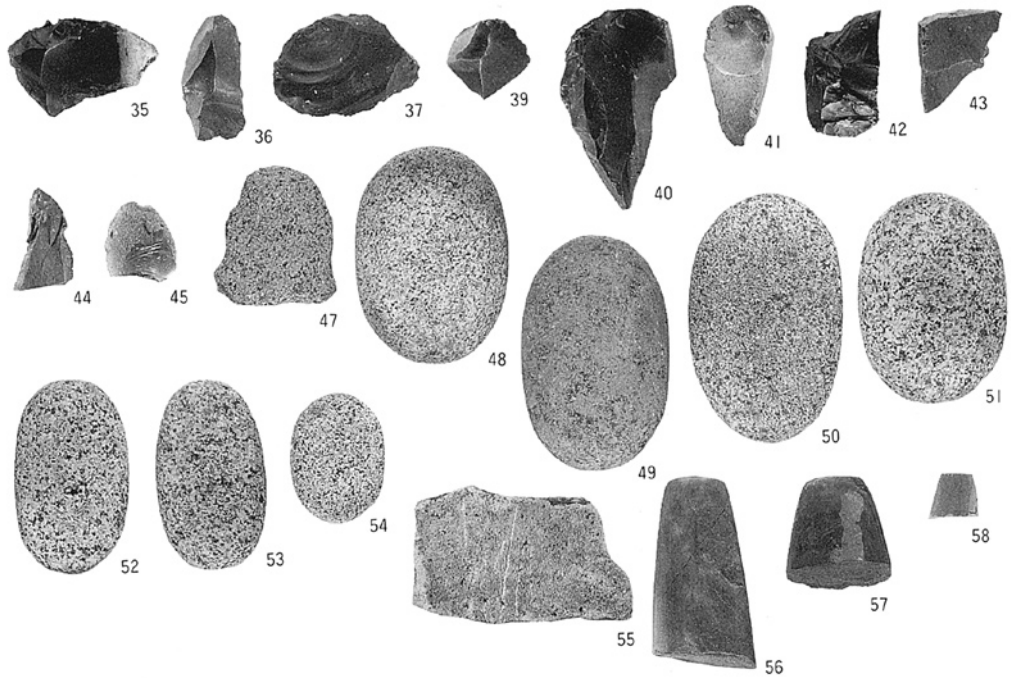


遺構外土器
(縄文時代)

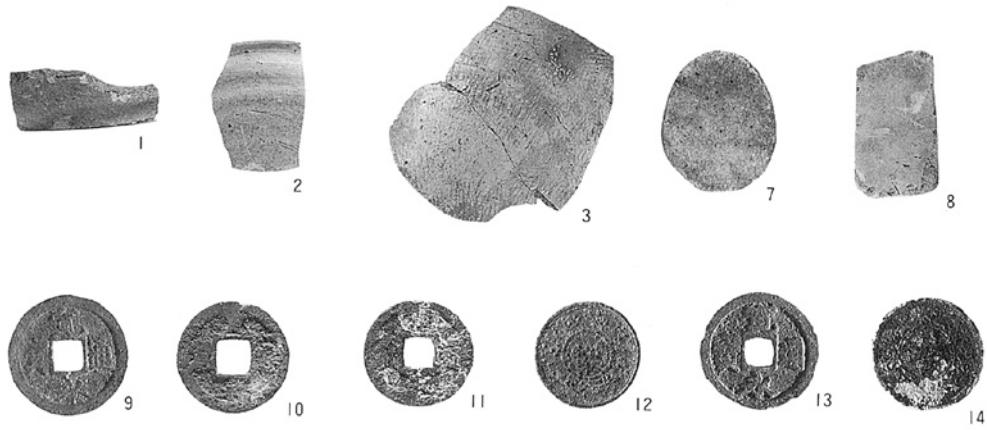


遺構外石器(縄文時代)

写真20　遺物(8)



遺構外石器ほか(縄文時代)



遺構外(平安時代ほか)

写真21　遺物(9)

☆ 報告書抄録

ふりがな	のじり(2)いせき
書名	野尻（2）遺跡
副書名	浪岡バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第172集
編著者名	伊藤昭雄、畠山　昇
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038 青森県青森市大字新城字天田内152-15　Tel 0177-88-5701
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東径 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
のじり（2）いせき 野尻（2）遺跡	あおもりけんみなみつがるぐんなみおかまち 青森県南津軽郡浪岡町 おおあざたかやしきあざのじり 16－1ほか 大字高屋敷字野尻16－1外	02-364	29-061	40度 44分 15秒	140度 35分 14秒	19930510 ～ 19930930	7,200	浪岡バイパス建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野尻（2）遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡　10軒 土坑　11基 焼土遺構　2基 溝跡　1条	土師器（坏・甕・小甕・皿・ミニチュア土器・壺・鉢・堝） 須恵器（坏・大甕・長頸壺・甕） 鉄器（刀子・鎌？・環状鉄製品・鉄滓） 石器2点（砥石―10H外周溝） 木製棒2点（3・9H各ピット） 土玉1点（10H外周溝） 羽口3点（10H外周溝）	9世紀中頃から後半の集落跡－9世紀中頃から後半の4号住居は、新旧のカマドを有する。9世紀後半の9号住居は、住居内に須恵器大甕埋設土坑を有する。9世紀後半の10号住居は竪穴住居に掘建柱建物及び外周溝を伴う。
	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　1軒 掘立柱建物跡2軒 土坑　12基 埋設土器遺構1基 小ピット群1ケ所	縄文土器（深鉢形土器・鉢・台付き鉢・壺・ミニチュア土器） 石器（石鏃・石錐・石匙・石篦・不定形石器・剝片・磨製石斧・敲磨石・石皿）	後期前半十腰内Ⅰ式期の小規模な集落跡―平成6年の野尻(4)遺跡の調査から、調査区の東西に広がるものと推定される。
	—	江戸時代	—	古銭4点（寛永通宝）	
	—	明治～昭和時代	土坑　1基		
	—	時代不詳	土坑　7基 焼土遺構　19基 溝跡　12条		

青森県埋蔵文化財調査報告書第172集

野尻（2）遺跡発掘調査報告書
－浪岡バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行年月日　平成７年３月31日
発　　行　青森県教育委員会
〒 030 青森市新町二丁目３－１
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒 038 青森市大字新城字天田内152-15
TEL 0177-88-5701　FAX 0177-88-5702
印　　刷　株式会社　誠工社
〒 030-01 青森市大字八ツ役字上林78-42
TEL 0177-29-1611　FAX 0177-29-1188